令和２年度　子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）

保育士養成施設における保育士の魅力向上に関する調査研究

研究報告書

一般社団法人　全国保育士養成協議会

目　　次

はじめに
Ⅰ．研究の目的と背景 1
Ⅱ．調査研究の概要 1
１．質問紙調査 1
２．ヒアリング調査 2
３．ハンドブックの作成 2

第１部　保育士養成施設における保育士の魅力向上に関する質問紙調査 3
Ⅰ．調査の目的・方法 3
１．調査の目的 3
２．調査の方法 3
（１）調査対象 3
（２）調査時期 3
（３）調査方法と手続き 3
（４）調査内容 3
（５）分析方法 3
（６）倫理的配慮 4
Ⅱ．調査の結果 5
１．養成施設について 5
（１）学校種 5
（２）修業年限 5
（３）所在地について 6
（４）保育士資格以外に取得可能な資格・免許（受験資格も含む）について 6
（５）保育士養成課程のある学科・専攻等の入学定員について 7
（６）養成施設として認可を受けている入学定員について 8
（７）養成施設における保育士資格の卒業要件の有無について 8
（８）卒業生について 10
２．保育士の魅力向上に向けた取組とキャリア支援について 13
（１）保育士養成施設の教員として、保育士という職業のやりがいや魅力を向上させるために今より必要な取組について 13
（２）養成施設が現在行っている保育士として就職するための、また保育士として就労することの不安低減につながるためのキャリア支援について 21
（３）ホームページ等による保育士のやりがいや魅力を発信する取組について 26
（４）卒業生に対する保育士としてやりがいや魅力向上のためのキャリア支援について 27
（５）卒業後 1～2 年目の保育士への保育現場、自治体、保育団体等と連携した研修等の取組について 29
（６）保育士を離職した卒業生に対する復職のためのフォローアップについて 31
（７）卒業生の横のつながりをつくるためのサポートについて 32
（８）保育士として就労した卒業生の割合からみた分析 32

３．保育士の魅力向上に資する効果的なカリキュラムについて.....39
（１）保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムの工夫の有無について.....39
（２）保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムの工夫の内容について.....40
（３）保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムを具体化している内容について.....42
（４）各実習指導において、保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるために具体化している取組.....46
（５）実習先の決定方法.....55
（６）保育士のやりがいや魅力を伝えるためのカリキュラムの工夫として考えられること.....56
４．保育士の魅力向上につながる保育現場、自治体、保育団体等との連携について.....57
（１）養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組について.....57
（２）養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組に関する連携先について.....58
（３）養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組の内容について.....58
（４）実習指導に携わる保育士の研修について.....59
（５）実習指導に携わる保育士の研修に関する連携先について.....60
（６）実習指導に携わる保育士の研修の内容について.....60
（７）保育所の ICT 化や業務効率化を支援する取組について.....61
（８）保育所の ICT 化や業務効率化を支援する取組の連携先について.....62
（９）保育所の ICT 化や業務効率化を支援する取組の内容について.....62
５．保育士の魅力向上につながる中学生・高校生向けの取組について.....63
（１）保育士の魅力を伝えることにつながる中学生・高校生向けの取組について.....63
（２）保育士の魅力を伝えることにつながる中学生・高校生向けの取組の内容.....64
６．今後の保育士の魅力向上をすすめるために必要な取組について.....65

Ⅲ．まとめ.....68
１．保育士の職業の魅力の発信の向上.....68
（１）保育士養成施設教員が捉えている保育士のやりがいや魅力向上に関する意識.....68
（２）養成施設におけるカリキュラムの工夫・具体化している取組.....68
（３）保育実習において保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるために具体化している取組.....69
（４）保育実習における実習先の決定方法.....69
（５）実習指導に携わる保育士の研修.....69
（６）養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組.....69
（７）ホームページ等による保育士のやりがいや魅力を発信している取組.....70
（８）保育士の魅力を伝えることにつながる中学生・高校生向けの取組.....70
２．生涯働ける魅力ある職場づくり.....70
（１）卒業後 1～2 年目の保育士を対象として保育現場や自治体、保育団体等と連携した研修等の取組.....70
（２）保育士としての悩みや課題を抱えている卒業生に対する環境づくり.....70

３．保育士資格を有する方と保育所とのマッチングの改善.....70
（１）卒業生の就労状況の把握.....70
（２）保育士を離職した卒業生に対する復職のためのフォローアップ.....71
（３）卒業生の横のつながり.....71

第２部　保育士養成施設における保育士の魅力向上に関するヒアリング調査.....73
Ⅰ．調査の目的と方法.....73
１．調査の目的.....73
２．調査の方法.....73
（１）調査対象.....73
（２）調査時期.....73
（３）調査方法と手続き.....73
（４）調査内容.....73
（５）倫理的配慮.....74
Ⅱ．ヒアリング結果.....75
１．４年制大学.....75
２．短期大学.....90
３．専修学校.....107
Ⅲ．考察.....117
１．カリキュラム関係.....117
（１）「保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか.....117
（２）それをカリキュラムにどのように反映しているか.....117
２．実習指導関係.....117
（１）実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていることは何か.....117
３．教育課程以外の活動.....121
（１）教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか.....121
４．保育現場および自治体や保育団体等との連携.....123
（１）授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか.....123
（２）授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか。それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか.....123
（３）教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか.....123
（４）リカレント教育、卒後教育の現状。行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか.....123

５．中高生に向けた取組 124
（１）オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業等において、「保育士の魅力」の伝え方。HPや情報機器の活用方法等 124
６．就職支援の取組等の有無とその内容 124
（１）就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫 124
（２）早期離職を防止するための対策 125
（３）再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容 125
７．その他 125
（１）今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア 125
Ⅳ．まとめ 126
１．保育士の魅力と保育士養成 126
２．保育士の魅力と保育実習 126
３．保育士の魅力と学生の主体的活動 126
４．保育士の魅力と地域との連携 126
５．保育士の魅力と中高生に向けた取組 127
６．保育士の魅力と就職及び卒業後の支援 127

第３部　総合考察 129
Ⅰ．調査結果の概要 129
１．質問紙調査のまとめ 129
（１）保育士の職業の魅力の発信の向上 129
（２）生涯働ける魅力ある職場づくり 130
（３）保育士資格を有する方と保育所とのマッチングの改善 131
２．ヒアリング調査のまとめ 131
（１）保育士の魅力と保育士養成 131
（２）保育士の魅力と保育実習 131
（３）保育士の魅力と学生の主体的活動 132
（４）保育士の魅力と地域との連携 132
（５）保育士の魅力と中高生に向けた取組 132
（６）保育士の魅力と就職及び卒業後の支援 132
Ⅱ．調査結果からの示唆と今後の課題 132

資料
◇　保育士養成施設における保育士の魅力向上に関する調査研究
質問紙調査票 135

◇　ハンドブック
Ｑ＆Ａから学ぶ好事例「保育の魅力向上のための養成校の取組 143

調査研究構成員一覧 167

はじめに

Ⅰ． 研究の目的と背景

本研究の目的は、指定保育士養成施設（以下、本章においては、養成校）において、保育士を目指す学生が増えるよう、効果的な保育実習の方法やカリキュラムのあり方及び保育の魅力向上に向けた取組等について明らかにし、効果的な事例を収集、提供することである。

待機児童解消のために保育施設の増加を図る施策が保育の需要を掘り起こし、女性の就業率の上昇と相まって待機児童が解消されない状況が続く中、地域によっては保育士の確保が困難な状況がある。こうした状況下において、いわゆる潜在保育士を掘り起こしたり、近接する他職種の有資格者による保育士試験の一部科目免除などが行われたりしてきており、養成校の取組にも期待が寄せられている。

2020（令和 2）年 2 月から 9 月にかけて開催された厚生労働省「保育の現場・職業の魅力向上検討会」による「保育の現場・職業の魅力向上に関する報告書」（2020（令和 2）年 9 月 30 日）では、「保育士養成及び就業に係る各段階における現状・課題と主な対応策」（別添 3）として、「保育士の魅力向上の発信」、「生涯働ける魅力ある職場づくり」、「保育士資格を有する方と保育所とのマッチングの改善」が挙げられ、養成校や養成校団体（つまり本会）に対してはそれぞれについて以下のような取組が例示されている。

「保育士の魅力向上の発信」においては、次の取組が示されている。

・実習の指導等学びの質の向上。オンラインも活用した養成校の学生と現役保育士との交流・対話。
・実習指導に携わる者に共通の研修の開始。
・HP 等により、保育士の魅力・専門性を発信。

「生涯働ける魅力ある職場づくり」においては、次の取組が示されている。

・卒業後 1～2 年目の保育士について、勤務園と連携して支援・教育し、専門職の基礎を確立（初任者研修の検討。）。
・保育士としての悩みや課題を抱えている卒業生が母校で相談できる環境づくり。

「保育士資格を有する方と保育所とのマッチングの改善」においては、次の取組が示されている。

・卒業生の横のつながりの強化、保育士のコミュニティ作りのサポート。
・保育士が離職後に、復職できるようなフォローアップ体制作り。

本調査研究事業では、こうした取組も含め、保育士の魅力向上について、養成校が実際にどのようなことをどの程度実施しているかを量的調査及び質的調査から明らかにし、その成果を踏まえて養成校の取組を促進するためのハンドブックとして活用できる冊子を作成することとした。

指定保育士養成施設を会員校としている本会において、保育士としての人材確保及びその就業継続や資質向上は重要な検討課題である。保育専門職への動機づけや、質の高い教育及び学生の進路ニーズとキャリア支援とのマッチング等は、保育人材確保及び就業継続に資する養成校の課題であり、本会が会員校をはじめとする養成校にこうした課題への一定の示唆を提供し、その共有を進めていくことが求められている。

Ⅱ．調査研究の概要

本調査研究は、2020 年 7 月 31 日（内示日）～2021 年 3 月 31 日の期間において実施した。

調査は、質問紙調査とヒアリング調査により実施した。それぞれの概要は以下のとおりである。

１．質問紙調査

養成校における効果的なカリキュラムのあり方や保育実習の方法及び保育の魅力向上に向けた取組等について基礎資料を得るために質問紙調査を実施した。

調査は、平成 31 年 4 月 1 日時点で保育士養成施設として認可を受けている全養成施設 679 施設を

対象とした。実施時期は、11 月から 12 月である。

おもな調査内容は以下の通りである。

第一に、保育士の魅力向上に向けた取組とキャリア支援についてである。ここでは、就職支援や卒業後のフォローアップ、リカレント教育、その他保育士のやりがい・魅力の発信等に関する活動などについて尋ねた。

第二に、保育士の魅力向上に資する効果的なカリキュラムについてである。ここでは、カリキュラムの工夫、実習指導における取組などについて尋ねた。

第三に、保育士の魅力向上につながる保育現場、自治体、保育団体等との連携についてである。養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組、実習指導に携わる保育士の研修、保育所の ICT 化や業務効率化を支援する取組などについて尋ねた。

第四に、保育士の魅力向上につながる中学生・高校生向けの取組について尋ねた。

加えて、今後必要な取組などについて尋ねた。

２．ヒアリング調査

養成校における、保育士の魅力向上に向けた効果的なカリキュラムのあり方や保育実習の方法及び望ましいと考えられる取組について具体的に明らかにするため、ヒアリング調査を実施した。

調査は、本会が実施した調査研究を含む先行研究から特色ある取組を行っていることが示されている養成校の中から、「保育士の魅力」と関連が強い取組を行っていると考えられる養成校を対象とした。なお、新型コロナウイルス感染症への対応状況からヒアリングに対応できないケースが例年の同種の調査より顕著であり、また現地で実情を視察することができず、オンライン会議システムを利用したヒアリングとなり、関連資料については郵送またはデータで提供を受けた。

調査のおもな観点は以下の通りである。

第一に、カリキュラムについて尋ねた。第二に、実習指導について尋ねた。第三に、教育課程以外の活動について尋ねた。第四に、保育現場及び自治体や保育団体等との連携について尋ねた。第五に、中高生に向けた取組について尋ねた。第六に、就職支援の取組等の内容について尋ねた。加えて、今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディアについて尋ねた。

３．ハンドブックの作成

調査の柱は、ここまで述べてきた質問紙調査とヒアリング調査であるが、その成果を各養成校で実際に活用してもらうために、そのガイドとなる資料としてハンドブック『Q&A から学ぶ好事例：保育士の魅力向上のための養成校の取組』を作成した（別添）。ヒアリング調査を中心に先行研究を参考にしつつ、実際に取組む際のハードルを下げるために、疑問となりそうな点を抽出し、それに応える形で好事例等の要素をヒントとして整理した。

第１部

保育士養成施設における保育の魅力向上に関する
質問紙調査

第１部　保育士養成施設における保育の魅力向上に関する質問紙調査

Ⅰ　調査の目的・方法

１．　調査の目的

本調査は、指定保育士養成施設における効果的なカリキュラムのあり方や保育実習の方法及び保育の魅力向上に向けた取組等について明らかにするため、質問紙調査によって基礎資料を得ることを目的としている。

２．調査の方法

（１）調査対象

平成 31 年 4 月 1 日時点で指定保育士養成施設として認可を受けている全養成施設 679 施設のうち 346 施設から回答を得た。回収率は 51.0%であった。

（２）調査時期

令和 2 年 11 月下旬に郵送にて送付し、投函締切を 12 月 19 日とした。

（３）調査方法と手続き

調査票を対象の養成施設に郵送し、学科長等養成課程の責任のある教員に回答を依頼した。

（４）調査内容

調査内容は以下の通りである。

【設問 1】養成施設について

学校種別、修業年限、所在地、取得可能な資格・免許、卒業生の資格・免許取得状況、業種別就職者数、卒業生の就労状況の把握割合・把握の方法

【設問 2】保育士の魅力向上に向けた取組とキャリア支援について

保育士のやりがい・魅力向上のために必要な取組、キャリア支援の内容、卒業生が母校で相談できる環境づくりの有無・内容、保育現場・自治体・保育団体等と連携した卒業後１～２年目の保育士を対象とした研修等の取組の有無・内容、卒業生への復職のためのフォローアップの有無・内容、卒業生の横のつながりをつくるためのサポートの有無・内容、ホームページ等による保育士のやりがいや魅力を発信する取組の有無・内容

【設問 3】保育士の魅力向上に資する効果的なカリキュラムについて

カリキュラムの工夫の有無・内容、実習指導における具体的な取組、実習先の決定方法、今後のカリキュラムの工夫

【設問 4】保育士の魅力向上につながる保育現場、自治体、保育団体等との連携について

養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組の有無・内容、実習指導に携わる保育士の研修の有無・内容、保育所の ICT 化や業務効率化を支援する取組の有無・内容

【設問 5】保育士の魅力向上につながる中学生・高校生向けの取組について

【設問 6】今後の保育士の魅力向上をすすめるために必要な取組について

（５）分析方法

数量的データの分析は統計ソフト SPSS（IBM 社）を使用し、自由記述については文字データ化し、適宜カテゴリーに分類した。

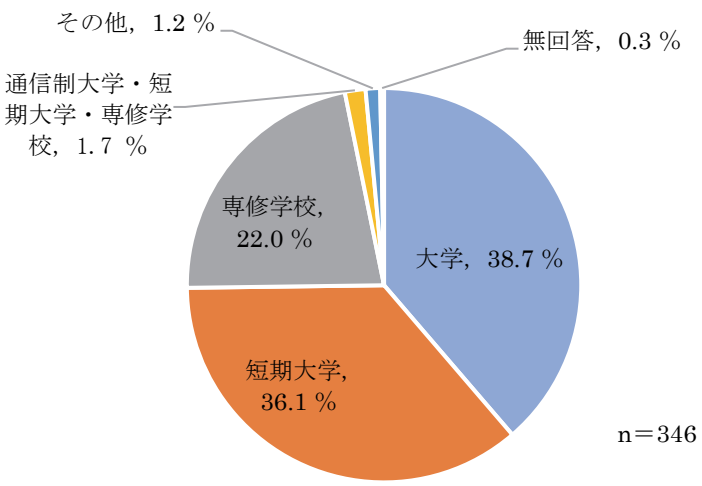
（6）倫理的配慮

研究目的と調査方法の概要、結果の処理方法及び成果の発表におけるプライバシーの保護、研究協力の任意性及び協力しないことによって不利益が生じないこと、回答データは特定の USB メモリーに保存したうえ、回答された調査票とともに、全国保育士養成協議会で施錠できるロッカー等に保管・管理し、一定期間が過ぎた後、溶解による処理をすることを書面にて説明し、回答の返送をもって調査への同意が得られたこととした。

Ⅱ　調査の結果

１．養成施設について

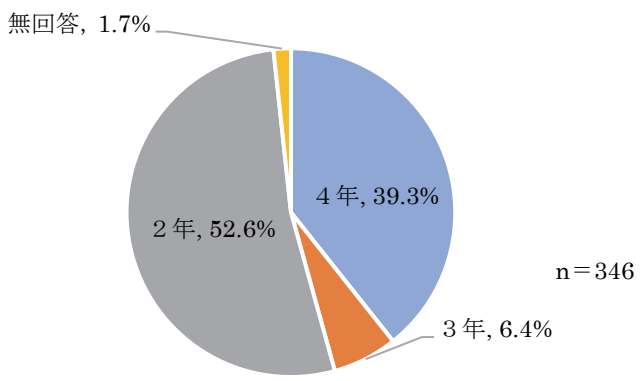
（１）学校種



図表1-1-1　学校種

回答のあった 346 施設の学校種の内訳は、大学 134 校（38.7%）、短期大学 125 校（36.1%）、専修学校 76 校（22.0%）、通信制大学・短期大学・専修学校 6 校（1.7%）、その他 4 校（1.2%）、無回答 1 校（0.3%）であった。

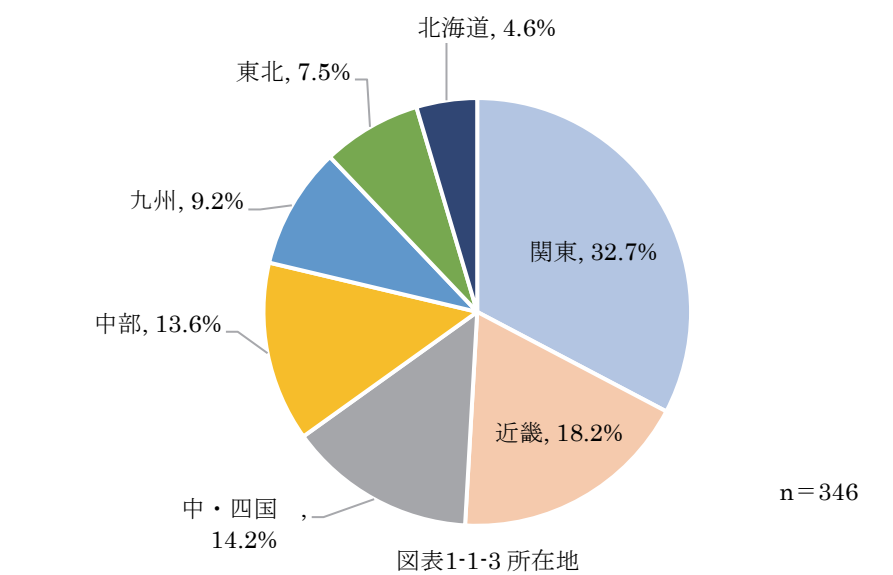
（２）修業年限



図表1-1-2　修業年限

修業年限については、4 年 136 校（39.3%）、3 年 22 校（6.4%）、2 年 182 校（52.6%）、無回答 6 校（1.7%）であった。学校種で見ると、短期大学では 3 年 10 校（8.0%）、2 年 113 校（90.4%）、無回答 2 校（1.6%）となり、専修学校では 3 年 8 校（10.5%）、2 年 64 校（84.2%）、無回答 4 校（5.3%）であった。

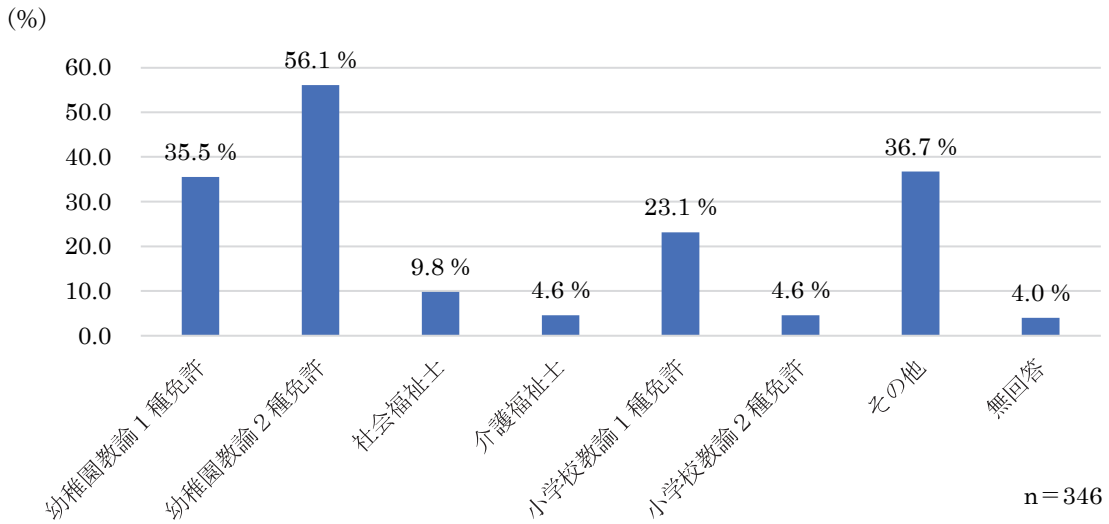
（３）所在地について



図表1-1-3 所在地

回答のあった 346 施設の所在地について、全国保育士養成協議会が定める都道府県別ブロックによって分析を行った。関東が 113 校（32.7%）、近畿が 63 校（18.2%）、中・四国が 49 校（14.2%）、中部が 47 校（13.6%）、九州が 32 校（9.2%）、東北が 26 校（7.5%）、北海道が 16 校（4.6%）であった。

（４）保育士資格以外に取得可能な資格・免許（受験資格も含む）について

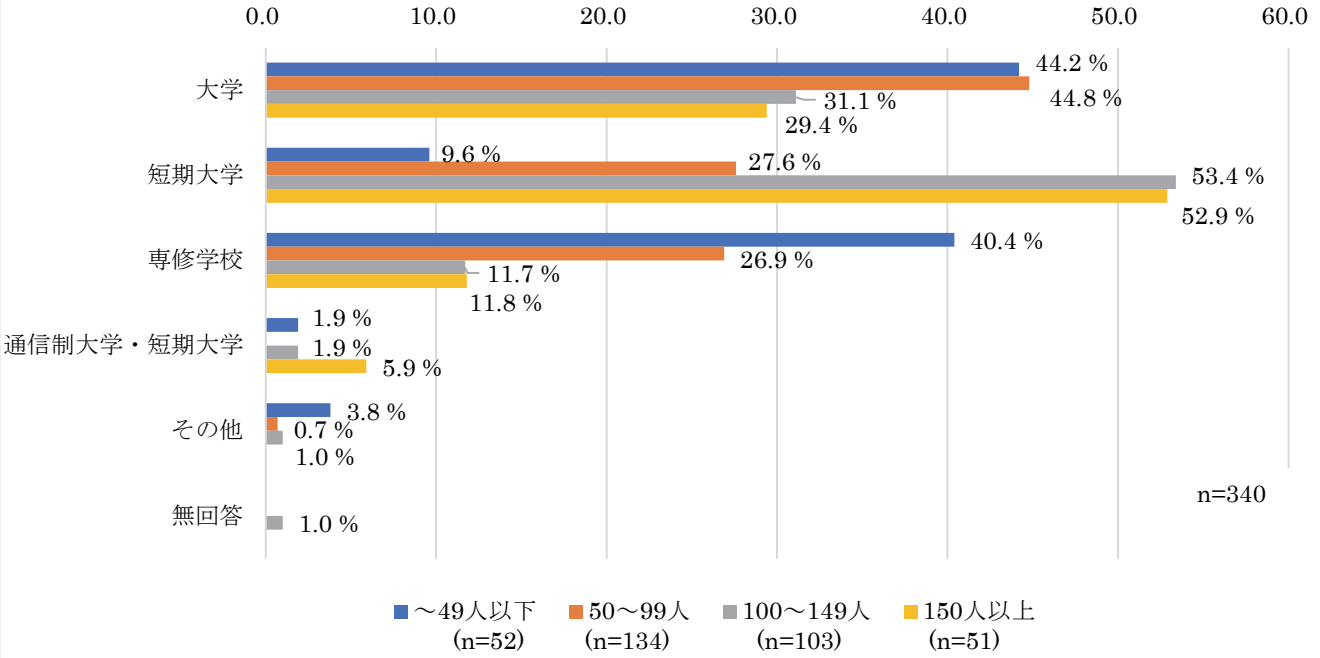


図表1-1-4　保育士資格以外の取得可能な資格・免許（受験資格も含む）について

保育士資格以外に取得可能な資格・免許（受験資格も含む）については、幼稚園教諭 2 種免許が 194 校（56.1%）と最も多かった。その他の 127 校（36.7%）を除いて、次いで、幼稚園教諭 1 種免許 123 校（35.5%）、小学校教諭 1 種免許 80 校（23.1%）、社会福祉士 16 校（9.8%）、介護福祉士 16 校（4.6%）、小学校教諭 2 種免許 16 校（4.6%）であった。

「その他」は、127 校（36.7%）であったが、修業年限 4 年では、中学校教諭 1 種・2 種、高等学校教諭 1 種、特別支援学校教諭 1 種・2 種、精神保健福祉士などがあり、修業年限 3 年では、特別支援学校教諭 2 種、こども音楽療育士、児童厚生二級指導員、図書館司書資格などがあった。修業年限 2 年では、社会福祉主事任用資格、介護職員初任者、保健児童ソーシャルワーカー、幼児体育指導者 2 級などがあった。

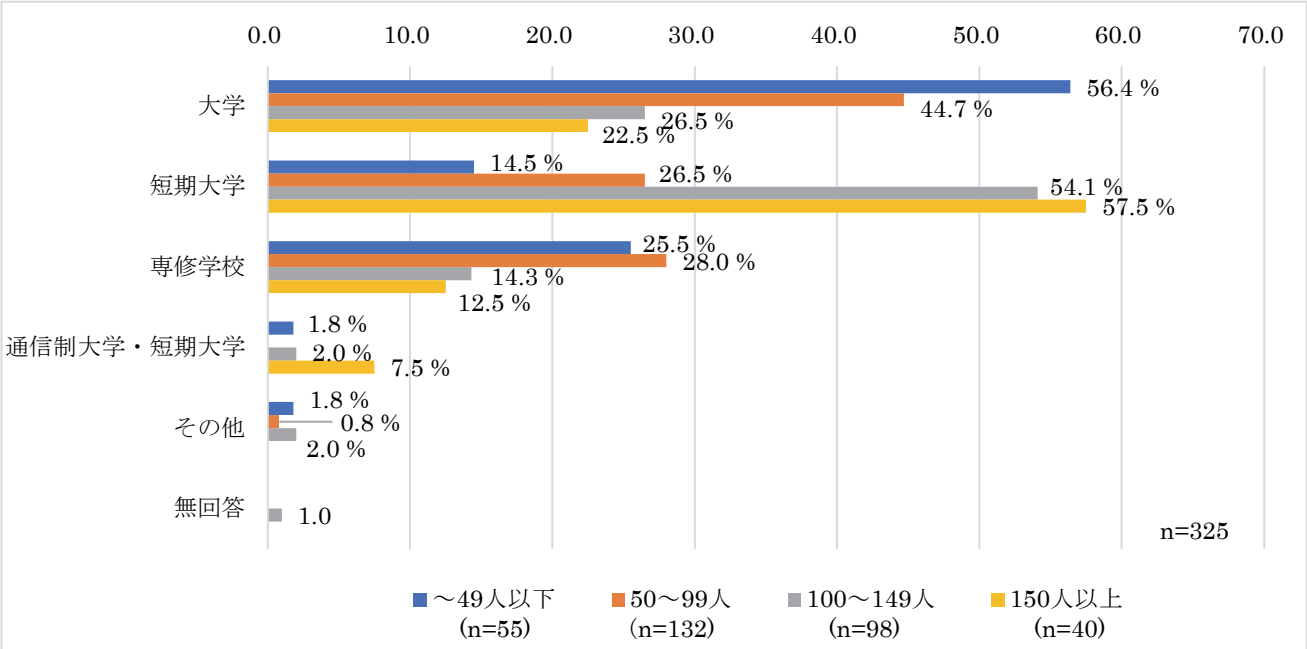
（5）保育士養成課程のある学科・専攻等の入学定員について



図表1-1-5　学校種別で見た保育士養成課程のある学科・専攻等の入学定員

保育士養成課程のある学科・専攻等の入学定員は、「49 人以下」が、大学 23 校（44.2%）、専修学校 21 校（40.4%）、短期大学 5 校（9.6%）となり、「50～99 人」は、大学 60 校（44.8%）、短期大学 37 校（27.6%）、専修学校 36 校（26.9%）となった。「100～149 人」は、短期大学 55 校（53.4%）、大学 32 校（31.1%）、専修学校 32 校（31.1%）となり、「150 人以上」は、短期大学 27 校（52.9%）、大学 15 校（29.4%）、専修学校 6 校（11.8%）となった。

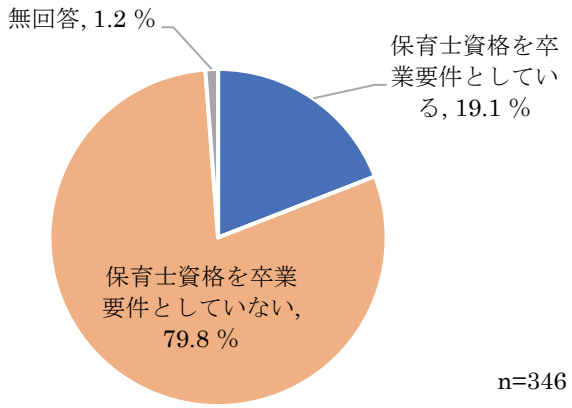
（６）養成施設として認可を受けている入学定員について



図表1-1-6　学校種別で見た指定保育士養成施設として認可を受けている入学定員

養成施設として認可を受けている入学定員は、「49 人以下」が、大学 31 校（56.4%）、専修学校 14 校（25.5%）、短期大学 8 校（14.5%）となり、「50～99 人」は、大学 59 校（44.7%）、専修学校 37 校（28.0%）、短期大学 35 校（26.5%）となった。「100～149 人」は、短期大学 53 校（54.1%）、大学 26 校（26.5%）、専修学校 14 校（14.3%）となり、「150 人以上」は、短期大学 23 校（57.5%）、大学 9 校（22.5%）、専修学校 5 校（12.5%）となった。

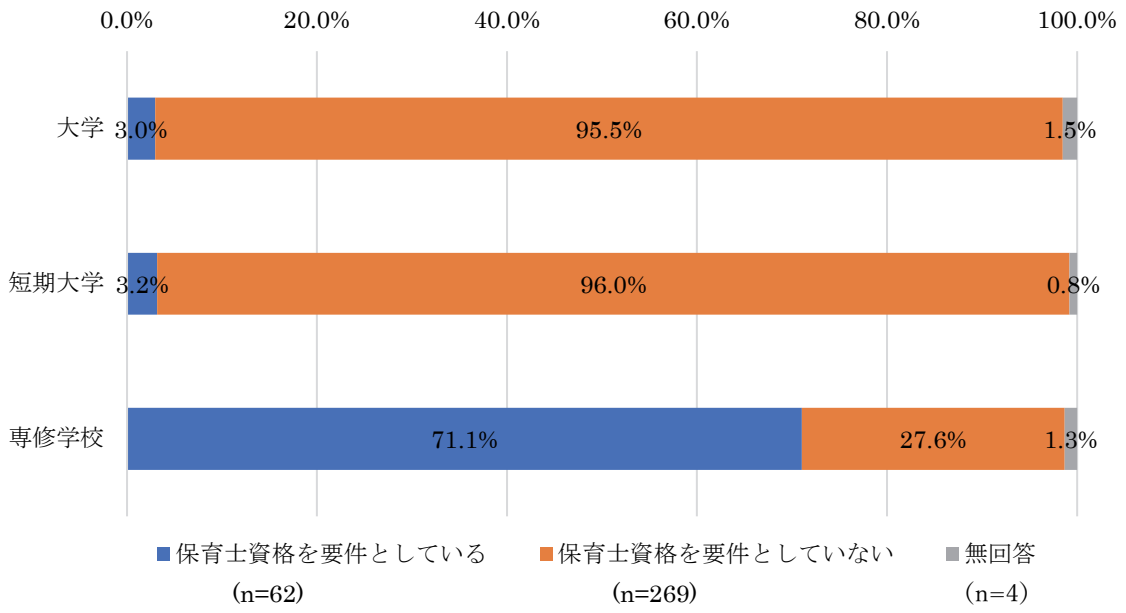
（７）養成施設における保育士資格の卒業要件の有無について



図表1-1-7　養成施設における保育士資格の卒業要件の有無について

養成施設における保育士資格の卒業要件の有無については、「卒業要件としている」66 校（19.1%）、「卒業要件としていない」276 校（79.8%）、「無回答」4 校（1.2%）であった。

また、学校種で見た養成施設における保育士資格の卒業要件の有無については次の通りである。



図表1-1-8　学校種で見た養成施設における保育士資格の卒業要件の有無

学校種で保育士資格の卒業要件の有無を見ると、卒業要件としている学校は、専修学校が 71.1%であったのに対して、大学および短期大学ともに 3%台であった。際立って専修学校において保育士資格を卒業要件としている学校が多いことが分かった。

（８）卒業生について

①学校種で見た卒業生の合計人数に占める業種別就職者の比率

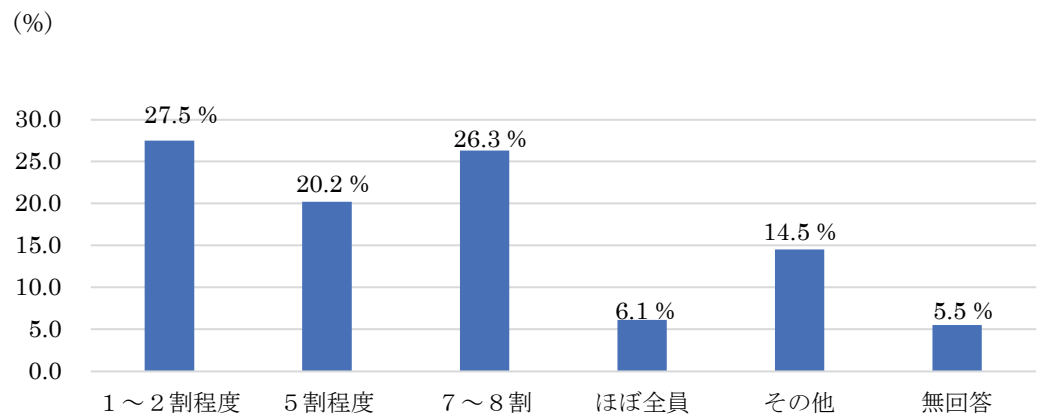
学校種で見た卒業生の合計人数に占める業種別就職者の比率は、大学で最も多いものが「私立保育所（認可保育所）」20.2%、次いで「一般企業等」17.7%、「小学校（私立・公立）」11.5%となった。

短期大学で最も多いものが「私立保育所（認可保育所）」37.9%、次いで「私立認定こども園」19.6%、「私立幼稚園」12.3%となった。

専修学校においては、最も多いものが「私立保育所（認可保育所）」44.7%、次いで「私立認定こども園」13.5%、「保育所以外の児童福祉施設」11.1%となった。

※「保育所以外の児童福祉施設」は小規模保育事業、家庭的保育事業を含んでいる。

②保育士として就職をした過去 5 年以内の卒業生の就労状況の把握



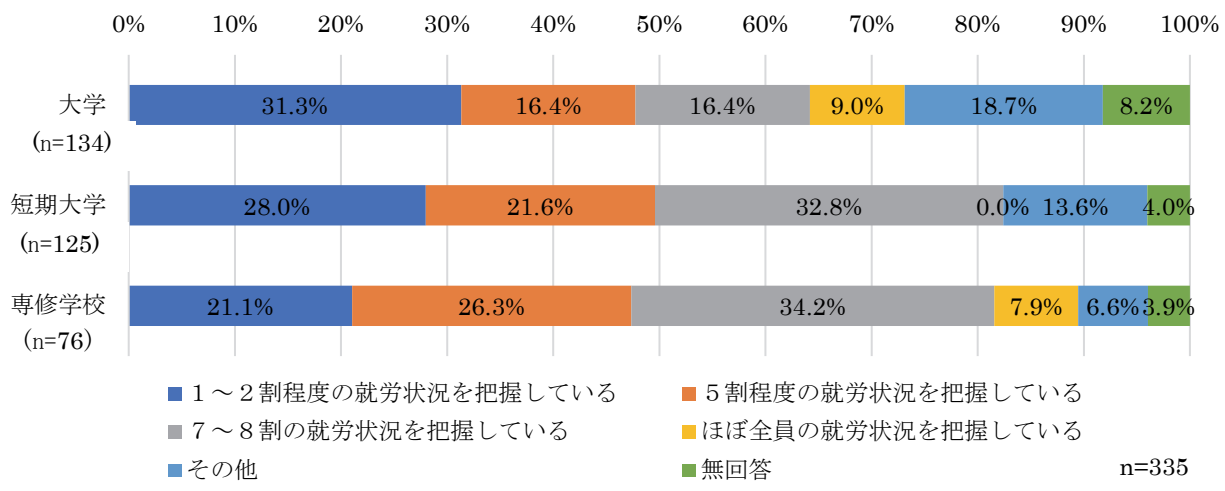
n=346

図表1-1-10　保育士として就職をした過去5年以内の卒業生の就労状況の把握

保育士として就職をした過去 5 年以内の卒業生について、現在の就労状況をどの程度把握できているかを問うたところ、「1～2 割程度」95 校（27.5%）と最も多く、次いで「7～8 割」91 校（26.3%）、「5 割程度」70 校（20.2%）となった。

「その他」の概要は、「把握していない」や「情報が入る分は把握している」、「就職 1 年目の状況の把握はしている」といった内容であった。

また、学校種で見た保育士として就職をした過去 5 年以内の卒業生の就労状況の把握は次の通りである。



図表1-1-11　学校種で見た保育士として就職をした過去5年以内の卒業生の就労状況の把握

大学では、「1～2 割程度」が 41 校（31.3%）と最も多くなり、次いで「その他」25 校（18.7%）、「5 割程度」・「7～8 割程度」がそれぞれ 22 校（16.4%）となった。

短期大学では、「7～8 割程度」が 41 校（32.8%）と最も多くなり、次いで「1～2 割程度」35 校（28.0%）、「5 割程度」27 校（21.6%）となった。

専修学校では、「7～8 割程度」が 26 校（34.2%）と最も多くなり、次いで「5 割程度」20 校（26.3%）、「1～2 割程度」16 校（21.2%）となった。

③就労状況の把握方法について

保育士として就職をした過去 5 年以内の卒業生について、現在の就労状況をどのように把握をしているか自由記述で問うたところ、大きく 3 つの方法に分かれた。

最も多かった把握方法は、卒業生へのアンケート調査・ホームカミングデー（同窓会含む）の実施であった。具体的には、「卒業生へのアンケートの実施（卒業後、3 年後まで）」、「卒業後すぐ（1 年目の 5 月）、新卒同窓会を実施し、参加者全員に卒業生アンケートを実施」、「卒業生に向けて不定期で郵送調査を実施」といった内容であり、卒業後も就労状況を把握することが可能なシステムが組織的に構築されていた。

2 つ目に、ゼミ教員・担任による把握方法であった。具体的には、「各教員の元ゼミ生との個人的な連絡のやりとり」、「卒業後にメールや LINE で報告や仕事の相談を受けることがある」、「定期的にメール等で近況を聞いている」といった内容であり、教員が各々で把握をした情報を学校全体で共有しているといった方法である。

3 つ目に、就職先や巡回先から得る把握方法があげられた。具体的には、「進路支援課を通して、年に 1 度（2～3 月）、卒業生の職場に訪問を実施」、「隔年で就職先に対して在職調査を行い、把握するようにしている」、「実習生の実習において（年 2 回）指導訪問時に卒業生の状況確認をしている」といった内容であった。就職先と実習指導の巡回先が重なっているケースが多く、その際に把握可能になっているようである。

その他にも、「卒業後 1、2 年の学生が転職相談に来るのでその学生の状況は把握している」、「就職の御礼と求人の依頼を兼ねて、動向を追っている、年 1 回」といった把握方法もあった。

ただし、これらの把握方法によって、過去 5 年以内の卒業生全員から返事を得られている回答はな

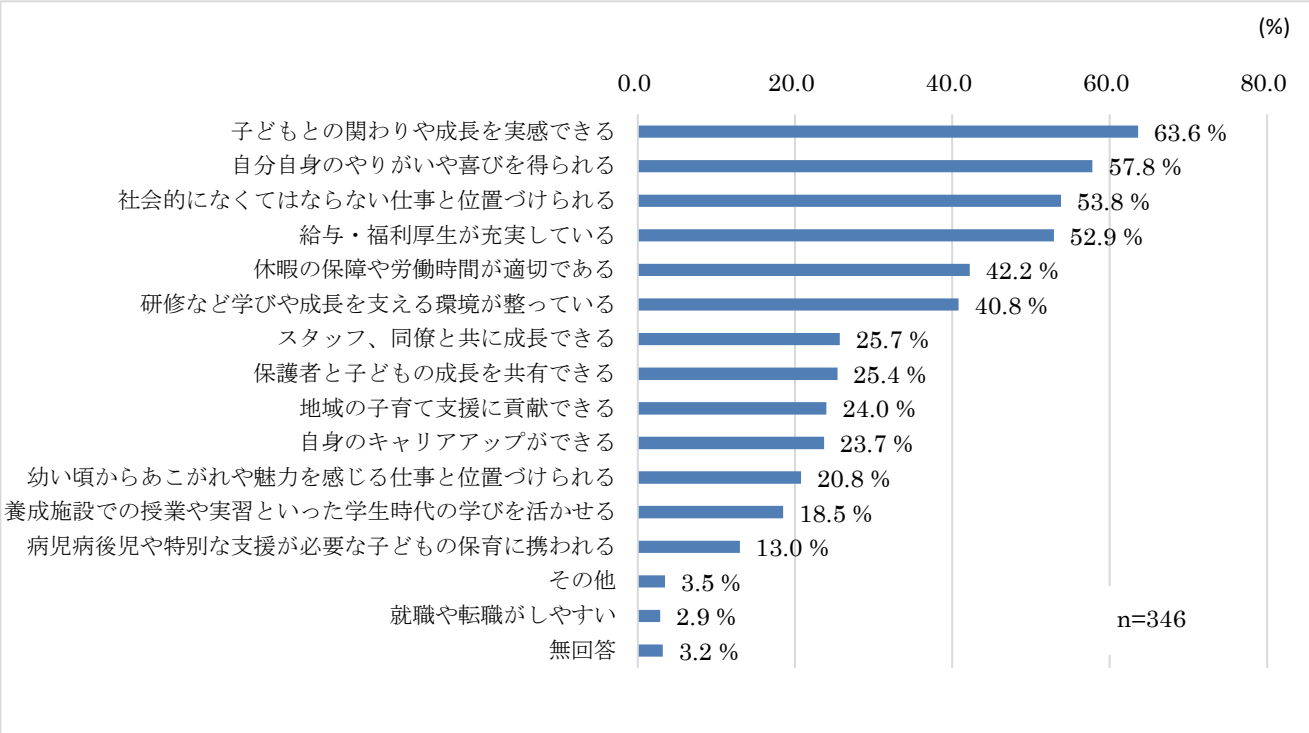
く、アンケート調査を自主的に回答した学生、ゼミ教員・担任等の教員とのつながりが卒業後も続いている学生のみの把握と、限定的な情報となっていることが課題であると考えられる。

２．保育士の魅力向上に向けた取組とキャリア支援について

（１）保育士養成施設の教員として、保育士という職業のやりがいや魅力を向上させるために、今より必要な取組について

①全体的傾向

保育士養成施設の教員として、保育士という職業のやりがいや魅力を向上させるために、今より必要と思われる取組については以下のような結果であった（5 つまで選択可能）。

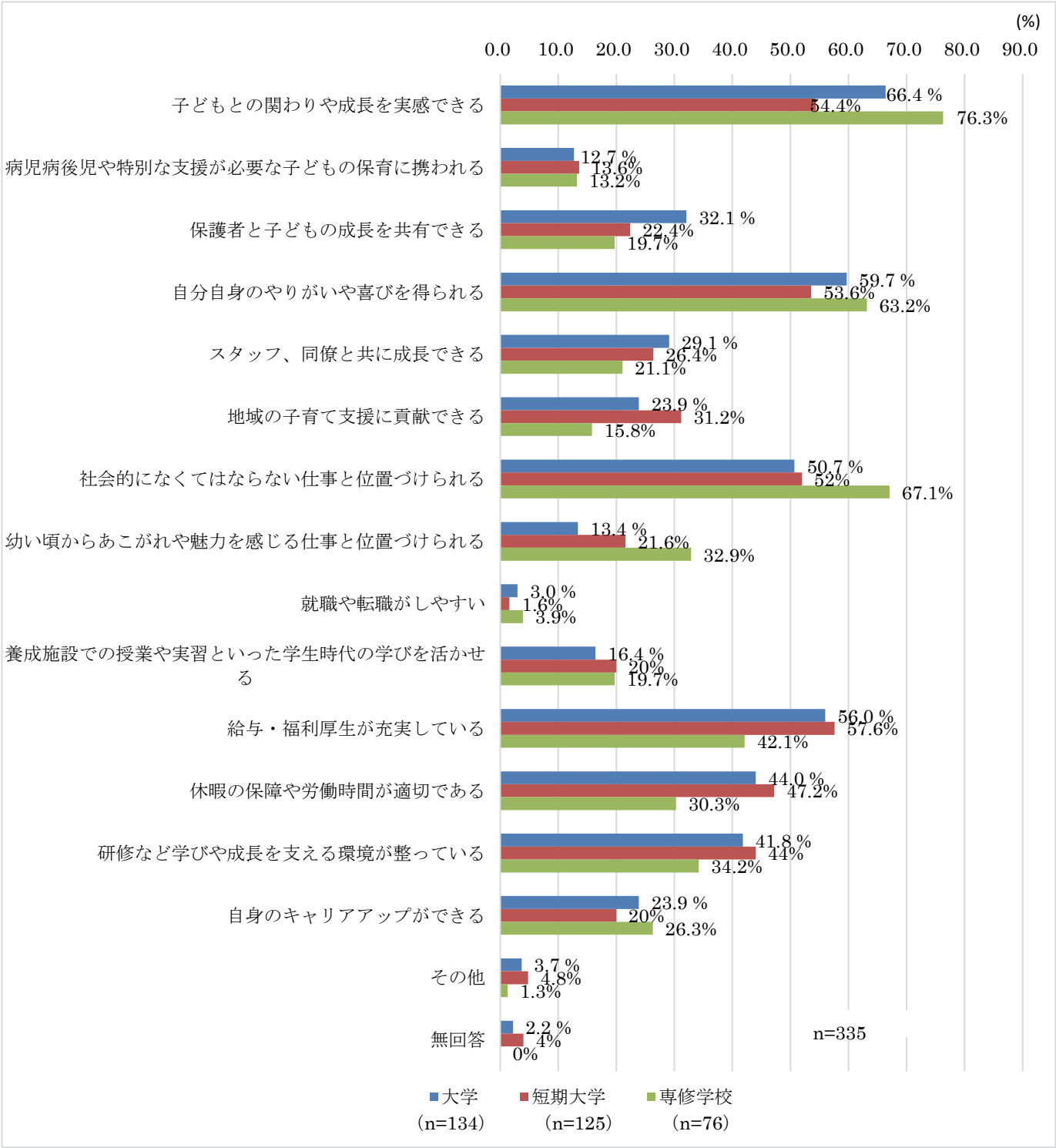


図表 1-2-1　保育士養成施設の教員として、保育士という職業のやりがいや魅力を向上させるために、今より必要な取組　（複数回答 5 つまで）

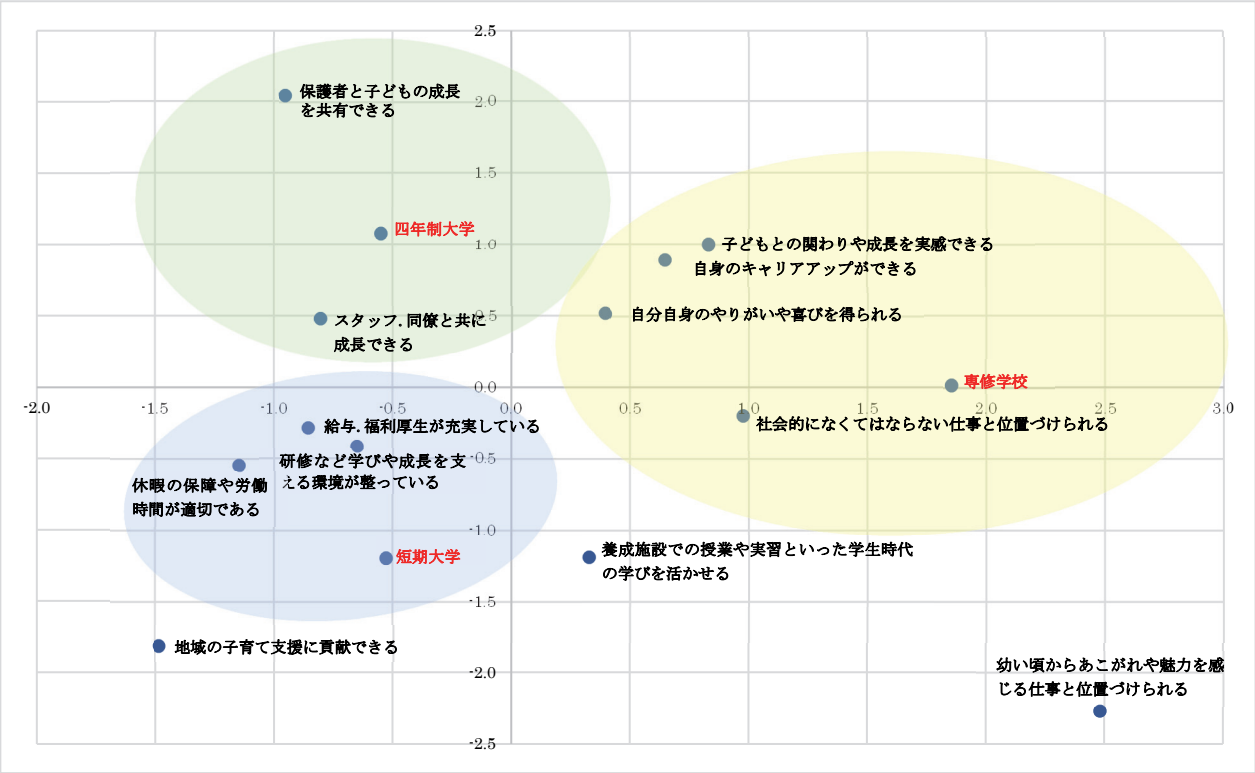
図 1-2-1 にあるように、学生が「子どもとの関わりや成長を実感できる」ようにすることが、保育士としてのやりがいや魅力を向上させるために必要であると多くの教員が考えていることがわかった（63.6%）。次いで、「自分自身のやりがいや喜びを得られる」（57.8%）、「社会的になくてはならない仕事と位置づけられる」（53.8%）、「給与・福利厚生が充実している」（52.9%）、「休暇の保障や労働時間が適切である」（42.2%）、「研修など学びや成長を支える環境が整っている」（40.8%）という回答が多かった。一方で、「就職や転職がしやすい」（2.9%）、「病児病後児や特別な支援が必要な子どもの保育に携われる」（13.0%）、「養成施設での授業や実習といった学生時代の学びを活かせる」（18.5%）といった回答は保育士のやりがいや魅力向上の取組としてはあまりあげられてなかった。「その他」については、「就労を継続する為の資格取得や構造（システム）を作る」、「保育職、子どもについての知見を活かした社会貢献を考える科目の新設」、「入学時の保育のイメージと現実の違いを、養成段階のうちに埋め、その現実を学生自身が受容できる」、「現職保育士の質向上、職業人としての協働、現場の人間関係の改善など」、「対人関係形成能力をアップさせ、対人関係に関心をもたせる」、「社会における職業的地位の向上（知識・スキル・人間性を備えた専門職としての評価）」、「実習以外でもできるだけ保育現場での体験ができる機会を増やす」などといった意見があった。

養成施設教員から保育士としてのやりがいや魅力向上のために今後必要な取組として、子どもの成長を実感でき、そして自分自身がやりがいや喜びを得られることが多くあげられていたが、これらは相互的関係にあるもので、子どもの成長を感じることはその保育士自身のやりがいとなると考えられるとするならば、初任者から日々の保育のなかで子どもの成長を感じ取ることができるような子どもの見方をもち、子ども理解を深めるようにつながる取組も養成段階で求められると考えられる。

②学校種別



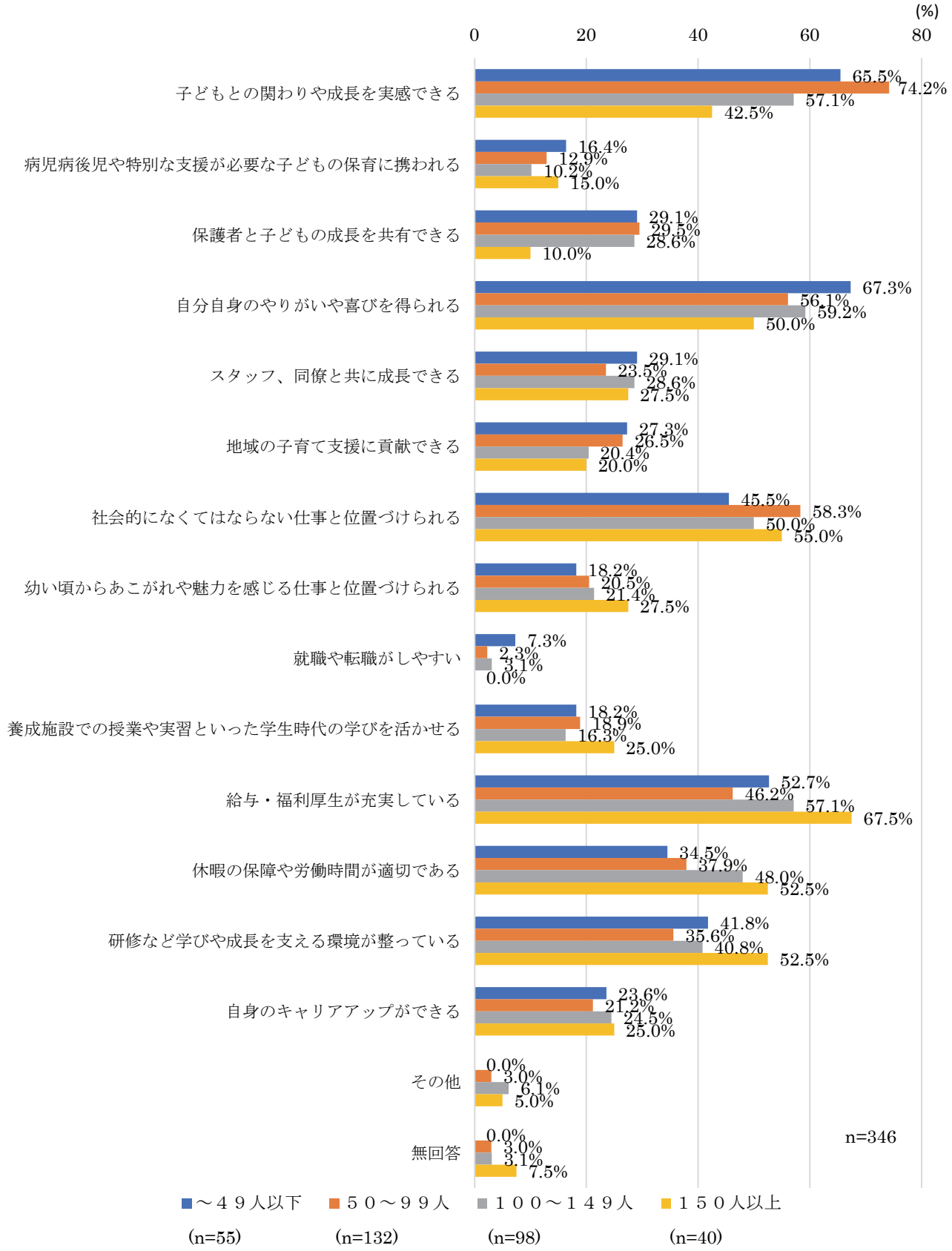
図表 1-2-2　学校種別でみた保育士という職業のやりがいや魅力を向上させるために必要な取組



図表 1-2-3　コレスポンデンス分析による保育士という職業のやりがいや魅力を向上させるために必要な取組

そして、図表 1-2-2 でみた結果をさらに学校種と必要な取組の関係をみるためにコレスポンデンス分析を行った結果が図表 1-2-3 である。これをみると、大学は「保護者と子どもの成長を共有できる」、「スタッフ・同僚と共に成長できる」が、短期大学は「給与・福利厚生が充実している」、「研修など学びや成長を支える環境が整っている」、「休暇の保障や労働時間が適切である」が、専修学校は「社会的になくてはならない仕事と位置づけられる」、「自分自身のやりがいや喜びを得られる」、「自身のキャリアアップができる」、「子どもとの関わりや成長を実感できる」がまとまりのあるもの、関連性が高いことが示された。

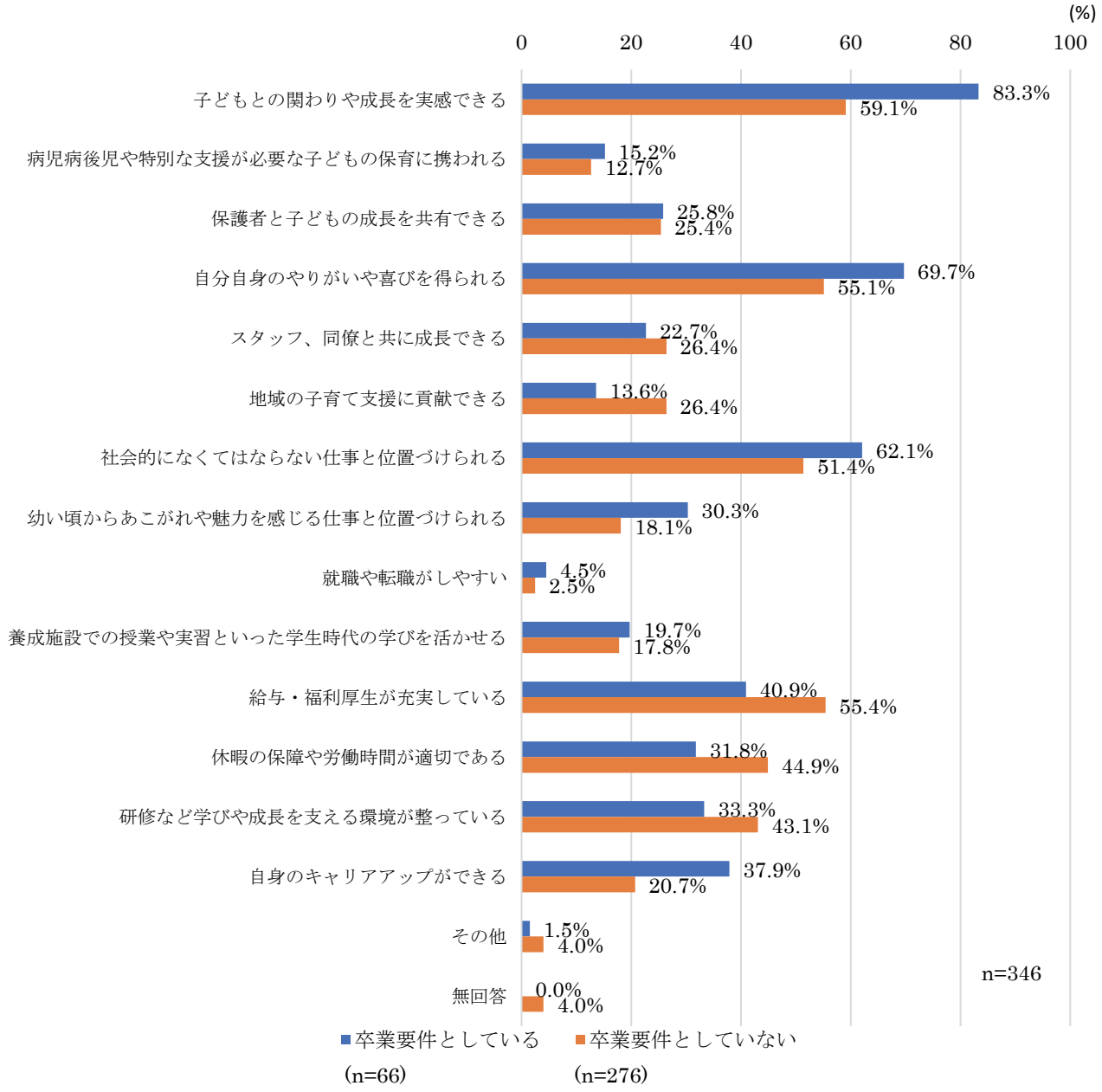
③保育士養成定員別



図表 1-2-4　保育士の養成定員別でみた保育士という職業のやりがいや魅力を向上させるために必要な取組

各養成施設の保育士養成定員別にみると、以下のような結果であった。定員 150 人以上の養成施設では、「給与・福利厚生が充実している」(67.5%)、「社会的になくてはならない仕事と位置づけられる」(55.0%)、「休暇の保障や労働時間が適切である」(52.5%)、「研修など学びや成長を支える環境が整っている」(52.5%)ことが保育士としてのやりがいや魅力向上に必要であると捉えられていた。定員 50～99 人以下では、「子どもとの関わりや成長を実感できる」(74.2%)、「社会的になくてはならない仕事と位置づけられる」(58.3%)ことが、定員 49 人以下では、「自分自身のやりがいや喜びを得られる」(67.3%)ことが多くあげられていた。

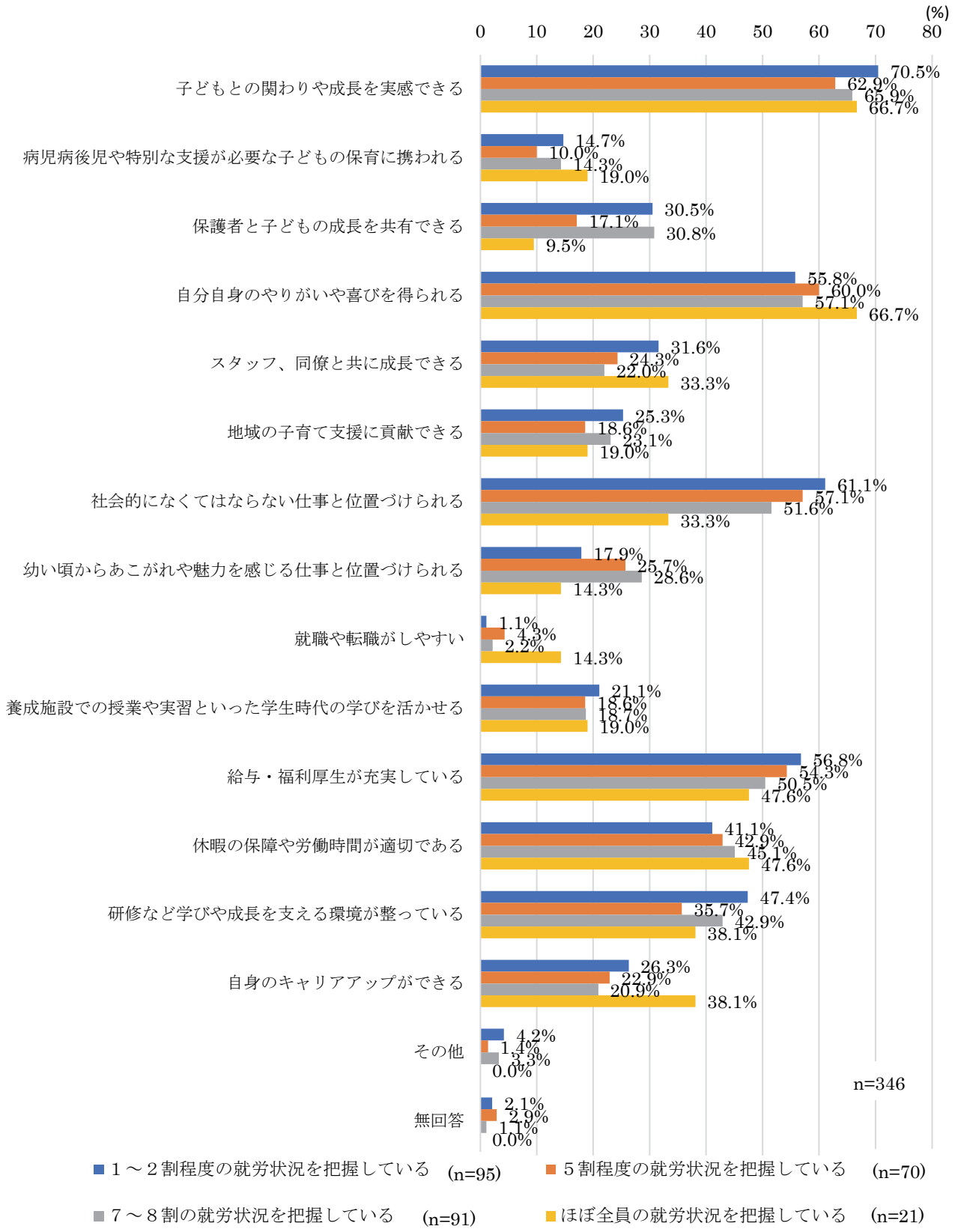
④保育士資格取得の卒業要件の有無



図表 1-2-5　卒業要件の有無でみた保育士という職業のやりがいや魅力を向上させるために必要な取組

卒業要件として保育士資格の取得を定めているかどうかでみると、図表 1-2-5 のような結果となった。保育士資格取得を卒業要件としている養成施設の教員は、「子どもとの関わりや成長を実感できる」(83.3%)、「自分自身のやりがいや喜びを得られる」(69.7%)、「社会的になくてはならない仕事と位置づけられる」(62.1%)ことが保育士としてのやりがいや魅力を学生が感じることとして必要な取組であると捉えられていた。一方、保育士資格取得を卒業要件としていない養成施設の教員のなかでは「給与・福利厚生が充実している」(55.4%)、「休暇の保障や労働時間が適切である」(44.9%)、「研修など学びや成長を支える環境が整っている」(43.1%)ことがあげられていた。

⑤卒業後５年以内の就労状況の把握



図表 1-2-6　卒業後５年以内の就労状況の把握からみた保育士という職業のやりがいや魅力を向上させるために必要な取組

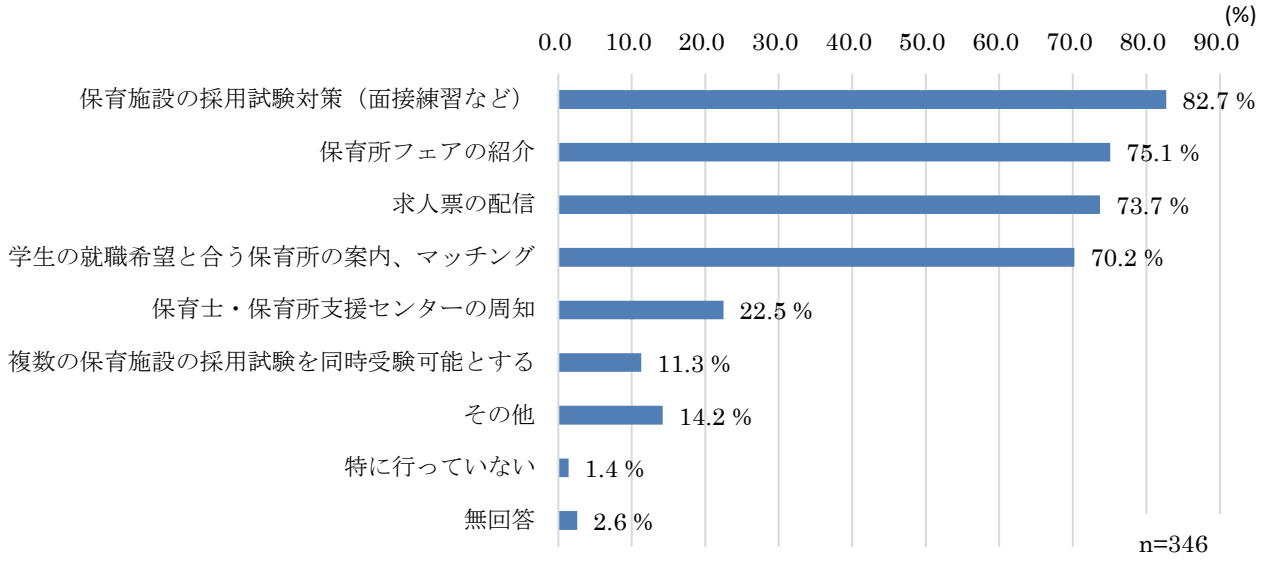
卒業後 5 年以内の就労状況の把握をしているかどうかの状況別にみると、図表 1-2-6 のような結果であった。卒業後 5 年以内の就労状況の把握が卒業生の 1 割～2 割程度把握している養成施設は 95 校(27.5%)と全体のなかでは一番多かったが、そこでは「子どもとの関わりや成長を実感できる」(70.5%)、「社会的になくてはならない仕事と位置づけられる」(61.1%)という子ども・社会に役立つことができるという面と、「給与・福利厚生が充実している」(56.8%)、「研修など学びや成長を支える環境が整っている」（47.4%）といった処遇面についても多くあげられていた。

また、卒業生ほぼ全員の 5 年以内の就労状況を把握している養成施設は全体からすると 21 校（0.06%）と割合は少ないが「自分自身のやりがいや喜びを得られる」、「自身のキャリアアップができる」、「研修など学びや成長を支える環境が整っている」、「スタッフ、同僚と共に成長できる」といった学生、卒業生の保育士という仕事を通しての成長や自己実現へとつながる取組がより必要であると感じていることがわかった。

（2）養成施設が現在行っている保育士として就職するための、また保育士として就労することの不安低減につながるためのキャリア支援について

前節で保育士として働くやりがいや魅力向上のためにより必要な取組についてみたが、次に現段階において各養成施設で行われている保育士として就職するためのキャリア支援についてみていくこととする（複数回答）。

①全体的傾向

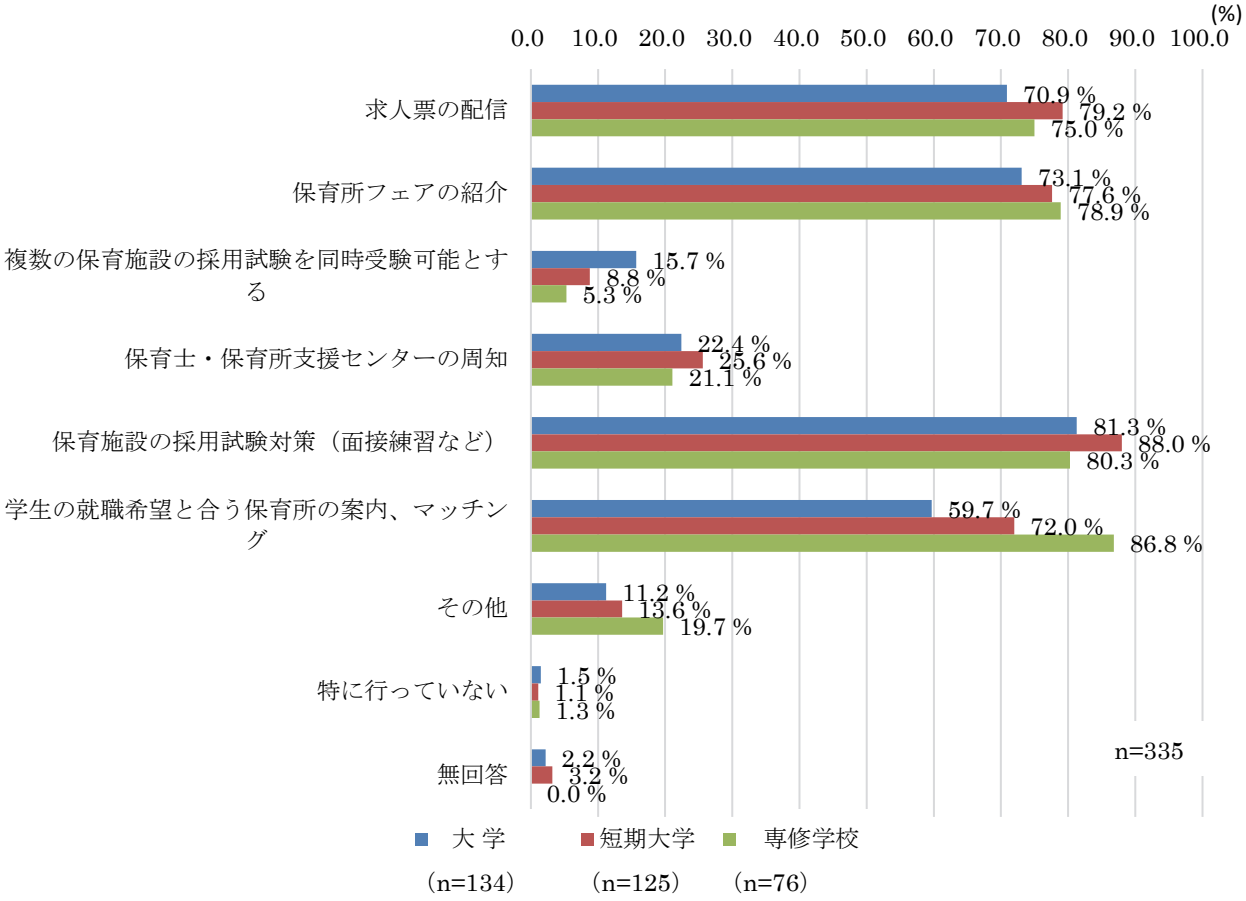


図表 1-2-7　保育士として就職するための、また保育士として就労することの不安低減につながるためのキャリア支援について

全体でみると保育士として就職するため、また保育士として就労することの不安低減につながるキャリア支援としては、「保育施設の採用試験対策（面接練習など）」(82.7%)がもっとも多く行われている。続いて、「保育所フェアの紹介」（75.1%）、「求人票の配信」（73.7%）、「学生の就職希望と合う保育所の案内、マッチング」（70.2%）となっていた。「保育士・保育所支援センターの周知」は全体のなかでは 22.5%と低かった。「その他」（14.2%）の自由記述をみると、「卒業生や保育園園長に

よる講話」、「ゼミナールの担当教員による支援」、「進路指導とカウンセリングの充実」、「自治体と共同で行う学内懇談会、ＯＧ懇談会、現職保育者との集い、採用担当者の話」、「県社会福祉協議会の派遣講師による出前講座の開催」、「学内での就職説明会（複数の法人の採用担当者を招き、法人の説明をしていただく）」、「就職に関する授業を時間割に組み込み実施している」、「保育施設の見学案内」、「公務員試験、大学編入に対応できるよう勉強会や科目を設けている」、「週１回の園・施設・子育て支援センターでのインターンシップ」、「学生全員との数回の面談を行い一人一人の希望を丁寧に聴き取りをしている」、「職業生活に必要なマナーや制度・法律・相談先などの情報提供・教育」などさまざまな支援が行われていた。

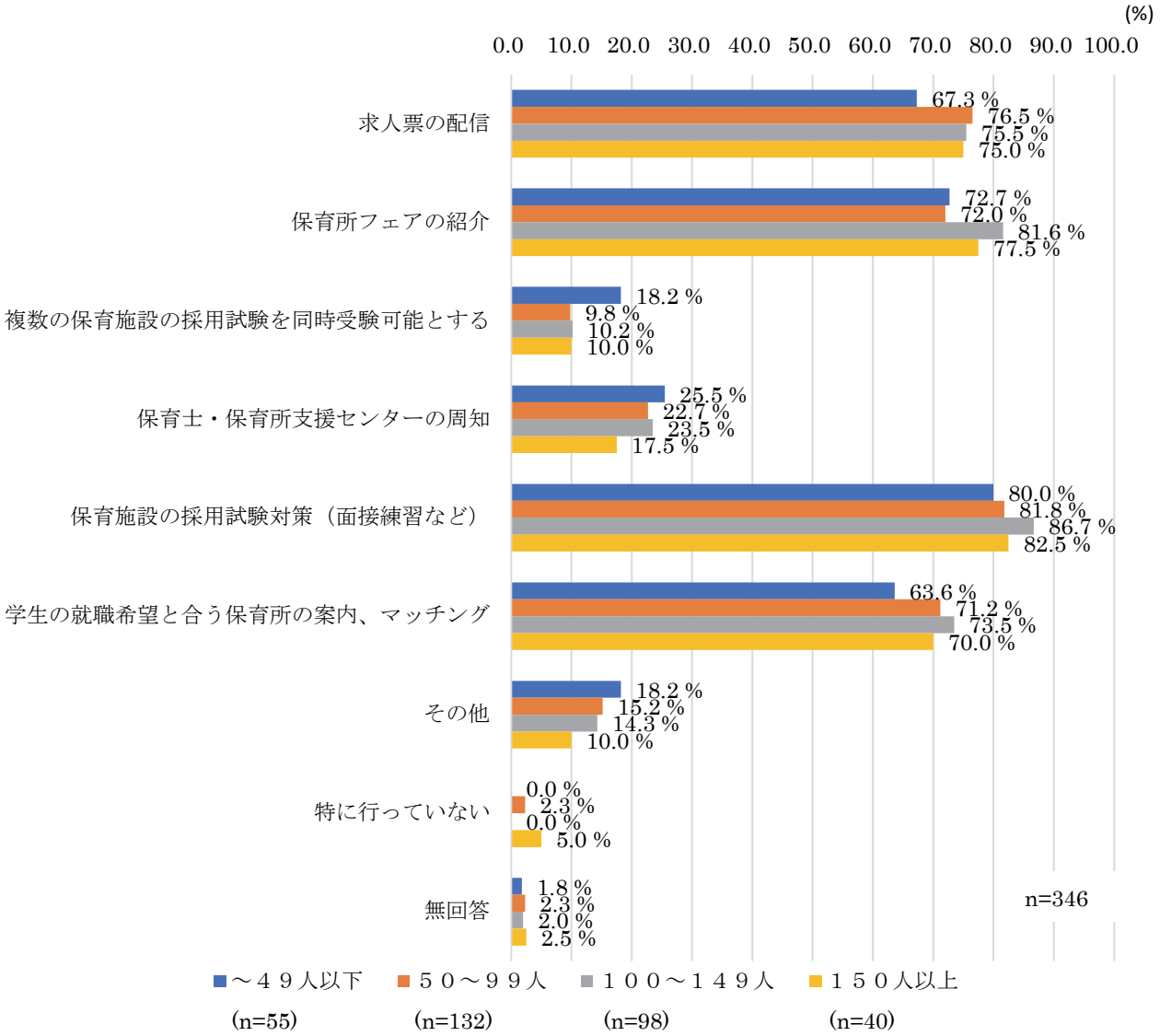
②学校種別



図表 1-2-8　学校種別にみた保育士として就職するための、また保育士として就労することの不安低減につながるためのキャリア支援について

学校種別にキャリア支援をみてみると、「学生の就職希望と合う保育所の案内、マッチング」は専修学校（86.8%）でもっとも多く行われている支援であり、また短期大学においても 72.0%と「保育施設の採用試験対策（面接練習など）」（88.0%）、「求人票の配信」（79.2%）、「保育所フェアの紹介」（77.6%）に次いで多く行われていた。全体としては多くはあげられていなかったが「複数の保育施設の採用試験を同時受験可能とする」は他より大学（15.7%）において実施されていた。「保育士・保育所支援センターの周知」は、いずれの学校種でも 20%台の実施であった。

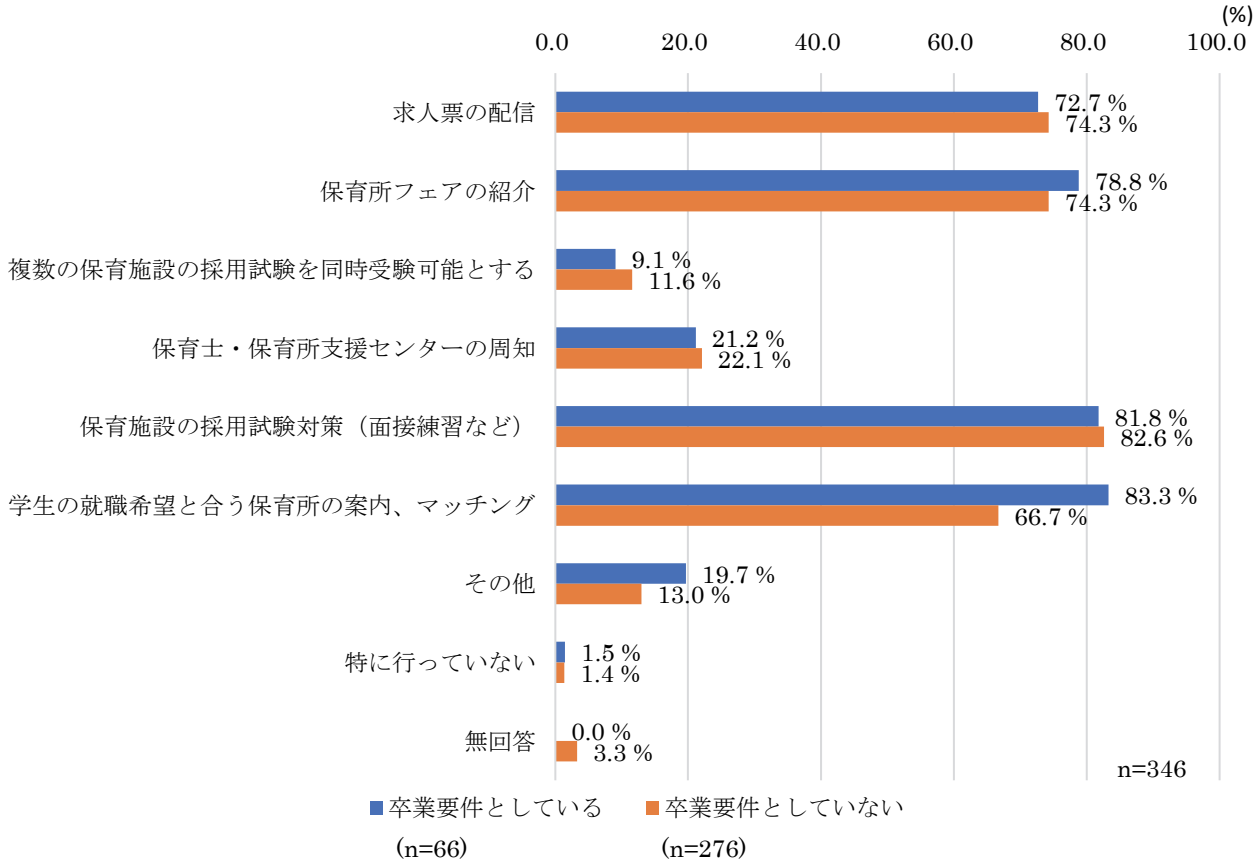
③保育士養成定員別



図表 1-2-9　保育士養成定員別にみた保育士として就職するための、また保育士として就労することの不安低減につながるためのキャリア支援について

保育士養成定員別に養成施設で行っているキャリア支援についてみたところ、「複数の保育施設の採用試験を同時受験可能とする」は 49 人以下の定員である養成施設において 18.2%となっていたが、他は大きな違いはみられなかった。

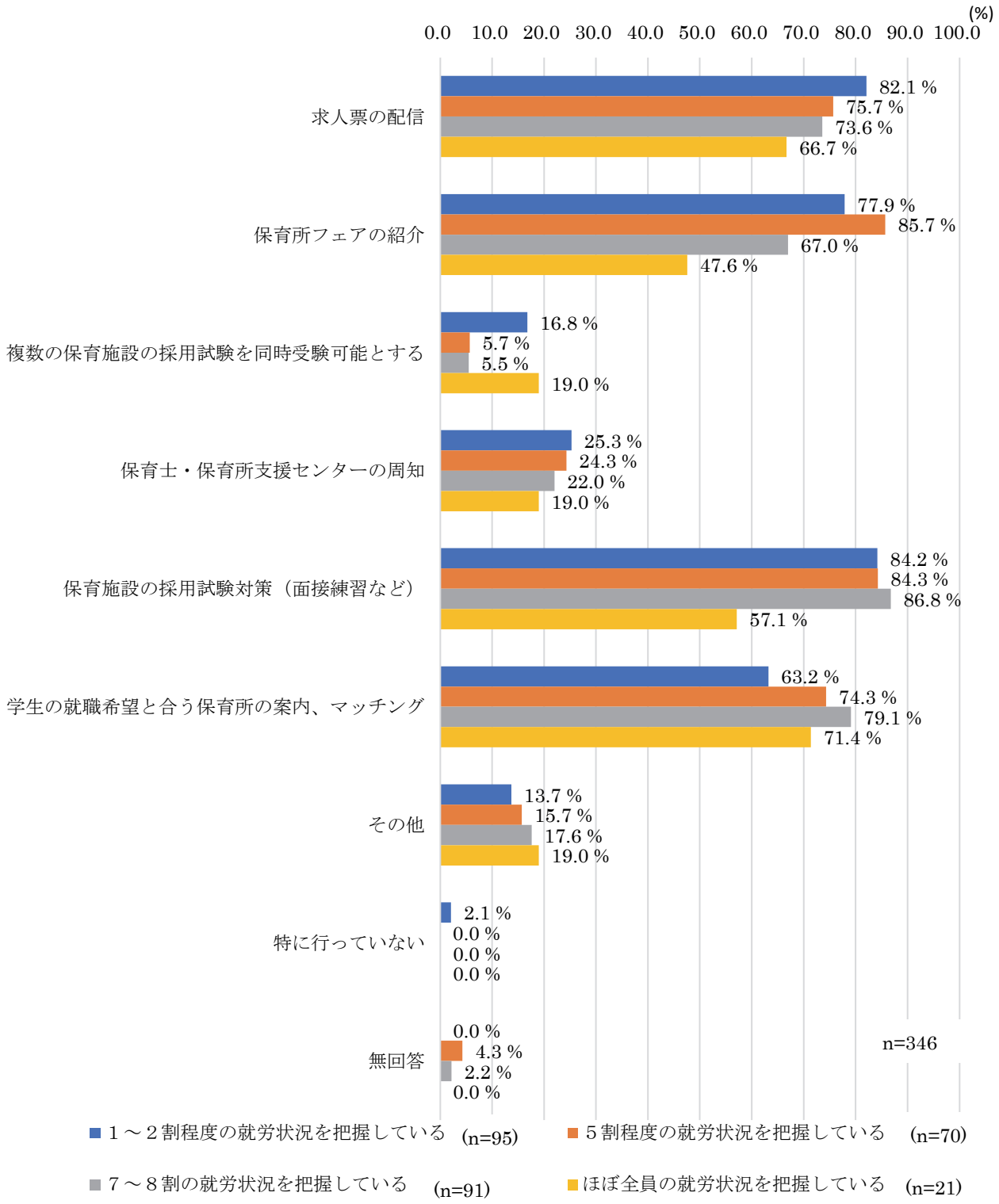
④保育士資格取得の卒業要件の有無



図表 1-2-10　卒業要件の有無による保育士として就職するための、また保育士として就労することの不安低減につながるためのキャリア支援について

保育士資格取得を卒業要件としている養成施設では、「学生の就職希望と合う保育所の案内、マッチング」が卒業要件としていないところよりも 16.6%割合が高く、学生に合った就職先を探すキャリア支援を行っていることがわかる（図表 1-2-10）。そのほかについては、卒業要件となっているかどうかで大きな割合の違いはみられなかった。

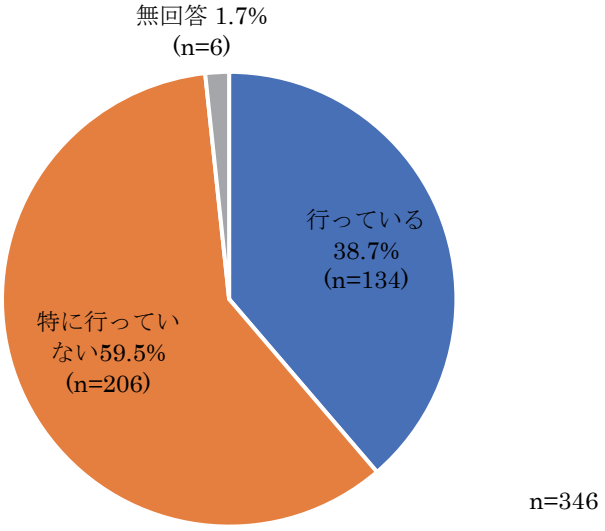
⑤卒業後５年以内の就労状況の把握



図表 1-2-11　卒業後５年以内の就労状況の把握からみた保育士として就職するための、また保育士として就労することの不安低減につながるためのキャリア支援について

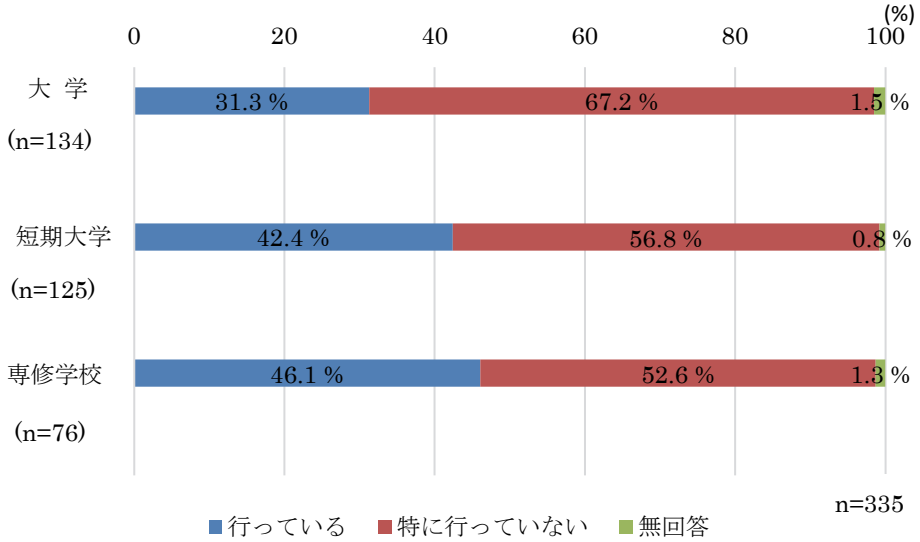
卒業後 5 年以内の就労状況をどの程度把握しているかで、保育士として就職するために現在行っているキャリア支援をみたのが図表 1-2-11 である。ほぼ全員の就労状況を把握している養成施設では、「求人票の配信」、「保育所フェアの紹介」、「保育施設の採用試験対策（面接練習など）」は他の学校種と比べると割合が低く一方、「複数の保育施設の採用試験を同時受験可能とする」、「学生の就職希望と合う保育所の案内、マッチング」が他の学校種より行われているキャリア支援となっていた。

（３）ホームページ等による保育士のやりがいや魅力を発信する取組について



図表 1-2-12　ホームページ等による、保育士のやりがいや魅力を発信する取組

養成施設におけるホームページ等を活用した保育士のやりがいや魅力を発信している取組については、全体では「行っている」134 校（38.7%）、「特に行っていない」206 校（59.5%）、「無回答」6 校（1.7%）であった。



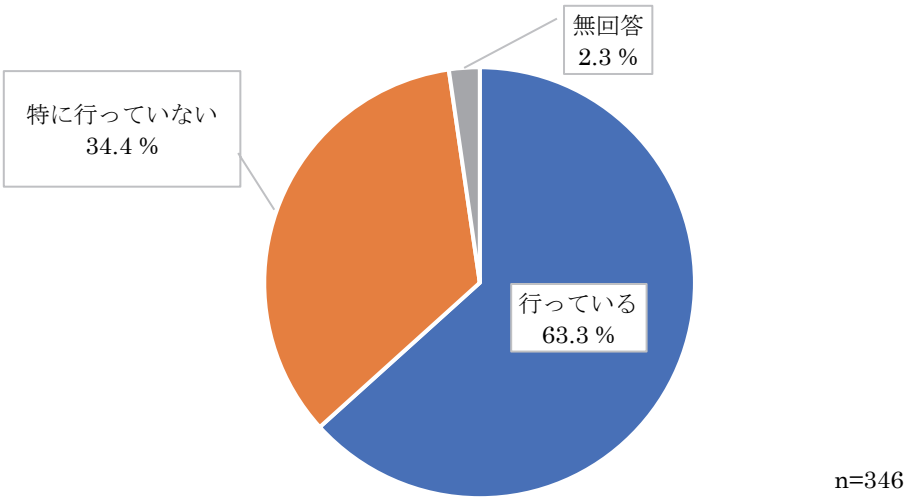
図表 1-2-13　学校種別でみたホームページ等による、保育士のやりがいや魅力を発信する取組

学校種別にホームページ等によるやりがいや魅力発信の取組状況をみたのが図表 1-2-13 である。これをみると、短期大学では「行っている」が 42.4%、専修学校では 46.1%であったところ、大学では実施が 31.3%にとどまっていた。

ホームページ等を活用した保育士のやりがいや魅力を発信している養成施設に具体的な取組をたずねたところ、次のような取組があげられていた。HP に現場で働く卒業生の声を掲載してやりがいを伝えたり、学生の授業や活動を配信したり、たくさんの子どもたちの写真を載せたりしている。なかには、「保育現場、自治体と協力し『保育士・幼稚園教諭・保育教諭のお仕事魅力発信 Book』を製作し、県内外の高校生・養成施設学生に配布している」ところや、「ホームページやパンフレット上に本校の附属園で働いている保育士のコメントを掲載し、やりがいなどの魅力を発信している。その他、〇〇県教育委員会が高校生の主体的な学びへとつながる様々な教育機会の提供の為に設立した『県立高校生学習活動コンソーシアム』への参加や、県下の高校で実施している進路の授業（職業人インタビュー等）に保育士と帯同するなどして、仕事の魅力・やりがいを発信している」、「『保育者を目指すみなさんへ』と題した動画をオリジナルで作成しホームページにあげている」などといった取組があげられていた。

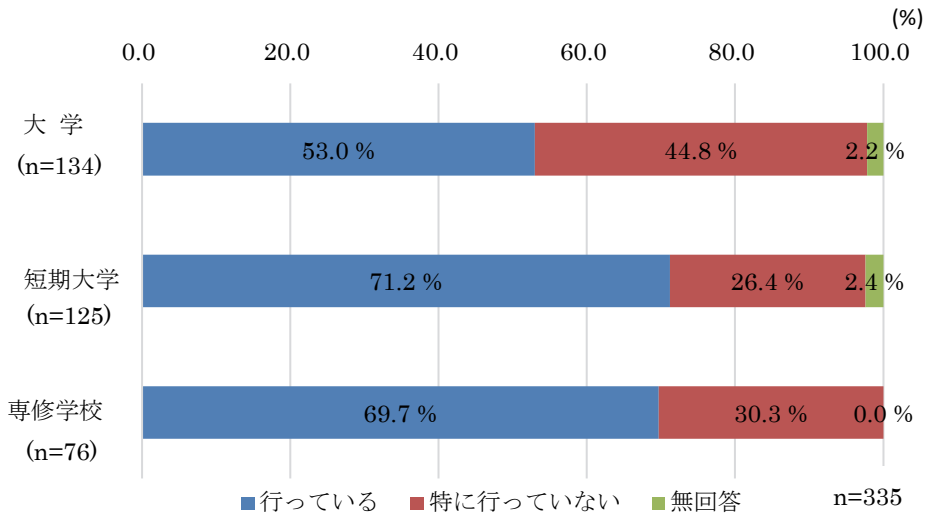
（4）卒業生に対する保育士としてやりがいや魅力向上のためのキャリア支援について

①保育士として悩みや課題を抱えている卒業生の相談できる環境づくりについて



図表 1-2-14　保育士として悩みや課題を抱えている卒業生の相談できる環境づくり

卒業生が保育士として働いていて感じる悩みや課題を相談できる環境を作っていると回答したのは、全体の 63.3%であり半数以上の養成施設で実施されていることがわかった。学校種でみると、短期大学（71.2%）、専修学校（69.7%）、大学（53.0%）であった。



図表 1-2-15　学校種別でみた保育士として悩みや課題を抱えている卒業生の相談できる環境づくり

保育士として悩みや課題を抱えている卒業生の相談できる環境づくりについて「行っている」と回答した養成施設教員に具体的にどのような取組を行っているか自由記述で回答を求めたところ、多岐にわたる取組が行われていることがわかった。具体的な取組について記述していた養成施設は 215 校であった。卒業生の相談できる環境づくりとしては図表 1-2-16 のような内容に集約できた。

図表 1-2-16　保育士として悩みや課題を抱えている卒業生の相談できる環境づくりについて

【来校の機会】	ホームカミングデー、同窓会・同期会、新卒激励会、卒業生向けの公開講座、リカレント研修会、フォローアップセミナー、保育研修会などの開催、オープンキャンパスでの講演者として招待、「在学生・卒業生サロン」や実習事前指導などでの後輩との交流、など
【ゼミ担当教員等とのつながり】	担任への連絡・相談、担任からの定期的連絡、各教員の研究室をオープンにした相談しやすい環境づくり、教員が個人的に相談対応
【相談窓口】	キャリア支援センター、学生相談室、教員・保育士養成支援センターなど
【卒業前からの情報提供】	悩んだときの相談可能、転職・再就職の相談可能、卒業時に全学科教員の連絡先を伝える
【現場との連携】	卒業後の就職先訪問
【情報配信】	メール、LINE アカウント開設、HP などの活用

【来校の機会】をつくっている養成施設では、ホームカミングデーを設けているところが多かったが開催の時期は 5 月・6 月であったり 8 月であったり、また回数も年 1 回、2 回などであった。卒業後の学びの機会をつくっているところでは、年 4 回保育研修会を実施したり、卒業後 1 年目、3 年目、〇年目など卒業してからの年数での集いを開催したりしていた。他に、在学生や高校生に向けた講演者として招待し、そこで相談できるようにしたりしている養成施設もみられた。

【ゼミ担当教員等とのつながり】をつくっている養成施設では、卒業生が連絡のつく教員（担任）へ相談できるようになっていたり、元担任から定期的に連絡を入れるようにしていたりしているが、なかには教員が個人的に相談対応をしているところもある。

【相談窓口】を設置している養成施設では、学生が利用できるキャリア支援センターや学生相談室

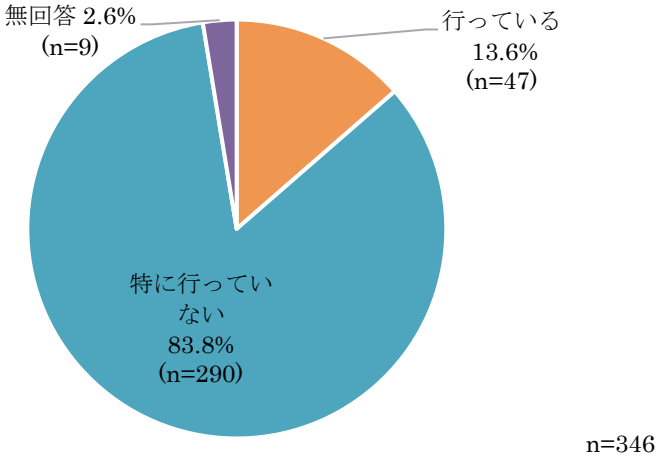
を卒業生も利用できるようにしてあったり、専任講師が常駐している相談窓口や、実務経験のある特任教員を配置した教育支援センター、現場経験豊富な教員のいる教員・保育士養成支援センターなどを開設している。

【卒業前からの情報提供】を行っている養成施設では、在学中から母校の教員にいつでも相談にくるように伝えていたり、「就職の手引」に卒業後の相談を受け付ける旨の記述や再就職の希望調書を付けて配布したりしている。“永久サポート大学”として卒業生にも卒業後の様子を聞き、就職等のフォローもあることを周知している養成施設もあった。

【現場との連携】を行っているところでは、毎年 7 月 8 月頃に卒業初年度卒業生の就職先訪問を行っていた。しかし、こうした就職先と連携した環境づくりを行っている養成施設は非常に少なかった。

【情報配信】の工夫をしている養成施設では、メールや養成施設の HP で卒業生の集いや研修等の情報を配信したり、グループラインでの連絡・学校に来やすい雰囲気づくりをしていたり、グループラインを利用した相談を手がかりに行政及び求人情報を通知したりしていた。

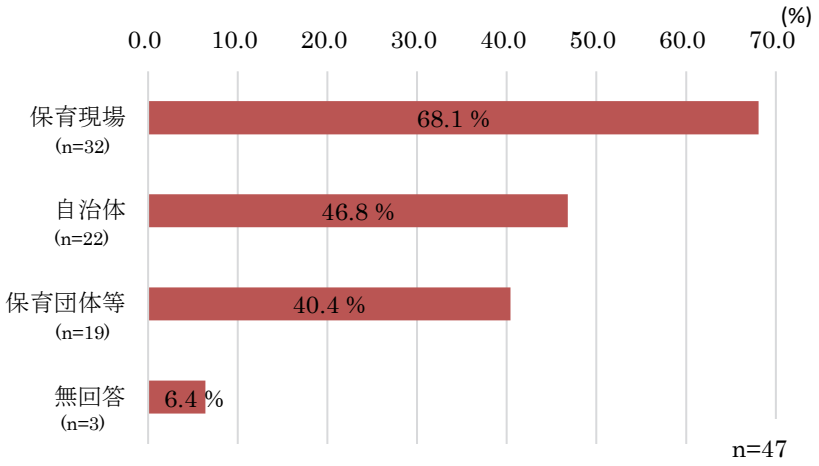
（5）卒業後 1～2 年目の保育士への保育現場、自治体、保育団体等と連携した研修等の取組について



図表 1-2-17　卒業後 1～2 年目の保育士への保育現場、自治体、保育団体等と連携した研修等の取組

卒業後 1～2 年目の保育士を対象として保育現場や自治体、保育団体等と連携した研修等の取組を「行っている」養成施設は全体 346 校のうち 47 校（13.6%）、「特に行っていない」養成施設は 290 校（83.8%）であり、取組を行っているところは非常に少ないことがわかった。

「行っている」と回答した養成施設で連携しているところは、以下のとおりであった（複数回答）。



図表 1-2-18　卒業後 1～2 年目の保育士へ実施している保育現場、自治体、保育団体等と連携した研修

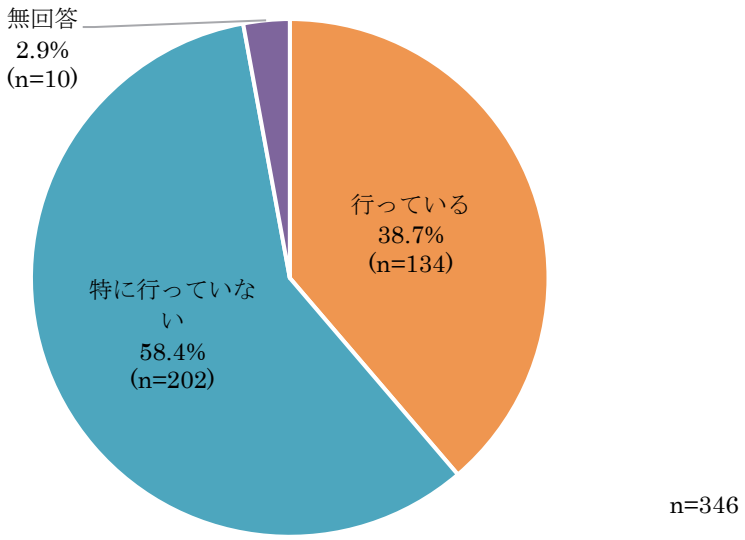
卒業後 1～2 年目の保育士を対象として保育現場や自治体、保育団体等と連携した研修等の具体的な取組は以下のとおりである。

図表 1-2-19　卒業後 1～2 年目の保育士を対象とした連携先ごとの具体的な取組例

【保育現場】
・学園として文科省からの委託事業を受け、ｅラーニングシステムの開発実施をすすめている。 ・研修講師派遣 ・毎年「保育研修会」、「保育を考える会」を実施。卒業後１年目の卒業生及び過去３年間の就職先へ案内を送り、保育現場に役立つ研修会を実施している。 ・幼児教育研究会を毎年開催、ワークショップ等の内容を新人保育士向けのものにする。 ・「現職保育者研修」を２月に行っている。 ・研究会 ・幼児教育講座の開催 ・園長宛に卒業生の参加依頼文を送付し、卒業後１年目の保育士を対象とした「保育スキルアップ講座」を開催している。 ・専門職研修講座を開講している。 ・家庭的保育の研修など実施 ・保育現場から、「学びなおし」の為に派遣された、卒業後１～２年目の保育士を受け入れ学生と一緒に授業に参加してもらう。
【自治体】
・合同キャリア説明会、保育所見学ツアー ・市町村研修 ・新生保育士の研修 ・研修講師派遣 ・「現職保育者研修」を２月に行っている。 ・幼児教育講座の開催 ・専門職研修講座を開講している ・新任研修、定期講座講習（あそび講習）、現任保育士研修 ・家庭的保育の研修など実施

【保育団体】
・保育協会（地元）の講師派遣やキャリアアップ研修の開催 ・研修講師派遣 ・「現職保育者研修」を２月に行っている。 ・家庭的保育の研修など実施

（６）保育士を離職した卒業生に対する復職のためのフォローアップについて

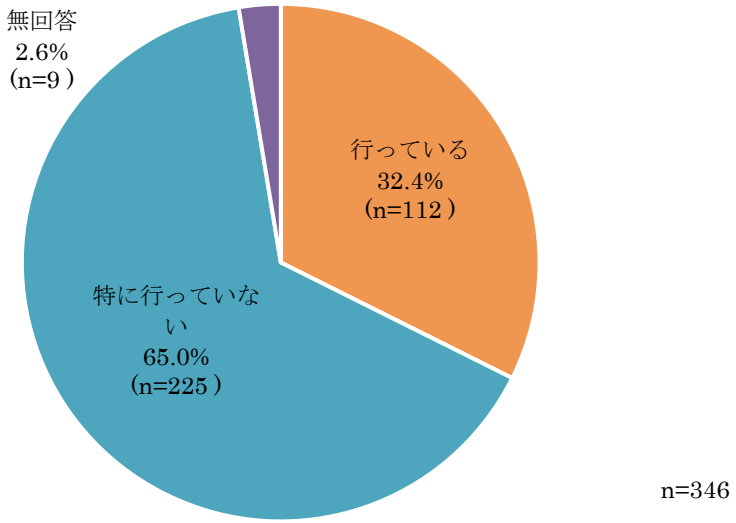


図表 1-2-20　保育士を離職した卒業生に対する復職のためのフォローアップの実施

保育士を離職した卒業生に対して行っている復職のためのフォローアップについては、「行っている」134 校（38.7%）、「特に行っていない」202 校（58.4%）、「無回答」10 校（2.9%）であった。

保育士を離職した卒業生が復職するために行っているフォローアップについての自由記述をみると、「相談に応じる」、求人などの「情報提供」、「面接練習」、潜在保育士講座などの「就職セミナー」の開催、「登録制」による離職した卒業生の復職の橋渡し、年度途中の求人など「個別の声かけ」など行われているが、なかには今後の方向性を聞き取りし卒業生にマッチしそうな求人を提示する、園へ卒業生に教職員が同行し見学する、転職希望の卒業生から問い合わせがあった際に新しい就職先を探すためのヒアリング、求人情報の紹介、外部の進路アドバイザー面接予約等活用できる旨を周知しているなど、丁寧な支援をしている養成施設もあった。

（7）卒業生の横のつながりをつくるためのサポートについて



図表 1-2-21　卒業生の横のつながりをつくるためのサポートの実施

卒業生の横のつながりをつくるためのサポートについては、「行っている」112 校（32.4%）、「特に行っていない」225 校（65.0%）、「無回答」9 校（2.6%）であった。

「行っている」と回答した養成校教員の具体的なサポートは、「同窓会」、「同期会」、「ホームカミングデーの開催」、「リカレント講座の実施」、「卒業生が登録できるアプリがあり、そこに情報をアップしている」や「在学時に作成したメーリングリストを活用している」などがあげられていた。

（8）保育士として就労した卒業生の割合からみた分析

①保育士として就労した卒業生の割合

2019 年度卒業生のうち、私立保育所（認可保育所）、公立保育所（認可保育所）、私立認定こども園、公立認定こども園、認可外保育所（企業主導型保育事業を含む）に就職した人数を各養成施設の保育士養成定員で除算した割合の平均値を基準として、平均値より高い割合で保育士として就職した養成施設を H 群、その平均値より低い割合で保育士として就職している養成施設を L 群として振り分けたところ図表 1-2-22 の結果となった。

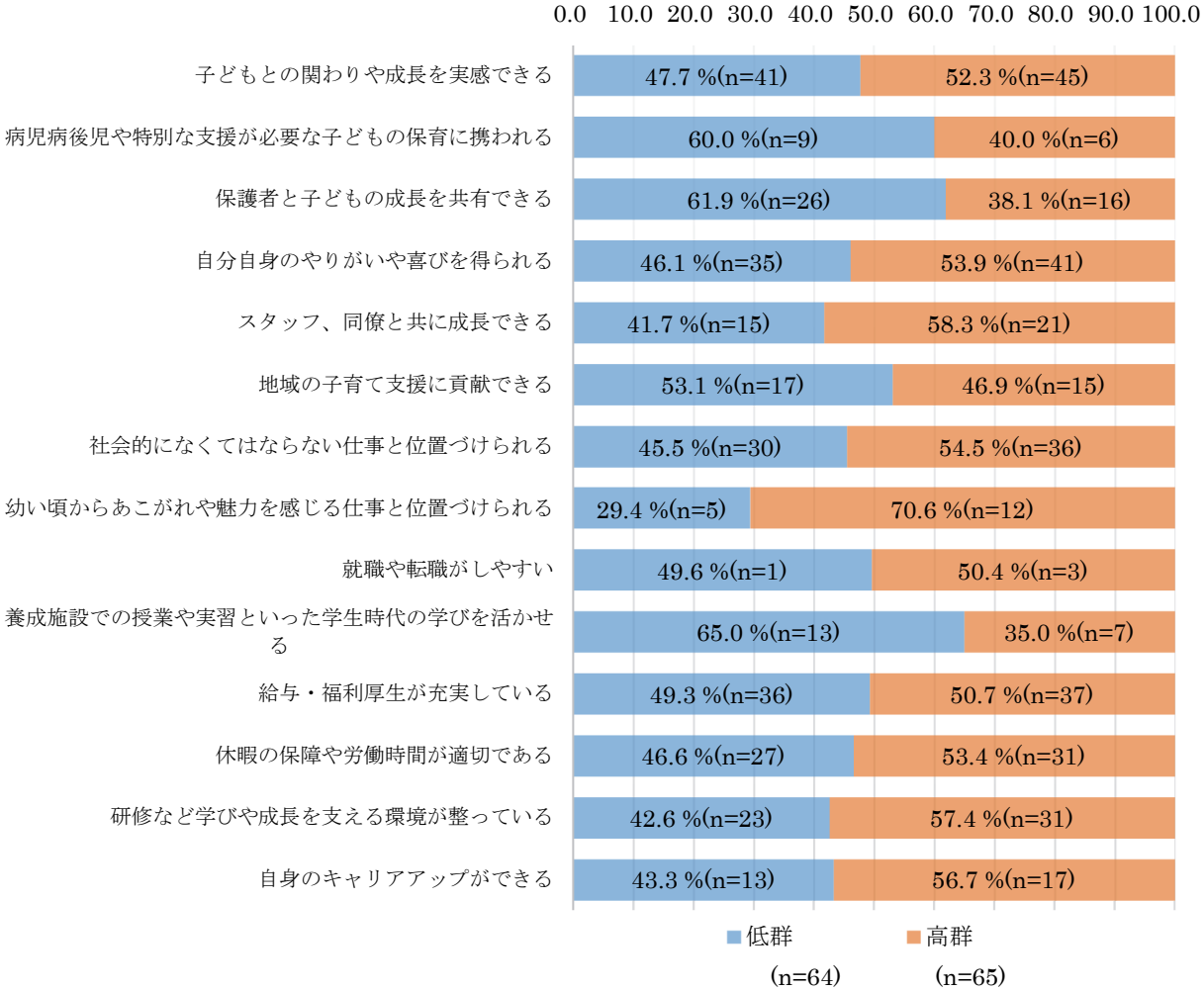
図表 1-2-22　2019 年度卒業生の保育士として就職した割合からみた保育士就職高低群

学校種別	低群	高群	合計
大学	64 (49.6%)	65 (50.4%)	129 (100.0%)
短期大学	63 (52.9%)	56 (47.1%)	119 (100.0%)
専修学校	36 (50.7%)	35 (49.3%)	71 (100.0%)

②保育士就職高低群でみた保育士のやりがい、魅力向上に向けた必要な取組について

保育士資格を活かした職業に就いた学生が多い養成施設の教員が考える保育士の魅力向上に向けた取組についてと、少ない養成施設教員のそれとを学校種別でみたのが図表 1-2-23（大学）、図表 1-2-24（短期大学）、図表 1-2-25（専修学校）である。なお、複数回答のため図の中の数値は魅力向上に向けて必要と思われるものとして選択された養成施設の割合を示している。

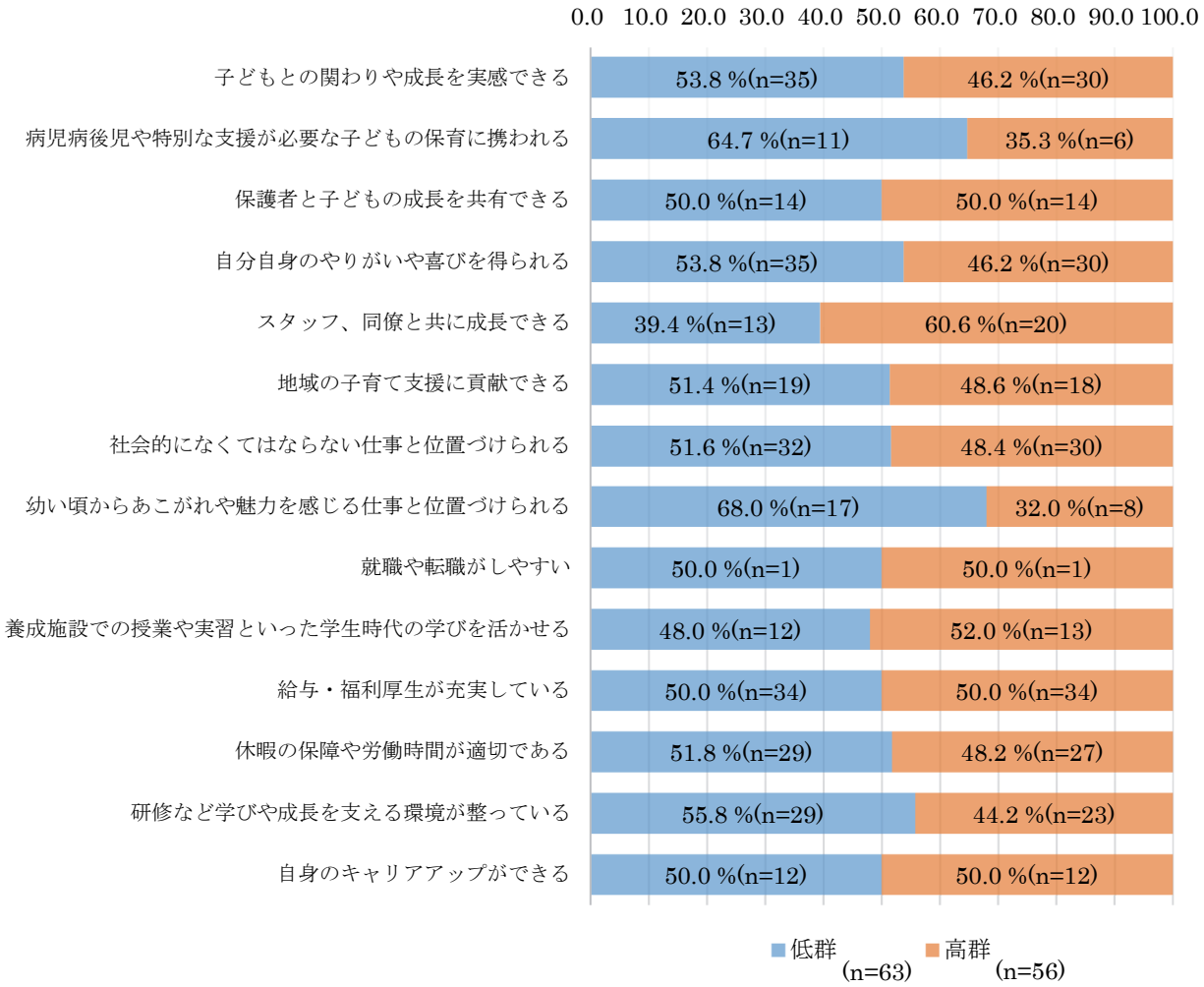
【大学】



図表 1-2-23　保育士就職高低群別でみた保育士のやりがい、魅力向上に向けた取組とキャリア支援（大学）

大学においては、保育士として多く就職している高群の養成施設教員は保育士の魅力向上のために今後必要と思われる取組として「幼いころからあこがれや魅力を感じる仕事と位置づけられる」(70.6%)がもっとも多くあげられていた。保育士として就職する割合が低い養成施設教員の場合は、「養成施設での授業や実習といった学生時代の学びを活かせる」(65.0%)、「保護者と子どもの成長を共有できる」(61.9%)、「病児病後児や特別な支援が必要な子どもの保育に携われる」(60.0%)が多くあげられていた。

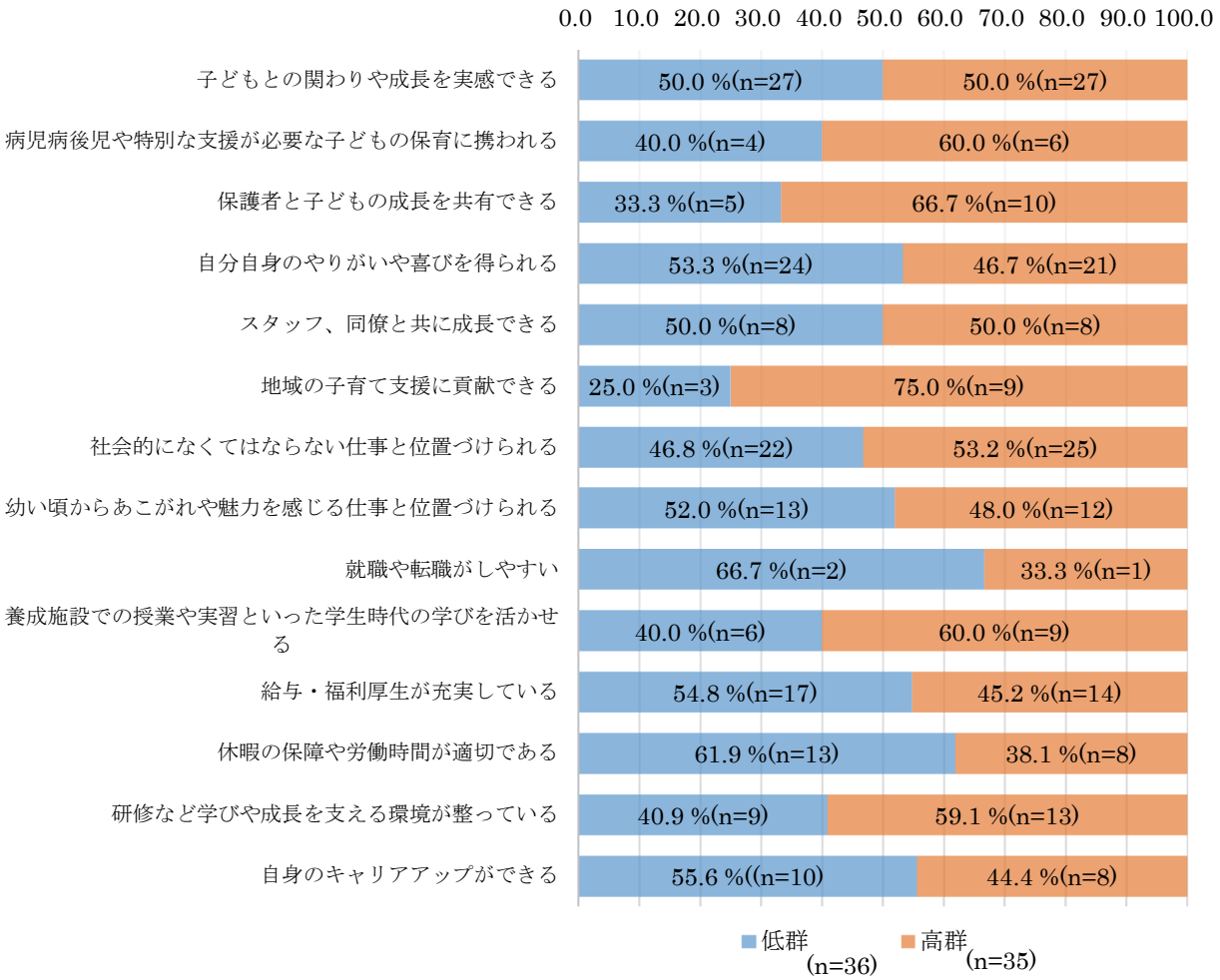
【短期大学】



図表 1-2-24　保育士就職高低群別でみた保育士のやりがい、魅力向上に向けた取組とキャリア支援（短期大学）

短期大学においては、高群の養成施設教員は保育士の魅力向上のために今後必要と思われる取組として「スタッフ、同僚と共に成長できる」(60.6%)ことを魅力向上には必要と考える割合が高かった。保育士として就職する学生の割合が低い短期大学の養成施設教員では「幼いころからあこがれや魅力を感じる仕事と位置づけられる」(68.0%)、「病児病後児や特別な支援が必要な子どもの保育に携われる」(64.7%)ことが多くあげられていた。

【専修学校】



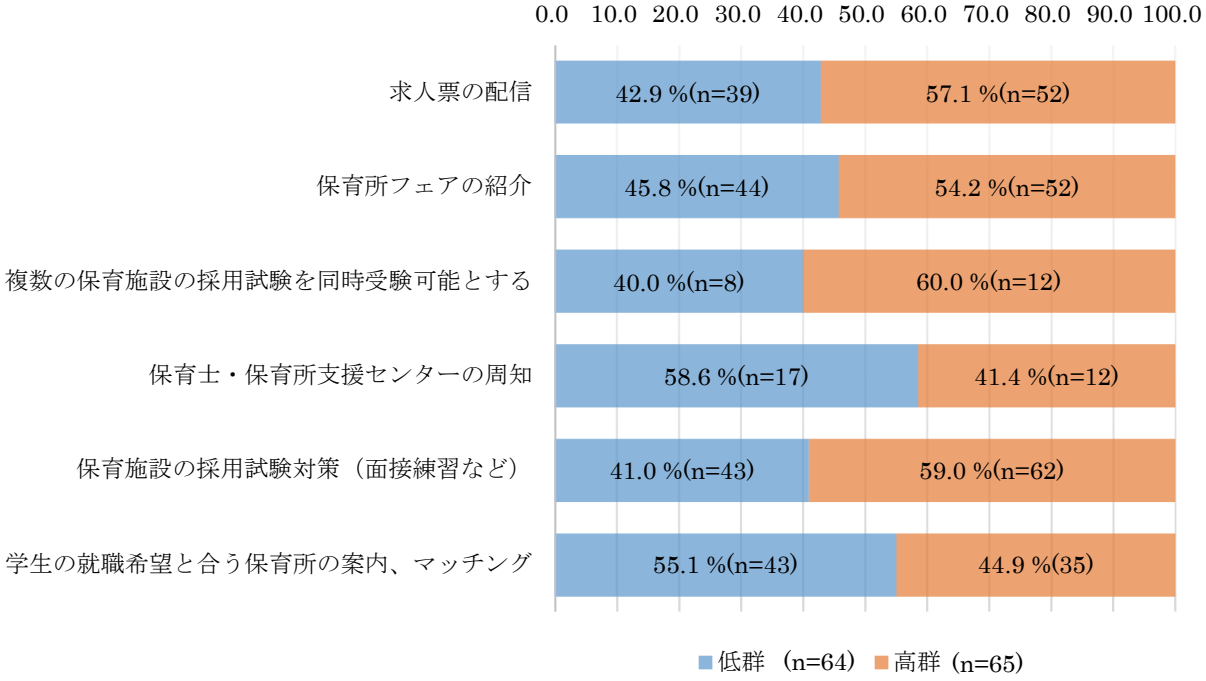
図表 1-2-26　保育士就職高低群別でみた保育士のやりがい、魅力向上に向けた取組とキャリア支援（専修学校）

専修学校においては、高群の養成施設教員は「地域の子育て支援に貢献できる」(75.0%)、「保護者と子どもの成長を共有できる」(66.7%)を魅力向上に必要な取組と考える割合が高く、低群の養成施設教員は「就職や転職がしやすい」(66.7%)、「休暇の保障や労働時間が適切である」(61.9%)が多くあげられていた。

③保育士就職高低群でみた保育士として就職するため、保育士として就労することの不安低減につながるための現在行っているキャリア支援について

先の保育士の魅力向上のために必要な取組と同様に、保育士として就職した学生の割合の高低で学校種別のキャリア支援についてみた結果が、図表 1-2-27（大学）、図表 1-2-28（短期大学）、図表 1-2-29（専修学校）である。なお、この質問項目も複数回答のため図の中の数値は保育士として就職するため、保育士として就労することの不安低減につながるための現在行っているキャリア支援のものとして選択された養成施設の割合を示している。

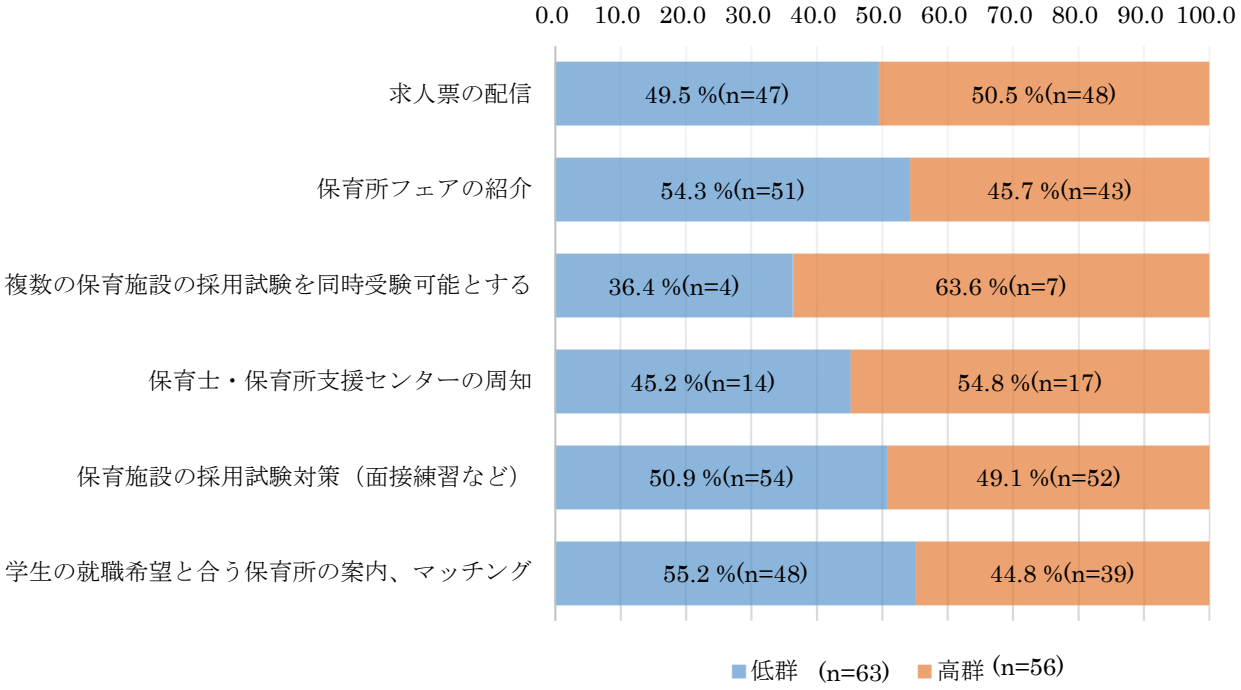
【大学】



図表 1-2-27　保育士就職高低群別でみた保育士として就職するため、保育士として就労することの不安低減のために現在行っているキャリア支援（大学）

大学においては、保育士として就職する学生の割合の高い養成施設では「保育施設の採用試験対策（面接練習など）」(59.0%)、「求人票の配信」(57.1%)、「保育所フェアの紹介」(54.2%)が多く行われていた。「複数の保育施設の採用試験を同時受験可能とする」は、行っていると回答した養成施設における高群の割合としては 60.0%となっているが、保育施設の採用状況を鑑みキャリア支援全体のなかで行われている養成施設数は非常に少ない。同時期にむやみに採用試験を受けることをすすめることをしない様子は、短期大学、専修学校においても同様である。低群の養成施設では、「保育士・保育所支援センターの周知」(58.6%)を行ったり、「学生の就職希望と合う保育所の案内、マッチング」(55.1%)が行われていることが多い。

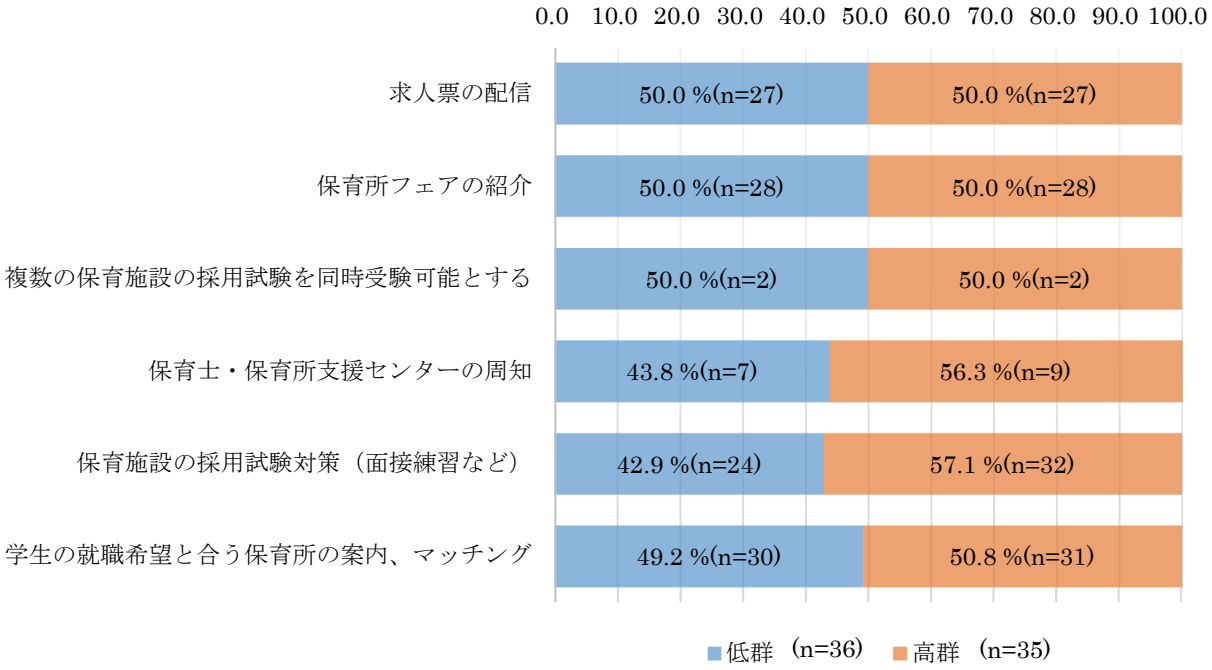
【短期大学】



図表 1-2-28　保育士就職高低群別でみた保育士として就職するため、保育士として就労することの不安低減のために現在行っているキャリア支援（短期大学）

短期大学においては、「複数の保育施設の採用試験を同時受験可能とする」以外で「保育士・保育所支援センターの周知」(54.8%)が高群において割合が高くなっている。また、「保育所フェアの紹介」(54.3%)、「学生の就職希望と合う保育所の案内、マッチング」(55.2%)は、低群において行われている割合が高い。

【専修学校】



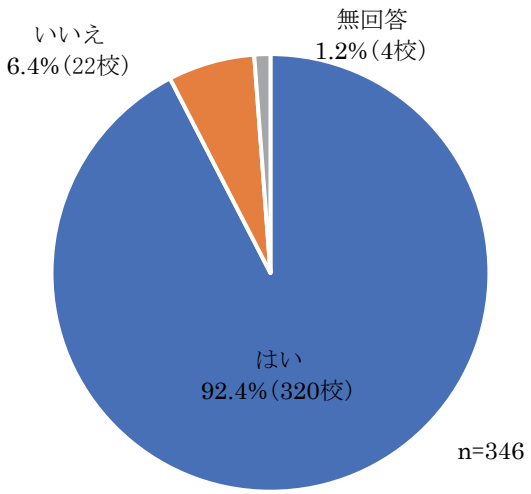
図表 1-2-29　保育士就職高低群別でみた保育士として就職するため、保育士として就労することの不安低減のために現在行っているキャリア支援（専修学校）

専修学校においては、「保育施設の採用試験対策（面接練習など）」は高群において実施されている割合が高くなっているものの、そのほかのキャリア支援では両群ともに同じように実施されている。

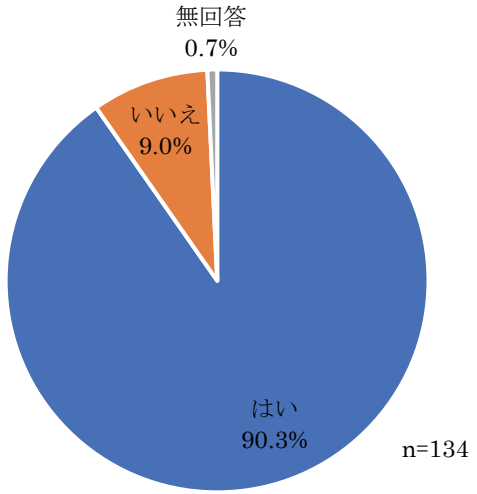
学校種で保育士として就職する割合の高低でみたところ、「求人票の配信」、「保育所フェアの紹介」はどの学校種においても同じように行われていたが、保育士として就職する学生の多い養成施設では保育所への就職や保育士として働くことのへの不安低減のために「保育施設の採用試験対策（面接練習）」を行っていることが多いことが考えられる。

３．保育士の魅力向上に資する効果的なカリキュラムについて

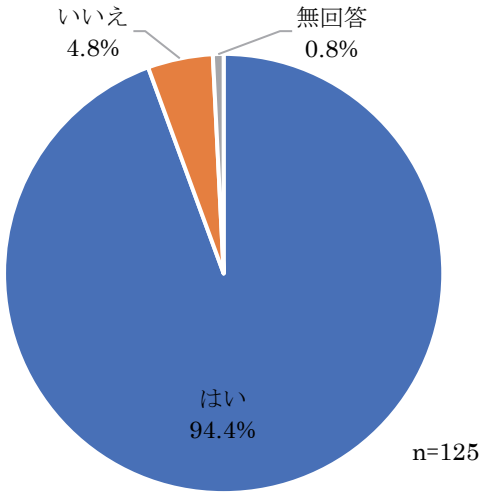
（１）保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムの工夫の有無について



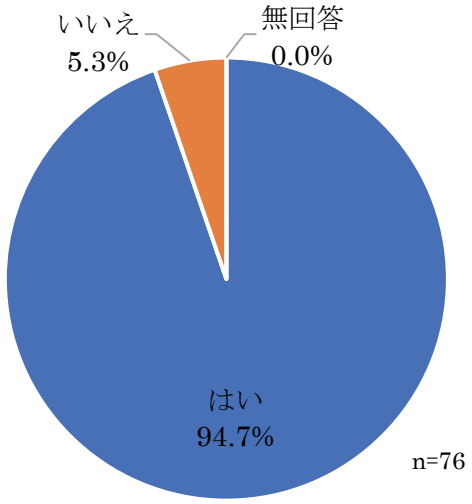
図表 1-3-1 カリキュラムの工夫の有無（全体）



図表 1-3-2 カリキュラムの工夫の有無（大学）



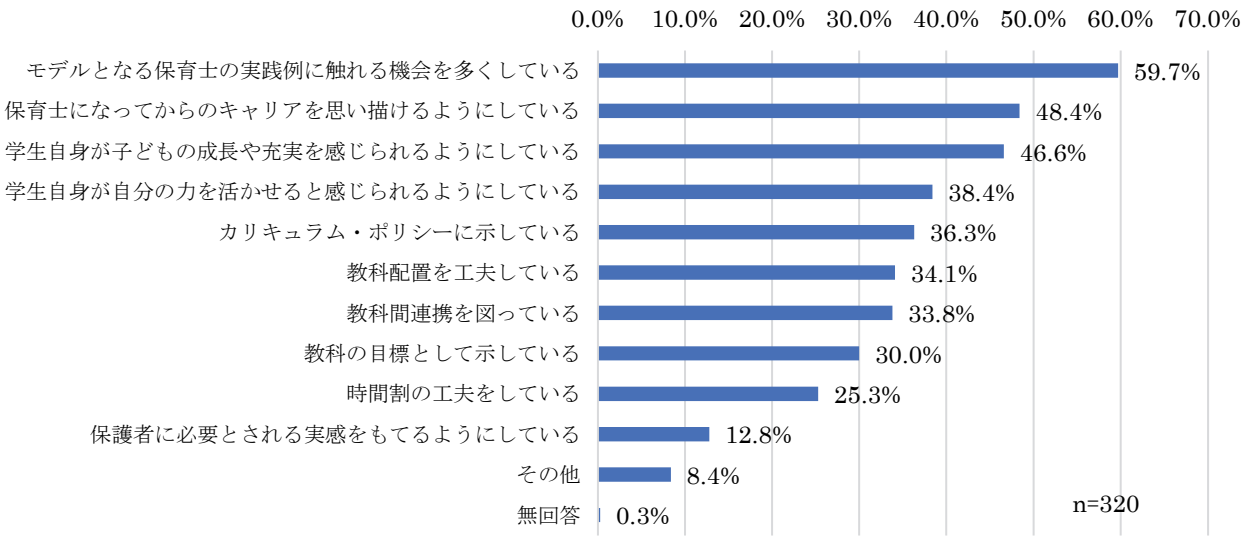
図表 1-3-3 カリキュラムの工夫の有無（短期大学）



図表 1-3-4 カリキュラムの工夫の有無（専修学校）

保育士のやりがいや魅力を伝えるためのカリキュラムの工夫の有無について、全体で「はい（有り）」92.4%、「いいえ（無し）」6.4%であった。「はい（有り）」と回答した割合を学校種に見ると、大学（90.3%）、短大（94.4%）、専修学校（94.7%）であり、短大・専修学校がやや高かった。多少の差はあるが、どの学校種でも 9 割以上がカリキュラムの工夫をしている。

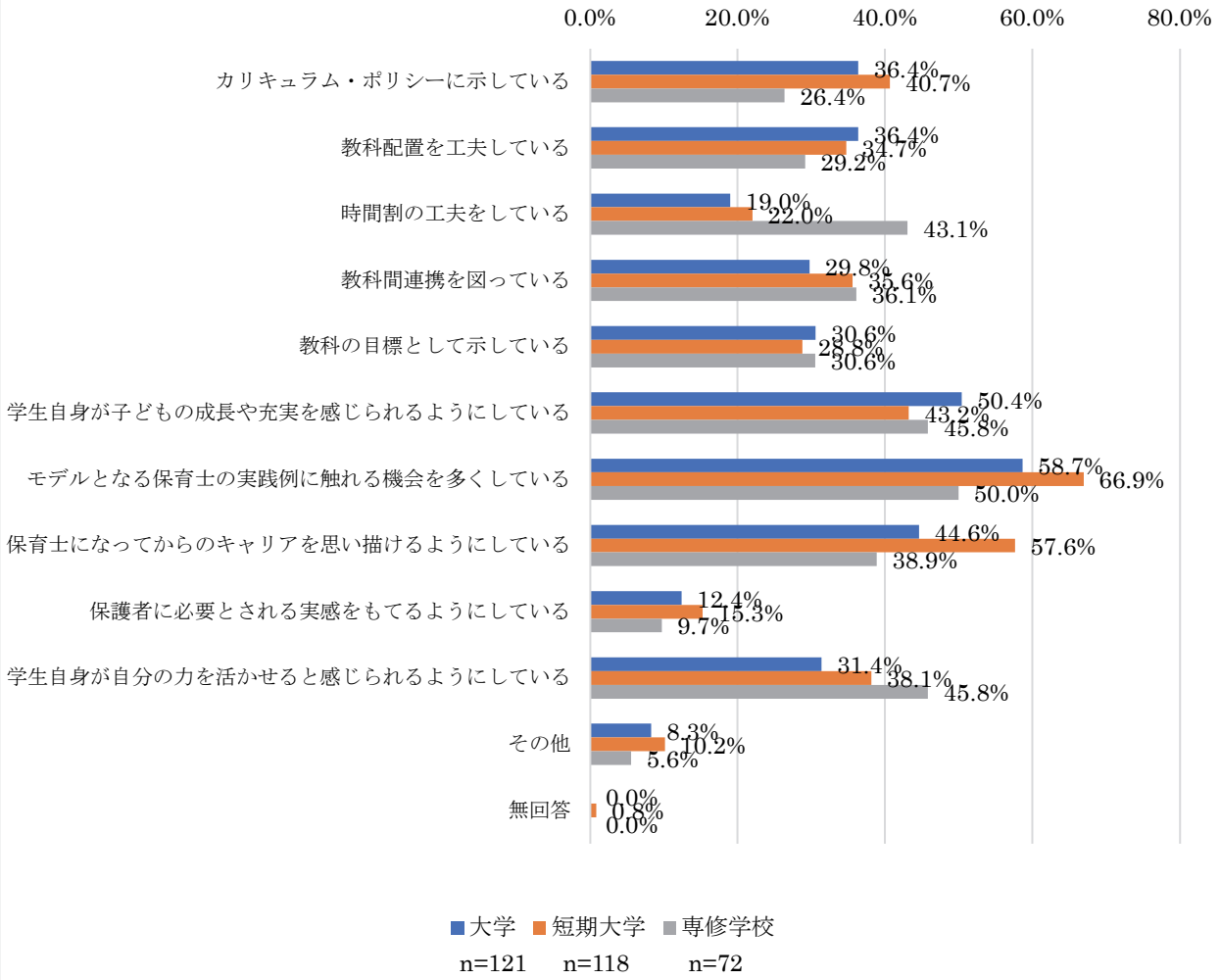
（２）保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムの工夫の内容について



図表 1-3-5 カリキュラムの工夫の内容（全体）

保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムの工夫としては、「モデルとなる保育士の実践例に触れる機会を多くしている」（59.7%）が一番多く、次いで「保育士になってからのキャリアを思い描けるようにしている」（48.4%）と、保育士の具体的な姿に関する内容が多かった。続いて「学生自身が子どもの成長や充実を感じられるようにしている」（46.6%）、「学生自身が自分の力を活かせると感じられるようにしている」（38.4%）と、学生自身の学びの実感に関する内容が多かった。一方、「保護者に必要とされる実感をもてるようにしている」は 12.8%であった。まずは子どもと保育士の姿を通して、保育士のやりがいや魅力を伝えていると言える。

その他として、「初年次に保育園等の観察参加実習を実施している。」、「初年次教育の一貫として『保育職基礎演習』を開講している。」等の初年次教育の工夫や、「１年生から毎週 1 日必ず保育・教育現場に入らせて頂く長期・継続的なインターンシップ制度」、「乳幼児との交流を通して実践的に学び保育士のやりがいを実感できる授業内容を１年、2 年、全体で設置している。」等の連携や体験の工夫、「幼稚園教諭 2 種免許状、保育士資格を基礎資格とし、学生の希望に応じて４つの資格を取得することができるカリキュラム」等資格取得の工夫、「やりがいの搾取にならないように労働条件や環境や労組の役割について取り上げている」という働く環境に関する内容があった。また、「担当教員が個人的に頑張っているだけ」という体制の課題も挙げられていた。

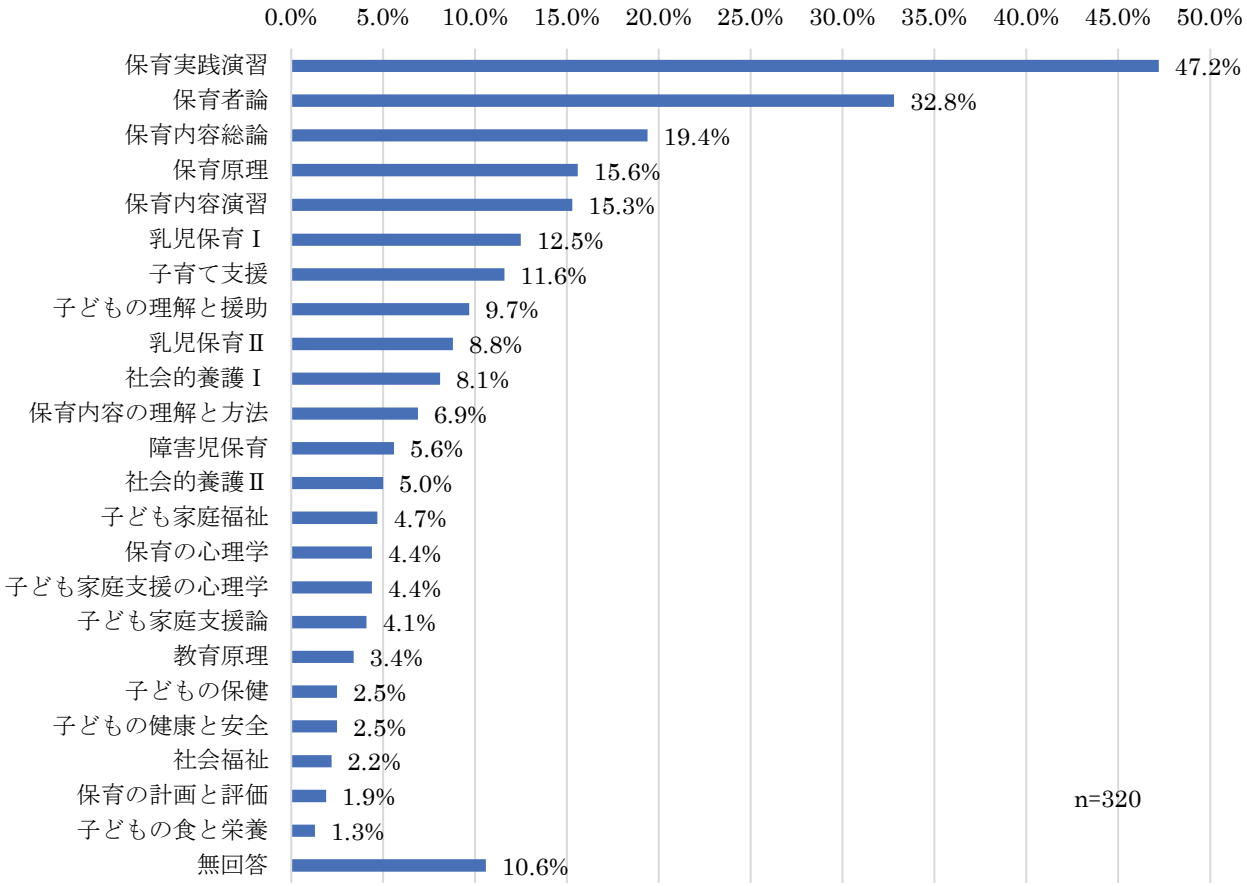


図表1-3-6 カリキュラムの工夫の内容（学校種）

保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムの工夫を学校種で見ると、短期大学では「モデルとなる保育士の実践例に触れる機会を多くしている」（66.9%）、「保育士になってからのキャリアを思い描けるようにしている」（57.6%）について大学、専修学校と比べて割合が高かった。また専修学校では「学生自身が自分の力を活かせると感じられるようにしている」（45.8%）について大学、短期大学に比べて割合が高かった。「カリキュラム・ポリシーに示している」については 26.4%と低かった一方、「時間割の工夫をしている」（43.1%）については、大学、短期大学に比べて割合が高く、柔軟な構成が可能であることが伺える。

（3）保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムを具体化している内容について

①保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムを具体化している教科目



図表 1-3-7 実習指導以外で保育士の魅力を伝えるためのカリキュラムを具体化している

保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムを具体化している教科目は、「保育実践演習」が 47.2%と多く、続いて「保育者論」が 32.8%と多かった。より総合的な科目であり、且つ保育士の仕事について具体的に扱う科目であるためと考えられる。

②保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムを具体化している取組

実習以外の各科目における、保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるための取組として挙げられた内容は、大きく分けると図表 1-3-8 の通りである。この設問は 3 つ以内の記述によるもので、全回答数 583 件であった。なお、分類に際しては、同一回答中に複数の内容がある場合には、そのいずれにも該当するものとしている。

図表 1-3-8　保育士のやりがいや魅力を伝えるためのカリキュラムを具体化している取り組みの概要（全体）

保育士のやりがいや魅力を伝えるためのカリキュラムを具体化している取組　　全回答数：583	
①　授業テーマや内容によって伝える	該当数：147
授業の中で扱うあるテーマ、または授業内容全体を通して、保育士のやりがいや魅力を伝えるという回答が一番多く挙げられた。講義演習等の授業形態に関わらずほとんどの科目に見られ、それぞれの科目の側面から、子どもや保育士について学ぶこと自体が、保育士のやりがいや魅力につながると考えることができる。 「保育者としての保育の専門性を背景とした保護者支援」、「子ども理解の専門性、専門家としてのやりがいを伝える」、「子どもと共に成長していていく保育者としてのやりがい」、「児童福祉の役割や保育士の魅力について取り扱う」等の記述（一部抜粋）があった。	
②　関係機関との連携、子どもや保護者と直接関わる体験等	該当数：128
保育所・施設等の見学や、現場で直接関わる体験、子どもたちを招いての活動、地域のイベント等での体験等の取り組みが多く挙げられた。現場等との連携しながら、実習以外でも様々な直接的関わりを重視し、工夫を凝らしていることが分かる。以下、記述の一部を抜粋する。	
保育所等での体験	「保育所見学の機会をつくり、観察したりふれあったりする」、「保育現場への訪問、園児や職員との交流」、「保育所へ行き、子どもの観察、記録を行う」、「保育施設で集団遊びの立案、実践を行う」等
子育て支援センター等での体験	「子育て支援施設に見学実習に行き、利用者親子と触れ合う」、「市内子育て支援機関におけるフィールド調査を実施」、「本学で開設している子育てサロンの企画運営に参加し、実技やふれ合いを通して体感させている」等
子どもを招いての取り組み	「子どもや保護者を招いて、学習の成果を親子の前で発表」、「こども園の子どもたちに大学に遊びに来てもらう（交流保育）」、「近隣の保育所から園児に来てもらい、夏祭り、クリスマス会、などの企画を行う」等
行事を機会とした取り組み	「保育現場の年間行事（夏祭り、運動会、クリスマス会等）に参加」、「併設園作品展と連携した行事を開催し、多くの地域の親子と触れ合う」、「1、2 年共同でこどもまつりに取組んでいる。地域親子を対象に、様々な企画を考え、準備、実践していく」等
③　実践例や、映像・写真を用いた授業	該当数：96
実践事例や、映像・写真を用いているという回答が多くあった。子どもの姿や保育士の実際を知ったり、具体的に思い描くことが重視されていると考えられる。事例や映像・写真等の活用は実際にはより多いと思われるが、これらが保育士のやりがいや魅力を知ることにつながるとの認識が多くあることが分かる。 「理想となる保育者の映像を多く視聴する」、「児童福祉施設の実践内容を映像を紹介しながら学修する」、「子どもの映像、写真から今の子どもの様子を知り保育者のかかわりや、いきがいを学ぶ」、「具体的に事例について学生同士で検討する」、「事例を通じて保育者の支援により子どもが心のよりどころを得て成長することを理解する」、「保育現場でのエピソードを通して学生にやりがいや魅力を伝えている」等の記述（一部抜粋）があった。	

④　外部講師による授業の実施	該当数：75

外部講師を招いての授業が多く挙げられた。講師としては、保育所や施設の現職保育士を招く例が多いが、元園長、役所職員、保護者等多様である。卒業生である場合も多く、学生がより現実的にキャリアを思い描くことができると考えられる。

「施設保育士のやりがいを伝えるため、卒業生（児童養護施設職員）を外部講師として招き、やりがい等について話してもらっている」、「現場の職員や園に子どもを預けている保護者を始め、多様な外部講師を招いて学習の機会をもっている」、「現職（卒業生）による講演会と講習会」、「行政との協働について県の幼児教育支援センターの職員による講義」、「現場の方をお招きしたり、zoom 等で相互にやりとり」、「卒業生を集めて、保育者になる魅力ややりがいについて話してもらう」等の記述（一部抜粋）があった。

⑤　模擬実践	該当数：46

絵本の読み聞かせや紙芝居等の実演、生活や遊び場面の模擬実践、保護者との関わりのロールプレイ等、相手を想定した実践を試行する取組が多く挙げられた。

「からだを使ったあそびや製作あそび等、体験した上で指導案を作成し模擬保育を行う」、「5 領域の内容を関連づけた保育の実践のためにグループでの模擬保育や、ディスカッションを取り入れている」、「保護者へのカウンセリング演習を通して、保護者を支える存在であることを実感できるようにする」、「保育所生活の一日を組み立て、模擬保育を行う」等の記述（一部抜粋）があった。

⑥　実務家教員が担当	該当数：31

実務経験のある教員が担当し、担当者の経験をもとに授業を行うことで、そのやりがいや魅力を伝えるという回答も見られた。

「元保育園園長を非常勤講師に迎え、非常に実践的な授業をしていただいている」、「障害児の療育・保育・社会的養護実践のやりがいを教員の実務経験をふまえて伝えている」、「担当教員は現場経験者であり、具体的な実践例等も交えている」、「講義やロールプレイ、事例紹介を心理士としての実務経験のある教員により行い、やりがいを伝える」等の記述（一部抜粋）があった。

⑦　グループワークやディスカッション	該当数：28

少人数でのグループワークやディスカッションが挙げられた。学生同士が共に取組んだり討論したりすることで、多様な意見に触れながら自ら考えたり気づいたりすることが考えられる。

「教科目と実習の集大成として、これまで経験した子どもや保育を事例化し、学生が主体となって議論」、「保育的成長についてグループワークを取り入れて理解する」、「学生同士が経験したことを発表し合う」等の記述（一部抜粋）があった。

⑧　総括的取組	該当数：24

実習を含むこれまでの学びの総括として位置づく取組が挙げられた。該当する回答の中では、教授内容から関連の強い「保育実践演習」に多く、方法としては学生個々やグループの関心に基づく研究や、自分の課題改善に向けての取組等、学生個々に合わせた展開が多く見られた。

「実習体験、各教科での 4 年間の学びを総合的に振り返り、テーマを設定して、ディスカッションを行い、ポスターにまとめ、発表の機会をつくっている」、「関心のあるテーマについてグループで調べ、まとめてポスター発表」、「実習後、自分の課題を見出して改善に向けて取組むことで、知識や技能の向上を実感できるようにしている」等の記述（一部抜粋）があった。

⑨　実習との連動・実習の振り返り	該当数：16
学生の実習体験をもとにした授業や、実習の振り返り、実習に生かすことを想定した授業等が挙げられた。該当する回答の中では、教授内容から関連の強い「保育実践演習」に多い。 「施設実習中に、保育士の子どもへの関わりを中心に学生がとった記録の中から場面を伝えている」、「実習での学びを振り返り保育の現場のやりがいをグループワークによりまとめる」、「実習の振り返りを通してすてきだと思ったこと、素晴らしさ、課題を見出し、解決の方向にもっていくアクティブラーニング」等の記述（一部抜粋）があった。	
⑩　歌や劇、制作等	該当数：9
歌や劇等の発表や、玩具や紙芝居等の制作等の内容が挙げられた。子どもたちを招く取組もあり、子どもの視点を踏まえながら、学生自身の感性や技能を養うことが考えられている。 「デジタル紙芝居、パネルシアターの制作及び上演」、「卒業演習の中で人形劇やオペレッタ等を制作し、発表会を開催する。子どもたちを招待する」、「わらべうた、ミュージカル、オペラなど総合的に歌うことで得られる子どもの感性を養う」等の記述（一部抜粋）があった。	
⑪　教科間連携	該当数：7
他教科と連携した展開が挙げられた。回答数としては少ないが、学生にとって教科と教科のつながりや、保育実践とのつながりが分かりやすくなると考えられる。また、教員も自身の担当教科と他教科との関連を認識しながら授業を展開することができる。 「（保育者論）インターンシップとの融合科目。理論と実践の融合をめざす」、「（保育の記録・分析）プロジェクト総合演習をもとに、ふれ合いを振り返る」、「保育内容総論で指導案作成と模擬演習を行い、保育内容指導法で地域の幼児に制作遊び、対面指導を試みるイベントを実施」等の記述（一部抜粋）があった。	
⑫　その他の取組	該当数：45
その他として、「アクティブラーニングと、フィールドワーク（プレーパーク見学、おもちゃ美術館）」、「児童養護施設にあうよう調理実習を取り入れ、お弁当作りなども行う」、「楽農を通じて食育の大切さと子どもが自然を知るための授業」、「『あそび検定』の 200 項目に挑戦、実践」、「本学独自の『乳児保育士』資格」、「卒業生のインタビュー動画を活用」、「卒業生の就職状況や入職後のインタビュー調査の結果等を紹介」等の記述（一部抜粋）があった。	

保育士のやりがいや魅力を伝える工夫として、「②関係機関との連携、子どもや保護者と直接関わる体験等」や「④外部講師」が多く挙げられており、各養成校で保育現場や関係機関、子どもをはじめとした関係者等、外部との様々な連携を図っていることが分かる。一方で、「⑨実習との連動」「⑪教科間連携」といった養成校内部での連携は外部連携に比べて少ない。教科間連携等の内部連携が有機的に行われることは、外部と連携した取組をより充実した学びとすることにもつながると考えられる。

③学校種と保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムを具体化している取組

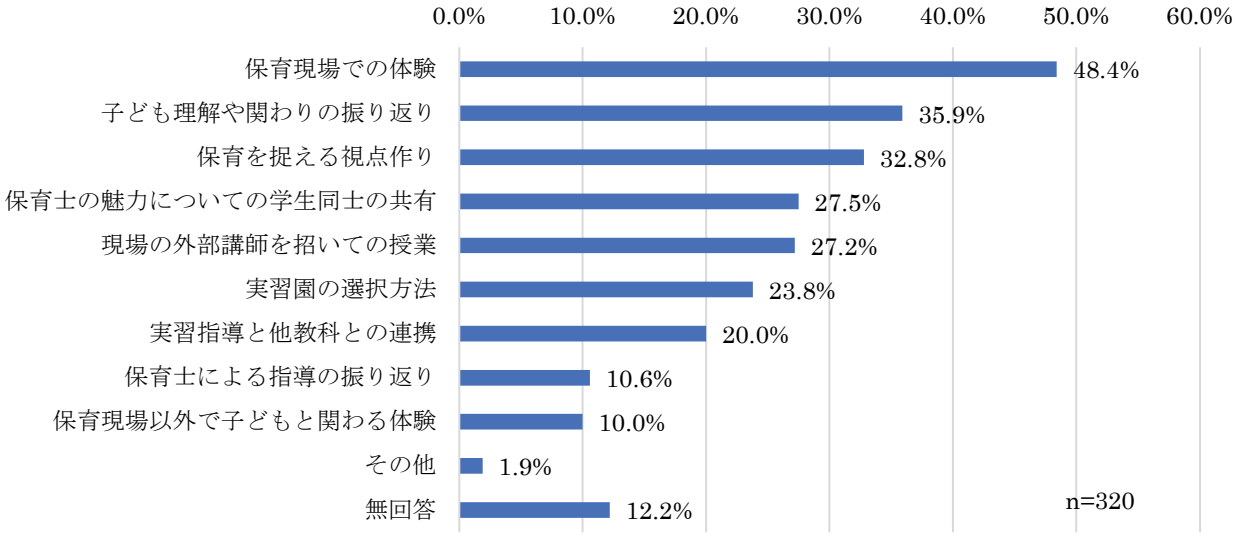
学校種ごとの回答の中での、それぞれの内容の割合は図表 1-3-9 の通りである。「①内容」、「②連携・体験」はほぼ同程度である。「③事例・映像」、「④外部講師」について、専修学校が大学、短期大学よりも割合が少なかった。一方、「⑤模擬実践」、「⑩劇、制作等」では専修学校が大学、短期大学より割合が多く、より実践的な取組を通して保育士のやりがいや魅力を伝えようとしていることが伺える。また、大学において「実習との連動」が短期大学、専修学校よりも割合が少なかった。取得資格が多様であることや、実習時期と関連教科の実施時期の違い等により、連動した展開がしにくいことが考えられる。

図表 1-3-9 保育士のやりがいや魅力を伝えるためのカリキュラムを具体化している取り組み（学校種）

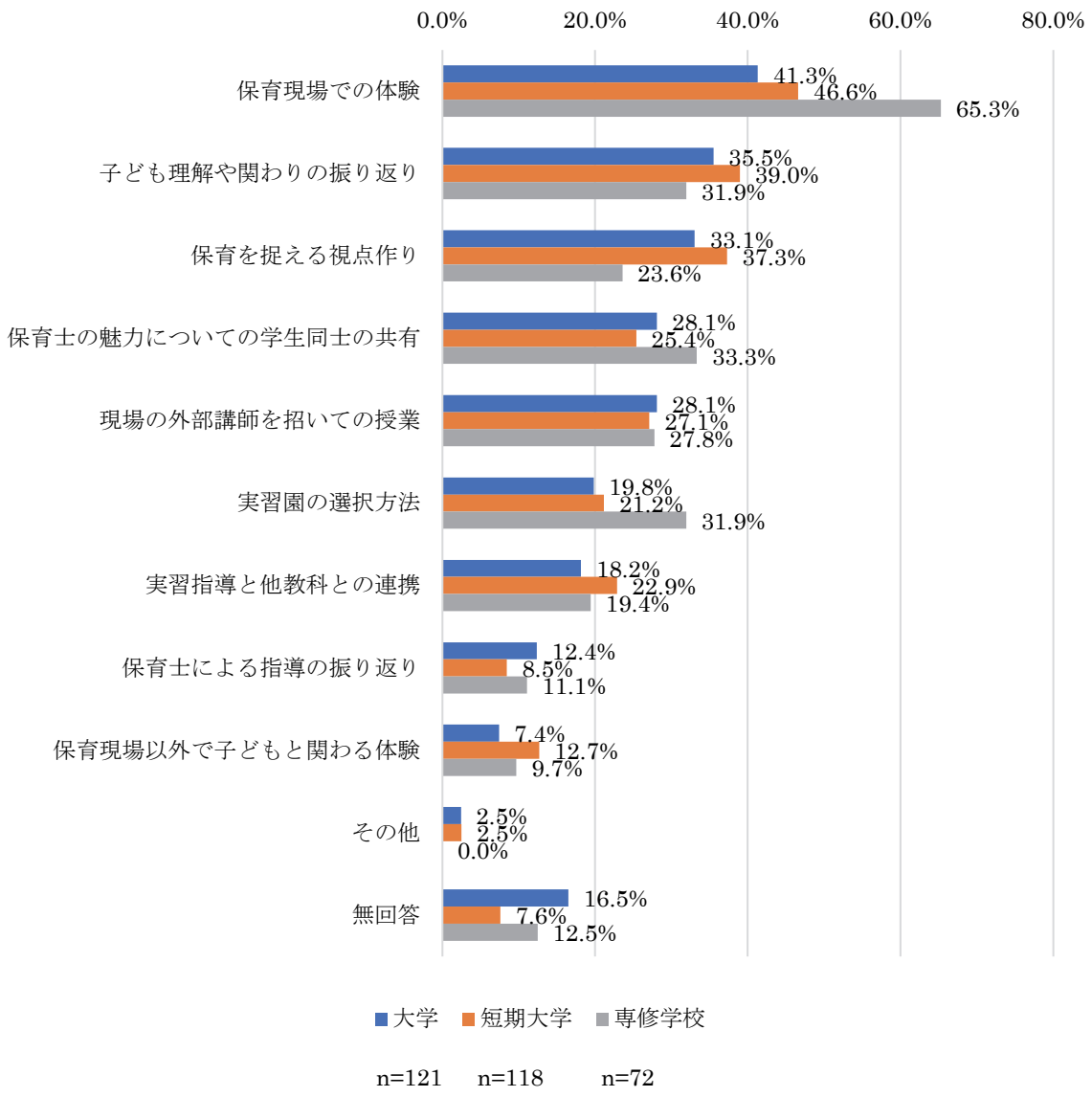
	回答数	①内容	②連携・体験	③事例・映像	④外部講師	⑤模擬実践	⑥実務家教員	⑦グループワーク	⑧総括	⑨実習との連動	⑩劇、制作等	⑪教科間連携	⑫その他
大学	207	53	48	39	35	14	8	12	6	2	2	2	11
		25.6%	23.2%	18.8%	16.9%	6.8%	3.9%	5.8%	2.9%	1.0%	1.0%	1.0%	5.3%
短期大学	235	56	50	48	33	10	15	10	12	10	0	5	19
		23.8%	21.3%	20.4%	14.0%	4.3%	6.4%	4.3%	5.1%	4.3%	0.0%	2.1%	8.1%
専修学校	125	33	28	7	6	19	7	3	6	4	5	0	14
		26.4%	22.4%	5.6%	4.8%	15.2%	5.6%	2.4%	4.8%	3.2%	4.0%	0.0%	11.2%
全体	567	142	126	94	74	43	30	25	24	16	7	7	44
		25.0%	22.2%	16.6%	13.1%	7.6%	5.3%	4.4%	4.2%	2.8%	1.2%	1.2%	7.8%

（４）各実習指導において、保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるために具体化している取組

①保育実習指導Ⅰ（保育所）



図表 1-3-10 保育実習指導Ⅰ（保育所）において保育士の魅力を伝えるための取組（全体）



図表1-3-11 保育実習指導Ⅰ（保育所）において保育士の魅力を伝えるための取組（学校種）

保育実習指導Ⅰ（保育所）における保育士の魅力を伝えるための取組としては、「保育現場での体験」が 48.4%と一番多く、次いで、「子ども理解や関わりの振り返り」（35.9%）、「保育を捉える視点作り」（32.8%）であった。

学校種で見ると、大学では「保育現場での体験」（41.3%）、「子ども理解や関わりの振り返り」（35.5%）の順に多かった。短期大学でも同じく「保育現場での体験」（46.6%）、「子ども理解や関わりの振り返り」（39.0%）の順に多かった。専修学校では「保育現場での体験」（65.3%）が一番多く、大学、短期大学に比べて割合が高かった。

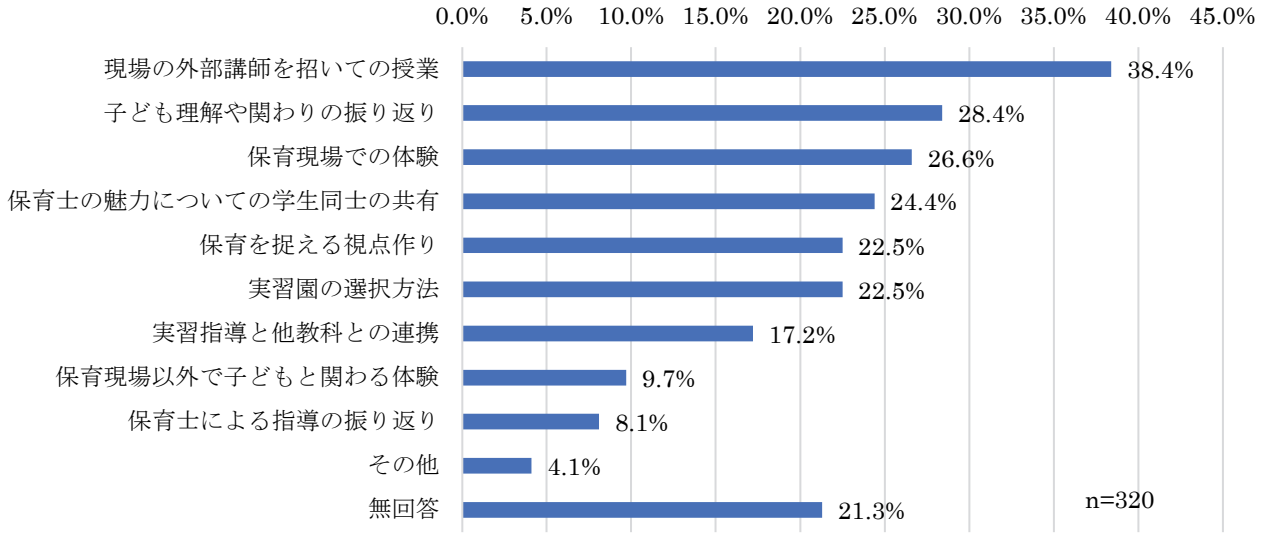
以下は、具体的な取組内容に関する記述の抜粋である。

・事前指導として、実習前の観察実習やボランティア実習で保育現場での体験をする。附属の保育園の子どもたちと日常的に触れ合い、保育職の魅力が高まるような機会を設けている。

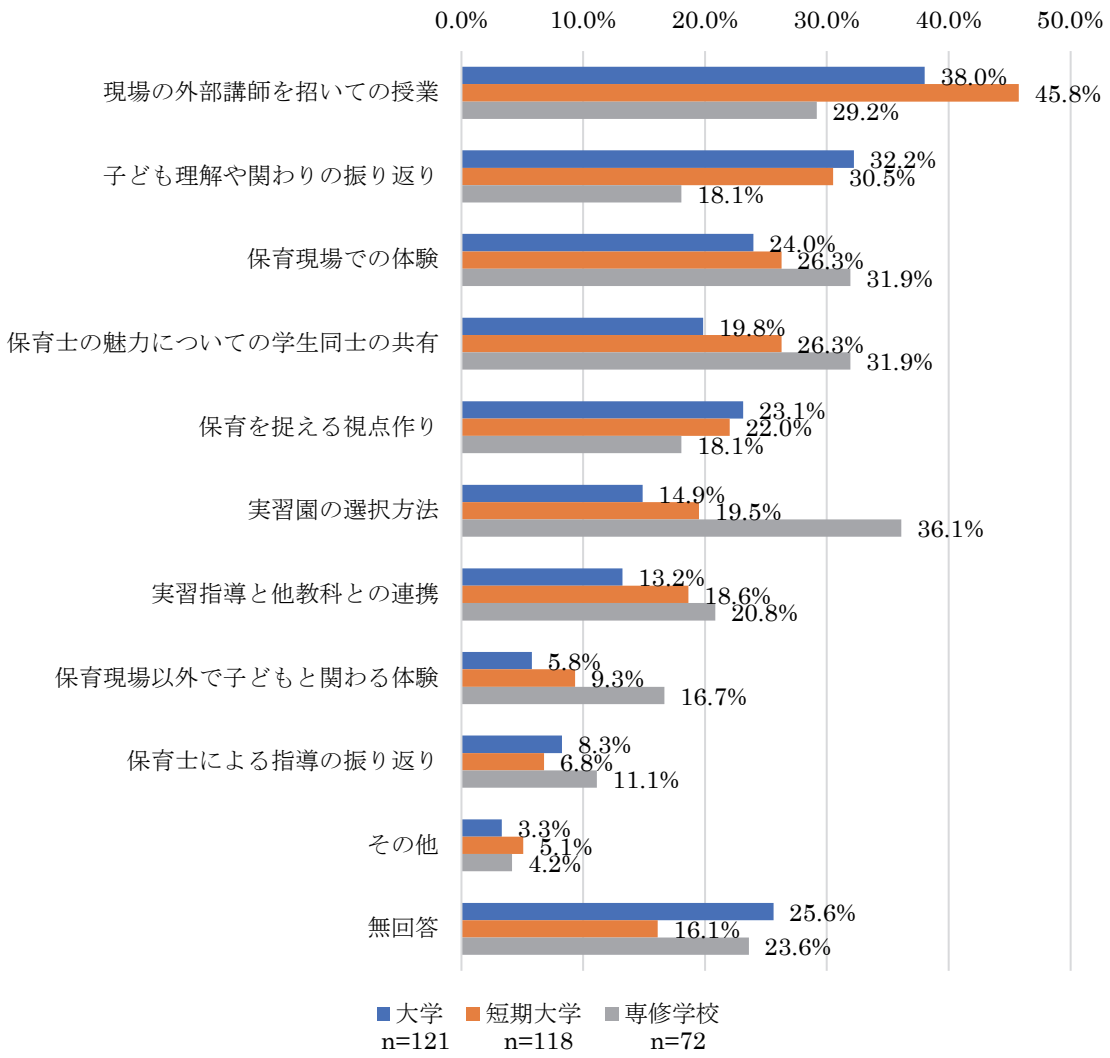
・1 年次夏休みに実習先（予定）へ 2 日間体験学習として入る。地域のイベントに子ども広場コーナー遊びの担当として参加する。

・事後の巡回教員との個別面談による振りかえり、次回実習の課題の明確化、特別な指導が必要な学生への特別面談、学生同士のグループディスカッション等を行っている。
・実習後に、同級生や後輩に向けて、実習園のデイリープログラムや保育の特徴をまとめて書面で提出させている。園の保育方針、実習指導方針と学生の特性、能力が適合するような配属に努めている。
・「教育・保育体験演習」という科目を設定し、隣接する認定こども園（本学の附属園）に入学直後の１年前期に子どもと関わることや保育教諭の動きに着目させていることで、関連させている。
・保育実習で体験した内容を分野別、テーマ別に整理してまとめグループ発表している。
・基本調査及び面談を通して、実習体験が好評価の園に配属している。外部講師や現役保育士を招き、保育実技などの演習を交え、保育現場での保育の魅力を伝える授業をおこなっている。また、事後学習では、事後学習シートや体験の共有などを活用し、保育所保育士の魅力にふれる学生同士の学びをおこなっている。
・実習報告会を 1、2 年合同で行い、実習の成果を共有することで保育士の魅力についても感じ取れるようにしている。

②保育実習指導Ⅰ（施設）



図表 1-3-12 保育実習指導Ⅰ（施設）において保育士の魅力を伝えるための取組



図表1-3-13 保育実習指導Ⅰ（施設）において保育士の魅力を伝えるための取組

保育実習指導Ⅰ（施設）における保育士の魅力を伝えるための取組としては、「現場の外部講師を招いての授業」が 38.4%と一番多かった。

学校種で見ると、大学では「現場の外部講師を招いての授業」（38.0%）、「子ども理解や関わりの振り返り」（32.2%）の順に多かった。短期大学では「現場の外部講師を招いての授業」（45.8%）が一番多く、大学、専修学校に比べて割合が高かった。専修学校では「保育現場での体験」（31.9%）、「保育士の魅力についての学生同士の共有」（31.9%）、「実習園の選択方法」（36.1%）の順に多く、いずれも大学、短期大学に比べて割合が高かった。

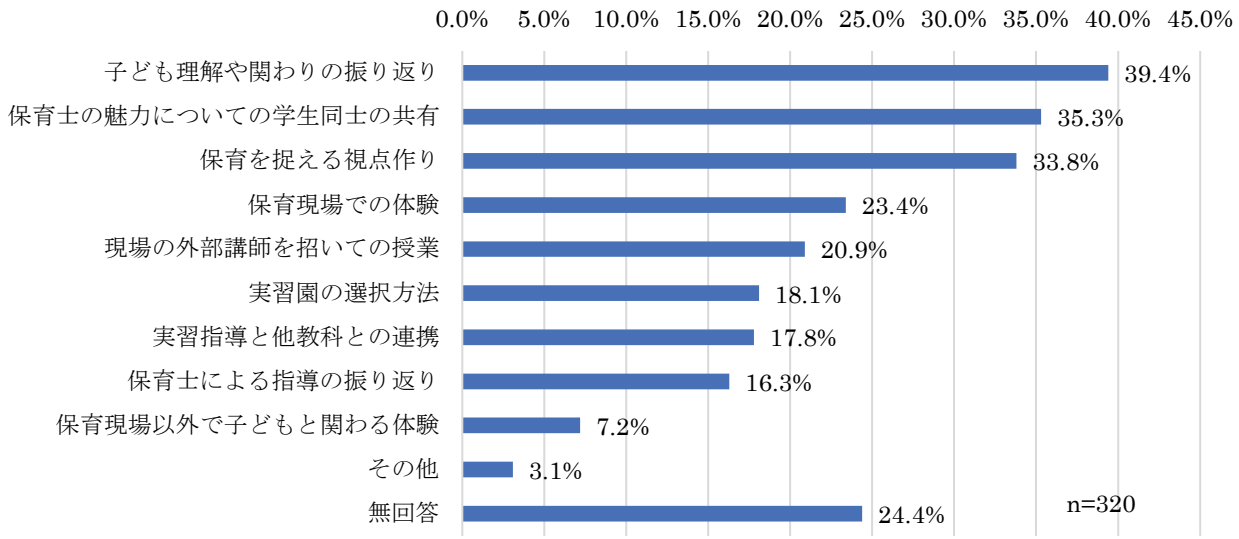
以下は、具体的な取組内容に関する記述の抜粋である。

・毎年乳児院、児童養護施設、障害関係施設の職員を招いて現場のやりがい等について話をしてもらっている。また、障害関係施設にて利用者と関わる機会を設けている。可能な限り実習先の希望に沿って配属している。

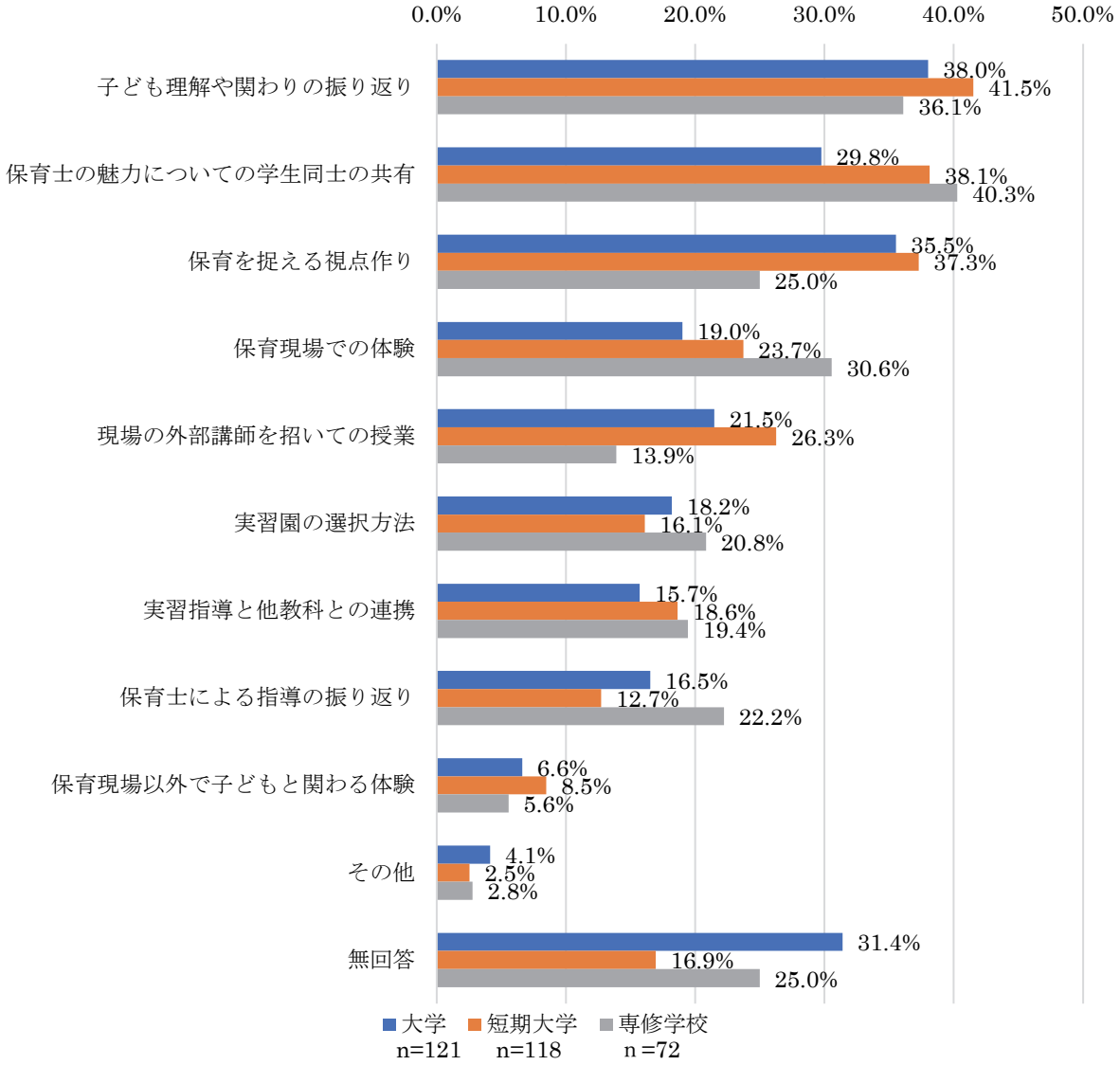
・実習後、実習まとめの時間に、障害支援施設の施設長、児童養護施設の統括施設長を招いて学生の実習の感想や学び、課題などの発表に対してコメントやアドバイスをもらっている。

・施設に就職した卒業生を招き、仕事の内容の説明や大変だったこと、乗りこえたこと、うれしかったこと等、具体的に話してもらう。その話を聞いた後、見学を希望する学生がいた。
・保育所以外での保育士の仕事については認識しづらい部分もあるため、各施設の特色や法的位置づけなども確認し、保育の仕事の広がりを理解させるようにしている。
・児童発達支援センター等の現場職員を外部講師として招き、実習生に臨むことなどを話していただく。他学生、他学年との実習報告会をとおして、実習体験を振り返り、学生同士で経験の共有を図る。※今年度はいずれも通常通りには実施できていない。
・魅力ある実習先に配属。実習先の施設実習職員を招いてやりがいや魅力を伝えている。「社会的養護」と連携。
・学生の保育職への志望が高まるような実習園の選定、学内実習施設（子育て支援施設）での体験、グループ討論等の設定と共有、子ども理解や指導に関する具体的振り返りの他、保育理解、指導理解等について、他教科との関連を担当教員と相談・検討した授業展開を行っている。

③保育実習指導Ⅱ



図表 1-3-14 保育実習指導Ⅱにおいて保育士の魅力を伝えるための取組（全体）



図表1-3-15 保育実習指導Ⅱにおいて保育士の魅力を伝えるための取組（学校種）

保育実習指導Ⅱにおける保育士の魅力を伝えるための取組としては、「子ども理解や関わりの振り返り」が 39.4%と一番多く、次いで「保育士の魅力についての学生同士の共有」（35.3%）、「保育を捉える視点作り」（33.8%）であった。

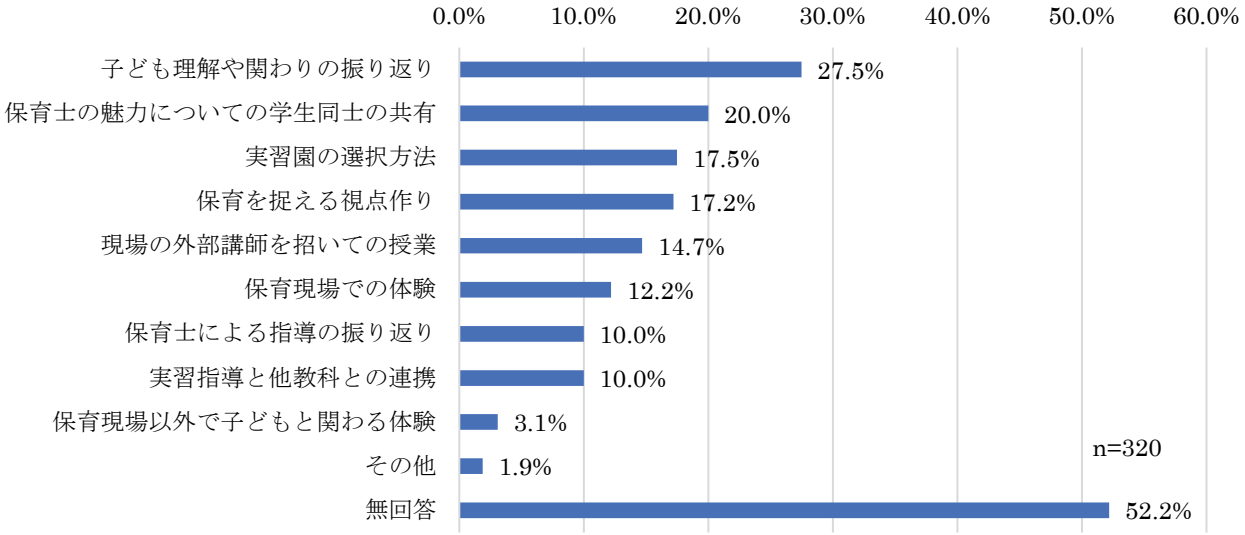
学校種で見ると、大学では「子ども理解や関わりの振り返り」（38.0%）が多かった。短期大学では「子ども理解や関わりの振り返り」（41.5%）が一番多く、「保育士の魅力についての学生同士の共有」（38.1%）、「保育を捉える視点作り」（37.3%）の順に多かった。専修学校では「保育士の魅力についての学生同士の共有」（40.3%）、「子ども理解や関わりの振り返り」（36.1%）、「保育現場での体験」（30.6%）の順に多かった。

以下は、具体的な取組内容に関する記述の抜粋である。

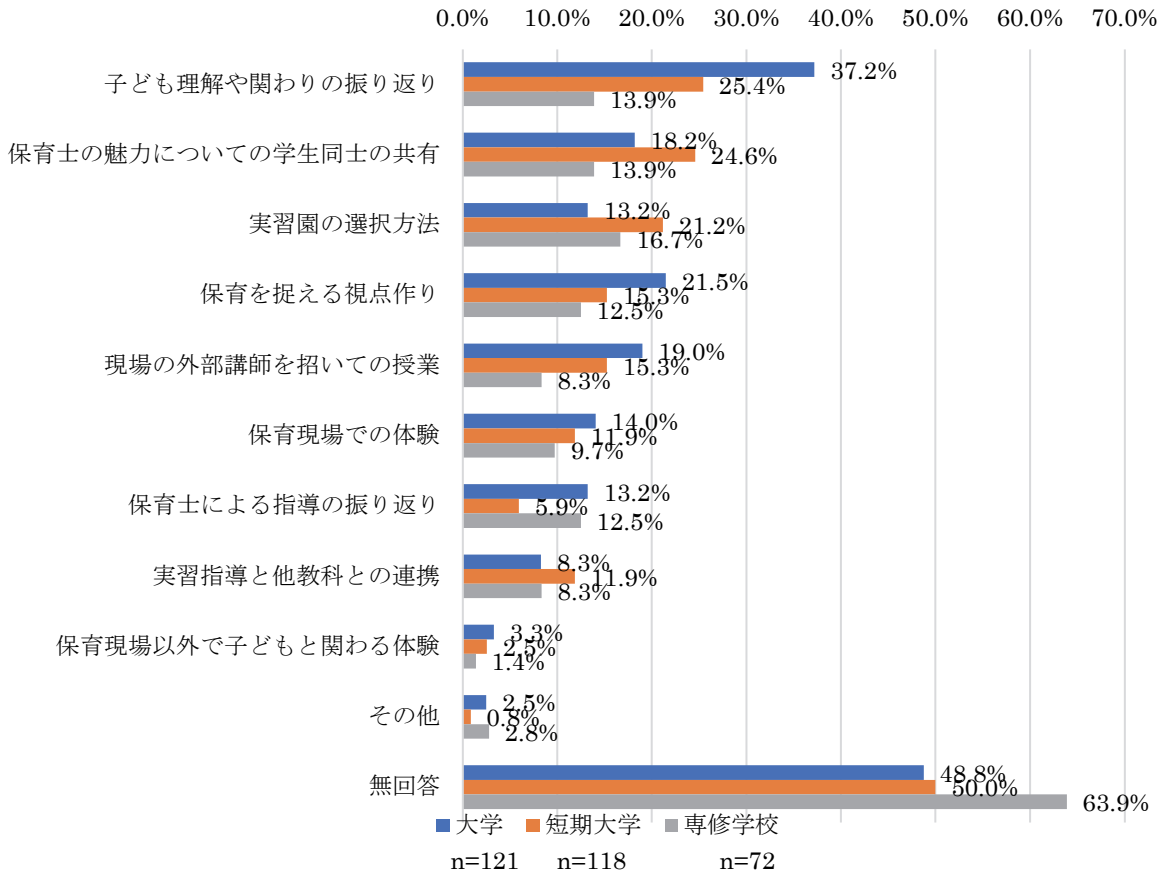
・実習後に実習園の園だよりを作成し、園の魅力だけではなく実習生自身の責任実習の内容を提示し、報告しあうことで子ども理解の視点、保育の意図の視点を確認する。

・これまでの実習体験を生かして実習前の目的の明確化と具体化を図ると共に、事後は体験と学びの共有を図っている。事後では現場の保育者を招き、保育者の魅力や保育の楽しさを伝える取組を行なっている。
・指導担当訪問に際して、子どもとの関わりを指導のポイントとし、実習後、学生同士で子どもとの関わりの楽しさ、保育のおもしろさを共有させる授業をする
・実習報告会を 1、2 年合同で行い、実習の成果を共有することで保育士の魅力についても感じ取れるようにしている。
・実習報告会を実施し、自身の実習を通しての学びと今後の課題を発表させる取組を行っている。また、下級生も参加させ、やりがいや難しさを聞くことで今後の示唆を得る。
・事後指導の中で、日誌を活用し実習の振り返りを行ったり、保育士による指導の振り返りを基に自分自身の課題を整理したり、学生同士で保育士の魅力や役割について話し合いの場を設けている。
・障害児保育の授業では、2 年生を対象に知的障害特別支援学校の見学と教頭先生から講話をいただき、障害のある児童への理解と対応について学ぶ機会を確保している。

④保育実習指導Ⅲ



図表 1-3-16 保育実習指導Ⅲにおいて保育士の魅力を伝えるための取組（全体）



図表1-3-17 保育実習指導Ⅱにおいて保育士の魅力を伝えるための取組（学校種）

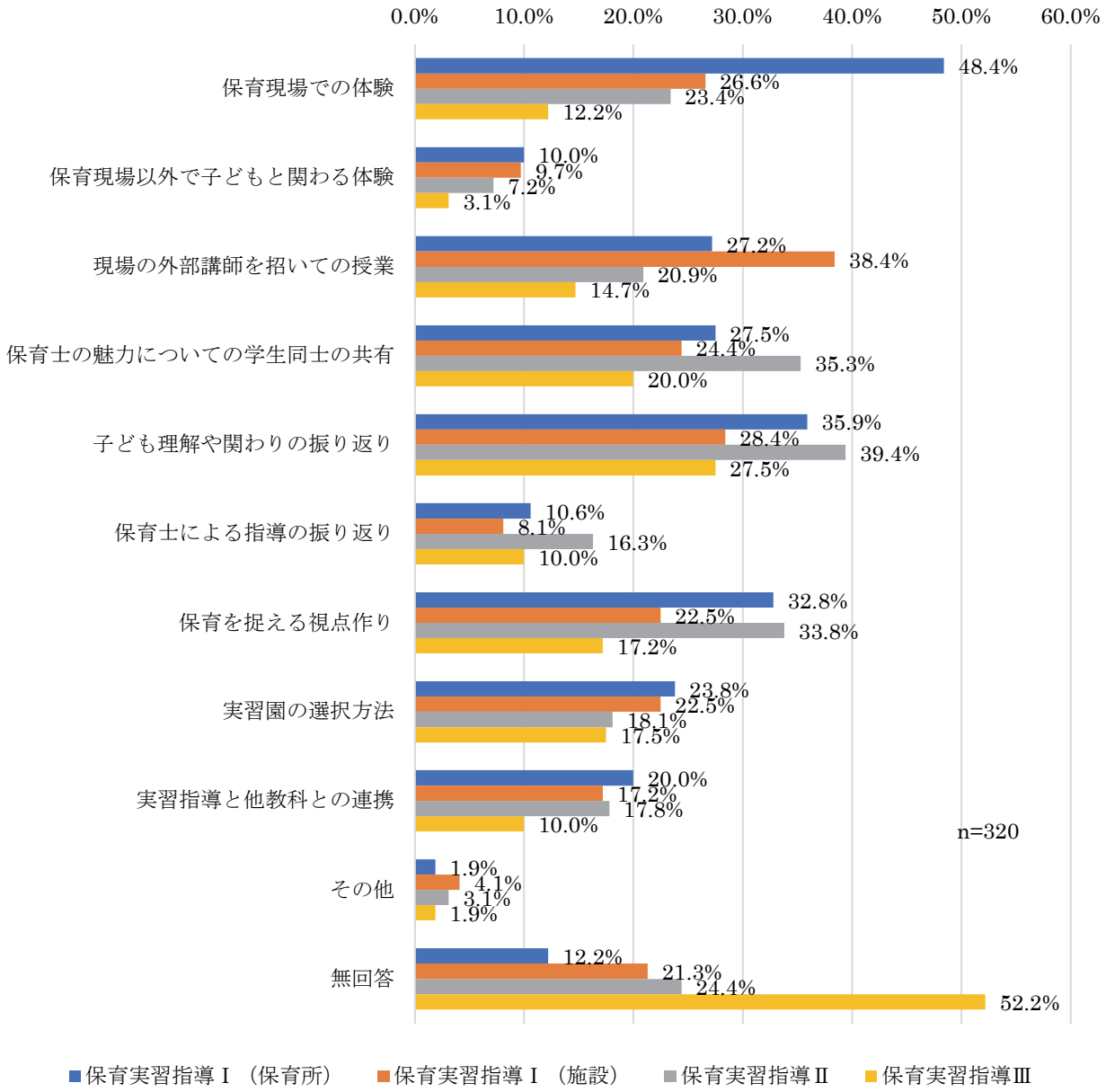
保育実習指導Ⅲにおける保育士の魅力を伝えるための取組としては、「子ども理解や関わりの振り返り」が 27.5%と一番多かった。また、大学、短期大学では約 5 割、専修学校では約 6 割が無回答であった。他の設問において、保育実習Ⅲは実施なしとの回答があることから、保育実習Ⅲを実施していない養成施設もあることが影響していると考えられる。

以下は、具体的な取組内容に関する記述の抜粋である。

・全員障がい児施設（入・通）へ行くようにしている。成人の施設や放課後デイサービスは除いている。
・実習Ⅰでの経験を振り返り、自分の課題を見つけるための時間を充分にとっている。そのため、振り返りの“視点”を教員が多面的に与えるようにしている。
・希望施設が多岐にわたるため、事前に希望の種別について調査した後、実習前に見学あるいは体験を個別に行なっている。
・施設での実習の振り返りから今後の課題を理解させたのち、施設で働くことを想定した視点から自身の現時点での長所・短所を理解させ、実習で感銘を受けた保育士の特徴を共有し、施設で働く保育士のやりがいや保育観を明確化している。
・「児童福祉」の授業を振り返り、施設において保育者としての専門的学びをどのように活かしていくのかについて考える機会を重視した。

・エピソード記述にて、実習時に体験した印象的な出来事を考察すると共に、発表をし保育体験や感動を学生同士共有できるようにしている。
・実習先施設の見学、保育実習指導Ⅰ（施設）の実習日誌の振り返りを通して、子ども理解や関わりの振り返り、保育士による指導の振り返り、保育をとらえる「視点」について学ぶ。保育体験演習Ⅱ（施設）にて、「実習施設見学、地域連携プログラムの実施、エピソード記録の方法を学ぶ等」の取組を行う。これらを通して、保育士の業務内容や魅力を体感できるようにする予定である。
・実習Ⅲでは、希望する種別の施設にできるだけ配当するよう配慮している。本学では、実習Ⅲを選ぶ学生は施設への就職を志す場合が多く、将来の進路にもつながる実習となるよう、実習先も選んでいる。

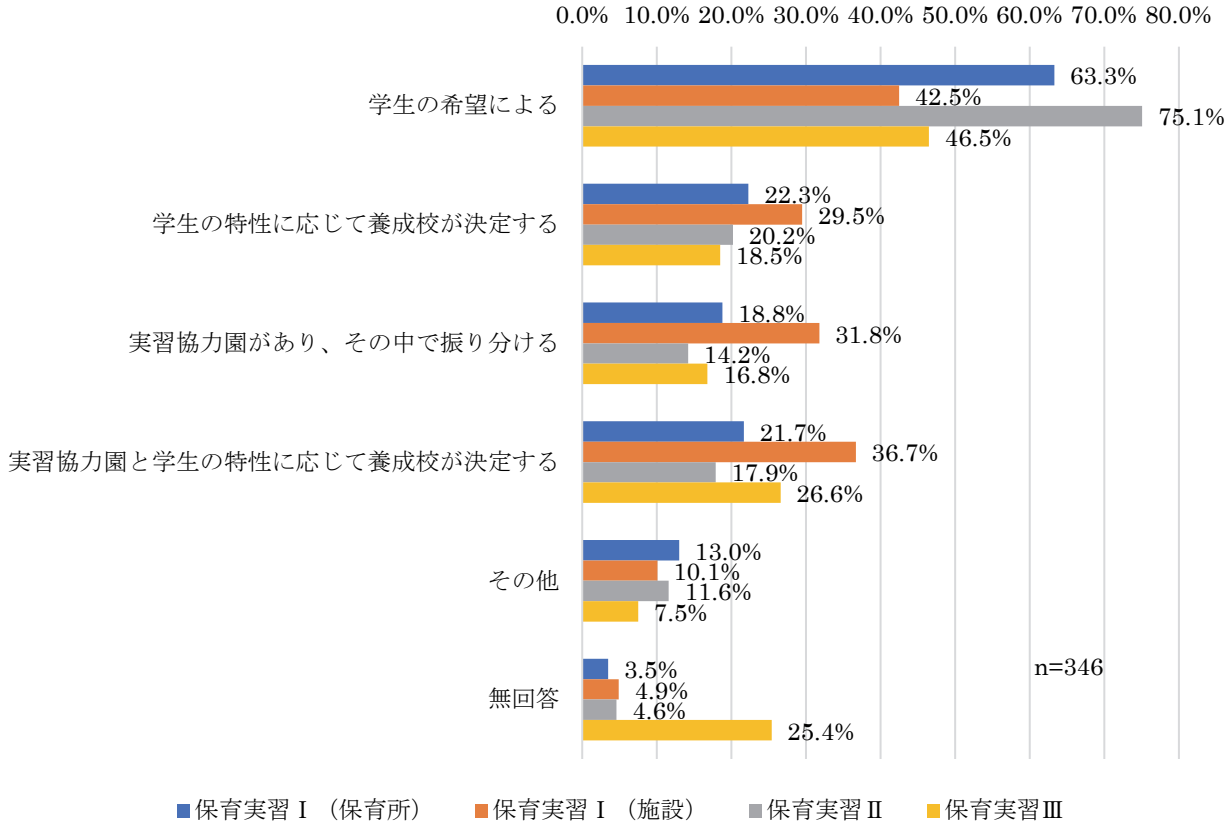
⑤各実習指導における保育士の魅力を伝えるための取組の比較



図表 1-3-18 各保育実習指導における保育士の魅力を伝えるための取組の比較

保育実習指導における保育士の魅力を伝えるための取組として、「保育現場での体験」は保育実習指導Ⅰ（保育所）で 48.4%と、他の実習指導よりも多かった。初めての保育所実習でもあり、実習以前に保育現場での何らかの体験をすることで、具体的イメージをもって実習に臨むことができ、このことが実習で保育士の魅力を感じられることにつながると考えられる。「現場の外部講師を招いての授業」は保育実習指導Ⅰ（施設）で 38.4%と多かった。施設実習の実習先は多様であり、一律に実習のイメージをもちにくいことが理由として考えられる。「保育士の魅力についての学生同士の共有」は保育実習Ⅱで 35.3%と、他の実習指導よりも多かった。取組内容の記述には、2 度の保育所実習の経験をもとに保育士のやりがいを考え合うことや、自身の保育観につながる機会としていることが伺えた。

（5）実習先の決定方法



図表 1-3-19 各実習における実習先の決定方法

保育所実習における実習先の決定方法は、いずれも「学生の希望による」が多い。保育実習Ⅰ（保育所）では 63.3%、保育実習Ⅱでは 75.1%と、保育実習Ⅱの方が多くなった。

保育実習Ⅰ（施設）における実習先の決定方法は、「学生の希望による」が 42.5%で一番多いが、「学生の特性に応じて養成校が決定する」、「実習協力園があり、その中で振り分ける」、「実習協力園と学生の特性に応じて養成校が決定する」はいずれも 3 割前後であり、決定方法にあまり偏りはなかった。

保育実習Ⅲにおける実習先の決定方法は、「学生の希望による」が 46.5%で一番多く、「学生の特性に応じて養成校が決定する」、「実習協力園があり、その中で振り分ける」はいずれも約 15%～20%であり、決定方法にあまり偏りはなかった。また、無回答が 25.4%と他の実習に比べて多いが、保育実習Ⅲは実施していない養成校もあることが影響していると考えられる。

その他の回答として、保育実習Ⅰ（保育所）では、「県内養成校による協議会を通じて調整し、養成校で決定する。」等県内養成施設で調整というものが複数あり、また「学生の通勤を優先」、「実習協力園の中から学生の希望をとる」等があった。

保育実習Ⅰ（施設）では、「県内の養成校間で調整の会議を経て、学生に実習種別と形態（通い・宿泊）の希望を取り割り振りを行う。」と、保育実習Ⅰ（保育所）と同じく県内養成施設で調整というものが複数あり、「施設の種別を学生が選択し、養成校が実習先を決定する」、「基本的に学生の決定であるが、施設数や時期が限られており、学生同士の協議、相談となる。」等があった。

保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰと同じく「県内養成施設で調整」、「保育実習Ⅰ（保育所）と同じ実習先を原則としている」が複数あり、「なるべく実習Ⅰで行った園でないところをすすめる。（様々な園があることを知る意味で）」等があった。

保育実習Ⅲでは、「県内養成施設で調整」、「学生の希望と協力園のマッチングを養成校が行う。」、「学生の方から違う施設を知りたいとの意見が多かった。」、「実施なし」等があった。

（6）保育士のやりがいや魅力を伝えるためのカリキュラムの工夫として考えられること

現在実施はしていないけれど、カリキュラムの工夫として考えられることを自由記述にて聞いた設問である。回答数は 167 件であった。

記述の内容で主なものとしては、「外部講師」が 47 件で最も多く、そのうち、卒業生を招いたり、卒業生との交流の充実について 17 件挙げられている。「保育現場との連携や直接関わる体験の実施や更なる充実」が 20 件、「カリキュラム構成や科目の新設」、「教科間連携等」が 13 件挙げられた。

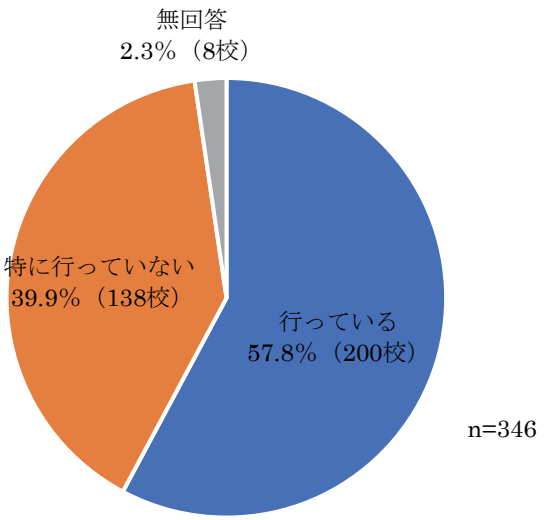
外部講師に関する内容として「卒業生を集めて研修を行うと同時に学生に対して保育の魅力を語ってもらう機会、学生からの相談に応じてもらう機会を設ける」、「現場で活躍している卒業生に外部講師として特別講義を実施してもらう。」等卒業生とのつながりを活かしたものが挙げられた。また、卒業生との交流や卒業生へのアプローチとして「キャリア支援やリカレント教育も兼ねて、在学生とのネットワークを形成し、そこから得られる情報等を複数の教科の中に活用できるカリキュラムを検討していきたいと考えている。」、「保育者ネットワークも卒後研修も必要だと考えている。」等があった。

連携や体験に関する内容としては「保育実習室を整備して、日常的に、体験できる機会をふやしたい」、「特色ある園の取組の紹介や見学」、「優良園の見学や紹介講義」、「保護者の視点に立つという指導をしていくことも試みてみたいと教員同士で話している。附属保育園の方等の協力が得られれば、保護者の思いや保育士への要望と共に、学生が保育士という仕事の重要性を感じられるような言葉が届けられるように思う」等があった。また実習に関する工夫として「子どもの成長や自身の関わりの結果を実感できる継続した実習の機会を増やすことや、学生自身が受け身ではなく、主体的、目的的に計画・実践・振り返りを行える機会を増やすことが求められる」という意見が挙げられた。

カリキュラム全体に関する内容として「現在、科目ごとに教員がそれぞれ取組んでいるが、このアンケートを書く過程で状況が把握できたので、外部講師の選定、内容等について科目間で調整、連携していきたい。」という教科間連携や全体の共通認識、「科目間の明確な住み分け、実践科目を増やす等、ICT 教育の推進。連続的な科目内容であるがゆえにプライオリティーがないように感じる。教授内容を精選していくことが必要であるように思う」という課程全体に対する各教科の位置づけについて挙げられた。

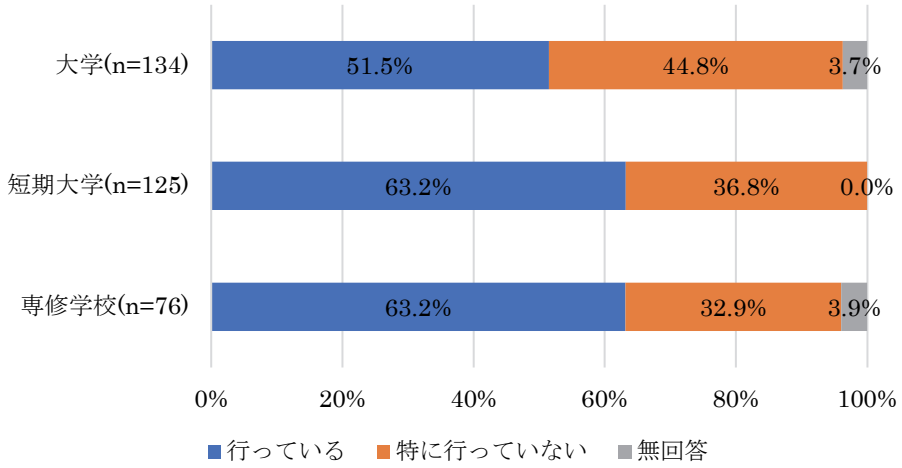
４．保育士の魅力向上につながる保育現場、自治体、保育団体等との連携について

（１）養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組について



図表1-4-1　学生と現役保育士の交流・対話

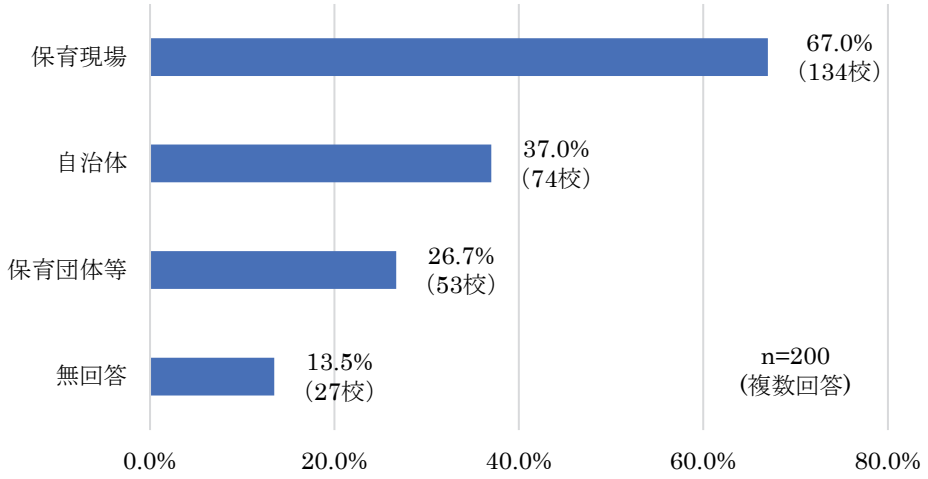
保育現場、自治体、保育団体等と連携して、養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組を行っているかについて質問した結果、「行っている」が 57.8%であり、半数以上の養成施設において学生と現役保育士との交流、対話が行われていることが分かった。



図表1-4-2　学生と現役保育士の交流・対話（学校種）

また、学校種で見ると、短期大学（63.2%）と専修学校（63.2%）では、ともに 6 割を超える養成施設で学生と現役保育士との交流、対話が行われており、大学（51.5%）では、5 割強とやや低くなっていた。

（２）養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組に関する連携先について



図表1-4-3 学生と現役保育士が交流、対話する取組みに関する連携先

前項の設問で「行っている」と回答した養成施設 200 校に対して、その連携先を質問したところ、「保育現場との連携」（67.0%）が最も多く、「自治体との連携」（37.0%）、「保育団体等との連携」（26.7%）という結果であった。

（３）養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組の内容について

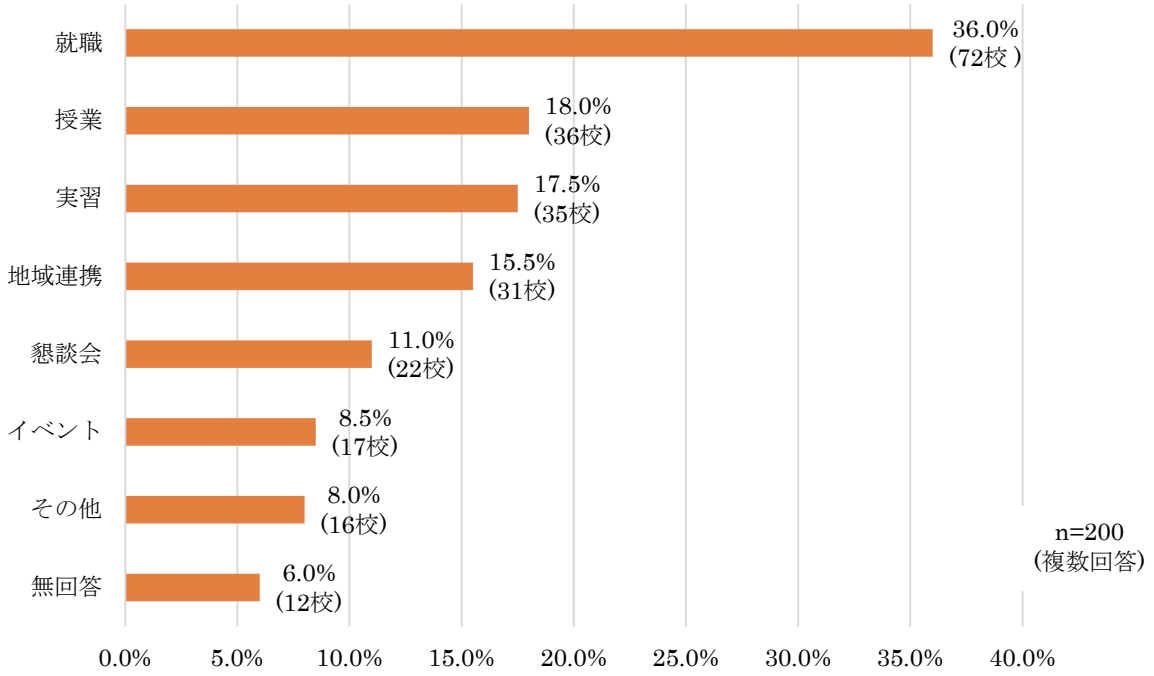
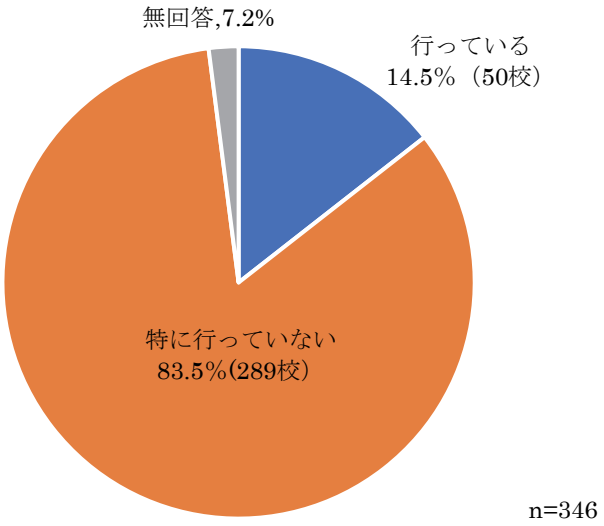


図1-4-4　学生と現役保育士が交流、対話する取組みの内容

前々項において養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組を「行っている」と回答した養成施設 200 校に対して、具体的な取組を自由記述で質問し、回答があった記述を大きく 7 項目に分類して集計した。以下、回答数の多かった順に具体的な取組の内容を示す。

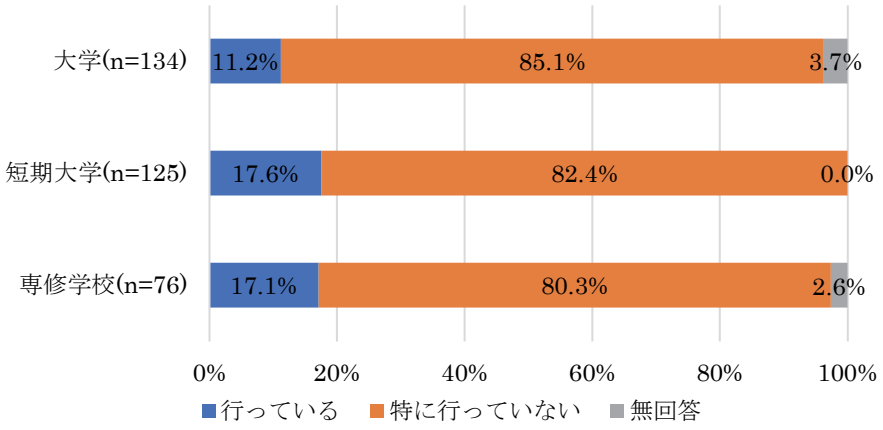
・就職活動に関する内容（36.0%）
「就職ガイダンス」、「就職合同説明会」、「現役保育士（卒業生を含む）の講話」など
・授業内での活動に関する内容（18.0%）
「授業内での現役保育士（卒業生）の講話」など
実施している授業としては、「保育・教職実践演習」、「基礎教養科目」、「キャリアデザイン」など
・実習指導に関する内容（17.5%）
「実習事前・事後指導」、「実習報告会」、「観察実習」、「体験実習」など
・地域連携に関する内容（15.5%）
「学内の子育て支援センター」、「保育現場でのボランティア活動」、「保育現場でのアルバイト」
・懇談会（情報・意見交換）に関する内容（11.0%）
「現役保育士（卒業生）との懇談会」、「保育現場との懇談会」など
・イベントに関する内容（8.5%）
「保育現場と共同の研究会」、「学習会」、「発表会」など
・その他（8.0%）
「自治体の取組に協力」など

（4）実習指導に携わる保育士の研修について



図表1-4-5　実習指導に携わる保育士の研修

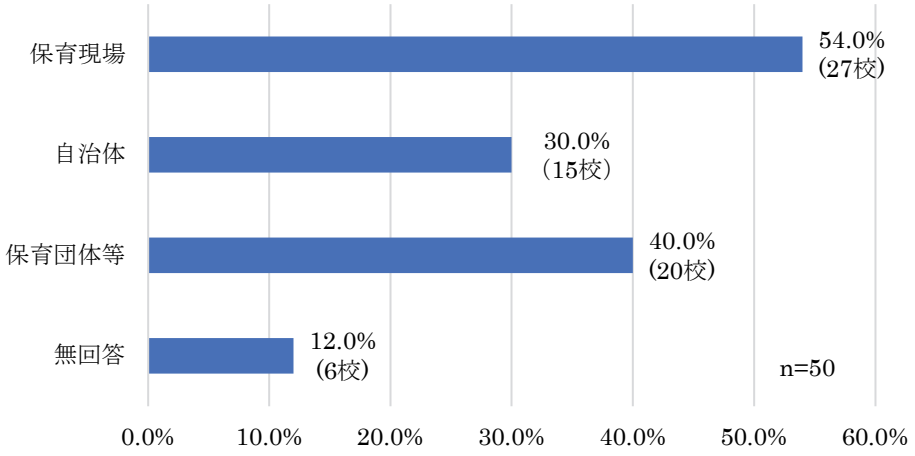
保育現場、自治体、保育団体等と連携して実習指導に携わる保育士の研修を行っているかについて質問した結果、「行っている」は 14.5%であり、多くの養成施設において、実習指導に携わる保育士の研修は行われていないことが分かった。



図表1-4-6　実習指導に携わる保育士の研修（学校種）

また、学校種で見ると、「行っている」と回答した養成施設は、短期大学（17.6%）と専修学校（17.1%）の方が、大学（11.2%）よりやや多くなっていた。

（５）実習指導に携わる保育士の研修に関する連携先について



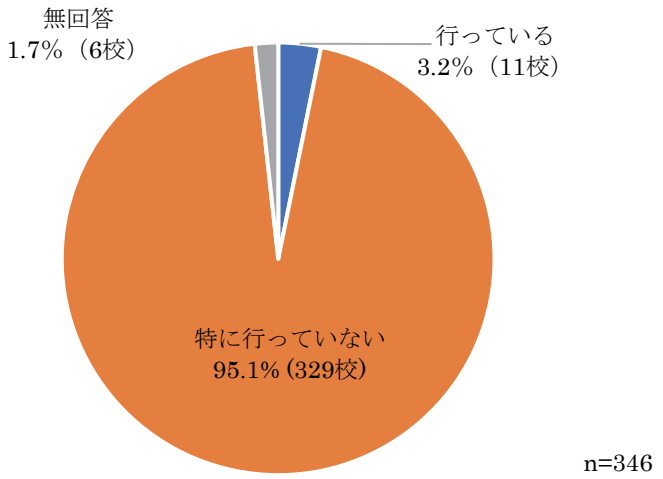
図表1-4-7　実習指導に携わる保育士の研修に関する連携先

前項の設問で「行っている」と回答した養成施設 50 校に対して、その連携先を質問したところ、「保育現場との連携」（54.0%）が最も多く、「保育団体等との連携」（40.0%）、「自治体との連携」（30.0%）という結果であった。

（６）実習指導に携わる保育士の研修の内容について

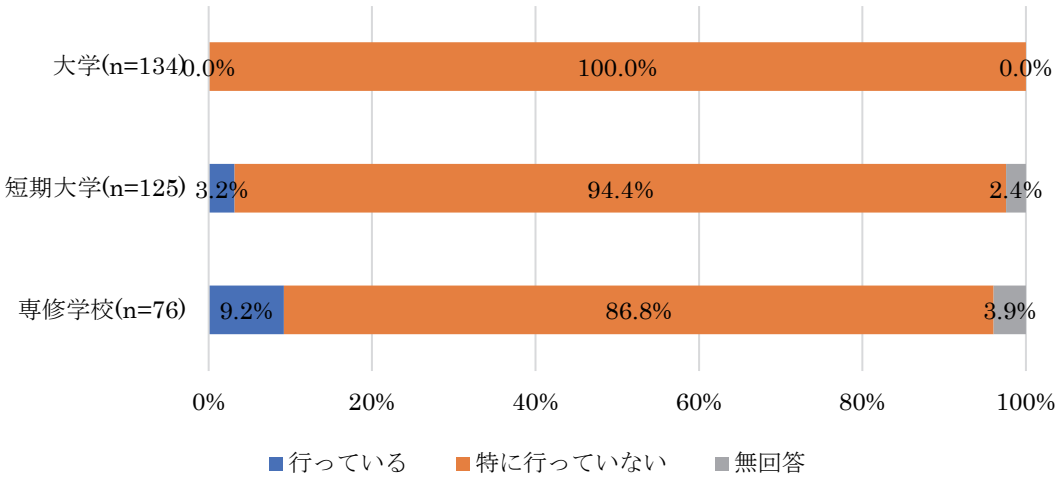
前々項において実習指導に携わる保育士の研修を「行っている」と回答した養成施設 50 校に対して、具体的な取組を自由記述で質問した。回答を見ると、保育現場、自治体、保育団体等において、養成施設の教員を講師として実施されている研修に関する回答がほとんどであった。数は少ないが、「実習指導者会議、実習指導者研修の実施（専修学校）」、「大学における実習指導の授業を保育現場に見学してもらう（大学）」という回答も見られた。

（７）保育所の ICT 化や業務効率化を支援する取組について



図表1-4-8　保育所のICT化や業務効率化を支援する取組

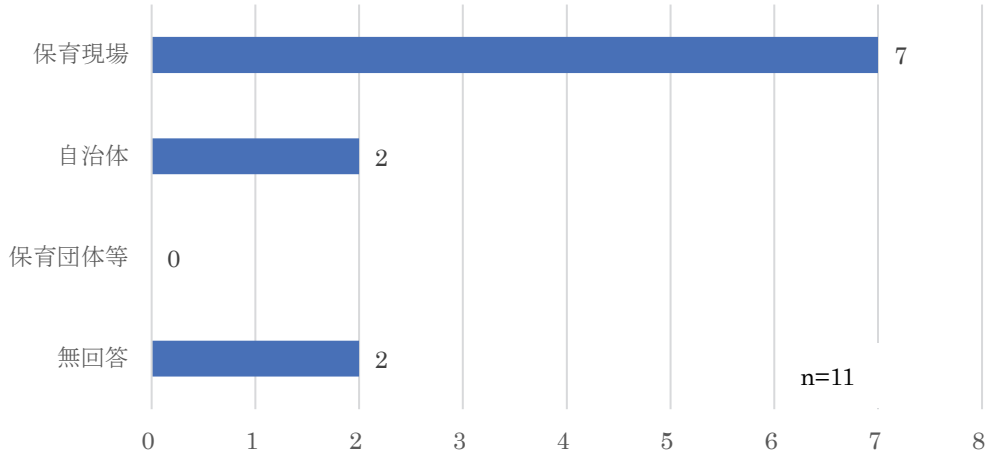
保育現場、自治体、保育団体等と連携して保育所の ICT 化や業務効率化を支援する取組を行っているかについて質問した結果、「行っている」という回答は 3.2%（11 校）であり、ほとんど行われていないことが分かった。



図表1-4-9　保育所のICT化や業務効率化を支援する取組（学校種）

また、学校種で見ると、「行っている」と回答した養成施設は、短期大学が 3.2%（4 校）、専修学校が 9.2%（7 校）であり、大学は 0 校であった。

（８）保育所の ICT 化や業務効率化を支援する取組の連携先について



図表1-4-10　保育所のICT化や業務効率化を支援する取組の連携先

前項の設問で「行っている」と回答した養成施設 11 校に対して、その連携先を質問したところ、「保育現場との連携」が 7 校、「自治体との連携」が 2 校、「保育団体等との連携」は 0 校という結果であった。

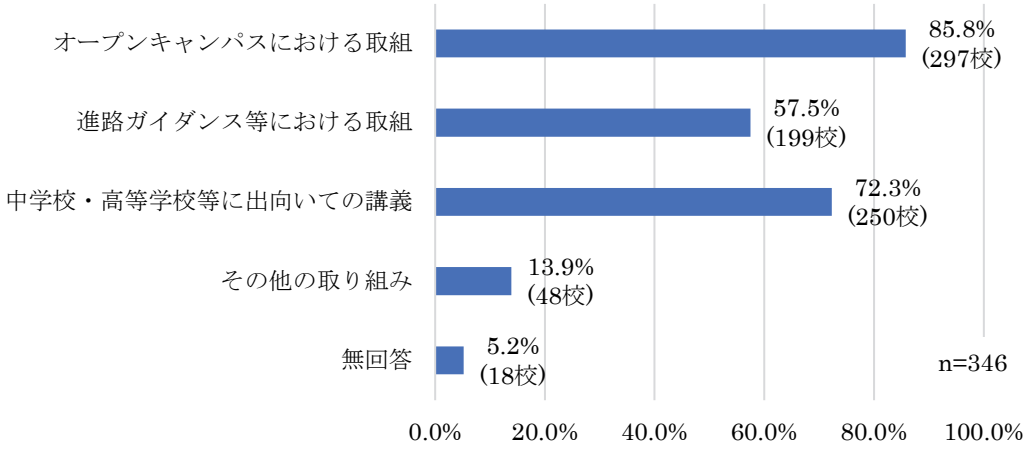
（９）保育所の ICT 化や業務効率化を支援する取組の内容について

前々項において実習指導に携わる保育士の研修を「行っている」と回答した養成施設 11 校に対して、具体的な取組を自由記述で質問した。

「保育所・認定こども園を中心に保育のねらい達成のため保育者のメディア活用についての取組（専修学校）」、「保育現場の協力により、保育士の研修として e ラーニング教材の作成（専修学校）」、「文科省からの委託で e ラーニングの教材を開発（専修学校）」、「保育士等キャリアアップ研修で ICT 化や業務効率化の取り組みについて助言（短期大学）」、「ZOOM での交流（専修学校）」といった回答がみられた。

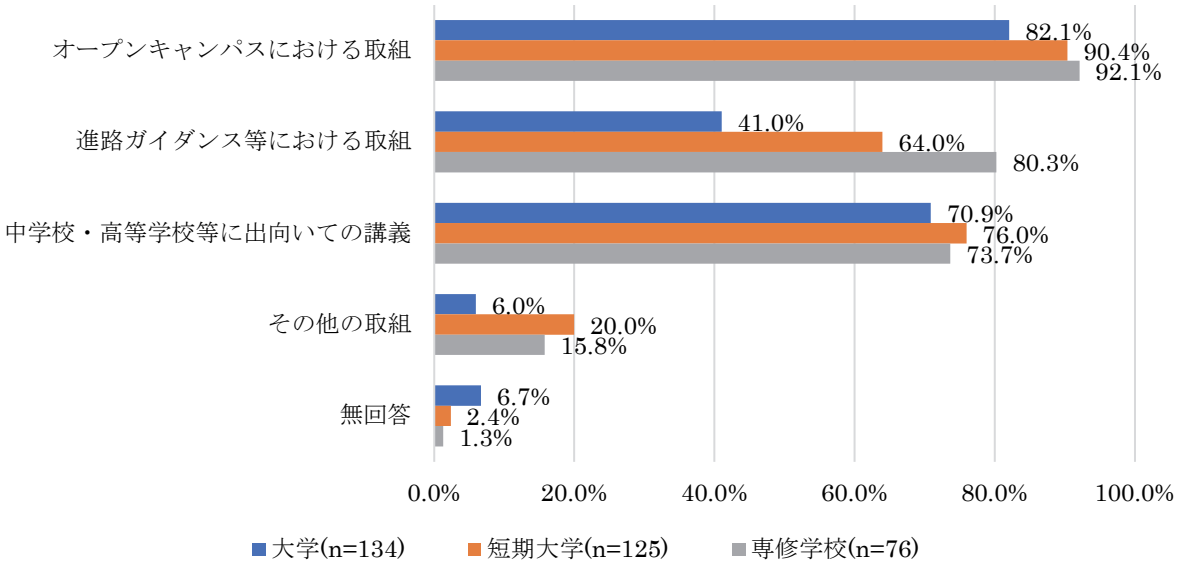
５．保育士の魅力向上につながる中学生・高校生向けの取組について

（１）保育士の魅力を伝えることにつながる中学生・高校生向けの取組について



図表1-5-1　保育士の魅力を伝えることにつながる中学生・高校生向けの取組み

養成施設として中学生・高校生向けに行っている取組の中で、中学生・高校生に保育士の魅力を伝えることにつながっていることはあるかを質問した結果、「オープンキャンパスにおける取組」（85.8%）が最も多く、「中学校・高等学校へ出向いての講義」（72.3%）、「進路ガイダンス等における取組」（57.5%）という回答であった。



図表1-5-2 保育士の魅力を伝えることにつながる中学生・高校生向けの取組み(学校種)

また、学校種で見ると、「オープンキャンパス」、「進路ガイダンス等」の取組では、専修学校で行っているところが多く、「中学校・高等学校へ出向いての講義」では短大が最も多かった。いずれの項目でも大学は一番少なかった。

（2）保育士の魅力を伝えることにつながる中学生・高校生向けの取組の内容

保育士の魅力を伝えることにつながる中学生・高校生向けの取組の具体的な内容を自由記述で質問した。

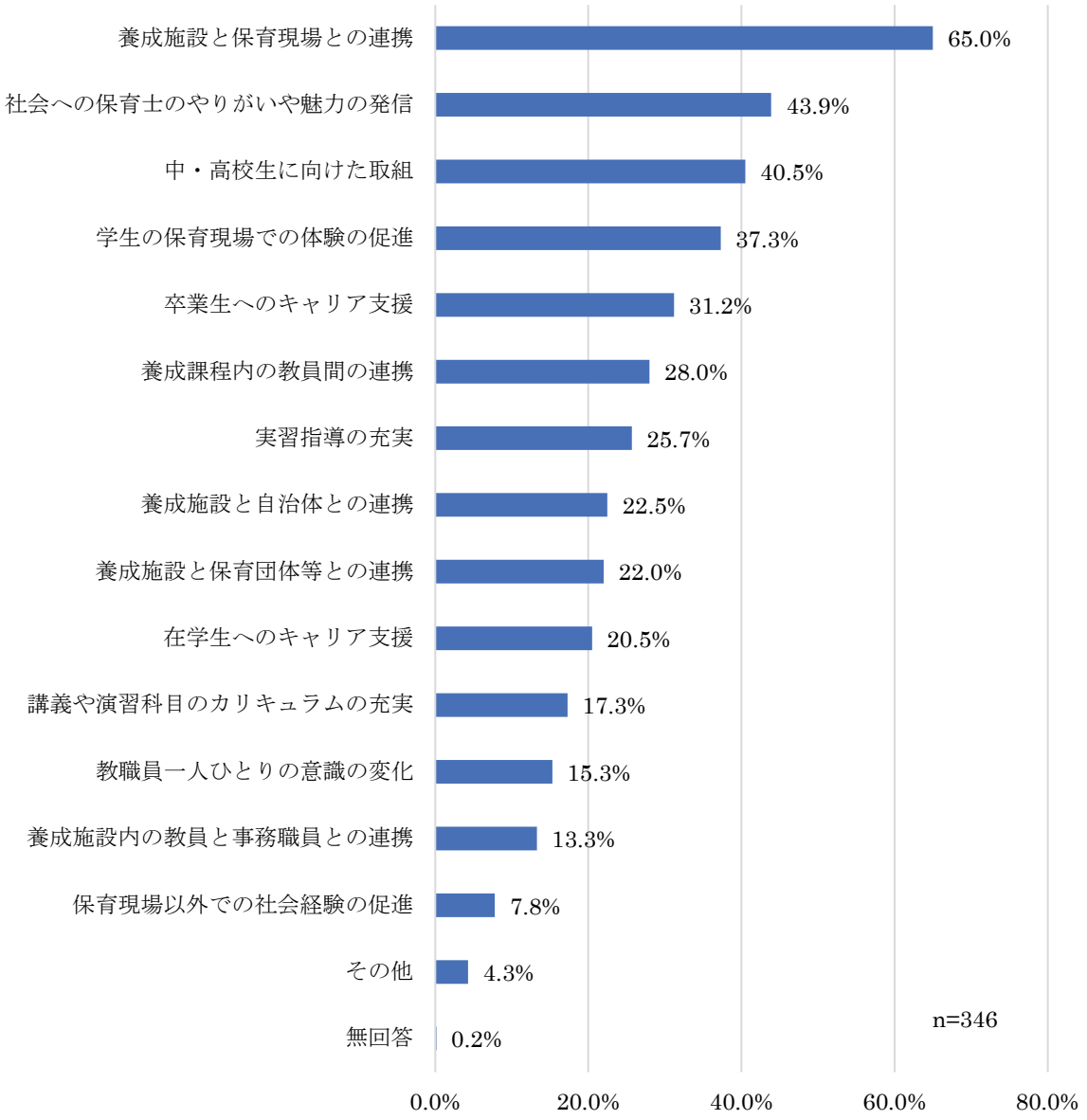
まず、行っているという回答が最も多かった「オープンキャンパスにおける取組」について、オープンキャンパスとして行われている具体的な内容に関する回答について、以下の 5 つの項目に大別した。

・養成施設の授業の体験
「模擬授業・講義」、「体験授業」、「模擬保育」
・学生（在学生）との交流や発表
「学生との交流・対話」、「学生による実演」、「学生による実習報告・発表」、「学生による模擬保育」
・現役保育士（卒業生）や経験者（養成施設教員）による講話等
「卒業生の保育士による講話」、「保育現場経験者の教員による講話」
・保育施設等の見学
「附属幼稚園・保育園・こども園の見学」、「附属園の園児との交流」、「子育て支援施設の見学」
・保育士の仕事についての説明
「保育の魅力を伝える」、「保育の楽しさ・やりがいの説明」、「保育の求人や待遇など現状の説明」、「幼稚園・保育所の違いの説明」、「児童福祉施設等の説明」

また、「進路ガイダンス等における取組」および「中学校・高等学校へ出向いての講義」に関する具体的な内容の回答をみると、オープンキャンパスでも行われていた養成施設で行われている授業の体験（「模擬授業・講義」、「体験授業」、「模擬保育」）に関する回答がほとんどであった。

「その他の取組」の内容としては、「『高大連携、高大接続』の事業として、養成施設に高校生を招いて授業等を行う」、「小・中学生の学校見学、職業体験の受入れ」、「保育士養成に関する就学資金の周知を図る活動」、「ホームページや SNS による情報発信」といった回答が見られた。

６．今後の保育士の魅力向上をすすめるために必要な取組について



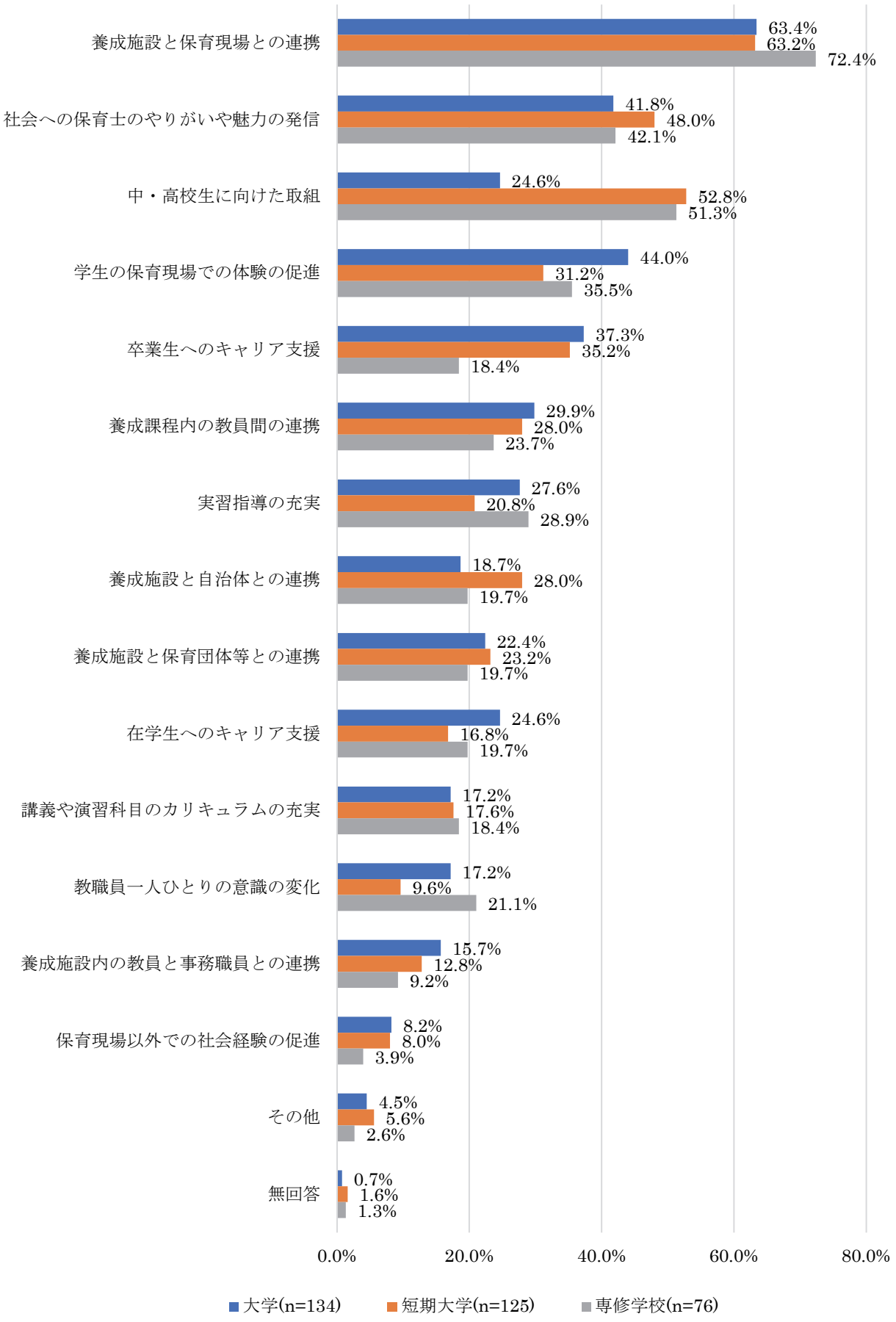
図表1-6-1　保育士の魅力向上のために、養成施設として改善が必要な事項

今後、保育士の魅力向上をすすめるために、所属する養成施設として改善が必要な事項について、複数回答可（最大４項目）で質問した。

最も回答が多かったのは、「養成施設と保育現場との連携」（65.0%）であり、他の項目に比べて回答数が突出して多いことから、保育現場との連携を課題としている養成施設が多いことがわかる。

続いて、「社会への保育士のやりがいや魅力の発信」（43.9%）、「中・高校生に向けた取組」（40.5%）の回答が４割を超えていた。

その他（4.3%）の自由記述では、「保育士の処遇改善」に関する回答が複数あり、また「中学・高校教員への保育の理解促進や情報提供」といった回答が見られた。


養成施設と保育現場との連携
63.4%
63.2%
72.4%
社会への保育士のやりがいや魅力の発信
41.8%
48.0%
42.1%
中・高校生に向けた取組
24.6%
52.8%
51.3%
学生の保育現場での体験の促進
44.0%
31.2%
35.5%
卒業生へのキャリア支援
37.3%
35.2%
18.4%
養成課程内の教員間の連携
29.9%
28.0%
23.7%
実習指導の充実
27.6%
20.8%
28.9%
養成施設と自治体との連携
18.7%
28.0%
19.7%
養成施設と保育団体等との連携
22.4%
23.2%
19.7%
在学生へのキャリア支援
24.6%
16.8%
19.7%
講義や演習科目のカリキュラムの充実
17.2%
17.6%
18.4%
教職員一人ひとりの意識の変化
17.2%
9.6%
21.1%
養成施設内の教員と事務職員との連携
15.7%
12.8%
9.2%
保育現場以外での社会経験の促進
8.2%
8.0%
3.9%
その他
4.5%
5.6%
2.6%
無回答
0.7%
1.6%
1.3%
0.0%
20.0%
40.0%
60.0%
80.0%
大学(n=134)
短期大学(n=125)
専修学校(n=76)

学校種で見たときに、回答率に大きな開きが見られたのは、まず全体で最も回答が多かった「養成施設と保育現場との連携」である。大学（63.4%）、短期大学（63.2%）に対して、専修学校（72.4%）の方がより連携を課題としていることがわかる。

「中・高校生に向けた取組」では、短期大学（52.8%）、専修学校（51.3%）が 5 割を超えているのに対し、大学（24.6%）は約 1/4 と回答率に大きな開きが見られた。

「卒業生へのキャリア支援（全体 31.2%）」では、大学（37.2%）、短期大学（35.2%）が 3 割を超えて比較的高い回答率だったのに対し、専修学校は 18.4%と低く、開きが見られた。

Ⅲまとめ

厚生労働省「保育の現場・職業の魅力向上検討会」の報告書（2020 年 9 月 30 日）において、保育士養成施設が取組むべき保育の現場・職業の魅力向上のための具体的な方策が示されている。本調査の結果に関しても、この報告書で示された対応策の三つの柱である「保育士の職業の魅力の発信の向上」、「生涯働ける魅力ある職場づくり」、「保育士資格を有する方と保育所とのマッチングの改善」に基づき、調査から得られた保育士養成の現状と課題についてまとめたい。

１．保育士の職業の魅力の発信の向上

（１）保育士養成施設教員が捉えている保育士のやりがいや魅力向上に関する意識【設問 2】

保育士養成施設教員として保育士という職業のやりがいや魅力を向上させるために、今より必要な取組をどのように考えるかを質問した結果、「子どもとの関わりや成長を実感できる」（63.6%）、「自分自身のやりがいや喜びを得られる」（57.8%）といった回答が多かった。子どもの成長を実感でき、そして自分自身がやりがいや喜びを得られることが多くあげられていたが、これらは相互的関係にあるもので、子どもの成長を感じることはその保育士自身のやりがいとなると考えられる。厚生労働省子ども家庭局が 2020 年に保育士等を対象にして行った「保育の現場・職業の魅力向上」に関する意見募集の結果からも、保育士という職業のやりがいや魅力として、「子どもとの関わり・成長実感」、「自己の成長・学び・誇り・自主性」といった回答が多く、本調査と同じ傾向を示している。

次いで、本調査では「社会的になくてはならない仕事と位置づけられる」（53.8%）、「給与・福利厚生が充実している」（52.9%）、「休暇の保障や労働時間が適切である」（42.2%）、「研修など学びや成長を支える環境が整っている」（40.8%）といった回答が多かった。保育士の社会的地位の向上、労働環境の改善、研修機会の確保といった取組の必要性があげられている。

他方で先に示した保育士等への「保育の現場・職業の魅力向上」に関する意見募集の中で多かった「保護者との関わり」は、本調査では「保護者と子どもの成長を共有できる」（25.4%）と値が低かった。子どもの成長する姿を保護者と共有することが保育士のやりがいや魅力につながるという認識は、養成施設教員の中では優先順位の低いものとして捉えられているのではないかと考えられた。

（２）養成施設におけるカリキュラムの工夫・具体化している取組【設問 3】

保育士のやりがいや魅力を伝えるためのカリキュラムの工夫の有無について質問した結果、「はい（有り）」92.4%と、非常に高い値を示した。

保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムの工夫の内容としては、「モデルとなる保育士の実践例に触れる機会を多くしている」（59.7%）が最も多く、次いで「保育士になってからのキャリアを思い描けるようにしている」（48.4%）と、保育士の具体的な姿に関する内容が多かった。他方で、「保護者に必要とされる実感をもてるようにしている」は 12.8%であった。まずは子どもと保育士の姿を通して、保育士のやりがいや魅力を伝えていることが示された。

保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムを具体化している教科目は、「保育実践演習」（47.2%）と最も多く、続いて「保育者論」（32.8%）と多かった。厚生労働省子ども家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の教授内容では、「保育実践演習」は養成施設における自らの学びや保育実習等で得られた力を振り返り、自己の課題を明確化することが目的とされている。「保育者論」は保育者の資質向上とキャリア形成についての理解を促すことが目的とされている。養成施設での学びを総括する科目であり、且つ保育士の仕事について具体的に扱う科目であるため回答する者が多かったと考えられる。

保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムを具体化している取組として自由記述を分析した結果、「授業のテーマや内容によって伝える」、「実践例や映像・写真を用いた授業」といった授業の内容、方法そのものを記述した回答が多かった。また、「関係機関との連携、子どもや保

護者と直接関わる体験等」、「外部講師」といった回答も多く、各養成校で保育現場や関係機関等、外部との様々な連携を図っていることが分かった。一方で、「実習との連動」、「教科間連携」といった養成施設内での連携は外部連携に比べて少なかった。これらの結果から養成施設内での連携が有機的に行われることが課題と考えられ、外部と連携した取組をより充実した学びにつなげることが必要ではないかと考えられた。

（3）保育実習において保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるために具体化している取組【設問 3】

保育実習の事前事後指導における保育士の魅力を伝えるための取組として、実習種ごとで特徴のある取組がなされていることが明らかになった。「保育実習指導Ⅰ（保育所）」では、「保育現場での体験」（48.4%）と、他の実習指導よりも多かった。初めての保育所実習でもあり、実習以前に保育現場での何らかの体験ことで具体的イメージをもって実習に臨むことができ、実習での保育士の魅力を感じられることにつながると考えられる。「保育実習指導Ⅰ（施設）」では、「現場の外部講師を招いての授業」（38.4%）が多かった。施設実習の実習先は多様であり、一律に実習のイメージをもちにくいことが理由として考えられる。さらに、「保育実習指導Ⅱ」では「保育士の魅力についての学生同士の共有」（35.3%）が、他の実習指導よりも多かった。前回の保育所実習の経験をもとに保育士のやりがいを考え合うことが、自身の保育観につながる機会になっていると考えられる。

（4）保育実習における実習先の決定方法【設問 3】

保育実習における実習先の決定方法でも実習種による違いが明らかになった。保育実習Ⅰ（保育所）、保育実習Ⅱといった保育所における実習では、「学生の希望による」が保育実習Ⅰ（保育所）（63.3%）、保育実習Ⅱ（75.1%）と、いずれも 6 割を超えていた。これらの実習種では、学生自らが実習園を探すことも多いため、「学生の希望による」が多かったのではないかと考えられる。

他方で、保育実習Ⅰ（施設）、保育実習Ⅲでは、「学生の希望による」といった回答が最も多かったが、「実習協力園と学生の特性に応じて養成校が決定する」といった方法が保育実習Ⅰ（保育所）・保育実習Ⅱと比べて多かった。施設での実習という性質上、学生の特性や希望に応じて実習先が決定されていることが示された。

（5）実習指導に携わる保育士の研修【設問 4】

保育現場、自治体、保育団体等と連携して実習指導に携わる保育士の研修を行っているかについて質問した結果、「行っている」は14.5%であり、こうした取組を行っている養成施設は非常に少ないことがわかった。厚生労働省「保育の現場・職業の魅力向上検討会」の報告書（2020年9月30日）では、「実習等を通じて、保育士としての責任感と使命感を育て、自らの職業にする決意を固めてもらえるように、（中略）実習を受け入れる保育所における実習指導の責任者となる保育士への研修を引き続き推進する」と述べられている。しかし、現状では養成施設が連携して実習指導に携わる保育士の研修は少ないため、この領域における連携の強化が必要であることが示された。

（6）養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組【設問 4】

保育現場、自治体、保育団体等と連携して、養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組を行っているかについて質問した結果、「行っている」が 57.8%であり、半数以上の養成施設において学生と現役保育士との交流、対話が行われていることが分かった。内容に関しては、「就職活動に関する内容」（36.0%）、「授業内での活動に関する内容（授業内での現役保育士の講話など）」（18.0%）、「実習指導に関する内容」（17.5%）の順であった。現状でも半数以上の養成施設で交流、対話が行われており、今後、オンライン型テクノロジーの導入によってこれらの取組がより加速することも考えられる。

（7）ホームページ等による保育士のやりがいや魅力を発信している取組【設問 2】

養成施設におけるホームページ等を活用した、保育士のやりがいや魅力を発信している取組については、「行っている」が 38.7%であった。学校種で比較すると、短期大学では「行っている」が 42.4%、専門学校では 46.1%であったが、4 年制大学では実施が 31.3%であった。

（8）保育士の魅力を伝えることにつながる中学生・高校生向けの取組【設問 5】

養成施設として中学生・高校生向けに行っている取組の中で、中学生・高校生に保育士の魅力を伝えることにつながっていることはあるかを質問した結果、「オープンキャンパスにおける取組」（85.8%）、「中学校・高等学校へ出向いての講義」（72.3%）であり、7 割以上の養成施設で実施されていることがわかった。

先に示した「ホームページ等による保育士のやりがいや魅力を発信している取組」よりも値が高く、中高生に対象を絞った取組や情報発信は行っているが、それよりも幅広い層に対する魅力の発信に課題があると考えられた。

２．生涯働ける魅力ある職場づくり

（1）卒業後 1～2 年目の保育士を対象として保育現場や自治体、保育団体等と連携した研修等の取組【設問 2】

「行っている」と回答した養成施設は 13.6%であり、こうした取組を行っている養成施設は非常に少ないことがわかった。保育士については初任者研修の法定化がなされていないことが影響していると考えられる。今後は、卒業生の勤務園など連携先を明確にすることで、養成施設と連携した研修等が進めやすいのではないかと考えられた。

（2）保育士としての悩みや課題を抱えている卒業生に対する環境づくり【設問 2】

卒業生が保育士として働いていて感じる悩みや課題を相談できる環境をつくっていると回答した養成施設は、全体の 63.3%であり半数以上の養成施設で実施されていることがわかった。学校種で比較すると、短期大学 71.2%、専修学校 69.7%の実施であるが、4 年制大学は 53.0%であり、2 年制の養成施設と 4 年制の養成施設との間に差が見られた。

具体的な取組としては、「ホームカミングデーや同窓会などの来校の機会づくり」、「学校での相談窓口の設置」、「卒業前・卒業後の情報配信」といったある程度組織的な取組とともに、「ゼミ教員・担任とのつながり」といった個々の教員等による取組がなされていることが明らかになった。

３．保育士資格を有する方と保育所とのマッチングの改善

（1）卒業生の就労状況の把握【設問 1】

保育士として就職をした過去 5 年以内の卒業生について、現在の就労状況をどの程度把握できているかを質問したところ、「1～2 割程度」（27.5%）と最も多く、「5 割程度」（20.2%）、「7～8 割」（26.3%）であった。本調査に回答した養成施設のほぼ半数が 5 割～8 割程度の把握ができることが分かった。ただ、学校種で比較すると、4 年制大学で「1～2 割程度」が 31.3%と他の学校種と比べて多い反面、「ほぼ全員」の把握ができているという回答も 9.0%と多かった。学校間による差が感じられる結果となった。

また、保育士として就職をした卒業生の就労状況把握の方法について自由記述を分析した結果、大きく 3 つの方法に分かれた。卒業生を対象とした「卒業生へのアンケート調査・ホームカミングデー（同窓会含む）の実施」、園を対象とした「就職先への調査や実習巡回等での把握」、「ゼミ教員・担任による把握」による個々の教員等による把握であった。

（2）保育士を離職した卒業生に対する復職のためのフォローアップ【設問 2】

保育士を離職した卒業生に対して行っている復職のためのフォローアップについては、「行っている」が 38.7%との回答であった。先の「悩みや課題を抱えている卒業生が相談できる環境づくり」を行っていると回答した養成施設が 63.3%であることを考えると、相談の場が復職のためのフォローアップにつながっていない場合もあることがうかがえる。環境づくりといった場の提供からどのような相談を受けられるかといった内容の検討を行う必要性が感じられた。

（3）卒業生の横のつながり【設問 2】

卒業生の横のつながりをつくるためのサポートについては、「行っている」が 32.4%との回答であった。ここでも先の「悩みや課題を抱えている卒業生が相談できる環境づくり」を行っていると回答した養成施設が 63.3%であることと比べると、値が低かった。具体的なサポートの内容では、「同窓会」、「同期会」、「ホームカミングデーの開催」、「リカレント講座の実施」、「卒業生が登録できるアプリがあり、そこに情報をアップしている」や「在学時に作成したメーリングリストを活用している」などがあげられていた。

最後に、今日、保育の現場・職業の魅力向上ためには、養成施設が保育の現場と連携するとともに、卒業生、保護者、中高生、幅広い層に養成施設を「開く」ことが求められているのであろう。本調査結果を総括すると、現状は「開く」ことの程度や内容に差があることが示された。つまり、養成施設のカリキュラムの工夫や実習の事前事後指導として「関係機関と連携する」、「外部講師を招く」ことや学生と現役保育士が交流、対話する取組、保育士として働いている卒業生が相談できる環境づくりといったことは比較的多くの養成施設で行われていることが分かった。現状でも保育士としてのキャリア形成をイメージできるような教育や卒業生へのフォローアップを意識した取組が行われていることが示唆された。

一方で、実習指導に携わる保育士の研修や卒業後1～2年目の保育士への研修等の取組を保育の現場と連携して行っている養成施設は1割台であった。さらに、保育士を離職した卒業生に対するフォローアップや卒業生の横のつながりをつくるためのサポートを行っている養成施設も共に3割台であった。ここから見えてくる課題は、保育士研修や再就職のためのフォローアップといった養成施設の教員個々人の力だけでは取組むことが難しい内容があまり行われていないという現状であろう。今後、これらの取組をすすめるのであれば、養成施設として組織的に取組むために国や自治体等から養成施設内の体制づくりをサポートするノウハウの蓄積や発信、経済的支援等がより必要と考えられる。

第２部

保育士養成施設における保育の魅力向上に関する
ヒアリング調査

第２部　　保育士養成施設における保育士の魅力向上に関するヒアリング調査

Ⅰ　調査の目的と方法

１．調査の目的

本調査は、指定保育士養成施設において、保育士を目指す学生が増えるよう、効果的な保育実習の方法やカリキュラムのあり方及び保育の魅力向上に向けた取組等について明らかにし、効果的な事例等を収集、提供することを目的としている。

２．調査の方法

（１）調査対象

本会が実施をしている「指定保育士養成施設実態調査（令和元年度）」において、特色ある取組が紹介されている養成校及びホームページの閲覧調査等により「保育士の魅力」と関連がある取組を行っていると考えられる養成校を選定し、養成施設の指定を受けた学科等の長及び長が推薦する当該養成施設の保育士養成について最も精通している教員２名を対象とした。対象となった学校種は、４年制大学４校、短期大学４校、専修学校３校の計 11 校である。

（２）調査時期

調査時期は、令和３年１月～２月である。

（３）調査の方法と手続き

調査を実施する上での倫理上の配慮について十分に説明をした後に調査を開始した。調査は、あらかじめ基本的な質問項目を設定し、面接の流れの中で柔軟に質問項目の追加や変更を行いながら進める半構造化面接法を用いて、オンライン（Zoom 等）で実施した。

（４）調査内容

質問項目は以下の通りである。

①カリキュラム関係

・日頃、「保育士(施設保育士も含め)という仕事の魅力」をどのように捉えて保育士養成を行っているか。

・それをカリキュラムにどのように反映させているか。

②実習指導関係

・実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていることは何か。

③教育課程以外の活動

・教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか。

④保育現場および自治体や保育団体等との連携

・授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。

・授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか。それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。

・教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。

・リカレント教育、卒後教育の現状。行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか。

⑤中高生に向けた取組

・オープンキャンパス(学校説明会)、出張授業等において、「保育士の魅力」を来校者にどのように伝えているか。HP や情報機器の活用方法等。

⑥就職支援の取組等の有無とその内容

・就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫

・早期離職を防止するための対策

・再就職支援、潜在保育士の掘り起こしについて。行っている場合、その内容はどのようなものか。

⑦その他

・今後、学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア等

（５）倫理的配慮

調査協力者の自由意思によりなんら不利益を受けずに随時撤回できること、調査への協力は依頼書に基づき口頭でも説明を行い、ヒアリング調査開始をもって同意を得たものとすること、調査から得られヒアリング内容の公表にあたっては発話内容を変えない範囲でまとめ直して報告すること、調査によって得られた情報の管理については細心の注意を払うとともに、研究終了後に全国保育士養成協議会に保管し、一定期間経過後に破棄することを口頭及び文書により説明し、承諾を得た。

Ⅱ　ヒアリング結果

１．4 年制大学

①　A 大学

1	カリキュラム関係
①	「保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか。
	・保育士は伝統があるからという点だけでは、もう響かない職業観をもたれてしまっている。その、イメージをどの程度払拭できるかが重要。 ・保育士は社会の一員であり、社会におけるマグネットであり、一番フロントラインにあると学生たちには伝えている。命を預かる場所、それが家庭とつながる仕事である、社会とつながる、隣接領域である小学校や幼稚園ともつながるところでもある。社会的なインフラとして保育所は重要である。また、学生は従来から子どもや人間が好きな者が多く、人間の笑顔を拾える場所であるという点も大事である。マグネットとして、真ん中をつなぐ役目の役職として、やりがいがあり、学生自身の「人間が好きだ」、「子どもが好きだ」という部分を生かしきれる職業であると伝えている。その結果、学生は、保育に対して「楽しそう」から「かっこいい」という認識に変わっていく。ただし、保育士の処遇に関しては問題意識をもっている。
②	それをカリキュラムにどのように反映しているか。
	・保育所実習に行くかどうかを決定する 2 年の後期開始までには、上記の件を学生に伝えている。そのスタートはオリエンテーションから始めている。また、保育士資格取得は卒業要件ではないが、保育原理と発達心理学は必修としている。このことにより、保育士資格を取得し、一般企業に就職し、保育士の魅力を知った市民が多く育っていると考えている。
2	実習指導関係
①	実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていること。
	・学生が実習で感じるネガティブなことをどのように価値付けるか、意識している。例えば、施設実習で洗濯、掃除、利用者の身の回りのお世話という体験に対して、それが利用者の生活を支えることにどのようにつながるのか、どれだけ価値付けられるかということを意識している。 ・実習中の学生のネガティブな体験に関して、学生同士で共有をし共に学んでいる。アクティブラーニングがしやすいのが実習指導であり、学生は主体的な体験を生かしながら、主体的に学び、保育士の魅力に気づいていく。 ・保育士の魅力を伝えるというよりも、自分がどれだけ子どもの役に立ち、保護者の役に立ち、そしてまた社会の役に立っているか、伝えることを意識している。魅力を教員側が伝えるよりも、学生が主体的に理解することを重視している。学生には、実習中に誰にも見せないでいいネガティブなことを書くメモを取ってもいいと伝えているが、最初はネガティブなことを書いていても徐々にポジティブな視点を持ち始める。また、教員だけでなく事務職員の関わりも大きいと考えている。

3	教育課程以外の活動
①	教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・養成課程以外の学生も含めた、障害を持つ子どもと関わるサークルがあり、積極的な活動をしている。また、ボランティアに対しては学生が積極的に活動しているので、保険をかける等のバックアップをしている。また、系列の保育所があり、学生たちはそこでのアルバイトも行っている。
4	保育現場および自治体や保育団体等との連携
①	授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・保育協会の園長たちに、保育指導方法の授業に参加してもらっている。ゲストスピーカーではなく模擬保育を行う中で学生と一緒に話し合ってもらっている。また、健康の授業では、5 歳児と学生が体育館で一緒に体を動かしている。さらに、表現の授業ではオペレッタをホールで行う際に、近隣の保育所の子どもたちを招いている。
②	授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・自治体とは、大学が提携パートナーシップを結んでおり、読み聞かせを行っている。大学のほうでブースを出して、親子や子どもたちに学生が読み聞かせを行っている。
③	教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・自治体の研修会や保育士等キャリアアップ研修の講師を務めている。
④	リカレント教育、卒後教育の現状。行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか。
	・学校の規模が大きいため、システム的なものは難しいが、ゼミなどを利用して卒業後もつながりを持ち、卒業生間の情報共有や交流を図っている。
5	中高生に向けた取組
①	オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業等における「保育士の魅力」の伝え方。HP や情報機器の活用方法等
	・保育士資格は、魅力ある大人が子どもに関わることが許される資格。だから自分自身の魅力そのままに、子どもに対して開いていくためには、学生として、どのように学び、どのように魅力を自分の中につくっていけるか、その準備を 4 年間一緒にしようと伝えている。 ただし、現状では学校としては学生募集がスムーズであり、ここでの取組は弱い部分かもしれない。また、このテーマを掘り下げていくためには中学・高校の教員側の意識に関する調査をもっと行わなければならない。この点は養成校全体で取組む必要がある。

6	就職支援の取組等の有無とその内容
①	就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫
	・保育士として就職するのは 10%弱。小学校の教員免許の関係から幼稚園教諭免許の取得者は減っていないが、保育士資格取得者は減っている。また、企業からの採用も非常に良い状態となっている。 ・学校全体の取組としては、保育系の就職指導が弱かったが、十数年前に学生からの強い要望があり、現在では年に一回卒業生を招いてガイダンスを行っている。
②	早期離職を防止するための対策
	・前述のゼミの交流などで在学生と卒業生が交流することに一定の効果があると考えている。また、一般企業に就職した学生が保育の世界に戻ることもあり、その場合は離職しないケースが多い。他職種の経験など、経験の多様化も早期離職防止につながると考えている。また、キャリアアップという観点からの離職のケースもある。
③	再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容はどのようなものか。
	・構想はあるが、現在のところは具体的な取組はない。（卒業生は自主的に動けるため、ニーズがあまりないという現状もあるとのこと。）
7	その他
①	今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア
	・現職の保育士が大学院等で保育の魅力を見直すことも大切である。また、メディアや SNS の活用を考えなければならない。

A 大学の特徴は、保育者養成校としての伝統と質の高い学生の確保に成功していることである。従って、教員側の理念を前提とした上で、学生たちの自発的な勉学と行動、気づきなどを大切にしていることが特徴である。ただしこのことは、本学部が小学校教諭や一般企業の採用状況が良いことと相まって、保育士としての就職率が 10%未満と低いことにもつながっている。しかし、他職種などの経験や、総合大学であるがゆえの他の専門分野の学生との交流は、保育士という仕事を俯瞰的に捉える力を養成することにもつながっており、この状況の中で保育士になる者は、保育士の魅力を主体的に理解した者たちであることが推測できる。

また、保育原理と発達心理学を必修とするなど、保育の道に進まない学生にも保育を理解させ、保育士の魅力を理解した市民を増やす意識があることも特徴である。

② B 大学

1	カリキュラム関係
①	「保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか。
	・本学科では「幼稚園と保育士」の免許資格を取得するコースと、「幼稚園と小学校」の免許を取得するコースがある。1 年次では、教養科目を全体で行うことが中心で、2 年次よりコースに分かれる。2 年次では、専門的に保育の学習に取組む。3 年次から 4 年次にかけて実習に行き、就職活動、卒業という流れとなることから、2 年次より専門科目を学習し、「模擬保育」等の授業を多く行いながら実践力を付けていく中で、保育の魅力を伝えている。4 年間のカリキュラムの中で徐々に保育者の仕事に就きたいという気持ちを高めるように取組んでいる。
②	それをカリキュラムにどのように反映しているか。
	・1 年次に、保育に興味を持てるように保育の基礎となる科目を置き、カリキュラムを工夫している。また、1 年次でコースが確定していない学生に、「保育者論」の授業で、保育の理想だけでなく、現状（給与面やキャリア等）にも触れ、授業において保育の魅力や保育の仕事について等、イメージが持てるようにしている。1～2 年次は、姉妹園の幼稚園や協力保育園で実習をし、3～4 年次には、外部実習にいく。またボランティアを推奨して、できるだけ保育の現場に触れて、保育の魅力を感じてもらえるようにしている。 ・学内において模擬保育等を活用し、実践力のある学生を育成し、キャリアにつながるカリキュラムを構成している。 ・模擬保育園のイベント版のような形で、運動会や発表会、遠足等を学生自身が自主的に企画し、授業内の活動として取り入れている。 ・外部講師を呼んで様々な取組も行っており、こうした点から保育の面白さも伝えている。例えば、「人形劇」や「あそびうたコンサート」等の専門家を招いている。授業の様子や学生の発表の様子、模擬保育やプロジェクト等の取組の様子を学科の HP 上のブログで紹介・掲載している。
2	実習指導関係
①	実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていること。
	・外部講師や卒業生 OG を多く呼び、保育の魅力、保育士の仕事内容や現場のエピソード等を具体的に話してもらっている。 ・1 年次では、実習に関する指導を科目としては設置していないが、初年次教育を含めた「幼児教育基礎演習」の中で、人形劇場の上演等、様々な外部講師との活動を取り入れ、実習に向けた指導を行っている。このような体験型の時間を設けることで、学生は子どもたちの前で実践する上で必要な視点を体感できる。学生も楽しそうに学んでいる様子が伝わってくる。 ・授業の中で模擬保育を積極的に取り入れ、学生自身が自主的に保育を考えていけるようにしている。 ・コロナの影響もあり、今年度は特に施設実習を学内実習に変更した際に、非常勤の先生方にも多く来てもらったことから外部講師と学生の関わりが多かった。ある面で良い学習につながっており、外部の方々の協力もあり良かった。 ・3 年生による実習成果発表会や、2 年生対象の実習チューター相談会等も行っており、自由な話し合いや交流が、学生同士の学びを深めている。 ・実習の事前指導は、どこの大学も力を注いでいるが、「事後指導」に関しては実際どうなの

	か。実は、事後指導こそが重要ではないか。本学では「事後・指導」に力を入れている。実習が終わったら良いのではない、また中には実習に行ったことで、保育士を諦めるケースも少なくない。保育職が嫌だと感じ、就職したくないと思ってしまった学生達へ、再度学生同士で振り返りをさせ、保育の良いところや保育の魅力的なことを思い出させる工夫を行っている。グループワーク、ワールドカフェ、学生同士の演習の振り返り、話し合いを取り入れることで、後ろ向きだった学生が前向きに変化することもある、効果を感じている。実習指導の中でのこうした活動が、就職やキャリア支援にもつながると考える。
3	教育課程以外の活動
①	教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・大学内に子育て支援施設があり、地域の子どもや保護者を呼んでいる。そこに全学の学生が主体的に関わっている。外部講師を呼んだり、教員が関わったり、保護者との交流の場、子どもの遊びの場として開放し、様々なプログラムを企画、準備を行っている。月１回実施し、保護者の受付や誘導をしたり、広場のレイアウトを変更したりし、その都度、学生自身が考える学生主導型のスタイルを大事にしながら活動に参加している。今年はクリスマス会も企画したが、コロナ禍で実施できなかったのは残念である。 ・学生自身がボランティアサークルを自主的に立ち上げた(現４年生)。近隣の保育施設に積極的にボランティアで保育参画している(1～3 年生)。2 年が主にリーダーとなり、3・4 年はアドバイス、見守り的な存在となり、継続的に行っている。保育参画をやりたいということで取組んでおり、学生自身が主体的に活動している。この活動が継承されており、伝統的になっている。これは全てボランティアで行っている。 ・HP 上のブログには、様々な取組が掲載されており、ここからも活動の様子を読み取ることができる。
4	保育現場および自治体や保育団体等との連携
①	授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・外部講師の活用として現場との連携を行っているが、授業の中ということではそこまで多くはない。 ・実習園の園長や施設実習先の保育者、現場で働いている OG 等の外部講師の活用を多く設定することで保育の魅力が伝わると考えている。特に今年度はコロナ禍で、学生が現場に行く機会がなかったので、外部講師を多く呼んで話をしてもらったが、非常に良かった。
②	授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか。それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・県、行政、教育委員会と連携している。また、近隣市とも連携を結び、子育て支援の連携も行っている。「親子のふれあい遊びプログラム」等、約３名の学生が 3～4 回ほど参加することで、学生の学びにつながるプログラムもある。 ・保育団体や行政側も保育士不足で危機感を持っており、地元の就職率を上げたいと思っている。連携活動で就職率が上がることもあることから、大学と県全体で「COC＋（地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」などを通して連携し、就職率をあげていく試みがある。県の公立や民間の保育所の保育士も来て、県への就職が拡がっている。近隣の県とも連携をとっているが、それが就職にもつながっている。 ・実習では姉妹園(幼稚園)はあるが、保育園はないので協力園にお願いしており、そこでも連携がある。8 園の協力園がある為、1 日観察実習は全員行ける。

	・区が主催する企画に応募した。絆プロジェクト「○○○○」としてプログラムを企画し、大学のキャンパスで実施した。子どもたちが楽しめるように、自然も豊かなので、散策してゲーム、知育や食育等の内容で多くのプロジェクトに関わっている。地域の子どもたちはもちろんのこと、学生や卒業生も参加することで学びにつながる。地域連携は大事だと思う。そうした意味で、社会・地域に開かれた大学プロジェクトとなっている。
③	教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・研修会講師、幼保の保護者会講師、○○県免許更新講師、○○県研修、キャリアアップ研修等、私立連合会、大小様々な自治体と連携している。 ・自治体との話があれば、積極的に引き受ける。その際に保育の魅力を伝えていくことが重要。 ・今年度はコロナ禍であったが、オンライン等でも相当数実施している。 ・認定こども園協会の就職率を上げる為の文部科学省委託事業「人材確保支援事業」の一環では、保育マルシェ、フリーマーケットにシンポジウムを抱き合わせた。そういう場面で「良い職場とは？良い現場とは？良い実習の在り方とは？人間関係や給与について」等々の具体的な話をすることで保育の理解を深めるようにしている。先生方でそれぞれの話を録画してつなぎ合わせて編集してあり、内容が残るので良い面もある。 ・県との連携による新卒対象の研修会では、ワールドカフェも取り入れ、悩んでいること等を共有する機会をつくった。 ・養成校 13～14 校で協力して、幼稚園、保育所、こども園等の現場との連携を進めている。このようなパイプが重要である。
④	リカレント教育、卒後教育の現状。行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか。
	・卒後教育として研修会等を実施したいと考えているが、まだそこまで至らず、ホームカミングを行っている。卒後 1～2 年の間、全員に葉書を出して学園祭に来てもらう企画を立てている。実際には社会人になってしまうと、学園祭の時期は忙しい為なかなか参加できない。しかしそこでの、先輩からの学生へのアドバイスや励ましがとても重要である。 ・本格的にリカレント教育を実施しようと、5 月の連休等に企画を立てていたが、今年度はコロナ禍もあり中止なった。その為、ZOOM での実施を試みた。今後さらに発展させていきたいと考えている。
5	中高生に向けた取組
①	オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業等において、「保育士の魅力」の伝え方。HP や情報機器の活用方法等。
	・HP の工夫を行っており、授業の様子や様々な取組についての学生の活動が見やすく分かりやすいブログを立ち上げている。(頻繁に更新されていることから、学生の雰囲気や非常に楽しそうな様子が伝わってくる。) ・高校に出向き、保育の話をしたり、出前授業を行ったりしている。 ・○○ライブも積極的に参加、講義ライブは勿論のこと、保育のイメージを明るくすることを意識している。また給与面等の実態等も分かりやすく伝えつつ、子どもの学びへの関心を持てるようにしている。発達の話や子どもの主体性を大事にするということは、保育者にとって大変であるし、魅力と大変さは表裏一体である等の話を具体的にしたり、実際に給料が上がっている等の話をデータをもとに行うことで、保育士を目指したいなどの声が高校生から挙がっている。今年度は、コロナの影響で「動画配信」となったが、web 上に動画でアップされるので、

	これも効果的である。 ・近隣の他県にも出向き、多くの高校生が参加してくれるよう、進路ガイダンスに力を入れている。なるべく裾野を広げる努力が必要である。 ・保育団体等と連携をとり、就職ガイダンスを行うことや、進路ガイダンス等に、保育団体の人を呼ぶことも実施していきたい。
6	就職支援の取組等の有無とその内容
①	就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫。
	・一番良いのは、現場の風景を見せていくこと。そして様々な園の見学の機会を増やしていくことである。 ・OG や現場の園長に来てもらい、具体的な話をしてもらう。現場の保育士の側から、保育がどのように見えているのかを話してもらう。外部や先輩の話を聞くことはとても意味がある。保育士の魅力を折に触れて教員側から伝えることを意識している。 ・行政や保育団体と連携すること、園見学、保育現場回りで魅力を伝えていくことも大事である。（今年はコロナで園回りが出来なかったが。） ・学生は地元の園に興味がある。地元にも就職してもらいたいが、色々な園があることを知ってほしい。一般企業等の就職活動もオンラインが増えてきたが、保育の場合も、説明会等にオンラインで参加していくようになるだろう。
②	早期離職を防止するための対策
	・ホームカミングが重要である。 ・離職防止のためのフォロー、研修の企画等が大事である。 ・保育団体とも連携をとりながら協力し合っていくことが必要である。早期離職を避ける為にも、教員側も外部へ発信する、協力・貢献していくことが大事である。
③	再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容はどのようなものか。
	・ここは、あまり把握できていない。今後の検討課題となっている。 ・行政が主催して行っているような再就職セミナー等に養成校が協力していく必要がある。 ・同窓会案内、リカレント教育や卒業生のフォロー等の企画を進めていくことが課題となっている。
7	その他
①	今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア。
	・卒業生を呼ぶこと、卒業生の話を聞くことは、学生にとっては、身に染みて感じる学びとなっているようである。 ・大学から外へ出ていくことが重要。また保育現場を見学するだけでなく、保育に参画していくことが重要である。 ・様々な園があることを知ること、ここだけが日本の保育・世界の保育ではないことを知らせる為に、多くの園を見せていくことが必要である。 ・学生の視野を広げること、外に出ていく機会を多く設けて実感させていくこと、保育参画から伝えていくことが大事である。 ・勤めてもすぐに辞めてしまうことを防止する意味もあるが、キャリア教育として、「人生ゲーム／保育者版すごろく」の様に、学生一人ひとりの人生を少し先まで見通すこと、モンスターペアレントやトラブル等ばかり気にせずに、もう少し良いイメージを持つことが重要なのではないか、長く勤めていきたいと思えるような先のイメージまで持たせていきたい。そのためには、授業の中で魅力を伝えていくことの工夫も必要であろう。

B 大学の特徴は、①実習指導においての取組、②教育課程以外の活動、③保育現場および自治体や保育団体等との連携に着目できる。①については、1 年次より 4 年間に渡る実習指導を計画しており、外部講師を呼んでの企画や模擬保育を多く取り入れ早い段階から学生が現場でのイメージを膨らませられるような取組を行っている。また、学内での授業と実習、さらには事後指導までを段階的にフォローしつつ、最終的に保育の魅力や保育者としての仕事、ライフイメージを持たせる工夫等は、学生にとって非常に重要な経験になっていると考えられる。②では、教育課程以外においても、学生が主体的に現場の保育と関わろうとする様子が見えてくる。大学内にある子育て支援施設での学生による企画、自主的に立ち上げたボランティアサークルでの現場への参画等は、まさに日頃の大学内における様々な教育の工夫や刺激が学生の主体性を生んでいるように捉えられる。③においては、日々の教員の熱意から、県、行政との連携がなされており、様々な自治体の活動への学生の参加は、就職支援やキャリア支援にもつながっていると推測される。また、県全体の養成校との連携や地域との連携、近隣の園との協力による活動を行うことは、B 大学の考える、学生の視野を広げ保育の裾野を広げていくこと、学生が実践力を身に付けキャリアにつなげていくことに寄与していると考えられる。熱意を持って学科独自の HP・ブログで授業や取組を掲載する等、保育の魅力を伝えようとする B 大学の姿勢は印象深く、養成校と現場・社会のパイプ役として貢献している B 大学の役割は大きいものと考える。

③ C 大学

1	カリキュラム関係
①	「保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか。
	・1 年次見学実習から保育所等において保育に参加し、実習から帰ってきて振り返りをする機会を持っている（基礎研究演習）。その実習先は、C 大学の学生が就職でお世話になっている園である。大学の先輩が働いている実習園や、大学との関係性が良好な実習園であるので、保育者もウエルカムな状態で、「よかったら後でアルバイト来て」という声かけをもらうこともある。それを通じて、学生にとってはそれが、「ああ、何か楽しそうだな」とか、「あ、やってみたい」という動機につながると考えている。見学実習に関しては、1 年生の実習は、例えば保育所、こども園の実習は半日、幼稚園の実習は半日で施設の実習も半日という形で、様々な種別の経験をすることになっている。2 年生になると基礎研究演習 2 という科目で少しバージョンアップして、1 年生の実習では半日の見学だったものが、1 日通して、それを複数日行くこととなる。
②	それをカリキュラムにどのように反映しているか。
	・基礎研究演習（1 年、2 年）において、幼稚園、保育所、施設（主な就職先等の協力）の見学実習・参加実習をおこなっている。基礎研究演習 1（1 年生）の実習は、保育所、こども園の実習は半日、幼稚園の実習は半日、施設の実習も半日という形で、様々な種別の経験をすることになっている。2 年生になると基礎研究演習 2 という科目で少しバージョンアップして、1 年生の実習では半日の見学だったのが 1 日通して、それを複数日行くことになっている（前述）。さらに基礎研究演習（2 年）では、教職実践演習（4 年）とのコラボレーションを行い、4 年生と 2 年生とが交流し、実習前の 2 年が実習に向けた話を聞くことのできる機会を設けている。実習がひととおり終了した 4 年生の学生が実習ノートを持ってきたり、自分が実習で経験してきたことを 2 年生の学生にブースに分かれて話をして「こんなことやっておいて」とか、「こんな感じだよ」という話をし、保育の魅力的な部分を学生（4 年生）が学生（2 年生）に伝える授業がある。 ・入学前教育として入学予定者に対して図書 1 冊を提示し、感想を書く課題、保育に関係する用語に関する課題を課している。感想については入学後の 1 泊 2 日の宿泊研修の際に発表することとしている。
2	実習指導関係
①	実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていること。
	・実習担当者が事前指導において実習を楽しむというメッセージを伝えている。 ・実習中における実習生の戸惑いや悩みがあると真っ先に実習の担当教員やゼミの教員が相談に乗り、すぐに解決して、また実習に新たな意欲で挑むというシステムや流れできている。それにより学生が実習を何とか乗り越え、楽しいと変えていく印象がある。基本的にはどの教員も、実習巡回に行ったときに学生の名前がわかっているので、「つらそうな顔してる」というところをすぐに察知する。それを、「どうしたの？」とか「大丈夫？」と声掛することによって、学生が涙を流しながら伝えたりするときにも、「つらかったらまた連絡しておいで」とどの教員も言っている。資格取るために必要な実習を楽しむのが一番だが、「資格取るために必要な実習だから我慢しないといけないこともあるよ」、「帰ってきてから何でも愚痴聞くから、取りあえず全部持って帰ってらっしゃい」と言って、不満を抱えながらも実習は取りあえず行かせて、全部持って帰ってこさせて、事後指導のところでばっと吐き出させるようにしている。

	また、個別面接によるフォローもおこなっている。さらに、ゼミ担当者が実習中の学生の悩みや戸惑いへのフォローをおこなう体制もとっている。（LINE などの活用） ・学科会議において全教員（18 名）で養成教育や実習に関する情報等の共有をおこなっている。教員組織の風通しがすごくよい。実習巡回をお願いしても嫌な顔をする教員はいない。全員ではないが、学科の教員は大体の学生の顔と名前が一致している。 ・実習準備室に保育現場経験のある助手が配置されている。
3	教育課程以外の活動
①	教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものはあるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・附属幼稚園が大学の敷地の中にあり、授業のコマが空いたところに学生が幼稚園を訪問し、例えば 90 分間、子どもと関わる機会（ボランティア）を設けている。この日時の調整は教員が行っている。 ・基礎研究演習をきっかけとして学生が、保育現場でのアルバイト・ボランティアをはじめることもある。 ・私立大学研究ブランディング事業として開設された総合支援施設があり、その中には小学校 1 年生から 6 年生を対象にした学習支援の施設と、0 歳児から 3 歳児と保護者の子育て広場のゾーンがあり、学生たちが 1 年生から関わっている。そこで基礎研究演習 1 の見学実習のほかに、職業体験を通して、早くから職業を意識をすることによって魅力につなげていくシステムにしている。授業外であるが基本的には出席を原則としていて、学生には参加するよう指示する形を取っている。参加しない学生は今のところいない。参加していないからといって何かの単位を落とすことはないが、学生に「行きましょう」という感じで指導している。 ・総合支援施設の空いたスペースを活用して、6 人、7 人のゼミ生が毎月 1 人 1 月担当して、壁面の貼り替えをやっている。そこには赤ちゃんと保護者が来ているので、その様子を見たり、あるいは職員が保育をしている様子を横で見ることができている。
4	保育現場および自治体や保育団体等との連携
①	授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・社会福祉や家庭支援論などの社会福祉関係の授業において福祉施設の長が講話をおこなっている。
②	授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・総合支援施設の事業（上述）
③	教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・保育施設等との情報交換会（懇談会）に関係する教員が参加している。
④	リカレント教育、卒後教育の現状。おこなわれている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか。
	・学園祭期間に講座（学部長による）が実施されており、数十名の卒業生が参加した（比較的卒後まもない卒業生が参加）。 ・計画としてはリカレント教育の実施が検討されていた。

5	中高生に向けた取組
①	オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業において、「保育士の魅力」の伝え方。HP や情報機器の活用方法等。
	・教員と学生の距離が近いと感じ取ってもらえるようなアットホームなオープンキャンパスを心掛けている。 ・大学と同一法人の高等学校の保育コースの生徒に、「C 大学いいよ」、「先生のお仕事、楽しいよ」と、基本的にはエスカレーターで上がってこられるように魅力は伝えている。また同校生徒（2 年生以上）に対して保育士養成を担う教員が授業をおこなっている。 ・大学と同一法人の高等学校のオープンスクールに参加する中学校の生徒に対して大学教員が保育に関する話をしている。たとえば『おおきなかぶ』の絵本を持っていったり、小学校 1 年生の教科書で『おおきなかぶ』が載っているその教科書を持っていって、「学び方が違うけれども、幼児期はこうやって絵を見て先生の声を聞いて楽しんで保育を受けてるんだよ」、「でも、小学校に行ったらそれを自分で読んだりとか、おじいさんの気持ち考えたりっていうふうに、そういう自分の意見を述べる場であったりとか、人の気持ちを考えてそれを言葉にするっていう学び方が変わってくるんだよ」などの話をしたりする。
6	就職支援の取組等の有無とその内容
①	就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫。
	・就職支援はキャリア支援課（事務）が担っているが、教員も大きくかかわっている。それぞれの教員が積極的に就職に関する情報提供をおこなっている。見学に行かせる際に、教員それぞれには強みがあので、施設に行きたい学生には「何々先生のところに一度相談に行きなさい」「保育だったらあの先生のところに行きなさい」と言って、学生を温かく迎えてくれる就職先、施設の保育所の特色、園長先生の人柄などを伝えている。
②	早期離職を防止するための対策。
	・卒業後も悩みなどの相談ができることを伝えている。実際、学生と教員の距離が近く相談に来ることが多い。卒業後でも関係なく話をしている。そこで離職が防げていると思う。
③	再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容はどのようなものか。
	・教員が LINE 等で卒業生とつながっているため、ゼミ担当等を通じて再就職支援をおこなうこともある。
7	その他
①	今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア。
	・職業体験などを通して保育の道に入学してきた学生が、実習などで理不尽な思いなどをすることもあるが、実習先で経験してしまったという学生に対しては、自分はそうならないように、子どもたち自身が、「保育、楽しかった。だから、あの先生みたいになりたい」と思う保育をしてくれるのが一番大切だと思う。 ・保育の魅力を感じて入学してきた学生に対して、早くから「子どものどのようなところが好きなのか」、「どのような働きかけすべきか」ということを意識させるようにすることが必要。

C 大学へのヒアリングの要点をまとめると以下の通りとなる。

第一に、保育士養成を担う学科の全教員の連携、協働の体制ができている。学科会議において学生の情報を共有したり、ほとんどの教員が学生の顔と名前がわかるという。それが実習や就職に対する丁寧な支援や卒業後のフォローにつながっているのだろう。また、教員組織の「風通しがよい」との発言があったが、学科全体が保育士養成教育に関して同じ方向を向いていることがうかがえた。基礎

教育研究と教職実践演習の連携など、科目間連携がスムーズに行えるのはこのためではないだろうか。学科が保育士の魅力を伝えるための組織として機能していると思われる。

第二に、現場における学びを重視し、初年次から保育現場におもむく授業が取り入れられている。さらに、そこからボランティアやアルバイトなどの課外の活動につながるようになっている。また、附属幼稚園や総合支援施設において子どもたちと関わる機会を、教員が支援しながら学生が行なっている。こうした機会を通じて保育の仕事の魅力を感じられるのではないかと考える。

第三に、ヒアリングでは詳細な聞き取りは行えなかったが、大学の教員が大学と同一法人の高校の保育コースへの入学希望者や生徒に対して、保育に関する授業を行っている。受講者は保育の奥深さ、魅力を感じることができ、大学としては受講者を保育の道に誘う機会となっているのではないだろうか。

④　D 大学

1	カリキュラム関係
①	保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか。
	・元幼稚園教諭・保育士として、自分の現場での経験をふまえ、保育士の仕事のすばらしさ、やりがいを伝えながら授業や実習指導を行っている。 ・日々成長する子どもと触れ合えること、保護者と子育ての喜びを共有できること、子ども同士の人間関係のすばらしさ（大人になると失われることが多いので）を日々体験できることが、自分にとって（幼稚園教諭・保育士）のやりがいであった。 ・学生が保育士の魅力を感じるポイントとして、「保育士の専門性を理解すること＝やりがい」、「自分が理想とする保育士との出会い（実習先やボランティア等）＝保育士モデル」の２つが考えられる。（待遇等は以前よりも改善傾向にあると感じる） ・カリキュラムの特徴として、4 年制ではあるが 1 年次から保育士専門科目（実技や指導法など）を開講している。
②	それをカリキュラムにどのように反映しているか。
	・現場経験のある教員が授業や実習指導を担当している。 保育実習指導（保育所担当＝元保育士、施設担当＝元児童養護施設職員） 幼稚園実習指導（元幼稚園教諭・園長）
2	実習指導関係
①	実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていること。
	・元幼稚園教諭・保育士の経験を授業や実習指導に反映している。特に、保育現場で実習生を指導した経験を生かしている（現場が求めている実習生像・求められるスキル・態度等）。 ・授業においては、現場経験の事例を多く取り入れている。
3	教育課程以外の活動
①	教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・保育現場に赴き保育士の実際の仕事に触れること ・児童文化部の歴史があり、サークル活動に力を入れている。 ・公務員保育士になるための講座を 1 年次から実施し、職業意識を高めている。
4	授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか
①	それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・保育実習指導やキャリアアップセミナーにおいて、卒業生を呼ぶことがある。卒業生とのつながりも大事にしている。 ・授業に自治体が参加することはない（公務員保育士を呼ぶことは難しいため）。
②	授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか
	・児童文化部等、サークル・ボランティア活動に力を入れている。

③	教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・地元のイベントに協力。キッズコーナーなど、地域の団体から大学に依頼があり、人形劇サークルが参加している。大学が地域貢献として協賛する形である。 ・免許更新講習会の講師他、講習会講師など、地元から依頼があれば協力をしている。
④	リカレント教育、卒後教育の現状。行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか。
	・長年保育士養成をしている大学（以前は短大）である。幼稚園教諭や保育士のためのリカレント講座を毎年実施している（年 4 回。現場で使える教材制作や演習が人気である）養成校が主催である。
5	中高生に向けた取組
①	オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業等において、「保育士の魅力」の伝え方。HP や情報機器の活用方法等。
	・オープンキャンパスや出張授業で保育に関する専門的、かつわかりやすい授業を行う（演習授業・絵本・造形等）。また、授業紹介（学生の学びが有効）や在学生との交流を図ることで、保育士志望が高まると考えている。 ・推薦入試の面接でなぜ保育者を目指したかを聞くと、多くが中学生の職場体験と言う。つまり、現場の保育士との触れ合いが保育士志望を高めると考えられる。 ・HP の充実
6	就職支援の取組等の有無とその内容はどのようなものか。
①	就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫。
	・卒業生を招いて（3 年目程度の新人・園長等）キャリアアップセミナーを実施している。
②	早期離職を防止するための対策。
	・卒業生が就職した保育現場との意見交換（新人研修の講師等）を行う。 ・ゼミ教員を通して卒業生の状況を把握する（相談され、離職を留まったケースもある） ・毎年 6 月頃卒業生へ「寄せ書き」を送り就職状況を把握している。
③	再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容はどのようなものか。
	・卒業生が大学に就職先を尋ねてくることがある。また、ゼミ教員を通して再就職支援をすることがある。
7	その他
①	今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア。
	・保育士は人間性も求められることから、保育士養成校の教員にも人間性が求められると考えられる。 ・保育士養成校教員の質の向上と、教員が保育者養成をしているという自覚をもつ。 ・分かりやすい授業、楽しい授業、保育の現場を理解できる授業と教授法。 ・中学や高校と連携、職場体験と 1 年次からの職業への意識づけ。

D 大学の特徴としては以下の点が挙げられる。

第一は、保育士養成校教員の意識の高さである。元保育士の教員が実習指導を担当することで職業や保育現場のイメージがつく。保育現場の事例や実践を多く取り入れた授業を実施することで力が身につく。教員は 4 年制で保育士を養成するという自覚を持っている。1 年次から領域の指導法等の授

業があり実践的に学んでいる。1年次から公務員対策授業を実施している。教員集団の人的環境が充実している。

第二は、保育士の仕事体験・経験ができる環境づくりである。大学敷地内には附属の幼稚園があり、園庭で遊ぶ子どもたちの様子をいつでも観察することができる。1年次から地域の保育園で観察実習を実施している。専門職を養成するということから、教養を身につける座学の授業だけでなく、ボランティアやサークル、卒業生との交流など、積極的に体験活動を実施している。また、教員たちに学生たちが現場と関われる環境を作りたいという熱意（意欲）がみられる。学生たちが保育士になるという夢が叶うよう、応援する姿が伺えた。このように、養成校内の環境づくりに力を入れている。

第三は、卒業生との関わりである。在校生と卒業生との授業内の交流だけでなく、卒業生対象のリカレント教育やキャリアアップセミナーなどのキャリア支援を行っている。また、卒業して3か月後には「先生方からの応援メッセージの寄せ書き」を送付するなど、離職防止のための対策をしている。さらに、卒業後もいつでも就職支援ができるような環境を整えている。卒業後のフォローが充実している。

2．短期大学

①　E 短期大学

1	カリキュラム関係
①	「保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか。
	・保育士の魅力については、まず子どもがかわいいという学生の思いがあり、そこから対人援助の仕事の魅力という部分をキーワードとしている。そして子どもの成長や人生の節目発達を間近で、保護者よりも先に直接関われることを魅力として、入学当初から伝えている。また、実習等を通して子どもや施設の利用者と関わることで、自分自身の人間性を高めて豊かにすることができ、また一生学ぶことでそれをさらに豊かにしていくことができることを魅力として捉えている。
②	それをカリキュラムにどのように反映しているか。
	・本学科のカリキュラムツリーの矢印がそれぞれ保育実習、幼稚園教育実習、施設実習につながっていくように授業の形態を組んでおり、最後には保育士の実践演習のほうに行けるようにしている。専門分野を基礎、中級、上級として、2 年の後期にそこに向かっていくように定めている。実習は、保育所実習から始まって保育所実習で終わるような形をとっている。
2	実習指導関係
①	実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていること。
	・実習指導は、入学して早々から始めており、最初は施設実習、保育所実習、幼稚園実習、3 実習の一番基礎となるところから始めている。そこで学生に 2 年間の自己課題を立てさせ、目標も設定している。そして、それを教職実践演習につながるような形にしている。 ・子どもと、または利用者と関わる機会をこまめにつくっている。各実習ももちろんだが、実習指導としては 1 年生の夏休みから、観察参加実習を兼ねた子どもと楽しい時間をもてるプログラムを作って、取組んでいる。 ・2 年間を通して実習に絡んだことを続けていると、学生が変化する。学外の実習に出ることで、“乗り越える力”に学生自らが気付く機会になる。それが保育士の魅力につながっている。結果として、学生は 98%ぐらいは資格を取り、その 9 割が保育士になっている。 ・実習等、小刻みに外部と接触する体験は、学生同士が切磋琢磨し、励ましあう機会になっている。 ・学生の傾向としては入学当初から目的意識が高いが、自己課題・目標をたてることで人間関係・コミュニケーション能力の向上を意識して学生同士が関わりあえている。 ・園の保育者から受けた指導にショックを受けたとしても、自分が目的を持って子どもと関わることを意識するよう、自己課題を文章として書かせ、教員が何度もチェックをしている。実習では「子どもに関わる」ことに対して意識付けをしている。最終的には自己課題は保育教職実践演習につなげていっている。 ・実習交流会では 2 年生が 1 年生と交流する機会があり、2 年生が自身の体験等を 1 年生に伝えていく。（実習以外のことも）これは、学生の中で意識付けられており、2 年生は積極的に後輩たちに話をしてくれている。 ・教員が各園や保育関係の協議会に足を運び、実習指導について話し合い、養成校が学生を大事に思っていることを理解してもらっている。

3	教育課程以外の活動
①	教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・コロナでボランティア活動が難しかったが、1 年後期に、子育て支援センターに授業外演習として希望者を訪問させたが、全員希望をした。 ・学内では学生の絵本の読み合いや、実技を学生同士で見せあったり高めあったりする経験をしている。 ・学生は最初の自己課題で、人前に立つのが怖い、緊張するなどネガティブな思いが強く、その点を意識化できているので、それを理解したうえで、学生同士が関わりあっている。
4	保育現場および自治体や保育団体等との連携
①	授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・現場の保育者、特に卒業生に講義をしてもらっている。 ・卒業生の 50～60 代の保育者が本当に学生のことを大事に思って講義されるので、学生も自分たちが大事に思われている安心感をもてる。外部の保育者は“頑張って欲しい”という思いが強いが、現場で働く卒業生は“支えてくれている感覚”や現場の事情などを学生に伝えてくれ、学生が“安心感を持てる”メリットがある。
②	授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・キャリア支援として就職懇談会を行っている。そこで講師が、就職や学生生活について話をしてくれる。また 5 月に市内の全民間保育園が来て、園の紹介や就職説明会をしている。（これ以外に実習指導の項でも説明あり。）
③	教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	（6 の③に関連回答あり）
④	リカレント教育、卒後教育の現状。行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか。
	・ステップアップ講座という名称で毎年行っている。卒業生がいる園に案内をして学校主催で講演会や研修会を企画している。 ・市内の行政主導の保育士対象の研修会には卒業生が多く参加するため、成長をこちらが理解する機会となる。そのような研修を受け持つことの重要性からも、行政との関係が大切になる。

5	中高生に向けた取組
①	オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業等において、「保育士の魅力」の伝え方。HP や情報機器の活用方法等。
	・オープンキャンパスでは在学生が企画をして、高校生と一緒に交流できる時間を持っている。主体は学生。教員はカリキュラムや入試の説明を行う。高校生からはアットホームという評価が多い。
	・高校生は学生にピアノ、入試、カリキュラムなどを尋ねている。優秀な学生をピックアップするのではなく、積極的に参加したい学生を募集し少しだけアルバイト料を出す。終わった後は教員と学生が自然と交流している。 ・学生をかわいいと思っている教員が多く、先生も遊び心がある。我々は基本にはそこがある。また、学内の試みは HP や You Tube で紹介している。 ・高校での出張授業の際には、地元での就職という部分を意識して、その高校のエリアの保育所の情報を多く出している。また、ベビー人形を使って子どもの発達、成長過程を説明している。
6	就職支援の取組等の有無とその内容はどのようなものか。
①	就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫。
	・（大部分が保育士として就職をしているが、どのような方針なのかと言う質問を受けて）子どもの発達過程のように、保育士になる学生も成長過程があり、それを大切にキャリア支援を行っている。最初に保育所実習があり、最後に保育所実習があるという流れは保育所への就職が多いことと関連があるかもしれない。 ・就職懇談会を 12 月に学内で行うが、そのときに、多分野多職種を広く見て自分を照らし合わせる機会をつくっている。加えてボランティアや子どもと触れる機会を通して、最初は他者理解から始まって。それが自己理解に至って、自己覚知に至る。保育士としての発達ととらえて必要な場面を設定している。 ・夏期の就職開拓では、卒業生が就職した園を教員が回るが、1 年目の卒業生が勤務する園は、必ず回るようにしている。次に、在学生で就職を希望している園がある学生がいたら、その園をリサーチし、園訪問をするなど情報収集を行う。 ・別のエリアの就職を希望する学生であっても、ボランティアに行かせたり、教員が学会や研究などのコネクションから様々な情報を得て学生に伝える努力をしている。 ・これらのことを行っていくためには教員の成長も重要であり、教員の保育士養成資質向上のための研修もおこなっている。
②	早期離職を防止するための対策。
	・先輩が勤務している園に、次の学生をつなげていく。そのためにちょっと気になる学生もお願いできるような関係を園とつくって、その学生をお願いしたり、その園に合った学生、その園独自の保育に合った学生を就職させており、それが早期離職防止につながっている。就職後も園への訪問の機会を持つことで、関係を途切れさせることなく、卒業生が悩んだときに教員に質問できるような関係性を維持している。
③	再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容はどのようなものか。
	・卒業生だけではなく、市と一緒に保育士支援セミナーや、潜在保育士セミナーを年 2 回ずつ行っている。元々は行政主導であったが、現在は委託を受けて行っている。

7	その他
①	今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア。
	・附属幼稚園が隣にあり、学生がいつも子どもたちに触れ合えるのは利点である。 ・お願いや謝罪などで広い範囲に教員が出向くことが、結果として園との関係を深くすることにつながり、この点は重要であると考えている。 ・学科として学校は学生主体だということを考えている。学生の人権を大事にすることを、教員間の共通理解とすることは大事にしていきたい。 ・教員の研究もまた重要な部分であり、研究における全国的な教員同士の交流、その成果を学校に持ち帰ることも重視している。

E 短期大学の特徴は、1 点目は学生に早い段階で「自己課題」を立てさせることである。自信のない部分を含めて自分たちが取組むべき課題を言語化させることで、学生同士の相互的な学び合いができるように促している。そのことによって学生は皆で問題を乗り越えていく意識を持つことができていた。また、そのことで保育士の仕事の厳しい部分よりも、子どもの成長を楽しみながら自分自身も成長していくという保育士の魅力に学生が向き合えるようにしていた。

2 点目は、教員が学生を大切にし、現場を大切にしていることである。派手な取組はないが、教員が真の教育的理念を持って苦労することに取組んでいるのかもしれない。この努力があってこそ、学生たちが自主的に様々な試みを行うことができる土台ができてくるのだと思われた。

② F 短期大学

1	カリキュラム関係
①	「保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか。
	・子どもの育ちやさまざまな発達の節目に向き合えて、共有できた喜びとか感動を子どもからもらえる。 ・子どもと一緒にさまざまなことを学び、知り、経験する中で、自分自身も人間として幅が広がり、成長できる。 ・幼児期に培われるものの重要な部分に関わり、子どものもっている可能性を伸ばしていけることを「保育士という仕事の魅力」ととらえて保育士養成を行っている。
②	それをカリキュラムにどのように反映しているか。
	・保育内容に関わる音楽・体育・美術の総合授業があり、授業の中で子ども向けの行事に向けた計画などを学生が一から考えていく。行事は年に 2 回実施しており、夏はミュージカル、秋には人形劇等を学生たちが作り上げていき、附属幼稚園の子ども、近隣の幼稚園、保育園の子どもたちを招いて発表・上演する。この取組は長年行われており、卒業生やオープンキャンパスの参加者も見に来る。シナリオ、音楽、衣装、舞台美術、演出のすべてを学生自らが作り上げる過程では、意見の衝突も含めて社会人になる上で必要な力が育っていく。また、子どもは素直にダイレクトに反応を返してくれるので、子どもの感動、喜び、面白がったり、嬉しがっている様子が学生に直に伝わり、保育士の魅力を感じる機会になっている。この取組はカリキュラムにも絡んで、音楽・体育・美術の 3 つが融合した形の総合授業の一環で行われ、総まとめがミュージカルや人形劇の上演となっている。 ・キャリア教育（1 年次後期）では、初めての実習（保育所）を目前に控え、就職への意識も出てきているタイミングに、実習に向けたマナー、コミュニケーションの取り方、言葉遣い、立ち居振る舞いなどの指導を行っている。また、模擬面接や履歴書の作成を通して、学生は自己分析を行い、自分への理解を深めていく。成果として、1 年次後期という早い段階から、これからどのように自分の人生を歩んでいくかという意識の高まりがみられ、保育士として必要な力を伸ばしている。
2	実習指導関係
①	実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていること。
	・DVD、録画などを用いて現場に即した内容の指導を行い、子どもの育ちをイメージできるよう工夫している。 ・附属の幼稚園にて見学、手遊び、絵本の読み聞かせなど自主的に子どもと関わることを推奨している。 ・初めての保育所実習（9 月）に向けて、7 月の初めに実習先の保育所で 1 日のみの観察参加実習を行い、学生は保育所、子どもたち、保護者の様子を観察してくる。そこでは、やっぱり保育っていいねとか、子どもの関わりって楽しいねとか、とってもすてきな先生がいらっしゃるね、というところも見つけてくるように指導をしている。学生は観察を通して感じたことを学校に持ち帰り、教員が実習指導の中でフィードバックをして 9 月の本実習に結び付けている。施設実習でも同様の取組を行っており、保育実習に関しては、こうした丁寧な指導を大切にしている。

3	教育課程以外の活動
①	教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・人形劇のクラブがあり、訪問公演の依頼を受けて、施設、児童発達センター、保育所等で公演して子どもと交流する機会がある。学生が主体的に、棒使い人形やぬいぐるみの中に入っての演技、せりふ、歌、生演奏、大道具の準備や配置、司会進行等を行い、子どもとコミュニケーションを取りながら公演をしている。学生でできるところは学生でして、教員の力が必要な部分は指導して一緒に活動を行う。このように、子どもたちの前でパフォーマンスをする経験を通して、表現がしっかりとできるようになっていく。また、実習以外にこうした機会があることで、学生は自信を持って子どもと触れ合えるようになっていく。また、子どもの反応から、保育士になりたいという気持ちが高められたり、訪問公演で行かせてもらった園とのご縁から就職につながっていくこともある。
4	保育現場および自治体や保育団体等との連携
①	授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・附属の幼稚園の園長、園長や主任をしている卒業生、現場経験をもつ非常勤の教員に現場の話をしてもらい、保育士の仕事についてハードなこと、魅力としてとらえていることの両面から学生に伝えている。
②	授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・3-①の人形劇クラブが最も大々的で伝統がある。その他、社会福祉協議会と連携して保育ボランティアとして、保育所・児童養護施設・乳児院・障害児施設に夏休みや春休みなどに参加する機会がある。
③	教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・市との連携で保育・施設現場に赴いて相談を受けたり、現場の保育をサポートをしている。研修の形で行うこともある。教員が現場の声を聞いてそれを学生に伝えることで、学生が保育の現状や必要な学びを知る機会になっている。
④	リカレント教育、卒後教育の現状。行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか。
	・保育に関する講座を養成校が主体となって実施している。卒業生が多く来ることで、楽しい時間も持ちながら最新の研究成果に基づいた内容を学ぶ機会となっている。

5	中高生に向けた取組
①	オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業等において、「保育士の魅力」の伝え方。HP や情報機器の活用方法等。
	・オープンキャンパスでは、就職した卒業生ともコンタクトをとって、今、どのような形で働いて、どのように取組んでいるかなど、自身の体験を語ってもらう機会を設けている。高校生はもちろんだが、一緒に来校する保護者も自分の子どもがどうなっていくのだろうという点が気になるので、関心を持って話を聞いている。また、1-②の学生によるミュージカルや人形劇の上演を見てもらう。 ・出張授業では、教員自身の体験や、卒業生から聞いた話も加えながら、保育士は、子どもがどのように反応して、どのように成長していくか、その過程に関われること、実際に大学ではどのような学びをして自分を伸ばしていけるのか、について伝えている。 ・コロナの影響もあり、YouTube などを使ってどのような学びができるかについて発信している。保育士や大学の魅力を伝えていくために SNS も使って、より広範囲の方に発信する取組もしており、中高生を対象に動画による手遊び等の紹介もしている。
6	就職支援の取組等の有無とその内容
①	就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫。
	・卒業生とのシンポジウムを開催して、保育職に就いた卒業生 4～5 名が講師となって 2 年生を対象に具体的な話をしてもらっている。卒業生の話を聞くことにより、就職に向けて気持ちが固まっていくことにつながっている。 ・現場の主任保育士等をお呼びして、現場もいろいろな問題点や大変なこともあるが、子どもと関わることのできるこの仕事の素晴らしさや魅力を伝えてもらっている。
②	早期離職を防止するための対策。
	・4-④の講座は早期離職防止としての機能も果たしている。その他、実習訪問時に、実習先に就職した 1 年目や 2 年目の卒業生に声掛けをさせてもらって話をするようにしている。また、就職先への訪問も行っている。今年はコロナの影響で電話だったが、就職先に卒業生の様子を聞き、できれば卒業生とも話をして今の状況をつかみ、もし何かあれば、いつでも相談に来るように伝えている。このように相談ごとがある時にはいつでも受け入れる体制を整えており、例えば音楽に関しては楽譜探しや手遊びなどの相談に対応している。
③	再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容はどのようなものか。
	・再就職支援については、何かあれば相談に乗れるようにホームカミングデーを設けている。また、就職に関する委員会組織があり、そこでも再就職や転園に関する相談に乗ることを PR している。
7	その他
①	今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア。
	・キャリア教育と音楽教育を充実させていることで、教養やマナーを身に付けると同時に保育士に対する意識を高められると感じている。

F 短期大学の特徴として、キャリア教育と音楽教育の充実が示された。キャリア教育では、初めての実習（保育所）の時期に合わせて 1 年次後期という早い段階から、実習に向けたマナー、コミュニケーションの取り方、言葉遣い、立ち居振る舞い、模擬面接、履歴書作成などの指導を行うことで、学生が自己理解を深めて自身の進路を考えるなど、2 年次の就職活動に向けたベースが培われていた。音楽教育では、音楽・体育・美術の総合授業としてカリキュラムに組み込まれた授業の中で、学生は

ミュージカルや人形劇を作り上げていき、総括として、近隣の幼稚園や保育園の子どもたちを招いて発表・上演する取組が長年行われており、学生は子どもたちの反応から子どもとの関わりに魅力を感じる機会になっていた。同時に、こられの発表には卒業生やオープンキャンパスの参加者も見に来ることから、卒業生との交流および中高生に養成校での学びや保育士の魅力を伝える機能も担っていた。また、教育課程以外の活動としての人形劇クラブにおいても、学生が主体となって作り上げた劇を施設、児童発達センター、保育所等を訪問して公演を行うことで実践力を身に付け、保育士になりたいという気持ちを高める機会になっていた。その他、保育実習Ｉにおける丁寧な実習指導も特徴的であり、本実習に入る前に実習先で 1 日のみの観察参加実習を行い、観察で感じたことを共有したり、フィードバックをすることにより、学生が実習へのモチベーションを高め、保育士の魅力を感じていけるよう、工夫がなされていた。

③　G 短期大学

1	カリキュラム関係
①	「保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか。
	・保育士という仕事の魅力は、「子どもの成長に携われる」、「子どもとともに成長していける」そして、「その素晴らしさを共感し、他者へ伝えられる」ことと考えている。そして、そのような魅力を十分に理解するためには、専門性が大切であり、特に子どもの育ちや学びなどに対する「気づき」や柔軟な対応と思考力の広がりといった「多様な力」を養成校として育成することを目指している。 ・しかしながら、入学者の現状として、入学時の保育職に対するイメージの差異や入学後の学びに対する姿勢などが異なるため、2 年間という短期間での養成というのは困難である。したがって、保育士という仕事の魅力や自分自身が成長していることに気づけるためにも、「学び続けられる学習者」であることが望ましいと思われる。
②	それをカリキュラムにどのように反映しているか。
	・各カリキュラム内で、保育士の仕事の魅力（子どもの成長に携われるなど）を具体的に伝えるため、現場の保育士や保育士となった卒業生などから学生に保育士の魅力について話すことを意識している。一方で、保育士の仕事として、大変な側面があることも伝えるよう意識している。例えば、人間関係や実際の労働における問題点などである。このように正と負の両方の情報を、リアリティをもって、明確且つ具体的に伝えるよう意識している。 ・保育士の仕事の魅力に気づくためには、現在の学びが保育にどのように結びつくかなど、理論と実践を往還することが重要であることを伝えるとともに、そのような授業構成になるよう努力している。例えば、1 つの事象（保育場面や保育に関わる教材など）に対してどれだけ気づくことができるか、そこから何が考えられるかなど、気づきと多様な力を高めるような工夫等を行っている。具体的な例として、「表現」の中で、目の前に子どもたちがいることをいつも意識して、音を楽しむことにはどんな方法があるか、何ができるかなどをいつも問い続けることなどである。そして、そのような力が身についてきたときに、学生自らこれまで見えなかった保育士の仕事の魅力に気づくようになると思われる。
2	実習指導関係
①	実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていること。
	・保育士の魅力に気づくためにも実習を最後までやり通すことを学生へ伝えている。なぜならば、1 日 1 日を通して子どもや保育士、保護者との関係が構築され、そこから多くの学びを得られること、そして、学びを得られるということは、保育士の魅力に気づくことが可能となるからである。 ・実習を通して、保育士の姿から「こんな保育士になってみたい」と思えるような意識付けをする指導を行っている。つまり目標となる保育士像を明確にするということである。保育士と子どもや保護者とのかかわり等を目の当たりにすることで、より具体的な保育士の魅力に気づくことにつながると思われるからである。しかしながら、一方で、少なからず保育士の魅力や目標となる保育士と出会えないケースも稀にある。そのような学生へは、この経験が新たな保育士の魅力への気づきの幅を広げることにつながると伝え、指導している。様々な園にある雰囲気や独自性、保育士の魅力に対する視野を広げ、自己にとっての保育士の魅力を発見してほしいと考えている。

3	教育課程以外の活動
①	教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・保育士の魅力について気づきを高めるために、専門知と実践知の往還が重要であると思われる。そのため、附属幼稚園やグループ保育園へボランティアに行くことなどを推進している。具体的には、園の行事やその他、園側からの依頼があったりした場合、学生にそのことを伝え参加を促す。他にも、地域の子育て支援センターなどに学生ボランティアとして主体的に参加することもある。 ・ただし、2 年間という短い時間の中でクラブ活動などを積極的に実施していくことは困難であり、さらに、カリキュラムの過密化などもあり、ボランティア活動への参加も難しくなっているのが現状である。そのような中で、学生が今年度主体的にボランティアサークルを立ち上げたことはとても意義深いことであり、上記で記載した保育士の魅力に気づける学びの芽が育ち始めているかもしれないと考えている。
4	保育現場および自治体や保育団体等との連携
①	授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・実習に行くまでの課題として、保育のボランティア活動を実施している。保育ボランティアを取り入れた意図は、実習だけでは保育を理解することが困難であるということ、実習というのはどうしても評価を気にしてしまい、学生からするとできることをしようと考え消極的になったり、視野が狭くなってしまうこともある。 ・前述した通り、課題として実施しているため主体的な活動ではない。しかしながら、その中で学生が保育士の仕事や魅力に理解を深め、保育の仕事の楽しさを明確にできることで実習へのモチベーションの向上に繋がっていると思われる。養成の期間やカリキュラム等との関連もあるが、今後はこのような保育ボランティアなどの取組が主体的な活動へとつながってほしいと思う。
②	授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・保育士の仕事の魅力や多種の施設の理解を促すために、ボランティアとして保育現場・施設現場へ行くことを推進している。しかし、カリキュラムの過密化などから主体的にボランティアに参加する学生が少なくなっていることから、意図的に授業（実習前に行う現場へのボランティア活動）を実施している。
③	教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・教育連携として地域と連携をもち、子ども子育て会議や幼児教育・保育現場の現任研修や教員免許講習の講師等を実施している。
④	リカレント教育、卒後教育の現状。行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか。
	・課題の 1 つでもあるが実際にはできていない。現状それに変わるものとして、本学卒業生のほとんどが保育現場へと就職するため、教員免許更新講習や研修等で会った際に話を聞くなどをしている。また、ゼミナール教員が個々の卒業年度別のグループを作り、つながりをもっている。

5	中高生に向けた取組
①	オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業等において、「保育士の魅力」の伝え方。HP や情報機器の活用方法等。
	・地元の中学生が「まち探検」という形で短期大学を訪れる場合がある。その際、保育士の仕事内容や子どもの発育・発達などの話をしたり、体験授業などを行いながら、保育士としての専門性ややりがいなどを保育士の魅力として伝えている。 ・オープンキャンパスではより深く子どもたちの育ちを理解してもらうために、模擬講義を行ったり、造形体験や心理学などの話をしている。他にも遠方の高校生に対して web（遠隔システム）を用いた相談会などを行っている。 ・地域外関わらず高校から保育の出張授業の申し出があった場合は、積極的に出向き、高校生へ幼児教育・保育の講話を行っている。
6	就職支援の取組等の有無とその内容
①	就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫。
	・前提として学生自身がどのような職業を選択し、働き方をしたいかについてしっかりと考えさせ、その上でサポートすることを重視している。そのうえで、自分にとっての保育士の魅力や保育士像を具体的に聴取し、支援するよう心掛けている。その基盤つくりとして、保育士の魅力について 2 年間という養成の中で教職員が一丸となって同一の方向を向き、授業や就職支援・キャリア支援の中で話をしている。
②	早期離職を防止するための対策。
	・大学として早期離職者の把握をするため情報を収集している。学生が就職後各施設へ 4 月から 5 月に教職員が出向き、施設長や卒業生から直接話を聞き状況を把握している。その中で困難なケースなどがある場合はフォローしている。 ・ゼミナールの担当教員が卒業生へ連絡をし、状況をできるだけ把握するよう心掛けている。このような対策をすることにより、早期離職者はほとんどいない。
③	再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容はどのようなものか。
	・退職等をした卒業生は、大学に来るように声がけしている。卒業生は比較的、大学にきて相談等を行うため退職に至った経緯などを細やかに確認し、本人の意思で再就職をしたいなどの希望があれば紹介していく。卒業生が過ごした 2 年間の中で信頼関係ができているため、何かあった場合は大学へ相談に来ることが多い。 ・保育現場を離職した卒業生についても概ね把握しているため、こちらから連絡を取り、本人が働く意思があれば紹介をする。 ・卒業生は 1 年間在学時に用いていた Google mail を用いることができるため、何かあった場合には大学から卒業生へダイレクトに連絡が取れるようになっている。
7	その他
①	今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア。
	・養成校と現場のより密な連携が重要になると思われる。例えば、実習等で学生が園の人間関係に不信感を抱くような発言などを聞いているケースがある。そうなった場合、魅力以前に保育士になろうとする気持ちを減少させる場合がある。したがって、施設長とのつながりも大切にしつつ、より現場で働いている保育士の方々と養成校教員が密につながり、保育士の魅力を語ったり共有したりする場が必要かと思われる。

G 短期大学では、入学時の学生の多様性を理解しつつ、保育士としての仕事の魅力についての基盤つくりを行っている。そして特に、「気づき」と「多様な力」の養成を重視している。無論、2 年間という短期間だけでは困難なため、学び続けられる自立した学習者となることが望ましいと考えている。このような保育士の仕事としての魅力に気づける学生の養成のために、教職員は一丸となり、同一方向を向き学生のサポートランナーのようなかかわりをしている。したがって、教員それぞれが点ではなく線としてつながることを意識することが大切であると思われる。このつながりは教職員と学生間のみならず、現場とのつながりや中高生との取組にも反映される。例えば、教育課程内外問わず、専門知を実践知とつながりをもたせるため、ボランティアなどに積極的に参加するよう促したり、教員が現場とつながりをもったりすることなどである。また、卒業生とのつながりも重視している。

以上のことから、G 短期大学では、学生の 2 年間を通じて保育士の仕事の魅力の芽を育て、その芽からどのような花を咲かせるかについては、個々の芽の育ち方（専門知や実践知の学び、理想とする保育士像など）が個々の学生によって異なるため、学生それぞれが思う保育士の仕事の魅力に気づけるような柔軟なかかわりを教職員一同が行っているといえよう。

④　H 短期大学

1	カリキュラム関係
①	「保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか。
	・保育士の魅力に関して、学科の DP（ディプロマポリシー）や教育目的、CP（カリキュラムポリシー）の中でも学生や社会に対して発信している。 ・保護者による子育てを支援すること、今の社会を支えること、未来の社会をつくる人たちを育てる人生の土台形成に関わっているということ、そして、保育者とは、未来の社会づくりにも貢献できる、本質的な仕事なのだということを、学生教育の基本的な方針として意識している。また教員間でもこのことを共有し、その考え方に基づいたカリキュラムを作成し、学生に対する日々の指導を行っている。 ・学生と話をしていると、保育士の魅力は、子どもたちの笑顔がみられることが挙げられる。保護者と一緒に子どもたちの日々の成長を共有し、本当に感動を得られる仕事であること、待遇面ではまだ様々な課題はあるが、世の中に多様な仕事がある中で、このような仕事はないのでは。という話を日頃から学生としている。 ・現代社会で生きている中で、色々な通信技術も発達しているが、直接的に生身の子どもと関わりや保護者と関わって得られる感動、心が揺さぶられることは、変わりない。今もそういう仕事であることは、将来いくら AI が発達しても変わらない仕事であることが一番の魅力ではないかと思う。
②	それをカリキュラムにどのように反映しているか。
	・1 学年に 300 名の学生がおり、全学で約 600 名ほどの学生を抱えている。その為、6～7 クラス編成で教室を分けて指導する為、教室は全て満杯状態、逼迫（ひっぱく）した状態で、学校設定の自由科目やカリキュラムを充実させる為の必修科目以外の科目を設定する余裕もなく、カリキュラムに関しては苦戦している。 ・いくつか選択科目を設けており、以前からできるだけ学生に子育て支援の現場に触れさせたいという目的から、「子育て支援演習」という演習科目を設けている。また、保育士は、子どもの生涯にわたる人格形成に関わるということを重視し、乳幼児期の発達のみを学ぶのではなく、生涯に渡り人がどのように生きていくのか、基礎として本当に乳幼児期が大事であり、全体の見通しを持った上で、学んで欲しいと感じている。「生涯発達心理学」という科目である。 ・保育士の魅力を伝える為にカリキュラムに反映しているものとして、短大 2 年間なので、学校設定科目として 1 年生の時の初年次教育とキャリア教育を同時に進めている。前期に「キャリアベーシック」とし、後期に「キャリアデザイン」という科目を開講し、自分自身のキャリアやこれからのライフプランを考えてみようということで、業界研究や保育の世界に関する理解を深めることを目的に学んだり、卒業生等も呼んで、保育士の魅力について語ってもらう機会を設けている。
2	実習指導関係
①	実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていること。
	・学生数が多い為、実習指導の授業の性質上、事務的な情報共有であったり個人調査票等の書類の作成に時間がかかったりしているのが現状である。実習指導の授業に関しては、実務家教員、現場経験のある教員が中心となって実習指導を行っている。現場経験の教員が多いことはメリット、強みであり、できるだけ実際の保育現場の話を織り交ぜながら、実習に向けての意識を高められるように工夫をしている。実習園側の視点から実習生に求められること、積極性や意欲、チャレンジする気持ちを求めていること、現場の具体的なエピソード等を伝えている。

	また逆に養成側の視点として、社会人としての基本的な姿勢やどのように実習に臨んでいくのか、学びの視点の明確化ということを学生と一緒に考えている。漠然といきなり実習の目的課題を考えなさいと言われても学生は難しいことから、教員は学生とともに子どものどのようなところを見たいのか等、一つずつ噛み砕いていき、丁寧に掘り下げながら具体的なイメージを持たせることが重要である。 ・実習では、保育所、児童養護施設、乳児院、障害児施設等に行っている。実習指導の授業の中で実習を終えた先輩（2 年生）からこれから実習に行く 1 年生に向けて心構え等を伝える機会を設けている。先輩が実際に経験したことを種別ごとに聞く方が新鮮であったり、気を付けないといけないこと等、教員からの話よりも具体的なイメージがもちやすいこともある。また先輩の方も、大勢の学生の前で話すことで自信がつき、後輩のコメントを見ることで、自分の話の他者への伝わり方を知ることができたようで、互いにメリットがあったように感じる。 ・机上での学びと実際の子どもの姿、保育士の関わり等が関連しながら、学生は保育の魅力を感じていくと思われる。
3	教育課程以外の活動
①	教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・学生の経済事情等もあると思うが、最近の学生は教育課程外の活動にはあまり参加していない。以前は人形劇等やサークル活動を行ったりしていたが、全体としては、主体的に学生が集まって行う活動は少ない。 ・保育現場から、保育所、施設からボランティア募集や行事のお手伝い、アルバイト募集等のチラシがあるので、興味のある学生は、個々で取組んでいる。実習がきっかけとなってボランティアを行っていたり、実習先にアルバイト等に行ったりしている。実習の関わりのみならず、子どもたちの成長する姿と授業を受けながら学びを深めていくことは大事、また保育現場にとっても助かるのでつながる機会を持てていることは嬉しい。
4	保育現場および自治体や保育団体等との連携
①	授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・「保育実習指導Ⅰ」等の授業の中で、保育現場で勤務している保育士を外部講師として招いている。保育所や施設等から 2～3 名来てもらっている。 ・現場の取組、実際の子ども、利用者の姿を伝えてもらうことで、対人援助職の魅力について話をしてもらっている。現場の保育士の生の声を聴くことは新鮮で、現場って楽しいということが伝わる。また一方、で厳しさや大変な部分も伝えてもらっている。今のうちに身に付けて欲しい力、必要な力を再認識する心構えを現場の保育士に話してもらうことでリアリティが増す。現場では実際に命の危険、命に直結する場面に出くわすことがある為、今のうちに気づきを得てある程度の緊張感を持って現場に臨んで欲しいということもあり、楽しんで実習をして欲しいと同時に、どのような力を身に付けて欲しいのかを再認識できるようにしていく為に重要な時間である。 ・養成校としての長い歴史を持つことから、地域との連携を更に深めていきたい。こちらが出向くよりも、外部から来てもらうことの方が多い。

②	授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・保育現場や施設現場が養成校の方に連携を求めてくることが多い。人材不足が基本となっており、良い保育士を確保したいとの声が多い。そうした中で学生には良い現場に、ミスマッチを防ぎながら自分のイメージする保育に近い形の園に就職して欲しいと思っている。その為、2 年次の 6 月に、「合同就職説明会」を 4 回程大学で開催し、ブースや教室を使用して、主に実習園ではあるが、保育所、施設の方に来てもらっている。実習をお願いしている園等も含め 100 園以上ある(実習でお願いしている箇所でいうと 200 近くある)が、1 人 1 日 3 園位をあらかじめ選定しておき、30 分ずつ位でまわる。(園からの説明等 15～20 分、学生との質疑応答 10 分程度)、それぞれの特徴や特色が見えるため、学生自身がそれぞれの園の考え方に触れながら就職をイメージできる。自由遊びを大事にしている園もあれば、早期教育を大事にしている園、サッカーに力を入れている等、それぞれの現場の特色に触れながら就職活動につなげている。また、この時期には、幼稚園 2 回、保育所 1 回、施設 1 回の実習が終了している為、学生自身もイメージが持ちやすい。保育所と幼稚園で迷っている学生等も両方から話を聞いてみる等、学生一人ひとり考えて選択しているように感じる。卒業生等も参加していることから、こういう保育が出来て、生きがいややりがいを持ってやっているという先輩の声を聞くことで学生にとっては親しみやすく様々な情報を得ることができる為、この連携は大事だと感じている。 ・この企画の実施では、卒業生が就職している園が多いこともあり、本学の教育に対するアンケート調査を行っている。本学の学生の良いところや足りないところ等を聞き、評価してもらっている。そのことで、本学の学生カラーが客観的に見えてくる。（大人数である為に、積極的、主体性に欠ける…等）その評価をもとに、フィードバックにもつなげている。 ・園が養成校に来てくれることから、敷居も低くなり、これをきっかけに園見学に行くことにもつながっている。
③	教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・専任教員が 24 人程いるので、専門分野、フィールドでお役に立てるところは、社会貢献として、地域福祉のプラン作りや講師、自治体の保育士研修講師、私立や民間の園内研修講師等、各研修の講師等に従事し、支援・連携している。 ・各自治体と連携することで、そこがパイプとなり、学生の就職等に繋がることもある。
④	リカレント教育、卒後教育の現状。行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか
	・卒後教育やリカレント教育は難しい課題であり、あまり取組めていない。しかし、かなり大きい同窓会組織があるので、年に 1 度、同窓会組織の中にある「保育研修部会」として、現場で働いている卒業生たちを講師に様々なテーマで開催している。最新の保育の施策や最新の知見等、保育、乳幼児教育に詳しい専門の講師に来て頂きながら研修会を開催しており、学びのチャンスが生まれている。

5	中高生に向けた取組
①	オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業等において、「保育士の魅力」の伝え方。HP や情報機器の活用方法等。
	・オープンキャンパス等では、高校生や保護者の方は卒業した後のことに興味を持っている。大学で学んだ後、どのような仕事をしているのか卒後のイメージを持てることが大事であると考え、保育現場で働いている卒業生を呼び、短大で短い期間ではあるが、基礎的なことを学んでいること、いち早く社会に出て子どもたちや保護者、先輩方と触れ合いながら成長し働いているという話をしてもらっている。卒業生の話は強みになる。 ・高校生が多く参加する 7 月～8 月に実施している。 ・最近は、4 年制養成の方が希望者が多い。しかし短大からも編入学で 4 年制大学へ行くことができること、卒業後すぐに就職もできる一方で、もっと学びたい状況であれば、4 年制大学にも編入できる説明をしている。そうすると、短大をまずチャレンジしようかというケースもある。将来のイメージが持てるようにしている。
6	就職支援の取組等の有無とその内容
①	就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫。
	・就職支援、キャリア支援というのは、保育者養成校の立場で、就職支援、キャリア支援としてイコール保育者としての魅力を伝えるということになると思う。そういう意味で、現場の生の声を伝えることが一番伝わるように思う。合同説明会等の実施や卒業生に来てもらって話をしてもらう、現場の保育士に生の声を話してもらうことが効果的なのではないか。
②	早期離職を防止するための対策。
	・大学の就職部の方で、離職率調査として卒業生全員へのアンケート調査を行っている。就職したところに就職継続しているか、また返答がない場合や不明になっている場合も、追いかけて何とか回答を得ている。 ・中には、1 年足らずで辞めてしまう場合もある。人間関係が一番の原因である。心が揺れている卒業生が大学に相談に来る場合は、話を聞き、もう少し頑張るよう励ましている。また、卒業生同士の集まりで交流できる機会を増やすようにしており、茶話会を実施している。そうした機会に自分の状況を客観的に見て考えたり、冷静に考え直したりすることで気が紛れたり元気になることもある。
③	再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容はどのようなものか。
	・求人票は、かなり多く出ているため、卒業生が大学に頼ってきた場合は、就職部にある資料を活用しながら、様々な提案をして、再就職に繋がるようにしている。
7	その他
①	今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア。
	・養成校で働いていると、社会の方が保育者を多く求めており、人材不足となっていると感じる。良い保育者が欲しい、養成して欲しいというニーズがある一方で、逆に学生の育ちの方は、年々そうした要望に応える力が乏しくなっているように感じる。現在の学生は、人と関わる機会が乏しく、人と関わらなくとも生きていける生活様式になっている。実習等で褒められる学生は、地域のコミュニティや団地等の人との濃厚な人間関係、そうした環境や関係性の中で育っていることが分かる。社会にでると、保護者対応等も必要になるので、養成校としては、やはり子育て支援の現場に学生が貢献できる仕組みを作っていきたい。学生の時の経験は大事であり、そうした意味でも実習の経験は大事になる。いかに実習で良い経験をするかによって変わるように感じる。自治体の方からも保育士不足を背景に養成校と連携したいという声があ

	るが、子育て支援の孤立化の中で悩んでいる保護者がいて、一方で保護者対応は経験がないから不安という学生がいる。そうしたことから、現場や自治体と連携し、互いに WinWin な関係でつながれる働き掛けを目指したい。

H 短期大学の特徴は、①実習指導、②保育現場および自治体や保育団体との連携である。H 短期大学では、保育者は保護者による子育てを支援することや今の社会を支えること、そして未来の社会をつくる人たちを育てる人生の土台形成に関わっているということ、更には未来の社会づくりにも貢献できる、本質的な仕事なのだということを大事にしている。その上で、①では、「子育て支援演習」において子育て支援の現場に触れさせる機会を多く設けることや、「生涯発達心理学」として、生涯にわたる人格形成に関わるということを重視し、乳幼児期の発達のみを学ぶのではなく、生涯に渡り人がどのように生きていくのかという全体の見通しを持つように学びを広げている。また、授業の中では、保育所や施設、それぞれの種別ごとに先輩から話を聞く機会を設けている。実際に実習体験を終えた先輩から色々な話をしてもらうことのメリットを感じているようだ。また、外部講師を招き、対人職の魅力について話をしてもらう機会を設けている。楽しさと同時に厳しさや大変な部分も伝えてもらうことで、学生は今のうちに身に付けなければならない力や現場に必要な力等を再認識するという。机上での学びと実際の子どもの姿、先生方との関わり等、様々な視点からのアプローチによって、様々な学びが関連されながら学生は保育の魅力を感じていくものだと考えられる。②では、H 短期大学は学生のミスマッチを防ぎながら自分のイメージする保育に近い形の園に就職して欲しいと考えているようだ。その為、2 年次の 6 月に、「合同就職説明会」を 4 回程大学で開催し、ブースや教室を使用して 100 園以上の保育所や園に来てもらう取組を行っている。この企画では、それぞれの園の特徴や特色が見えるため、学生自身が園の考え方に触れながら就職をイメージできるメリットがあると捉えられる。保育所と幼稚園で迷っている学生や実習を終えた後の就職に悩みを抱えている学生等が、もう一度自分に適した就職につなげられる機会となっている。また、そこでは卒業生等も多く参加していることから、先輩の生きがいややりがいを持った仕事の話や生き生きした姿を通して、様々な情報を得ることができている。大規模なこの連携は、まさに現場と自治体との連携を通して保育の魅力とキャリア支援につなげられる非常に有益な活動であると考える。さらに、H 短期大学では、この企画の実施において、来校している園等へ「本学の教育に対するアンケート調査」を行っている。こうした調査から、具体的な学生の姿やカラーを客観的に捉え、その評価をもとに教育活動へのフィードバックにもつなげようとしていることは有効であると考える。

３、専修学校

①　Ⅰ専修学校

1	カリキュラム関係
①	「保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか。
	・併設園が学内にあり（保育実習室、愛称：〇〇保育園、3 歳以上児対象、実習支援室でもある）、昼休みに子どもたちが遊んでいる状況をみることができ、すぐ学生が保育園に行って実習・演習ができる環境にある。
②	それをカリキュラムにどのように反映しているか。
	・「保育原理」の授業で学生が作ったものを、すぐ直接子どもに実践できる。「お買い物ごっこ（お店屋さんごっこ）」がカリキュラムに入っている。実践後の振り返りもすぐできる。非常勤講師が体育館で行う「運動プログラム」に子どもたちが参加している。「保育実習室演習」という科目もある（シラバスは公開されているため、閲覧可）。
2	実習指導関係
①	実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていること。
	・1 年次 1～2 月に保育実習Ⅰがある。保育所と施設を経験した上で、2 年次 8 月にある保育実習Ⅱか保育実習Ⅲを選択することになる。9 割位が保育実習Ⅱを選択するが、専攻科の介護福祉学科への進学を希望する学生は保育実習Ⅲを選択する傾向にある。実習日誌の書き方は「保育実習室演習」で学べるようになっているため、保育実習指導の授業では、より「保育園に行ったら･･･」を想定して行うことができ、地震体感車を経験して地震への対応を学ぶなど実践を重視した指導ができている。保育実習指導Ⅱ・Ⅲでは、新聞社主催、自治体共催の保育に関する研修に参加し、有識者から学ぶことも取り入れている。2 日間のうち、授業としては 1 日 4 コマに参加することになっている。
3	教育課程以外の活動
①	・教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・1 学年が少ないため、クラブ活動も少人数で行っている。近隣での絵本の読み聞かせなど自発的なボランティアの他に、1 年次夏休みに 3 日間のボランティアをすることになっている。現場（保育所・施設・幼稚園）を知る機会となっている。圏域内の社会福祉協議会のボランティア事業でボランティア登録をし、そこから保育に関連するボランティアを選ぶ学生もいる。ボランティア事業があることは、学生に紹介している。
4	保育現場および自治体や保育団体等との連携
①	授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・併設園は 3 歳以上児が対象であるため、乳児保育を経験することができない。そのため「乳児保育Ⅱ」では、自治体と連携して地元の公立園で実践を行う。自治体に依頼し、学生を振り分けてもらう。なお、私立園については、学校で直接依頼している。児童養護施設、障害児入所施設、高齢者施設等の施設見学を年に 1 回行っている。特別講師を招いてお話してもらうことは年度によってあったり、なかったり。なお、今年度は、コロナの影響により、施設実習が中止となり、ZOOM で乳児院と児童養護施設の講義を行った。

②	授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・先輩との交流会がある。2 部構成で、園長・主任クラスの保育者との懇談会と卒後 3 年目の保育者との懇談会がそれぞれ 2 時間弱。学生全員が出席している。
③	教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・非常勤講師との連携をここに含めるかどうかだが、以前は、保育系教員が県の保育所の研修講師やアドバイザーを非常勤と一緒に行うということがあった。また、年に 1 回、講師会議を開いており、今年の学生の様子や学校の状況について共有している。
④	リカレント教育、卒後教育の現状。行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか。
	・卒業 2～3 ヶ月後に、卒業生の就職先に出向き、状況確認をしている。上司からも状況を聞いている。3 年後の学生の状況は、先輩との交流会で卒後 3 年目保育者として招いた卒業生と話をして把握している。卒業生が悩んで、相談に来る時もある。リカレント教育として組織的に行っていることはない。ここ 2～3 年は、卒後 5 年目の卒業生の調査を始めた。きっかけは外部評価への対応。基本的に全員に電話で聞くなどしている。学生時代から教員と学生は親密な関係が築かれており、卒業生も、教員の声を聞いて学校に来たくなったと言う卒業生もいる。少人数の良さだと思う。
5	中高生に向けた取組
①	オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業等において、「保育士の魅力」の伝え方。HP や情報機器の活用方法等。
	・オープンキャンパスでは、高校生に実際に併設園に入ってもらい、学生が先生役まではいかないが、一緒に遊ぶ。製作や体育館で一緒に踊る、手遊びをするなど、教職員が決めたことを学生に協力してもらう。福祉の魅力は、介護福祉学科が疑似体験や模擬授業で伝えている。
6	就職支援の取組等の有無とその内容
①	就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫。
	・1 年前期からホームルームがある。学生同士で夢の確認をし合い、共有している。後期になると、就職対策講座があり、面接対策などを行っている。公務員志望者が多く、公立保育所への就職率が 8 割以上である。当該県は幼稚園がそもそも少ない。当該県の市町村の就職担当者が市町村ごとにブースをつくり、就職説明会を行っている。社会福祉協議会に「人材バンク」があり、連携している。施設への就職は 1～2 名、専攻科は年度によって希望者が異なる。
②	早期離職を防止するための対策。
	・10 年以上前から、卒業して 2～3 ヶ月後に就職先を訪問することは行っている。人間関係等で悩んでいる場合は、上司（園長先生など）と情報共有し、連携して支えるようにしている。訪問は約 1 時間。本人と 30 分位、職場の方（主として園長先生）と 20 分位。本人との面談では、話を聞いたり、個別の支援を丁寧にするようにしている。そもそも卒業生に公立園就職者が多く、学生が実習でも経験しているため、雰囲気をつかんで就職している。他市町村への就職であっても、ボランティアで様子を見てから受験している。少なくとも 3 年は勤めており、早期離職はない。
③	再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容はどのようなものか。
	（特になし）

7	その他
①	今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア。
	・なるべく現場の声（実務家教員、卒業生も含めて）を聞いてもらう機会を設ける。福祉の職場に勤務していた現場経験者が教員に多いため、現場のことがよく分かっている。親密に相談し、話し合えるという少人数の良さがある。

令和元年度「指定保育士養成施設実態調査報告（全国保育士養成協議会）」において、「本校を卒業した者で、現在園長・主任レベルの保育士と、就職して 2～3 年経過した保育士を招き、それぞれ年 1 回ずつ在校生との意見交換の場を設けている」という点から協力校として選定され、「7①保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア」でも挙げてはいたが、それよりも、併設園が学内にあるということが魅力であること、入学定員が 50 名で少人数体制での指導ができるために教員と学生との心理的距離も近く、さらに教員に現場経験者が多いために、必然的に学生との関わりの中で保育士の魅力を伝えるのが日常になっていることが印象的だった。養成校で意識されずになされていることが、結果的に保育士の魅力を伝える養成になっているということを示唆した内容だった。

② J 専修学校

1	カリキュラム関係
①	「保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか。
	・創立者が実学主義を唱えており、現場で学ぶ、体験しながら学ぶことを大切にしている。子どもとともに心を動かして生活し、その中で自分も気づかされて教えられ、自分自身も共に育つ。そういう喜びを味わうことが魅力と考えている。それを感じられるように入学前からずっと一貫して伝えており、授業の中でも何回でも伝え、カリキュラムにも反映させている。
②	それをカリキュラムにどのように反映しているか。
	・保育所、幼稚園から実習すると、集団で捉えがちなので、施設実習から始め、一人一人を大事にするという見方をまずは学んでもらっている。乳児保育の授業で乳児院に見学に行くなどもしていて、法人施設と連携している。見学に行ってから振り返りをし、保育士の役割について考えさせている。 ・3 年のコースがあり、約 4 割が 3 年コースに進んでいる。インターンシップを 1 年間かけて行いながら、自分の適性に合っているのか、1 年の仕事の流れはどうなっているのか、理解することができる。
2	実習指導関係
①	実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていること
	施設実習に関連して、事前に児童養護施設、障害者入所施設、重症心身障害児の 3 か所には全て見学に行く。重症心身障害者の施設については、医療の提供も必要だが、保育者として利用者にできることは何かを考えられるようにしている。 ・実習先については、学校側が学生と施設とのマッチングを考えて、児童養護施設か、知的障害児・者の施設のどちらかに振り分けている。 ・担当者は基本的に固定なので、学生のことはよく把握できる。担当者会議を週 1 回開いているので、学生の情報を共有している。一人につき学生 25 名程度を担当する。 ・保育所や幼稚園の体験を伴う見学実習では、体験したことの意味や子どもへの関わりについて振り返り、それを記録に起こすようにしている。実習指導の時間は倍とり、振り返りの時間も十分にとっている。施設とは密接に連携し、情報交換しながら進めており、学生の問題だけではなく、施設側の問題についても率直に伝えるようにしている。 ・教員に現場経験者が多いので、自らの体験、魅力を伝えながら進めている。
3	教育課程以外の活動
①	教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・今は行われていないが、2 年前くらいに活動していたサークルがある。病棟保育、障害者福祉施設に行き、実践の機会を持っていたこともある。熱心な学生がいると新しくできることもある。 ・児童養護施設等に学習ボランティアで参加することもあるが、学生が忙しいため、あまり機会は多くない。その一方、アルバイトを法人施設や他の施設でもできるので、アルバイトをしながら学んでいる学生も多い。学生に学校から声をかけることもある。

4	保育現場および自治体や保育団体等との連携
①	授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・施設の職員に、3 年コースの授業の講師としてきてもらっている。
②	授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・法人全体でバザーを行う際に、専修学校としては子育てスクールを実施。地域の親子を呼んで遊べるスペースを学生が企画し実施する。 ・同法人の保育園や幼稚園の子どもたちが学校に来て遊ぶイベントを毎年開催しており、2 年生が行う。学んだことを駆使し、楽しめるスペースを企画し、実行する。
③	教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・現場で講師として話す機会がある。 ・保育所の実習巡回のときにカンファレンスに参加することもある。 ・社会福祉士の資格を取るための施設実習でもあるので、2 回訪問に行く必要があり、カンファレンスに参加することもある。また、2 回行くことで関係性も深まる。
④	リカレント教育、卒後教育の現状。行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか。
	・卒後教育はシステムとしてはできていないところだが、個別対応している。
5	中高生に向けた取組
①	オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業等において、「保育士の魅力」の伝え方。HP や情報機器の活用方法等。
	・オープンキャンパスのときには、法人内の施設に協力してもらい、高校生を連れて、現場に行かせてもらう。高校生が施設を見学したり、直接子どもと接する機会を取り入れ、子どもと接することの楽しさを伝えている。さらに、直接子どもと関わっている在校生の姿を見てもらい、在校生からやりがいを伝えてもらう。 ・高校の授業に行って保育の授業を行うこともある。 ・今まで HP や情報機器の活用については出来ていなかったが、今年は YouTube で映像を配信している。伝えたいことや子どもの様子など映像作成している。
6	就職支援の取組等の有無とその内容
①	就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫。
	・3 年コースでは、ゼミの教員との関係で個別相談して、学生の希望や性格などを見ながら、その学生に合った就職先をマッチングできるようにしている。教員が現場を知っているのでできることである。実習担当、ホームルーム担当、非常勤の先生にも協力してもらい、情報を収集したり、学生の直接の相談にも乗る。教員全員が同じ方向を向きながら、話ができるようにしている。 ・卒業して 2、3 年経った卒業生（様々な種別から）に来てもらい、在校生に話をしてもらう。2 年生の 5 月ごろに行う。
②	早期離職を防止するための対策。
	・個々の学生と就職先とのマッチングを考えることで、早期離職の防止につながっている。

③	再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容はどのようなものか。
	・卒業生登録があり、再就職の希望条件を登録するシステムはあるが、今は求人がすぐにあるので、登録者はいない。バザーの時には卒業生が来る。
7	その他
①	・今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア
	現場が大変な状況があるので、まずは保育士の待遇改善が必要ではないか。 養成校に入学する学生の中には、いじめや虐待などの経験がある学生もいる。そのような学生に教員が丁寧、親切に関わることで、教員が援助職としてのモデルとなる。そのことで、自分自身が今度支える側になろうと思えるのではないか。

J 専修学校は、児童養護施設を運営していく中で、保育士の人材不足の問題を解消するために設立された経緯があり、福祉の視点を重視した保育士養成を行っている。現在では同法人内に複数の児童福祉施設や幼稚園があり、それらが J 専修学校から歩いて行ける距離にある。また、現場を経験し、J 専修学校での勤務年数の長い教員が多く、法人内の施設のみならず、近隣の関連施設との信頼関係ができている。それらを生かした①オープンキャンパス、②実習指導、③就職支援の 3 点に特に特色がよく表れている。

①オープンキャンパスでは、高校生が保育所や児童養護施設の子どもたちと直接触れ合う機会を作っており、実際に接することで楽しさを感じることができる。また、在校生の子どもへの関わり方を見て、憧れの気持ちを持ったり、未来の自分のイメージを描くことができ、より具体的な保育の魅力を体感できる。J 専修学校だからできる取組ではあるが、他の養成校でも附属園や近隣の保育所等と連携できれば、実現できるのではないだろうか。

②実習指導では、施設実習を始めの実習として位置づけている。多様な背景をもつ子どもたちと個々に関わることで、一人一人の子どもを深く知り、その重要性を理解することができる。さらに、各実習に関して、見学実習や体験を伴う実習を事前に行っており、その振り返りを丁寧に行っていく。さらに、当事者の方との交流の機会を授業の中に取り入れている。実習先について理解を深めた上で実習を行うので、学ぶ視点がはっきりし、実習をより有意義なものにできる。さらに、学生の特性に合わせた実習先を選定しており、学校も現場も「学生を育てる」ために同じ方向性で進めていく事ができていると思われる。

③就職支援でも、就職先の情報と学生の特性とを教員が十分把握できており、学生に適した就職先を勧めることが可能となっている。教員が情報共有し、同じ指導方針のもとに動いていることから、学生への指導も一貫したものになっており、学生からの信頼も得られやすい。こうした取組が早期離職を未然に防ぐことに繋がっている。

以上のように、現場との連携を密接に取りながら、現場の担当者や教員が同じ方向性で学生を指導、育てて行くことで、学生たちには保育の魅力がぶれることなく伝わっていることが伺える。

③　K 専修学校

1	カリキュラム関係
①	「保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか。
	・2 年間で完璧な養成ができるとは思っていない。保育士という仕事そのものが、現場で子どもたち、あるいは保護者の方々と出会ったところからが真の学びのスタート。2 年間の養成校での学びは、そこに至るまでの支援。保育士という仕事は「学び続けなければいけない仕事」と捉えているし、受験生にもそのように伝えている。
②	それをカリキュラムにどのように反映しているか。
	・実習がカリキュラムの核になっている。期の中間に実習をセッティングし、各教科が実習と関連させて学べるようにしている。
2	実習指導関係
①	実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていること。
	・担当教員は現場の経験があるので、現場でのさまざまなエピソードを伝えている。保育現場には様々な資格を持った者がいる中で、「保育士の強みは何か」、というところを学生に伝えている。 ・施設保育士の魅力について、実習指導を通して、子どもの昼間の顔と夜の顔、生活場面の顔とよそ行きの顔って違うので、その両方が見られ、責任は大変重いかもしれないが、その分とてもやりがいがあることを伝えている。
3	教育課程以外の活動
①	教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・学生の主体的な活動（サークル活動等）が重要であることは認識しており、教員もサポートしている。児童館等に行って、スポーツ（ダンス等）活動をおこなうサークルがあるが、そこに教員も混ざって活動することがある。 ・学園祭は、子どもたちがたくさん集まる活動で、近所の小学校の子どもたち、本校の元になってる幼稚園の子どもたち、実習でお世話になっている幼稚園の子どもたち、あるいは卒業生のお子さんなどが多数、大体 200 から 300 人のお子さんが参加するので、その子どもたちが楽しめるような企画を学生が考えて、お祭り的なことを行っている。（今回、新型コロナウィルスにより、全てその活動は中止にはなっているが、状況が落ち着けば、また復活させたい。）そこにおいて、学生同士がコミュニケーションを取りあったり、ぶつかり合ったりしながらも、何か 1 つのものをつくり上げていく姿が見られる。またこのような行事に卒業生も参加するので、在学生は卒業生から保育現場の様々な話をフラットな関係性の中で伝えられている実態がある。
4	保育現場および自治体や保育団体等との連携
①	授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・保育の現場団体として招聘し話をしていただくということは、数とすればそれほど多くない。その分、本校の講師陣に現場経験者が多くおり、現場の話を中心にした授業を積極的に展開している。

②	授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか。 それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。
	・保育者となった卒業生が、非公式に、主体的に立ち上げたコミュニティーが幾つかあり、1つのコミュニティーに30～40名ぐらいの卒業生が､年代や､働いている場所を問わずに集まっている。そのような場に教員が出掛けて行って、様々な話を聞いたり、いろいろな研究会などの情報を共有し合ったりしている。 ・行事やキャンプの実習等に卒業生が手伝いに来てくれ、その中で学生間の縦、横のつながりができ、卒業生同士の連携もとれており、それ自体、極めて興味深いと思っている。学生間、あるいは卒業生と学生とのつながりは非常に強い印象がある。学生の集まりにときどき教員が参加することもあるが、初めは保育に関する話はなかなか出てこず、雑談だが、話が煮詰まってきて食事、飲食が伴いながら盛り上がってくると、最終的には保育のことについて真面目に語り合っていく流れになることが多い。
③	教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。
	・教員が、さまざまな保育現場や施設現場と連携しながら研修会の講師として出掛けることはよく行われている。
④	リカレント教育、卒後教育の現状。 行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか。
	・リカレント教育、卒後教育については、非常に大事にしなければいけないと考えているが、現状では、いわゆる教員免許の更新講習、保育士等のキャリアアップの講習を行っている。これらはもちろん卒業生ばかりではないが、卒業生にも参加を促し、卒後教育の機会をつくっていきたいと考えている。リカレント教育については、いろいろな形で組織化していきたいと考えてはいるが、まだ、具体的にまだ実現はしていない。
5	中高生に向けた取組
①	オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業等において、「保育士の魅力」の伝え方。HPや情報機器の活用方法等。
	・保育者を目指す高校生のための保育講座を実施している。年に1回から2回行っており、昼食をはさんで4コマ（1コマは45～50分）ぐらいの講座を受講する。他の養成校のオープンキャンパス等と比較すると、朝から夕方までの講座であり、少しハードなスケジュールであるため、高校生から遠慮される可能性もあるので、1コマだけの体験入学、体験授業もちりばめながら、年に1～2回の形で実施している。 もちろんこれは、学生募集という観点もあるが、その観点とは別に、保育者を目指す高校生に対して、入学後の学びを、入学した学生の気分になって、「本物の学生生活の雰囲気」を伝えることを狙っている。対象が高校生だから、少し優しく、伝えやすく、というイメージで授業をしておらず、保育者を目指している高校生たちを、内部の学生と同様に扱い、講座内容もできるだけ内部の学生に伝えている内容と同じようにしている。高校生だから、この程度でいいというのがむしろ保育者を目指す高校生さんには失礼な感じを持っている。高校生だから、何か楽しく分かりやすく､笑いがいっぱいあってよかったね､という内容も大事かもしれないが、保育には厳しさもあり、難しさもあることを高校生にもしっかり持ってほしいと考えている。 もちろん高校生や入学したての1年生も同様だが、まずは子どものかわいらしさ、人としての始まりの部分に関われることの喜び、自分自身も成長できる仕事である、などの内容も組み込んでいないわけではない。先ほどの保育の「厳しさ」､「難しさ」を伝えることとのバランスが重要。

	・（毎年ではないが）社会福祉協議会から、保育の仕事職場体験事業（高校生向け）のオリエンテーションを依頼されている。その際、本校には約 200 人ぐらい高校生が来たが、紙を配って説明したりするだけでは、高校生が真剣に聞いてくれないと思い、映像を交えた説明を行ったり、実際に教員たち何人かがモデルになって、体験に臨む態度（服装等も含めて）等について説明した。高校の先生がこの説明会にくることはなく、もし、高校の先生が保育の仕事の楽しさとかやりがいみたいなことを伝えてくれたら、高校生の中からもっと保育の道へ進む人が出るのではと思う。高校での説明会、高校側から呼ばれて模擬授業的なものに行くこともあるが、その際、高校の先生方にも保育のことはぜひ知ってほしいと思うが、先生方の保育に対する関心はあまりないのではないだろうか。保育士や幼稚園教諭というのは、われわれ（高校の教員）とは違うという、大きく隔たりがあること感じる。
6	就職支援の取組等の有無とその内容
①	就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫。
	・多くの求人が来ることによって、逆に就職先を選びにくい。学生が自分にマッチした園を選ぶことに考えると、就職支援、キャリア支援というのはとても難しいと考えている。例年であれば、幼稚園、保育園、あるいは施設の方たちを学校に招聘し、直接現場の声を学生に届ける活動をしていたが、今年はコロナ禍のため、実施できなかった。そのため今年は、卒業生を招いて、少人数グループの中での具体的なやりとりを通して、学生から本音を聞き出し、卒業生からも職場での本音の話をしてもらい、学生に保育者に関する魅力を伝える活動をしている。 ・本校は担任制を敷いているので、一人一人と個別での相談を行い、担任の教員との関係を密にしながら、学生が自分の就職のことについて相談しやすい環境を整えている。
②	早期離職を防止するための対策。
	非常に難しい問題。卒業して、いろいろ困ってしまったときに、本校に相談してくれればいいのだが。もちろん卒業生がまた学校に電話をしてきたり、訪ねてきた場合にはそれに対するフォローは行っている。一番困るのは、全く誰にも相談しないまま、辞めてしまい、それが後から人づてに、実は辞めてしまったという話を聞くこともないわけではなく、そのような場合はもう少しフォローができたのではないだろうか、ということはよくある。 ・卒業生間で職場の情報を共有しているがゆえに、それが職場の転園等のきっかけになることもある。特に、男性保育者の場合、卒業生間の情報共有から、今度新しく園を立ち上げることによって募集があるから、ぜひここでちょっと活躍してみないか、主任を募集している、もう少し上の立場でも募集をしている、などの情報を得て、転園することもある。園長を務めている卒業生もおり、園経営にも関わっている卒業生のつながりが、卒業生の異動に影響を与えることもある。そのことによって、簡単に退職されてしまうのも本校としては困るのだが。
③	再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容はどのようなものか。
	難しいと思うが、同窓会と学校との連携、同窓会へ本校からリクエストしていくことも大事だと思う。ただ、現状では、掘り起こしまでには至っていないと思う。

7	その他
①	今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア。
	1つとして、やはりその人を丸ごと受け止めるという点があるのではないか、ということである。そして、それが教育の根幹だと思っている。それゆえ、養成校の学生が現場に行って、あなたはあなたでいいよねって思ってもらうためにも、やはりわれわれ教員が、「保育者を目指している学生たちに対しても、あなたはあなたでいいんだということをしっかりと伝えていくことが大事だと思う。加えて、世の中は、保育士は保育園の先生って思っている傾向が強いので、実はもっと幅広く活躍の場があることについて、高校に説明会に行ったときには伝えている。保育士の守備範囲の広さを伝えることは続けていきたいと思っている。

K 専修学校の特徴は①中高生に向けた取組、②卒業生のネットワークの活用の二点に集約される。①については、オープンキャンパスに相当するイベントの一つとして実施している「保育講座」がある。これは、養成校で行われている授業を4コマ、高校生が受講するものである。それは、一般的に養成校で行われている模擬授業の域を越えて、養成校の授業のほぼ一日を体験するもので、内容は養成校の学生が学んでいる「ホンモノ」である。“高校生だからこの程度でよい”という意識をもって実施する講座ではない。保育士という仕事を「学び続ける仕事」と捉えており、その考え方を学生たちに伝えている日々の授業の様子を、リアルに高校生に見せている。また、高校の教員の保育に関する理解の深まりが、保育士を目指す高校生の増加に貢献するのではないか、という指摘も印象深い。

②については、歴史のある専修学校であることから、多数存在する卒業生のネットワークを、就職支援、キャリア支援に活用していることがあげられる。特に、早期離職の抑止という点において、卒業生のネットワークの中で、卒業生同士が情報交換するなど、自立的に支えあう姿がみられるとのことである。これは、K 専修学校が直接的に卒業生に関わることによって成立している支えあいではないため、養成校の早期離職対策と呼ぶには違和感があるかもしれないが、卒業生同士がこのような関係をつくる素地を養成校時代に育む環境を整えている、という観点から捉えれば、K 専修学校の果たす役割は大きいと考えられる。

Ⅲ　考察

１．カリキュラム関係

（1）「保育士（施設保育士も含め）という仕事の魅力」をどのようにとらえて保育士養成を行っているか。

本調査では「保育士という仕事の魅力」をキーワードとして調査を行ったが、この「魅力」という概念は幅広い概念であり、調査対象ごとにその捉え方に差があった。しかし、全体を通して以下の三つの観点を見出すことができた。

一つ目は、保育士の魅力を、子どもの成長や喜びを共有できることと捉えていたことである。ここには、子どもと保育士の関係についての言及に加えて、保護者とも子どもの育ちに関する喜びを共有できることも含まれていた。

二つ目は保育実践が常に学ぶことを求められる仕事であることから、保育士の魅力を、保育士自身が専門家として、あるいは人間として成長していくことができると捉えていたことである。

三つ目は、保育士あるいは保育所が社会的に重要な職業・施設であり、その重要性自体を保育士の魅力と捉えていた。その背景に、保育士と地域社会と連携することが、子どもの健全育成につながり、より良い社会の実現に強い影響を与える、という考え方があることが推察された。

一方で、保育士の給与については、その仕事の魅力や社会的意義に見合っていないのではないかという指摘も散見された。

（2）それをカリキュラムにどのように反映しているか。

（1）を学生たちに伝えていくために、各養成校が各々創意工夫をしていることが明らかとなったが、多く見られたのは以下の点であった。

多くの養成校で、実際の保育士の仕事を学生に理解してもらうために、現場経験のある教員やゲストスピーカーが学生に授業を行う場面を設定していた。このことから、養成校は、保育現場の実際を伝えることは、学生が保育士の仕事を魅力的なものとして捉える上で効果的と考えていると思われる。

また、実習を含めて学生が保育現場を体験出来る試みも多く見受けられたが、それに加えて学内でイベントを開催し、近隣の保育所の子どもを学内に招くという試みもあった。これらのイベントには、学生が実際に「子どもの姿」を見ることで、子ども理解が深まることはもちろん、より保育士の仕事に対する学生のモチベーションを高めていく養成校のねらいがあると思われる。

さらに、どの科目で行うかは養成校ごとに異なっているが、学生の「キャリア」や「成長」などをキーワードとして、入学から卒業まで、さらに就職後などを想定して長期間の教育を行う試みも見受けられた。各授業が担当教員の考え方で独立しているのではなく、学科として幾つかのキーとなる科目があり、その科目に集約されていくという方法である。「保育についての学びと自身の成長」を学生に意識させることで、保育士という仕事の魅力を養成校での学びから理解させようというねらいがあるのではないだろうか。

２．実習指導関係

（1）実習指導において、「保育士の魅力」を伝えるために工夫していること、大事にしていることは何か。

この項目では、「現場経験のある教員」や「外部講師、卒業生」の活用、実習も含めた「1年次からの計画的な指導設計」や「学生への対応と多くのサポート」、「事前事後指導の重要性」というキーワードがみえてきた。

①現場経験のある教員・外部講師、卒業生の活用

実習に関する授業では、保育士や幼稚園教諭の現場経験がある実務家教員が実習指導を担当しているケースが多い。このような教員が担当することのメリットは、現場での経験から多くの事例を示せることや、保育現場の視点から実習前の心構え等を伝えられる、などのことが挙げられる。

例えば、実際の保育現場の話を織り交ぜながら具体的なエピソード等を伝えていく中で、実習に向けての意識を高められるように工夫したり、実習園が求める実習生像を示したり、社会人としての基本的な姿勢や実習への臨み方、実習でチャレンジしてみたいことを考えさせること等を行っている。その上で、「実習目的の明確化や自己課題」について意識している養成校が多かった。実習で学生自身が学びたいことを一つひとつ噛み砕き、具体的な実習イメージを丁寧に掘り下げていくことの重要性を意識させる指導を行っていた。また、教員は学生自身が実習に対する課題設定が出来るように授業内で心掛けていることも分かった。自信のない部分を含めて自分たちが取組むべき課題を言語化させながら自己課題をたてることで、学生同士の学び合いができるようになり、学生は皆で課題を乗り越えようという意識を持つことが期待できる。保育士の厳しい部分よりも、子どもの成長を楽しみながら自分自身も成長していける、という保育士の仕事のポジティブな部分に学生が向き合えるような指導がなされていた。一方で、保育現場には様々な資格を持った者がいる中で、「保育士の強みは何か」ということを学生に伝えているという発言もあった。例えば、施設保育士の魅力としては、子どもの昼間の顔と夜の顔や生活場面の顔とよそ行きの顔が違うこと等、その両方が見られることを挙げながら、責任は大変重いかもしれないがその分とてもやりがいがあること等、実習指導を通して伝えているようである。多くの養成校が現場経験のある教員の授業への活用に関してメリットを感じており、その強みを生かした実習指導を展開していることが分かる。

外部講師や卒業生を授業で活用することで、保育士の仕事内容のイメージづくりや現場のエピソード等を具体的に話してもらう取組をしている養成校が多くみられた。現場のエピソードなどは、施設長、現場の保育士、現場で働いている卒業生が話すことにより、その内容が学生に浸透しやすいと考えている養成校が多くみられた。他にも外部講師の活用としては、1 年次には、実習に関する指導が科目として設置されていなくても、初年次教育の中で、様々な外部講師による活動を取り入れながら学生に体験させる時間を設けた取組がみられた。こうした体験型の実習指導を行うことによって、子どもたちの前で実践するにはどのような工夫が必要かという視点から、保育の面白さを伝えていることがうかがえた。また、養成校の実習では、保育所、幼稚園、児童養護施設、乳児院、障害児施設等に行くが、これから実習に行く学生に向けて、実習指導の授業の中で、実習を終えた先輩学生から心構え等を伝えてもらう機会を設けている養成校が多くみられた。3 年生による実習成果発表会や 2 年生対象の実習チューター相談会等を行い、授業の中で自由な話し合いや交流をすることで学生同士の学びを深めていることも述べられていた。先輩学生が実際に経験したことを実習先の種別ごとで聞いていくことは、新鮮さや現実味があって、実習のイメージ等が広がるようだ。また、先輩学生も、後輩に話すことで保育についての自らの指導観が整理されたり、大勢の学生の前で話すことで自信がついたり、終了後に後輩学生からのコメントを見ることで、自分の話の伝わり方を実感できたりすることから、互いにメリットがあることがわかる。実務家教員の視点、外部講師や卒業生の視点に実習現場での学生自身の経験等が関連し合い、学びが相互に補完し合うことで学生は保育の魅力を感じていくと考えられる。

他にも、DVD や録画映像などの視聴をもとに、現場に即した内容の指導を行い、子どもの育ちをイメージできるように工夫している養成校もあった。また、附属の幼稚園や併設の子育て支援施設にて、自主的に手遊びや絵本の読み聞かせなどを通じて子どもと関わることや、1 日観察実習において子どもや保護者の様子を見ることが、子どもとの関わることの楽しさ、保育士の魅力に気づいていくことへつながっている様子もうかがえた。

授業では、模擬保育を積極的に取り入れている養成校もあり、授業内の活動で学生自身が自主的に保育を考えていけるように工夫していることがみえた。模擬保育園のイベント版のような形で運動会や発表会、遠足等を学生自身が自主的に企画すること等を通して、実践力のある学生を育成し、キャリアにもつなげていく試みであることがうかがえる。

②計画的な指導設計

実習指導設計については、1 年次からの計画的な取組を考えている養成施設が多くみられた。実習に関する指導は、入学時より早々に始めているケースが多く、キャリアを見通した上での実習指導設計を計画的に考えている養成施設が多いことが分かった。特に短期大学の場合は修学期間が 2 年間であるため、早い段階で自己課題を立てさせ、学生自らの目標を持たせるようにしていることが分かった。また、1 年生の夏休みから観察参加実習を兼ねた取組として、楽しく子どもや利用者と関わるプログラム作りを行っている養成施設もあり、2 年間を通して実習に絡んだ活動を行っていくことによって、学生が変化していることに気づくという発言もあった。

保育所や幼稚園の体験を伴う見学実習では、体験したことの意味や子どもへの関わりについて振り返り、それを記録に起こすようにしているという発言があった。振り返りの時間を十分にとること、実習先と密接に連携し、情報交換しながら進めていくこと、学生の問題だけではなく実習施設側の問題についても率直に伝えるようにしていることがわかった。

施設実習に関連して、事前に児童養護施設、障害者入所施設、重症心身障害児の 3 か所には全て見学に行き、重症心身障害者の施設については、医療の提供も必要だが、保育者として利用者にできることは何かを考えさせるようにしているという発言もあった。実習先については、養成校側が学生と施設とのマッチングを考えて、児童養護施設か知的障害児・者施設のどちらかに振り分けている養成校があった。また、担当者が固定のため、学生のことをよく把握できていることから、担当者会議を週 1 回開催し、学生の情報を共有していることも分かった。

実習日誌の書き方は「保育実習室演習」で学べるようになっている養成校もあり、保育実習指導の授業では、「保育園に行ったら･･･」をより想定して行うことができる様子がうかがえる。例えば地震体感車を経験して地震への対応を学ぶなど実践を重視した指導ができているようである。また、保育実習指導Ⅱ・Ⅲでは、新聞社主催、地方自治体共催の保育に関する研修に参加し、有識者から学ぶことをとり入れているケースもみられた。

実習に関しては、保育士の魅力に気づくためにも実習を最後までやり通すことを学生へ伝えている養成校がみられた。実習 1 日 1 日を通して、子どもや保育士、保護者との関係は構築され、そこから多くの学びを得られることがあり、そのことが保育士の魅力に学生が気づくことを可能にする、という意見もあった。養成校は、学生が実習での保育士の姿から「こんな保育士になってみたい」と感じることを願い、保育士と子どもや保護者との関わりを目の当たりにすることで、より具体的な保育士の魅力に気づいて欲しいという願いをもっている。一方で、少なからず保育士の魅力や目標となる保育士と出会えないケースも稀にあるが、このようなケースは、一度立ち止まって自身が思う保育士の魅力とは何かについて考える機会であること、そういった経験が新たな保育士の魅力への気づきの幅を広げることにつながる、と指導している養成校もあった。様々な園の雰囲気や独自性、保育士の魅力に対する視野を広げることによって、自己にとっての保育士の魅力を発見してほしいと考えていることが分かる。

③学生への対応と多くのサポート

養成校の学生への対応として、実習において、保育士から受けた指導にショックを受けた場合でも、自分が目的を持って子どもと関わることを意識するように自己課題について文章を書かせて何度もチェックする取組を行っているケースがあった。また、実習中における実習生の戸惑いや悩みがある

と真っ先に実習の担当教員やゼミの教員が相談に乗り、すぐに解決するという取組もみられたように、学生が実習に新たな意欲で挑めるシステムや流れができている養成校が見られた。また、実習巡回に行った際には、学生の表情を見てその状況を察知し、声掛けをしたり、安心感を与えつつ、資格を取るために必要な実習を楽しむことが一番なことと、同時に資格を取るために必要な我慢や忍耐についても伝え、様々な不満を抱えながらも実習は頑張らせた上で、事後指導のところで全てを吐き出させるようにしているという意見もあった。実習担当者が事後に個別面接によるフォローを行ったり、ゼミ担当者が実習中の学生の悩みや戸惑いへのフォローを行う体制として LINE などの活用をしている養成校もあった。学科会議で、全教員で養成教育や実習に関する情報等の共有を行っており、教員組織の風通しがとてもよいという発言もあった。学科教員は大体の学生の顔と名前が一致していることもあり、実習巡回は全員で担当し、快く引き受けてくれることや実習準備室に保育現場経験のある助手が配置されており、実習について学科全体の教員が実習生を支えていることが伝わってくる。多くの養成施設では、様々な視点や個に応じたアプローチなどのきめ細やかな学生指導が行われており、実習指導を通して保育の魅力を感じさせつつ学生をフォローしていることがうかがえる。

④事前事後指導の重要性

事前事後の指導においては、実習担当者が事前指導において実習を楽しむというメッセージを伝えたり、実習へのイメージを持たせたりし、事前指導に力を注いでいることが多くみられた。また、「事後指導」に着目し、その重要性を述べた養成校の取組からは、実際の実習後の学生の様子から、実習に行ったことで保育士を諦めるケースが少なくないことがわかる。また、保育職が嫌だと感じ、就職したくないと思ってしまった学生達へ、再度学生同士で振り返りをさせ、保育の良いところや保育の魅力を思い出させる工夫を行っている養成校があった。その方法としては、グループワークやワールドカフェ、学生同士の振り返りを取り入れており、その結果、学生は保育に対して前向きな姿勢に変化し、その効果があることがわかる。こうした実習指導における事後指導は、就職やキャリア支援にもつながると考えられるだろう。

他の養成校では、学生が実習で感じるネガティブな意識を、どのように価値付けるか意識しているという発言があった。例えば、施設実習で洗濯、掃除、身の回りのお世話という体験に対して、それが子どもの生活を支えることにどのようにつながるのか、どれだけ価値付けられるかということを意識していると述べていた。また、実習指導ではアクティブラーニングが取り入れやすいため、実習における学生の主体的な体験を生かしながら、主体的に学び、保育の魅力につなげていく試みをしている養成校があることも分かった。一方で、保育士の魅力を伝えるというよりも、自分がどれだけ子どもの役に立ち、保護者の役に立ち、そして社会の役に立っているのかを伝えることを意識しているという発言もあった。教員側が魅力を伝えるよりも、学生が主体的に理解することを重視している為、学生には実習中に誰にも見せないでいいネガティブなことを書くメモを取ってもいいと伝えている（最初はネガティブなことを書いていても徐々にポジティブな視点を持ち始めるということがみえてきている）養成校もあった。実習指導を通して外部との接触や様々な視点からの情報、学生同士が切磋琢磨し励まし合う機会等から、学生自身の目的意識や自己課題・目標を更新していく姿がみられる。またそうした取組を通して、人間関係・コミュニケーション能力の向上を意識しながら学生同士が関わりあえていることもうかがえる。

早い段階からの実習に関する指導を行い、様々な授業方法で学生に現場の具体的なイメージを持たせ、学内での授業と実習、事前事後指導を通して総括的にフォローしつつ、最終的に保育の魅力や保育者としての仕事、ライフイメージを持たせる工夫等が、実習指導の重要なプロセスであると考えられる。

３．教育課程以外の活動

（１）教育課程以外の学生の主体的な活動（クラブ活動、ボランティア活動）で「保育士の魅力」が伝わるものがあるか。また、具体的内容はどのようなものか。

教育課程以外の学生の主体的な活動において、「保育士の魅力」が伝わるものの具体的内容の項目では、「現場に関わる」、「地域貢献」、「キャリアへとつなげる」がキーワードとして見えてきた。

① 現場に関わる

多くの養成校が挙げたのは、学生が保育現場に赴き保育士の実際の仕事に触れることを重視したボランティア活動であった。例えば、現4年生の学生自身がボランティアサークルを自主的に立ち上げ、1 年～3 年生の学生が近隣の保育施設にボランティアで積極的に保育参画しているケースである。2 年が主にリーダーとなり、3・4 年はアドバイスや見守り的な存在となる活動が継続的に行われている。学生自身が保育参画を行いたいという思いで主体的に活動していることから、学生間で継承され伝統になっていることが分かった。この活動について学科の HP 上のブログにはそれぞれの取組が掲載されていることから学生の様子を読み取ることもでき、参考となる事例であると考える。

他にも、クラブ活動として近隣の園での絵本の読み聞かせなどに参加したり、サークルとして病棟保育、障害者福祉施設に行って実践の機会を持ったり、熱心な学生がいると新しい活動が生まれることがあることが示された。また、授業の演習をきっかけに保育現場でのボランティアやアルバイトを始める学生もいることや、学内でも学生の絵本の読み合いや、実技面を共に見せ合ったり高め合ったりする経験をしている姿がみられることも分かった。さらに、保育所や施設からのボランティア募集や、行事のお手伝い等のアルバイト募集チラシをきっかけとして、興味のある学生は個々で参加したり、実習がきっかけとなってボランティアやアルバイト等に行ったりしていることが挙げられた。様々なきっかけから、実習の関わりのみならず子どもたちの成長する姿を現場で受け止めながら授業の学びを深めていくことにつながっていくことが示された。こうした取組は、保育現場にとっても、人手が増えるというメリットもあることから、このような現場とのつながりは今後も求められるだろう。

依頼を受けて、訪問公演として活動するケースも挙げられた。人形劇のクラブとして施設や児童発達センター、保育所等で公演して子どもと交流を持つ機会があり、学生が棒使い人形やぬいぐるみの中に入っての演技、せりふ、歌、生演奏、大道具の準備や配置、司会進行等を行い、子どもとコミュニケーションを取りながら公演をしていることが述べられていた。また、学生ができるところは学生が行い、教員の力が必要な部分は指導して一緒に活動を行っていることがみえる。子どもたちの前でパフォーマンスをする経験を通して、表現がしっかりとできるようになり、実習以外にこうした機会があることで、学生は自信を持って子どもと触れ合えるようになっていくという意見があった。さらに子どもの反応から、学生の、保育士になりたいという気持ちが高まったり、訪問公演で行かせてもらった園とのご縁から就職につながることもあることがわかった。

一方で、自発的なボランティア以外に 1 年次夏休みに 3 日間のボランティアをする取組を行っている養成校もある。地域の社会福祉協議会のボランティア事業を学生に紹介し、ボランティア登録を行い、そこから保育に関連するボランティアを選ぶ学生もいることが分かった。これらを通して学生が現場（保育所・施設・幼稚園）を知る機会になっていることが示された。

附属幼稚園が大学の敷地内にある一例としては、学生の空いたコマを活用し幼稚園に訪問し、例えば 90 分間、子どもと関わるという機会（ボランティア）を設けているケースがあった。日時調整等は教員がおこなっている。また他の養成校でも、附属幼稚園やグループ保育園へボランティアに行くことを推進していることが挙げられており、園の行事やその他園側からの依頼があったりした場合に、学生へそのことを伝えて参加を促すことが分かった。

また、学内の子育て支援施設において、地域の子どもや保護者を呼んで全学の学生が主体的に関わっているケースもあった。子育て支援施設に外部講師を呼んだり、教員が関わったり、保護者との

交流の場、子どもの遊びの場として開放し、様々なプログラムの企画、準備を行っている。月１回実施し、保護者の受付や誘導をしたり、広場のレイアウトを変更したりして、その都度、学生自身が考え、活動に参加していることが挙げられた。

多くの養成施設がコロナ感染症の影響で、通常のようなボランティア活動等の活動ができない辛さを述べていたが、1 年次の後期に、子育て支援センターに授業外演習として希望者を訪問させる企画では、全員希望をしたという事例もあった。

他にも、学園祭において、近所の小学校や幼稚園の子どもたち、実習でお世話になっている幼稚園の子どもたちや卒業生の子どもなどが多数集まる活動があり、200～300 人規模の子どもたちが参加するため、子どもたちが楽しめるような企画を学生が考え、お祭りを行っている養成校もあった。そして、こうした活動を通して学生同士がコミュニケーションを取り、時としてぶつかり合ったりしながらも、何か１つのものをつくり上げていく姿がみられることの意味が示された。このような行事には、卒業生も参加するので、在学生は卒業生から保育現場の様々な話がフラットな関係性の中で伝えられている実態もある。

②地域貢献

地域に関係する事例では、私立大学研究ブランディング事業として開設された総合支援施設の中に、小学校１年生から 6 年生を対象にした学習支援の施設と、0 歳児から 3 歳児と保護者の子育て広場のゾーンがあり、学生たちが１年生から関わっている活動が挙げられていた。早くから職業を意識していくことによって保育の魅力につなげていくシステムとなっている。また他の例では、地域の子育て支援センターなどに学生ボランティアとして学生が主体的に参加することも挙げられていた。児童館等で、スポーツ（ダンス等）活動をおこなうサークルのケースでは、教員も混ざって活動している養成校もあった。多くの養成校では、学生の主体的な活動（サークル活動等）が重要であることを認識しており、教員も多様な形式でサポートしていることがうかがえる。

③キャリアへとつなげる

キャリアを意識した活動としては、公務員保育士になるための講座を１年次から実施し、職業意識を高めている取組がある。また、保育士養成課程に所属していない学生も含めた、障害を持つ子どもと関わるサークルが、積極的な活動をしていることもあり、ボランティアに対しては学生が積極的に行動しているので、活動に保険をかける等のバックアップをしている養成校もあった。

保育士の魅力について気づきを高めるためには、専門知と実践知の往還が重要であるとの意見がある。ただし、教育課程以外の活動における課題もみえてきた。学生の経済事情等も関係しており、最近の学生は教育課程外の活動にはあまり参加していないこともうかがえる。以前は人形劇等やサークル活動を行ったりしていたが、全体としては、主体的に学生が集まって行う活動は少ないことや児童養護施設等に学習ボランティアで参加することもあるが、学生が忙しいためあまり機会は多くないこと等が示された。その一方、アルバイトとして法人施設等に行きながら学んでいる学生も多いことが分かった。特に短期大学の場合は、2 年間という短い時間の中で、クラブ活動などを積極的に実施していくことは困難な部分もあり、さらにカリキュラムの過密化なども関係し、ボランティア活動への参加も難しくなっているのが現状であることがみえてきた。

そのような状況の中で、養成施設の学生たちが主体的にボランティアサークルを立ち上げたことも示された。とても意義深いことであると同時に、保育士の魅力に気づける学びの芽が育ち始めていると考えられる。また、授業以外の活動を通して、最初の自己課題では人前に立つのが怖い、緊張するなどネガティブな思いが強かった学生が、その部分を意識化できたことで変化したことも挙げられた。

教育課程以外の活動について様々な課題も示されたが、同時に教育課程以外の活動を通して授業では学ぶことができない保育の魅力が伝わることの可能性や、このような活動の必要性も示唆された。

現場や地域と養成校が連携を図り、教育課程以外の活動についての取組の充実やキャリアを見通した活動のサポートが求められる。

４．保育現場および自治体や保育団体等との連携

（１）授業に保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）が参加する機会はあるか。それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。

養成校の種別を問わず、保育現場および自治体や保育団体等と連携して、保育士等に授業等への参画・参加を依頼している。具体的には、学内講師に多数の現場経験者を登用し、学生のことを大事に思ってくれる外部講師を活用して多くの回数を設定していた。また、養成校に併設園がない場合は、地域（自治体）と連携して公立園で実践をおこなっているケースも見られた。

（２）授業以外で保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会はあるか。それは具体的にどのような意図で始まり、どのような内容のものか。

卒業生（保育者）の自主的なコミュニティーが確立している養成校があったが、これは、卒業生と教員、さらに学生間のつながりのプラットフォームとなっている点で注目に値する。主体的なボランティア活動は、特にカリキュラムが過密化する短期大学では困難であるが、多くの養成校では学生に対してサークル活動をボランティア活動へ向けるなどして勧めている．県、行政との連携、教育委員会、連携の拠点を結び、近隣の自治体とも子育て支援の連携を広げて、企画プログラムをキャンパスで実施している。また保育士不足への危機感共有から、大学の地域連携では「COC＋（地（知）の拠点大学による地方創生推進事業）」などを通して、就職率を上げていく試みもみられた。

（３）教員が、保育現場・施設現場および自治体（保育団体等）と連携する機会があるか。また、具体的内容はどのようなものか。

保育現場および自治体や保育団体等からの依頼により講師を担当することが、専修学校、短大、大学いずれも共通してあげられている。養成校の教員は、そうした研究会講師等の形態をはじめ、積極的に地域活動に協力している様子が見られる。さらに、様々な自治体と連携し、保育マルシェ、フリーマーケットにシンポジウムを抱き合わせた企画を実施したり、養成校 13～14 校の協力関係に基づいた、幼稚園、保育所、子ども園等の現場との連携がとれている養成校もみられた。また、教員だけでなく自治体との連携による企画に学生も一緒に参加させている養成校もあり、積極的に地域貢献に取組んでいる様子が伺える。

（４）リカレント教育、卒後教育の現状。行われている場合、主体は養成校、保育現場・自治体等のどちらか。

リカレント教育を実施している養成校は比較的少ない（ヒアリングを行った 11 養成校のうち 4 養成校）。しかし、リカレント教育をいろいろな形で組織化して実施することが必要と感じ、検討している養成校は多い。また、リカレント教育は実施していないが学園祭などホームカミングイベントの機会に卒業生の状況を把握したり、卒業 2～3 ヶ月後に、卒業生の就職先に出向き、状況確認をしたり、ステップアップ講座、キャリアアップ講座の名称で卒業後の教育をしている養成校があった。これらの取組は、卒業生の離職率を上げないようにフォローをしていると考えられる。

５．中高生に向けた取組

（１）オープンキャンパス（学校説明会）、出張授業等において、「保育士の魅力」の伝え方。HP や情報機器の活用方法等

ヒアリング対象の養成校の中で、中高生に向けた取組として、オープンキャンパス（学校説明会）や出張授業等において保育士の魅力を伝えている養成校は多かった。養成校の広報活動の一つとして、HP や SNS も活用しながら保育士の魅力を発信している。

ヒアリング対象の専修学校の中には、保育者を目指す高校生のための保育講座において、4 コマ（1 コマは 45～50 分）ぐらいの講座を提供している養成校があった。他の養成校のオープンキャンパス等と比較すると、少しタイトなため敬遠される可能性があることから、1 コマだけの体験入学、体験授業もちりばめながら、年に 1～2 回実施している。高校生だからこの程度、というのではなく、「本物の学生生活の雰囲気」を伝えようとしている。

オープンキャンパスで保育者となった卒業生に自分の体験を語ってもらい、保育士や大学の学びや魅力を YouTube や SNS を使用して伝えている養成校、学生主体のオープンキャンパスを行っている養成校もみられた。また、HP を工夫し、授業の様子や様々な取組についての学生の活動が見やすく分かりやすいブログを立ち上げている養成校は、HP が頻繁に更新されていることから、非常に楽しそうな学生の様子が伝わってくる。また他県にも出向き、多くの高校生が参加してくれるよう、進路ガイダンスに力を入れ、なるべく裾野を広げる努力が必要と考えている養成校もある。また、中学生を対象にしたものでは、同じ学校法人の高校での出張授業で魅力を伝え、高校のオープンスクールに参加する中学生に、大学教員が保育に関する話をして魅力を伝えている養成校があることがわかった。

６．就職支援の取組等の有無とその内容

（１）就職支援・キャリア支援において、「保育士の魅力」を伝える工夫

就職支援では、まず学生自身がどの職業を選択してどのような働き方をしたいかに向き合う機会を提供する必要がある。そのため、複数の養成校において、保育の現場を知り、子どもと触れ合う機会をもつことにより「保育士の魅力」を学生が見出せるよう促していた。同時に、「保育士の魅力」について、教員が授業等で伝えたり、学生同士が話し合うなどの工夫も行われていた。このようにして、学生が「保育士の魅力」を感じ取りながら自身の職業選択を考えるプロセスでは、改めて自分を見つめ直すことになる。こうした自己理解を深め、進路を模索する中で、教職員が一人ひとりの学生に寄り添い、個々の成長に合わせたサポートをしながら、保育士として就職することへの意識づけを行うことの大切さが示された。

次に、保育職への就職にあたっては、学生と就職先とのマッチングの重要性が示された。学生が自分に合った就職先を見つけることは、就職後も「保育士の魅力」がぶれることなく勤められることにつながる。そのため、教職員が日頃から学生の特性を捉えること、相談しやすい環境を整えることを複数の協力校が大切にしていた。同時に、学生に合った就職先を紹介するには、就職先に関する情報収集が必要であり、卒業生の就職先訪問や行政との連携などを通して様々な情報を得る努力が重ねられていた。

以上の教職員の取組に加えて、現場の保育士や卒業生を招いての講話も「保育士の魅力」を伝えるうえで有効に機能しており、現場の保育士の目に保育がどのように映っているのかを話してもらうことや、卒業生には本音も含めて魅力を伝えてもらうことは、就職に対する意識の向上につながっていた。

その他、保育職以外の職種についても知り、視野を広げることで、あらためて「保育士の魅力」を見出す学生もいることが示された。

（２）早期離職を防止するための対策

（１）で示したように、就職支援において個々の学生と就職先とのマッチングを考えることは早期離職の防止にもつながっていた。このように、教職員が日ごろから学生のことを良く知り、学生に合った就職先を紹介すること、あるいは、学生自身が保育の特徴や雰囲気をつかんで、納得して就職することが離職を未然に防ぐと考えられた。

一方、学生が卒業した後も、就職先への訪問などにより卒業生の状況を把握していくことの重要性が示された。中には、卒業後３か月後に教員からの応援メッセージの寄せ書きを送付しているケースもあった。このように、卒業生と養成校とのつながりを途切れさせず、相談がある時にはいつでも受け入れる体制を整え、卒業生にそのことを周知する取組は、困りごとへの早期対応につながり、早期離職への予防的介入としての意味をもつ。同様に、ホームカミングなどの交流にも一定の効果があることが示された。

その他、養成校が直接関わることなく、卒業生同士が情報交換を行い自立的に支え合うネットワークが早期離職の抑止となっているケースもあった。そこからは、卒業後も関係が育まれていくように在学時の環境を整えることが、早期離職防止対策にもつながると考えられた。

（３）再就職支援、潜在保育士の掘り起こしの実施について。また、その内容

再就職支援に関して、いくつかの養成校では、再就職や転園に関する相談に乗れるように窓口を設けたり、離職した卒業生を把握して連絡を取るなどの積極的な働きかけが行われていた。また、養成校が主催する行事、ホームカミング、同窓会、研修会なども、再就職の相談を受ける場として機能していた。その他、卒業生が再就職の希望条件を登録するシステムを整えている養成校もあったが、保育職への求人は多く、求職者が自主的に動けるため、ニーズは高くないことが示された。

潜在保育士の掘り起こしに関しては、行政と連携した潜在保育士セミナーなどの実施がみられたものの、養成校の多くは具体的な取組には至っておらず、今後の課題となっていた。

７．その他

（１）今後学生に保育士の魅力を伝える方法についてのアイディア

「保育士の魅力」を伝える方法として、養成校での実践を通して有効に機能している内容は以下の通りであった。

まず、教員が授業の中で「保育士の魅力」を直接伝えていき、長く勤めていきたいと思えるような先のイメージまで持たせることの大切さがあげられた。そのためには現場で働いている保育士と養成校教員が密に連携を取って、「保育士の魅力」について語り合い、共有することの必要性が指摘された。

加えて、学生が現場の声を聞く機会を設けて、現役の保育士や卒業生から「保育士の魅力」を伝えてもらうことの大切さがあげられた。

また、様々な保育施設があることを知ってもらい学生の視野を広げること、幅広く活躍の場があることや保育士の守備範囲の広さを伝えていくことも、「保育士の魅力」を伝えるうえで重要となることが示された。

一方、教員が学生を受けとめて丁寧に関わる姿勢が援助職としてのモデルとなり、学生がそこに「魅力」を感じて、今度は自分が支える側になろうという気持ちにつながることもあるため、教員が学生を主体に考える姿勢をもつことの大切さもあげられた。

Ⅳ　まとめ

１. 保育士の魅力と保育士養成

今回、大学、短期大学、専修学校とすべての種別の養成校に対してヒアリングを行ったが、「保育士の魅力とは」という根源的な問いに関して、掘り下げた質問を直接的には行っていない。しかし、11養成校の回答をみると、その意味の捉え方に関する違いこそあれ、すべての養成校が「保育士の魅力」を視野に入れた養成を行っていることがわかる。その中でも「保育士あるいは保育が社会的に重要な施設・職業であり、その重要性を保育士の魅力」と捉える見方は、保育士の専門性に関する社会的な理解が不十分と言われている現在、重要な見方の一つといって良いだろう。これは、後述する高校生や中学生、および中学校、高校の教員への保育士の魅力発信の必要性とも大きく関係してくると考えられる。

２．保育士の魅力と保育実習

今回のヒアリングで、多様な工夫が見られたのは、保育実習に関してであった。本文中、Ⅲ考察の中で、①現場経験のある教員・外部講師、卒業生の活用、②計画的な指導設計、③学生への対応と多くのサポート、④事前事後指導の重要性の４つの観点から保育実習に関して述べられているが、これほど多くの観点が出てくる背景には、保育実習が学生の卒業後の進路選択において、保育士を目指すか否かの分岐点になっていることが容易に推察できる。特に、③学生への対応と多くのサポート、④事前事後指導の重要性では、保育実習で保育士になる意欲が低下した学生に対する様々な支援の姿を知ることができた。「保育職が嫌だと感じ、就職したくないと思ってしまった学生達へ、再度学生同士で振り返りをさせ、保育の良いところや保育の魅力的なことを思い出させる工夫を行っている養成校があった」という記述があるが、裏を返せば、保育実習は学生の保育士になるモチベーションを高める機会だけでなく、保育士をあきらめるきっかけにもなり得るのである。それだけに各養成校が、保育実習を学生の保育士を目指す思いを促進させるための機会として重視するのは必然とも言えるだろう。

３．保育士の魅力と学生の主体的活動

今回のヒアリングでは、養成校の教育課程以外にも目を向けた。その結果、二年制の養成校の場合、時間の確保という観点から、ボランティア活動等が難しいとの回答もあったが、多くの養成校で、学生の主体的な活動（ボランティア活動、サークル活動等）が学生の保育現場への関心や学ぶ意欲を高め、最終的に就職まで結びつくこともあることが示唆された。高等教育における主体的学びの重要性が指摘される[1)]中、それは養成校にとっても同様である。もちろん、それは教育課程における学びの中で十分保障されなければないが、教育課程以外の時間が、結果として保育士を目指す学生のモチベーションを高める機会になっていることは、無視できない。養成校が意図的な教育機関として存在していることを考えれば、学生の主体的活動が生まれやすい環境を、養成校での学生生活の中に意図的に作り上げていくことが養成校に求められているのではないだろうか。

４．保育士の魅力と地域との連携

養成校の教員が、地域の研修等の講師を務めることは一般的だが、今回のヒアリングで、養成校と地域の連携の中に、学生も巻き込んでいるケースがあることを知ることができた。例えば、子育て支援関係の地域実践に学生が参画することは、学生の子育て支援に関する学びを深めるという点で、意味のあることと言える。他方、ヒアリングの中に「自治体の方からも保育士不足を背景に養成校と連携したいという声がある」とあるように、保育士獲得のための“リクルート活動の一環としての養成校と地域の連携”という実態もあることは、知っておくべきだろう。保育士不足は解決すべき、喫緊

の課題ではあるが、保育の質、保育士養成の質向上が連携の前提とされていない場合、本質的な意味での養成校と地域の連携の成立と言い切ることはできないだろう。

５．保育士の魅力と中高生に向けた取組

中学校時代の職場体験に関して、「保育の職場体験をした学生の方が非経験者よりも保育系の資格・免許取得率が高く、また保育系の就職率も高い。」という指摘がある[2)]。また、高校生の抱く保育士イメージと職業選択について、高校生は“人”としての保育士には肯定的なイメージをもっているものの、保育職という“職業”に対してはマイナスの印象を抱いている、という報告もある[3)]。今回のヒアリング対象校の中で、オープンキャンパスや出張授業等で、中高生に対して働きかけを行っている養成校は少なくなかったが、それが、前述した保育士不足解消のためだけの地域連携への危惧と同様の文脈だった場合、単なる学生募集の場で終わってしまう可能性もある。職場体験が中高生の保育士を目指す志向を促進するのであれば、そこに“職業”としての魅力が加わることは、その志向性がさらに高まることを期待させる。とすれば、中高生のときに“職業”として保育に携わることの意義や、保育士の専門性に関して、正確に理解することが重要である。そしてその理解を可能にするためには、中学校や高等学校に、養成校が積極的に働きかけ、教員に保育、保育士の本質的について伝える機会を作ることが重要であると考える。養成校教員と中学校、高等学校教員の協働は、養成校入学前の世代に、保育士の“職業”としての魅力を伝えるうえで不可欠と思われる。

６．保育士の魅力と就職及び卒業後の支援

“マッチング”という言葉が文中に出てきたように、ヒアリング対象の養成校の多くが、学生の就職に関して、個々の学生の志向性を把握したうえで、就職先の園との相性を考慮した就職指導をしていること、また、卒業後も一定程度の期間、学生の状況を把握するなど、個々の養成校の特性を活かしたフォローをしていることが分かった。このような取組は、卒業生の早期離職の防止や、最終就職支援にも貢献することが期待できよう。

他方、保育士として就職する学生が卒業生の 10%程度というヒアリング先もあったが、この養成校の発言記録の中に「保育士資格を取得し、一般企業に就職し、保育士の魅力を知った市民が多く育っている」という記述がある。言うまでもなく、養成校は保育士として就職することを前提として成立しているものだが、一方で、養成校の卒業生が、社会に対して保育及び保育士の正しい理解を広めていく、という意義も大きいと考える。前述したように、職業としての保育にマイナスイメージを持たれやすいのだとすれば、なおさらである。養成校にはこのような側面の役割を果たすことも求められているのではないだろうか。その役割を果たすことよって、広く保育士の魅力が社会に認知されることにつながるのではと考える。

引用文献

１）永田祥子（2018）「高等教育における主体的な学びに関する一考察： 関西大学の PBL への取り組みから」 『関西大学高等教育研究 第９号』 pp.101 - 107
２）大久保義美（2017）「職場体験と保育系短大生 —体験は進路選択に影響するが、現実は厳しかった—」『日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集』 p 176
３）広瀬由紀（2013）「高校生が抱く保育士のイメージと職業選択の基準」『植草学園大学研究紀要第 5 巻』 pp.95 - 101

第３部

総合考察

第３部　総合考察

Ⅰ．調査結果の概要

１．質問紙調査のまとめ

第１部では、質問紙調査の結果を踏まえて、厚生労働省「保育の現場・職業の魅力向上に関する報告書」（2020（令和 2）年 9 月 30 日）において示された対応策の三つの柱である「保育士の職業の魅力の発信の向上」、「生涯働ける魅力ある職場づくり」、「保育士資格を有する方と保育所とのマッチングの改善」を踏まえて、保育士の魅力向上に関して調査から得られた保育士養成の現状と課題についてまとめた。

（1）保育士の職業の魅力の発信の向上

1）養成校教員が捉えている保育士のやりがいや魅力向上に関する意識

保育士のやりがいや魅力を向上させるために必要な取組として「子どもとの関わりや成長を実感できる」、「自分自身のやりがいや喜びを得られる」といった回答が多かったことは、保育の質が高いことと、保育士自身の自己実現が図られている状況が保育及び保育士の魅力に強く関わっていることを示唆している。このことは、厚生労働省子ども家庭局が 2020 年に保育士等を対象にして行った「保育の現場・職業の魅力向上」に関する意見募集の結果において、保育士という職業のやりがいや魅力として、「子どもとの関わり・成長実感」、「自己の成長・学び・誇り・自主性」といった回答が多かったことと重なっている。

次いで、本調査では「社会的になくてはならない仕事と位置づけられる」、「給与・福利厚生が充実している」、「休暇の保障や労働時間が適切である」、「研修など学びや成長を支える環境が整っている」といった回答が多く、保育士の社会的地位の向上、労働環境の改善、研修機会の確保といった取組の必要性がうかがわれる。

2）養成校におけるカリキュラムの工夫・具体化している取組

保育士のやりがいや魅力を伝えるためのカリキュラムの工夫についてはほとんどの養成校が「はい（有り）」と回答している。具体的には、「モデルとなる保育士の実践例に触れる機会を多くしている」が最も多く、次いで「保育士になってからのキャリアを思い描けるようにしている」と、保育士の具体的な姿に関する内容が多かった。子どもと保育士の姿を通して、保育士のやりがいや魅力を伝えていることが示された。

それらを具体化している教科目としては「保育実践演習」が最も多く、続いて「保育者論」が挙げられた。これは厚生労働省子ども家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の「教科目の教授内容」の内容に合致した結果であった。自由記述からは、「授業のテーマや内容によって伝える」、「実践例や映像・写真を用いた授業」といった授業の内容、方法の記述が多く、また、「関係機関との連携、子どもや保護者と直接関わる体験等」や「外部講師」といった回答も多い。各養成校で保育現場や関係機関等、外部との様々な連携を図っていることがうかがわれた。一方で、「実習との連動」、「教科間連携」といった養成校内での連携は外部連携に比べて少なかった。養成校内での連携を充実させることで、外部との連携をより充実した学びにつなげることができると考えられる。

3）保育実習において保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるために具体化している取組

保育実習の事前事後指導における保育士の魅力を伝えるための取組としては、「保育実習指導Ⅰ（保育所）」において「保育現場での体験」が他の実習指導よりも多く、「保育実習指導Ⅰ（施設）」では、

「現場の外部講師を招いての授業」が最も多かった。最初の保育所実習の前には導入として現場経験を取り入れ、多様な施設に行く施設実習では、各施設の現場の様子についてのガイダンスがより重視されていることがうかがわれる。「保育実習指導Ⅱ」では「保育士の魅力についての学生同士の共有」が他の実習指導よりも多かった。実習経験をもとに保育士のやりがい等を伝え合うことで、保育観や就業意欲への強化につながっていることが考えられる。

４）保育実習における実習先の決定方法

保育実習の実習先は基本的に学生の希望を踏まえて行われるが、「保育実習Ⅰ（施設）」、「保育実習Ⅲ」では、「実習協力園と学生の特性に応じて養成校が決定する」といった方法が「保育実習Ⅰ（保育所）」や「保育実習Ⅱ」と比べて多かった。より前向きに取組めるよう学生の特性や希望に配慮していることが示された。

５）実習指導に携わる保育士の研修

保育現場、自治体、保育団体等と連携して実習指導に携わる保育士の研修を行っている養成校は少ない。この領域における連携の強化が必要であることが示された。

６）養成校の学生と現役保育士が交流、対話する取組

保育現場、自治体、保育団体等と連携して、養成校の学生と現役保育士が交流、対話する取組を行っている養成校は半数を超えている。内容は「就職活動に関する内容」が最も多く、「授業内での活動に関する内容（授業内での現役保育士の講話など）」、「実習指導に関する内容」の順であった。今後、オンライン型テクノロジーによってこれらの取組が加速することも考えられる。

７）ホームページ等による保育士のやりがいや魅力を発信している取組

養成校におけるホームページ等を活用した、保育士のやりがいや魅力を発信している取組については、学校種で違いがみられ、短期大学、専修学校とも 4 割を超えるが 4 年制大学では 3 割にとどまっていた。

８）保育士の魅力を伝えることにつながる中学生・高校生向けの取組

中学生・高校生向けに行っている取組としては、「オープンキャンパスにおける取組」、「中学校・高等学校へ出向いての講義」が多く行われている。これらはおもに学生募集の観点から行われているものであり、今後、中学生等も含めて幅広く保育士の魅力を発信する機会を模索することが求められる。

（２）生涯働ける魅力ある職場づくり

１）卒業後 1～2 年目の保育士を対象として保育現場や自治体、保育団体等と連携した研修等の取組

こうした取組を行っている養成校は少ない。保育士について初任者研修の法定化がなされていないことも影響していると考えられる。卒業生の勤務先を把握することで研修の機会につなげていくことが考えられる。

２）保育士としての悩みや課題を抱えている卒業生に対する環境づくり

卒業生が保育士として働いていて感じる悩みや課題を相談できる環境をつくっていると回答した養成校は多いが、短期大学、専修学校とも 7 割前後であるのに対し、4 年制大学は 5 割程度である。

具体的な取組としては、「ホームカミングデーや同窓会などの来校の機会づくり」、「学校での相談窓口の設置」、「卒業前・卒業後の情報配信」など養成校として行っているものに加えて、「ゼミ教員・担任とのつながり」といった個々の教員等による取組がなされていた。

（3）保育士資格を有する方と保育所とのマッチングの改善

1）卒業生の就労状況の把握

保育士として就職をした過去5年以内の卒業生について、現在の就労状況をどの程度把握できているかを質問したところ、ほぼ半数が5割～8割程度の把握ができていることが分かった。4年制大学で「1～2割程度」が他の学校種と比べて多い反面、「ほぼ全員」の把握ができているという回答も相対的に多く、学校間による差がうかがわれる。

自由記述によると、保育士として就職をした卒業生の就労状況把握においては大きく3つの方法に分かれた。卒業生を対象とした「卒業生へのアンケート調査・ホームカミングデー（同窓会含む）の実施」、園を対象とした「就職先への調査や実習巡回等での把握」、個々の教員等による「ゼミ教員・担任による把握」であった。

2）保育士を離職した卒業生に対する復職のためのフォローアップ

保育士を離職した卒業生に対して行っている復職のためのフォローアップを行っている養成校は4割足らずで先の「悩みや課題を抱えている卒業生が相談できる環境づくり」を行っていると回答した養成校が6割を超えているのに比べて少ない。卒業生の就職の斡旋が専修学校を除いては行うことができない（職業安定法第33条の2）が、養成校の相談と何らかのフォローアップをつなげることを考えていく必要があるだろう。

3）卒業生の横のつながり

卒業生の横のつながりをつくるためのサポートを行っている養成校は、3分の1程度で先の「悩みや課題を抱えている卒業生が相談できる環境づくり」を行っていると回答した養成校が6割を超えることと比べると少ない。具体的なサポートの内容では、「同窓会」、「同期会」、「ホームカミングデー」、「リカレント講座」等のほか、卒業生向けアプリやメーリングリストを活用しているケースが見られた。

2．ヒアリング調査のまとめ

（1）保育士の魅力と保育士養成

今回、「保育士の魅力とは」と直接的に問うてはいない。しかし回答をみると、その意味の捉え方に違いはあれども、すべての養成校が「保育士の魅力」を視野に入れた養成を行っていることがわかる。また、「保育士あるいは保育が社会的に重要な施設・職業であり、その重要性を保育士の魅力」と捉える見方は、保育士の専門性に関する社会的な理解を導く重要な観点である。これは保育士の魅力の発信にも関係する。

（2）保育士の魅力と保育実習

今回のヒアリングで、多様な工夫が見られたのは、保育実習に関してであった。①現場経験のある教員・外部講師、卒業生の活用、②計画的な指導設計、③学生への対応と多くのサポート、④事前事後指導の重要性といった多様な観点が見られるのは、保育実習が学生の卒業後の進路選択において分岐点になっているからだと考えられる。特に、③、④では、保育実習で保育士への就業意欲が低下した学生に対する様々な支援が見られた。

（3）保育士の魅力と学生の主体的活動

忙しいとされる 2 年制の養成校も含め多くの養成校で、学生の主体的な活動（ボランティア活動、サークル活動等）が、学生の保育現場への関心や学ぶ意欲を高め、最終的に就職まで結びつくこともあることが示唆された。教育課程における学びだけでなく、教育課程外の経験が保育士を目指す学生のモチベーションを高める機会になっていることがうかがわれる。学生の主体的活動が生まれやすい環境を整備していくことが有効であることが示唆される。

（4）保育士の魅力と地域との連携

養成校の教員が地域の研修等の講師を務めることは一般的だが、養成校と地域が連携した取組に、例えば子育て支援関係の地域実践に学生が参画するなど学生を巻き込んでいるケースもあった。「自治体の方からも保育士不足を背景に養成校と連携したいという声がある」という回答もあり、人材確保のために地域が連携を求めてくるという側面があることがうかがわれる。動機はどうあれ、そうした機会に保育の質、保育士養成の質向上への連携へとシフトしていく努力が不可欠であろう。

（5）保育士の魅力と中高生に向けた取組

オープンキャンパスや出張授業等で、中高生に対して働きかけを行っている養成校は少なくなかったが、単なる学生募集の場で終わってしまう可能性もある。中高生のときに“職業”として保育に携わることの意義や保育士の専門性に関して正確に理解することが重要である。養成校教員と中学校、高等学校教員の協働は、養成校入学前の世代に、保育士の“職業”としての魅力を伝えるうえで、不可欠である。

（6）保育士の魅力と就職及び卒業後の支援

養成校の多くが、学生の就職に関して、個々の学生の志向性を把握したうえで、就職先の園との相性を考慮した就職指導をしていること、また、卒業後も一定程度の期間、学生の状況を把握するなど、個々の養成校の特性を活かしたフォローをしていることが分かった。このような取組は、卒業生の早期離職の防止や、最終就職支援にも貢献することが期待できる。

保育士としての就職する学生が非常に少ない養成校もあるが、「保育士資格を取得し、一般企業に就職し、保育士の魅力を知った市民が多く育っている」と述べるように、保育を学んだ学生が保育以外の進路に進むことで、保育の意義への認知を社会に広げてくれるという側面もある。

Ⅱ．調査結果からの示唆と今後の課題

以上、本調査研究の結果について改めて概観した。それらを踏まえて、保育士の魅力向上につながる養成校の取組について考察する。

第一に、保育士の魅力が、質の高い保育に伴うということを十分に踏まえた取組が求められよう。実習が保育士への進路から離脱する重要な契機になっている[1)]ことを考えると、学生の資質・能力に課題が大きいようなケースのほかに、学生が養成校で学んだ最新の内容と現場の保育との間に大きなギャップを感じるような場合に就業意欲を失うケースを十分に考慮する必要がある。逆に言えば、園や施設の保育がアップデートされていると、養成校での学びと実習施設での学びが整合性を持ちやすくなり、振り返りを効果的に行うことができ、往還的に学びが深まり、就業意慾も高まることが期待できる。また、保育の質の向上を目指して実習施設と養成校が連携、協働することが大切である。その際、養成校の教職員が学術的専門家として保育士に教授するというだけでなく、現場が主体的・対話的に学び合うことをファシリテートしたり、養成校教職員が現場からリアルに学んでよりよい授業

につなげたりしていくなど、現場との学び合いを養成校のスタンスとして設定して組織的に取組むことが望ましい。

第二に、本調査研究から、養成校を開かれたシステムにしていくこと（ヨコ展開）が有効であることが示唆された。学生だけでなく、保護者に開き、卒業生に開き、保育現場や保育団体及び行政に開き、中高生に開き、他の養成校や関係する専門機関に開く、つまり、風通しをよくして多様な情報や知恵や経験が行き交うことで、相互により高次の学びへと向かうことが可能になる。そのことが、新たな時代の社会に開かれた実践を現場と養成校にもたらし、新たな時代の保育士の育ちの連続性につながり、安心してキャリア形成していくことがより可能になり、就業とその継続のモチベーションのひとつとなることが期待される。地域において、養成校やその団体、保育現場やその団体・行政機関等が協働して検討し取組むことが、学び合いを地域に展開する基盤となり、地域のすべての子どもの最善の利益に向けた営みとなる。こうした志の高さも、保育士を誇りある職業としていく視点の一つになると思われる。

第三に、中学・高校～養成校～保育現場への就業とそこでの成長という、保育士のキャリア発達を見通した、保育職への導入から養成、採用、研修に至る筋道を踏まえた諸活動の展開（タテ展開）が望まれる。中学生が保育を知る機会に養成校が積極的に関与したり、高校生を学生募集の対象としてだけではなく将来の保育専門職の候補者と捉えて養成校の PR（それも必要であるが）だけでなく保育士のやりがいや魅力を PR したりすることが大切である。養成校に入ってきた学生には、実習をはじめとする各教科目を効果的に編成し、教育課程を通じて専門性を涵養するとともに、その過程で保育のやりがいや魅力を感じられる機会を得られるよう、教育課程外の活動も含めて学生が育つ環境をデザインする必要があろう。さらにキャリア教育の一環としての就職支援において、いたずらに就職実績のみに傾注するのではなく、学生と十分なコミュニケーションを図りながら、その特長を踏まえて、学生が生かしてもらえる職場をマッチングさせる手順を確立していくことが望まれる。就職後はもちろん就職先の職員であるが、特に経験の少ない者にとっては、安心して戻ってきて相談できる場が必要であり、その役割を最も十分に果たせるのは養成校である。それを個々の教職員の努力や囲い込みに委ねず、ホームカミングデーのような具体的なプログラムとして組織的に取組むことがより有効であろう。心理的安全だけでなく、専門性を豊かにしていくための学びとして、研修等のリカレント教育を地域的協働のもとに企画するなども望ましい。

これらを一気に展開して保育士の魅力が急激に高めるということは容易ではない。しかし、その 1 つでも 2 つでも、可能な範囲で試行錯誤を重ねることが重要である。そのためにハンドブックを作成したので活用されたい。小さな試行錯誤であっても、地域における相互に開かれた関係性の展開と共に進めることで、事例を交換したり洗練したりしていくことができる。オンラインで地域という物理的制約を超えた学び合いも可能になってきているので、より仲間を見つけやすくなっている。

こうした取組に、保育士のやりがいや魅力という観点でアプローチすることが、養成教育にも現職研修にも意義深いことが明らかになったといえる。また養成教育の質だけでなく保育現場の保育の質にも関わってくることが示唆された。

なお、本調査は、新型コロナウイルス感染症により多くの養成校がその対応に迫られ続けている状況下で実施されました。そのような中で調査の趣旨と意義をご理解くださり、調査に直接、間接にご協力いただいた養成校の教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

1）全国保育士養成協議会（2020）「指定保育士養成施設卒業者の内定先等に関する調査研究」（2019（令和元年度）厚生労働省こども・子育て支援推進調査研究事業）

資　料

◇ 保育士養成施設における保育の魅力向上に関する調査研究

質問紙調査票

◇ ハンドブック

Ｑ＆Ａ から学ぶ好事例「保育の魅力向上のための養成校の取組」

令和２年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）
「保育士養成施設における保育の魅力向上に関する調査研究」調査ご協力のお願い

一般社団法人　全国保育士養成協議会

全国保育士養成協議会では令和２年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）「保育士養成施設における保育の魅力向上に関する調査研究」に取り組んでおります。

本研究は、指定保育士養成施設（以下養成施設といいます）における効果的なカリキュラムのあり方や保育実習の方法及び保育の魅力向上に向けた取組等について明らかにし、効果的な事例等を収集、提供することを目的としています。

今回ご協力をお願いする調査は、平成 31 年４月１日時点で指定保育士養成施設として認可を受けている全養成施設の学科長等養成課程の責任のある教員の方を対象にいたしまして、①プロフィール（学校種別、修業年限、所在地、取得可能な資格・免許、卒業生の資格・免許取得状況、業種別就職者数等）、②養成施設として考える保育士の魅力及びキャリア支援、③保育士の魅力向上に資する効果的なカリキュラム、④保育士の魅力向上につながる保育現場、自治体、保育団体等との連携、⑤中高生に向けた取組等についてお聞きするものです。

なお、本調査に関しては、以下の点につきまして十分に留意をして実施をいたします。

＜倫理的配慮＞

この調査は強制力をもつものではありません。調査は無記名で実施をいたします。調査への回答は自由意志で、回答を拒否したり、途中で中断したりした場合でも、貴施設に不利益になることはありません。

なお、調査票にご回答をいただきましたことをもちまして、本調査へのご協力の同意が得られたこととさせていただきます。

＜情報の取り扱いと管理について＞

本調査で得られた情報は、目的以外に使用することはありません。調査結果は、統計的に処理し、個々の養成施設が特定されることはありません。自由記述の内容に関しましても、養成施設が特定されないよう十分に配慮をいたします。

また、調査結果データは特定の USB メモリーに保存したうえ、ご回答いただいた調査票とともに、全国保育士養成協議会で施錠できるロッカー等に保管・管理し、一定期間が過ぎた後、溶解による処理をします。調査結果により得られた成果は、報告書を作成し、厚生労働省子ども家庭局保育課に報告をするとともに、本会ホームページ等にて報告をいたします。

本務ご多忙のところ誠に恐縮ではございますが、研究の趣旨をご理解のうえ、何卒ご協力賜りますようお願い申し上げます。なお、養成施設としての指定が学校内において複数ある場合は、「指定保育士養成施設ごと」にご回答をお願い申し上げます。

■学科長等養成課程の責任ある教員の方にご回答をお願い申し上げます。（無記名式）

■ご回答後は、調査票を同封の返信用封筒に入れて、切手を貼らずに令和２年 12 月 19 日（土）までに投函してください。

【本調査に関するお問合せ先】
一般社団法人全国保育士養成協議会　保育士養成研究所（事業調査課）
東京都豊島区高田 3-19-10　TEL：03-3590-5571
E-mail：kenkyusho@hoyokyo.or.jp

Q1. 貴養成施設について

Q1-1.該当する学校種別についてお答えください。

1．四年制大学	2．短期大学	3．専門学校
4．通信制大学・短期大学・専門学校		5．その他

Q1-2. 修業年限についてお答えください。

1．4年	2．3年	3．2年

Q1-3. 所在地についてお答えください。

（　　）都・ 道・ 府・ 県

Q1-4. 貴養成施設における保育士資格以外の取得可能な資格・免許（受験資格も含む）についてうかがいます。該当するものすべてに○をつけてください。その他に○をつけた場合は、具体的に取得可能な資格・免許をお答えください。

1．幼稚園教諭１種免許	2．幼稚園教諭２種免許	3．社会福祉士
4．介護福祉士	5．小学校教諭１種免許	6．小学校教諭２種免許
7．その他（　　）		

Q1-5. 今年度（2020 年度）の保育士養成課程のある学科・専攻等の入学定員と、指定保育士養成施設として認可を受けている入学定員をお答えください。

入学定員（　　）人　　保育士養成定員（　　）人

Q1-6. 貴養成施設は保育士資格取得を卒業要件としていますか。

1．保育士資格を卒業要件としている	2．保育士資格を卒業要件としていない

Q1-7. 昨年度（2019 年度）の卒業生の資格・免許取得状況について、以下の資格・免許の取得者の人数をお答えください。取得者がいない場合、卒業生がまだいない場合は、“0”人とご記入ください。

		卒業生の合計人数	人
1．保育士資格	人	2．幼稚園教諭１種免許	人
3．幼稚園教諭２種免許	人	4．小学校教諭１種免許	人
5．小学校教諭２種免許	人		

Q1-8. 昨年度（2019 年度）の卒業生の業種別就職者の人数をお答えください。卒業生がまだいない場合は、“0”人とご記入ください。

		卒業生の合計人数	人
1．私立保育所（認可保育所）	人	2．公立保育所（認可保育所）	人
3．私立幼稚園	人	4．公立幼稚園	人
5．私立認定こども園	人	6．公立認定こども園	人
7．小学校（私立・公立）	人	8．保育所以外の児童福祉施設（小規模保育事業、家庭的保育事業を含む）	人
9．認可外保育所（企業主導型保育事業を含む）	人	10．公務員（保育所・幼稚園・認定こども園以外）	人
11．一般企業等	人	12．その他	人

Q1-9. 保育士として就職をした過去5年以内の卒業生について、現在の就労状況をどの程度把握していますか。

1．1～2割程度の就労状況を把握している	2．5割程度の就労状況を把握している
3．7～8割の就労状況を把握している	4．ほぼ全員の就労状況を把握している
5．その他（　　）	

Q1-10. どのように把握をされているのか、把握方法や、頻度等、具体的にお答えください。

Q2. 養成施設の教員として考える保育士の魅力及びキャリア支援について

Q2-1. 保育士養成施設の教員として、保育士という職業のやりがいや魅力を向上させるために、今より必要な取組として特に当てはまると思うものを5つまで選択して○をつけてください。（複数回答可）

1．子どもとの関わりや成長を実感できる	2．病児病後児や特別な支援が必要な子どもの保育に携われる
3．保護者と子どもの成長を共有できる	4．自分自身のやりがいや喜びを得られる
5．スタッフ、同僚と共に成長できる	6．地域の子育て支援に貢献できる
7．社会的になくてはならない仕事と位置づけられる	8．幼い頃からあこがれや魅力を感じる仕事と位置づけられる
9．就職や転職がしやすい	10. 養成施設での授業や実習といった学生時代の学びを活かせる
11. 給与・福利厚生が充実している	12. 休暇の保障や労働時間が適切である
13. 研修など学びや成長を支える環境が整っている	14. 自身のキャリアアップができる
15. その他（　　）	

Q2-2. 貴養成施設が現在行っている保育士として就職するための、また保育士として就労することの不安低減につながるための、キャリア支援にはどのようなものがありますか。当てはまるものすべてに○をつけてください。（複数回答可）

1．求人票の配信	2．保育所フェアの紹介
3．複数の保育施設の採用試験を同時受験可能とする	4．保育士・保育所支援センターの周知
5．保育施設の採用試験対策（面接練習など）	6．学生の就職希望と合う保育所の案内、マッチング
7．その他	8．特に行っていない
（　　）	

Q2-3. 貴養成施設では、保育士として悩みや課題を抱えている卒業生が母校で相談できる環境づくりを行っていますか。

1．行っている	2．特に行っていない

Q2-4. Q2-3の回答で、「1．行っている」に○をつけた方にうかがいます。具体的な取組についてお答えください。

Q2-5. 貴養成施設では、保育現場、自治体、保育団体等と連携して卒業後１～２年目の保育士を対象とした研修等の取組を行っていますか。

１．行っている　→　行っている場合、連携しているところすべてに○をつけてください（複数回答可） ①保育現場　②自治体　③保育団体等 ２．特に行っていない

Q2-6. Q2-5 の回答で、「１．行っている」に○をつけた方にうかがいます。具体的な取組についてお答えください。

Q2-7. 貴養成施設では、保育士を離職した卒業生に対して、復職のためのフォローアップの取組を行っていますか。

１．行っている	２．特に行っていない

Q2-8. Q2-7 の回答で、「１．行っている」に○をつけた方にうかがいます。具体的な取組についてお答えください。

Q2-9. 貴養成施設では、卒業生の横のつながりをつくるためのサポートを行っていますか。

１．行っている	２．特に行っていない

Q2-10. Q2-9 の回答で、「１．行っている」に○をつけた方にうかがいます。具体的な取組についてお答えください。

Q2-11. 貴養成施設では、ホームページ等により、保育士のやりがいや魅力を発信する取組を行っていますか。

１．行っている	２．特に行っていない

Q2-12. Q2-11 の回答で、「１．行っている」に○をつけた方にうかがいます。具体的な取組についてお答えください。

Q3. 保育士の魅力向上に資する効果的なカリキュラムについて

Q3-1. 保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムを工夫していますか。

1．はい	2．いいえ

Q3-2. Q3-1の回答で、「1．はい」に○をつけた方にうかがいます。
なお、「2．いいえ」に○をつけた方は、Q3-3へお進みください。

Q3-2-1. それはどのような工夫ですか。当てはまるものすべてに○をつけてください。（複数回答可）

1．カリキュラム・ポリシーに示している	2．教科配置を工夫している
3．時間割の工夫をしている	4．教科間連携を図っている
5．教科の目標として示している	6．学生自身が子どもの成長や充実を感じられるようにしている
7．モデルとなる保育士の実践例に触れる機会を多くしている	8．保育士になってからのキャリアを思い描けるようにしている
9．保護者に必要とされる実感をもてるようにしている	10．学生自身が自分の力を活かせると感じられるようにしている
11．その他（　　）	

Q3-2-2. 「実習」及び「実習指導」以外の科目で、保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムを主に具体化している教科目とその内容を３つまで挙げてください。保育士養成課程を構成する教科目の場合は、以下の選択肢から科目を選び、その番号をご記入ください。なお、保育士養成課程科目以外の科目でも構いません。その場合は具体的な科目名称をご記入ください。

＜保育士養成課程を構成する教科目＞

貴養成施設独自の名称を用いている場合も下記の養成施設基準に定められた科目の番号でお答えください。

1．保育原理	2．教育原理	3．子ども家庭福祉
4．社会福祉	5．子ども家庭支援論	6．社会的養護Ⅰ
7．保育者論	8．保育の心理学	9．子ども家庭支援の心理学
10．子どもの理解と援助	11．子どもの保健	12．子どもの食と栄養
13．保育の計画と評価	14．保育内容総論	15．保育内容演習
16．保育内容の理解と方法	17．乳児保育Ⅰ	18．乳児保育Ⅱ
19．子どもの健康と安全	20．障害児保育	21．社会的養護Ⅱ
22．子育て支援	23．保育実践演習	

教科目名（番号または名称）：	配当年次　1年　2年　3年　4年　（当てはまる年次に○）
具体的な内容	
教科目名（番号または名称）：	配当年次　1年　2年　3年　4年　（当てはまる年次に○）
具体的な内容	
教科目名（番号または名称）：	配当年次　1年　2年　3年　4年　（当てはまる年次に○）
具体的な内容	

Q3-2-3. 各実習指導において、保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるために具体化している取組について、以下の選択肢の中から当てはまるものすべてを番号で選び（複数回答可）、その具体的な方法をご記入ください。

＜保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるために具体化している取組＞

1．保育現場での体験
2．保育現場以外で子どもと関わる体験
3．現場の外部講師を招いての授業
4．保育士の魅力についての学生同士の共有
5．子ども理解や関わりの振り返り
6．保育士による指導の振り返り
7．保育を捉える視点作り
8．実習園の選択方法
9．実習指導と他教科との連携
10．その他

回答例　＜保育実習指導Ⅱ　事前事後指導＞
具体化している取組（番号で記入）：　1　、8
具体的な方法
（　卒業生でもある保育所長を招き、保育士として乗り越えてきたことややりがいについて話してもらっている。また、学生の保育職の魅力が高まるような実習園に配属している。）

＜保育実習指導Ⅰ（保育所）　事前事後指導＞
具体化している取組（番号で記入）：＿＿＿＿＿＿＿＿
具体的な方法
（　　）

＜保育実習指導Ⅰ（施設）　事前事後指導＞
具体化している取組（番号で記入）：＿＿＿＿＿＿＿＿
具体的な方法
（　　）

＜保育実習指導Ⅱ　事前事後指導＞
具体化している取組組（番号で記入）：＿＿＿＿＿＿＿＿
具体的な方法
（　　）

＜保育実習指導Ⅲ　事前事後指導＞
具体化している取組（番号で記入）：＿＿＿＿＿＿＿＿
具体的な方法
（　　）

Q3-3. 各実習における実習先の決定方法について、以下の選択肢の中から当てはまるものすべてを選び、その番号をご記入ください。（複数回答可）

＜実習先の決定方法＞
1．学生の希望による
2．学生の特性に応じて養成校が決定する
3．実習協力園があり、その中で振り分ける
4．実習協力園と学生の特性に応じて養成校が決定する
5．その他（具体的にご記入ください）

実習	決定方法（番号で記入）	実習	決定方法（番号で記入）
保育実習Ⅰ（保育所）		保育実習Ⅰ（施設）	
保育実習Ⅱ		保育実習Ⅲ	

Q3-4. 現在実施はしていないが、保育士のやりがいや魅力を学生に伝えるためのカリキュラムの工夫として考えられることをご記入ください。

Q 4. 保育士の魅力向上につながる保育現場、自治体、保育団体等との連携について

Q4-1. 貴養成施設では、保育現場、自治体、保育団体等と連携して養成施設の学生と現役保育士が交流、対話する取組を行っていますか。

1．行っている　→　行っている場合、連携しているところすべてに○をつけてください（複数回答可）
①保育現場　②自治体　③保育団体等
2．特に行っていない

Q4-2. Q4-1の回答で、「1．行っている」に○をつけた方にうかがいます。具体的な取組についてお答えください。

Q4-3. 貴養成施設では、保育現場、自治体、保育団体等と連携して実習指導に携わる保育士の研修を行っていますか。

1．行っている　→　行っている場合、連携しているところすべてに○をつけてください（複数回答可）
①保育現場　②自治体　③保育団体等
2．特に行っていない

Q4-4. Q4-3 の回答で、「1．行っている」に○をつけた方にうかがいます。具体的な取組についてお答えください。

Q4-5. 貴養成施設では、保育現場、自治体、保育団体等と連携して保育所の ICT 化や業務効率化を支援する取組を行っていますか。

1．行っている　→　行っている場合、連携しているところすべてに○をつけてください（複数回答可） ①保育現場　②自治体　③保育団体等 2．特に行っていない

Q4-6. Q4-5 の回答で、「1．行っている」に○をつけた方にうかがいます。具体的な取組についてお答えください。

Q5. 保育士の魅力向上につながる中学生・高校生向けの取組について

養成施設として中学生・高校生向けに行っている取組の中で、中学生・高校生に保育士の魅力を伝えることにつながっていることはありますか。当てはまるものすべてに○をつけてください。（複数回答可）

1．オープンキャンパスにおける取組	2．進路ガイダンス等における取組
3．中学校・高等学校等に出向いての講義	4．その他の取り組み

選択した取組の具体的な内容を記入してください。

Q6. 今後、保育士の魅力向上をすすめるために必要な取組について

今後、保育士の魅力向上をすすめるために、所属する養成施設として改善が必要な事項について、特に当てはまるものを４つまで選んで○をつけてください。（複数回答可）

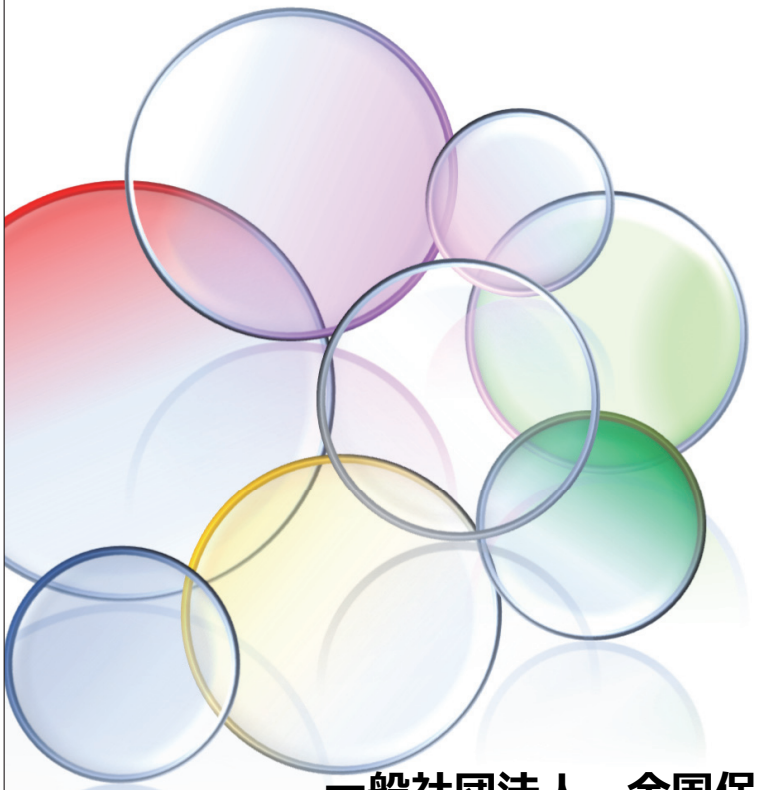
1．養成課程内の教員間の連携	2．養成施設内の教員と事務職員との連携
3．養成施設と保育現場との連携	4．養成施設と自治体との連携
5．養成施設と保育団体等との連携	6．中・高校生に向けた取組
7．社会への保育士のやりがいや魅力の発信	8．教職員一人ひとりの意識の変化
9．学生の保育現場での体験の促進	10. 保育現場以外での社会経験の促進
11. 在学生へのキャリア支援	12. 卒業生へのキャリア支援
13. 実習指導の充実	14. 講義や演習科目のカリキュラムの充実
15. その他（　　）	

設問は以上です。お忙しいところご協力いただきましてありがとうございました。

令和2年度　子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）
保育士養成施設における保育士の魅力向上に関する調査研究

Ｑ＆Ａから学ぶ好事例

保育士の魅力向上のための養成校の取組



一般社団法人　全国保育士養成協議会

目　次

はじめに …… P1

キーワード（1）中高生への働きかけ …… P2

Q1　中学生や高校生に保育士の魅力を伝えるのに養成校はどのような貢献ができるでしょうか。
Q2　学生募集の場面で保育の仕事についてどのように伝えたらよいでしょうか。
Q3　中学生や高校生に向けて養成校はどのような情報発信をすることができるでしょうか。
Q4　入学前教育ではどのような取組をすればよいでしょうか。

キーワード（2）教科目の工夫 …… P4

Q1　保育士の魅力を伝えられるような教科目の工夫を教えてください。
Q2　教員同士で連携して授業をするために、どのように進めたらよいでしょうか。
Q3　保育士の資格を取らない選択をした学生には、保育士の魅力が伝えられません。

キーワード（3）実習指導 …… P6

Q1　実習後に保育に対してマイナスな印象を抱き、学ぶ意欲が低下してしまうことがあります。
Q2　実習指導担当者だけでは実習に不安を抱く学生や個別に指導が必要な学生への指導が行き届きません。
Q3　実習担当者間の連携がとれておらず、教員によって伝える内容が異なることがあります。
Q4　実習指導の内容が、実習のマナーや書類の書き方の指導ばかりになっています。
Q5　保育所実習の事前指導では、設定保育を想定した模擬保育を行っています。
Q6　実習を行う順序、実習施設の選定、実習の実施方法に関する工夫を教えてください。

キーワード（4）キャリア教育 …… P10

Q1　学生主体の職業選択を促すためにはどうしたらよいでしょうか。
Q2　キャリア教育を特定の教職員で行うことに限界があります。

キーワード（5）正課外活動 …… P12

Q1　教科目や保育実習の他に学生が保育の現場に入る機会をどのようにつくったらよいでしょうか。
Q2　保育士の魅力向上につながる学生の主体的活動をどのようにサポートしたらよいでしょうか。
Q3　保育現場でのボランティア活動にどのようなサポートすればよいでしょうか。

キーワード（6）保育現場等との連携 …… P14

Q1　実習指導等の授業や、キャリア教育・就職支援の一環で、ゲストティーチャーを招いて現場の話をしていただいたり、懇談会の場を設けたりしていますが、それ以外に連携できることはあるでしょうか。

キーワード（7）就職支援 …… P15

Q1　就職希望者と就職先のミスマッチングが生じないか不安です。
Q2　入学後、保育士になることに自信がなくなり、他職種への就職を希望する学生がいます。

キーワード（8）リカレント教育等卒後支援 …… P17

Q1　卒業生が就職先に適応できているか心配です。
Q2　日々の授業だけでなく、リカレント教育も行うのは、養成校の業務が増えて大変だと思ってしまいます。

保育士の魅力向上に関する取組：チェックリスト …… P19

保育士の魅力向上の取組イメージ図 …… P20

おわりに …… P21

はじめに

「Q&Aから学ぶ　保育士の魅力向上のための養成校の取組」は、保育士養成校が保育士の魅力向上のための取組を進める際のガイドとして作成しました。

「保育の現場・職業の魅力向上に関する報告書」（2020年9月30日、厚生労働省「保育の現場・職業の魅力向上検討会」）において、養成校における教育の充実と質の向上が求められています。
そこでは、「養成校における教育の充実と取組の発信」「養成校の教育の発信」「保育実習の改善に向けた共通研修の開始」「卒業生のフォローアップ」という観点から、養成校に期待される取組が示されています。

この冊子は、そうした取組を実際に養成校で進めていく際のヒントを集めて、Q&Aの形で示したものです。
令和2（2020）年度　子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）「保育士養成施設における保育士の魅力向上に関する調査研究」における調査結果のうち、特にヒアリング調査を踏まえ、また、全国保育士養成協議会が過去に実施した子ども・子育て支援推進調査研究事業の調査結果等も参照しながら、執筆担当者間で議論を重ねて作成しました。

子どもの最善の利益を保障するために保育の質の向上が求められ、そのための人材の確保・育成が喫緊の課題となっています。保育の魅力を発信して、多くの人材を集め、その専門性を育てていくことが重要な課題となる中で、養成校の役割は小さくありません。
養成校を開き、養成教育の質を向上させるとともに、地域の保育現場や関係機関との協働を進めていく必要があります。
この冊子のさまざまなヒントをぜひ参考にしていただき、できることから一歩ずつ取組んで参りましょう。

2021年3月

執筆者
伊藤理絵（岡崎女子短期大学）、熊谷享子（豊橋創造大学短期大学部）
江津和也（淑徳大学）、水落洋志（東海学園大学）、矢藤誠慈郎（和洋女子大学）

＊所属は2021年3月現在

キーワード（１）中高生への働きかけ

Q1. 中学生や高校生に保育士の魅力を伝えるのに養成校はどのような貢献ができるでしょうか。

A. 養成校の教員の専門性を通して保育について伝えることができます。

＊系列や提携している中学校・高校等では、生徒たちに対して養成校の教員が保育に関わる授業を行うことがあります。
＊高大・高専連携の協定として「総合的な学習の時間」等の学びとして保育士養成教育の一部を開放したり、保育講座を実施したりする養成校も少なくありません。
＊その際には自らの専門的な立場から保育という営みについて積極的に語ってみましょう。生徒たちにとって保育という営みの面白さや奥深さを知るきっかけとなります。

Q2. 学生募集の場面で保育の仕事についてどのように伝えたらよいでしょうか。

A. オープンキャンパスや出張講義では、高校生が保育の仕事を知る貴重な機会であることを踏まえて語りかけましょう。

＊オープンキャンパスや出張講義は第一義的には養成校の学生募集のためのものです。しかし、保育士の魅力を高校生に伝える貴重な機会ともいえます。こうした意識も持って取組むことが必要です。

＊模擬授業として子どもの発達過程、保育技術、保育の現状などを講義し、保育士として求められる専門性について理解を促すことが期待できます。
＊オープンキャンパスで現場で保育士として働く卒業生の話を取り入れることによって、保育士の魅力を伝えている養成校もあります。
＊オープンキャンパスでは在学生による活動を取り入れ、その姿をみてもらうことも考えられます。
＊系列の保育施設がある場合には、そこで実習する在学生の姿や子どもの様子を見学するプログラムを入れることによって、具体的に保育の仕事について具体的なイメージをもってもらうことも期待できます。

Q3. 中学生や高校生に向けて養成校はどのような情報発信をすることができるでしょうか。

A. ICTを活用して保育士の専門性や魅力について発信することができます。

＊中高生はスマートフォンなどの情報機器を日常的に活用しています。
＊養成校のウェブサイトを進路選択の資料として閲覧する機会は少なくありません。ウェブサイトを充実させるようにしましょう。
＊保育の仕事を知ってもらうためにはウェブサイトに資格や職業、保育の専門性について情報を掲載することが有効です。
＊ブログや動画サイトを活用して、授業や課外活動の様子を積極的に発信してみましょう。保育士になるための学びについて具体的なイメージをもってもらうことにつながります。

Q4. 入学前教育ではどのような取組をすればよいでしょうか。

A. 入学後の初年次教育とつながるような取組をしてみましょう。

＊総合型選抜や推薦入試によって秋には進路が決定している高校生も少なくありません。養成校の学生としての意識づけを図るためにも入学前教育は大切です。

＊養成校での学習を不安なく開始できるようにするため、基礎学力の維持向上や保育の表現技術などの習得を促すような課題を出すことが考えられます。
＊子どもを理解し、保育の魅力を感じられるような書籍を読むことを課題とすることも考えられます。

＊入学前教育での新入生の状況を踏まえた入学後の支援が必要です。また、入学後の教科目と連続させることも求められます。
＊入学後のオリエンテーションや教科目において、入学前教育の課題に対するフィードバックすると効果的です。

キーワード（２）教科目の工夫

Q1．保育士の魅力を伝えられるような教科目の工夫を教えてください。

A．保育士の魅力や学生に身につけて欲しい力を見直した上で、何を伝えるのか整理しましょう。

＊建学の精神やカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーに基づき、保育士としてのあるべき姿を明確にし、教員間で共有した上で、どの教科目でも一貫して学生に伝えられるようにすることが基本です。

＊子どもたちと直接関わることは、魅力が伝わりやすく、実践と理論の往還を行いながら学びを深めることができます。
＊実習以外にも子どもと関わることができるようにボランティアやインターンシップ等の教科目を設けたり、既存の教科目の中で子どもと関わる機会を作ったりすることはできます。

＊関連する教科目の中で子どもが楽しめる活動を企画、実行することによって、どうしたら子どもが楽しめるのか、子どもの目線で考えられる力や実践力が身につきます。

＊各教科目の中で保育士の魅力を伝えつつ、保育に関わる現状や課題も伝え、理解できるようにしておきましょう。実習での経験について、現状を踏まえて、考察することができるようになります。これは意欲低下を防ぐことにつながります。

他にも・・・・

＊保育は「生涯にわたる人格形成にとって重要な時期」に関わることから、子どもだけでなく、生涯発達の視点も重視する。

＊初年次教育の教科目の中で、保育士の魅力を伝える内容を組み込む。

＊宿泊研修などの生活場面で、保育現場での取組と関連付けて指導していく。

Q2．教員同士で連携して授業をするために、どのように進めたらよいでしょうか。

A. お互いの教科目を見合って内容を精査したり、他の担当者の教科目と連携した授業を計画したり、できるところから取組んでみましょう。

＊全ての教員がいきなり連携しようとしても難しいものです。話しやすい教員同士でまずは試みてはいかがでしょうか。
＊気軽に話ができるようにランチミーティングなどを開催してもいいでしょう。

＊これらに取り組むために、連携の必要性の理解や保育士養成への熱意が求められますが、組織の長の役割も大切です。所属する教員の意識改革、新任者への教育、保育学領域以外を専門とする教員への支援等、よりよい保育士養成を目指した組織づくりに、積極的に取り組むことが求められます。

他にも・・・・

＊ルーブリックを通して、学びが足りない部分や重複部分などを明確にし、それを基に話し合う。

Q3．保育士の資格を取らない選択をした学生には、保育士の魅力が伝えられません。

A. 保育の基礎を学ぶ教科目を選択前の時期に設定したり、卒業必修にしたりしてはいかがでしょうか。

＊保育が学べる環境があるのに、学ばないまま卒業するのはもったいないことです。
＊保育の道に直接進まなくても、保育のすばらしさを別の領域で広める役割を担ってもらいたいと思います。
＊他の分野に進んだ卒業生が保育の魅力を発信することで、今まで保育について興味がなかった人や、誤解している人たちに保育の魅力を伝えることができるのではないでしょうか。

キーワード（３） 実習指導

Q1. 実習後に保育に対してマイナスな印象を抱き、学ぶ意欲が低下してしまうことがあります。

A. 個々に話を聞き、体験を客観的に捉えられるようにしましょう。

＊様々な実習施設がある中で、学生自身が思い描く保育とは異なる場面に遭遇することはあるでしょう。
＊様々な原因が考えられますが、学生自身の保育に対する理解不足や保育理念の不一致、自身の能力不足や適性の有無の自覚等があります。
＊学生が体験したマイナスのエピソードについて丁寧に聴取し、それに対して保育の基本を伝えながら、学生が客観的に振り返ることができるように指導していきます。
＊学生のわだかまりを解消するためには、個別、あるいは少人数での事後指導が望ましいでしょう。
＊学生指導を通して、教員自身が学生にとっての対人援助職モデルとなり得ることも意識して欲しいところです。

＊慎重に実習施設を選択していても、学生が不適切な保育を目にしてしまう可能性もゼロではありません。
＊教員が情報を把握し、場合によっては、実習施設に事実を確認して対応する必要があります。

＊保育士養成倫理綱領にあるように、「学生の学ぶ権利」を保障するため、実習施設の情報を把握することに努め、「指導能力が充実している施設に実習配当を行う」ことも保育士の魅力向上につながります。

他にも・・・・

＊学生同士が体験を共有し、保育の在り方をディスカッションできるグループワークなどの機会を作る。
＊学生の特性と実習施設の指導内容とのマッチングを考慮して実習施設を配属する。
＊実習訪問時に教員が反省会や保育カンファレンスに参加する。
＊学びの可視化と自己課題の明確化を行い、意欲につなげる。

Q2．実習指導担当者だけでは実習に不安を抱く学生や個別に指導が必要な学生への指導が行き届きません。

A. 他の教員や職員とも連携しながら進めましょう。

＊実習指導担当者だけで丁寧な個別指導を行うことは難しいでしょう。
＊全教員に学生を少人数ずつ割り振り、実習に関する指導の役割を一部担えないでしょうか。クラス担任や実習訪問の担当者等が考えられます。
＊全教員が関わることで、実習指導に共通認識が持てることも利点です。
＊実習に関わる職員と連携し、学生への実習支援において協働をすすめることも効果的です。

他にも・・・・

＊実習を終えた先輩の話を聞く機会をつくる。
＊現場で活躍している卒業生や職員の話を聞く。
＊大学内に実習センターや子育て支援室等設置し、実務経験のある保育士をおき、学生指導において協働していく。

Q3．実習指導担当者間の連携がとれておらず、教員によって伝える内容が異なることがあります。

A. 他の担当者の実習指導を見る機会を作ってみてはいかがでしょうか。

＊実習指導担当者が連携できないことで、共通認識ができず、ちぐはぐな内容を伝えてしまうこともあります。それによって不利益を被るのは学生であり、保育士の魅力を損なってしまうことにもつながります。まずはお互い見て学ぶところから始めてみましょう。
＊学生にとって最初の実習の実習指導の授業に、実習指導担当者全員が関わって進めるようにすることも効果的です。
＊連携が円滑に進むことによって、各実習での学びが連続的に、発展的に深まっていくでしょう。

他にも・・・・

＊実習の種別を超えて、指導を一本化する。
＊全教員が実習指導に関わる。

Q4．実習指導の内容が、実習のマナーや書類の書き方の指導ばかりになっています。

A. 他の教科目で取組めることはないかを見直しましょう。

＊マナーや言葉遣い等に関すること、一般的な書類の書き方など、キャリア教育に関わる教科目や就職支援の講座などで取組めることはないでしょうか。各担当者と連携し、それぞれの教科目に含められる内容を検討しましょう。
＊どの教科目で何をするのか話し合うことで、教科目間で重複する内容や教員間の教授内容のずれを整理することにもつながります。

＊記録の方法や計画の立案等、多様な方法を用いる園が増えてきています。特定の書式の記録を知っているだけでは対応できなくなってきています。
＊書式に関わらず、子どもの育ちを見る視点、環境構成の意味、養護と教育を踏まえた保育者の言動のねらいなど、学生が何を見て、何を学んだらよいのかを押さえた指導が必要です。

＊実習指導では具体的なイメージが持てるように、映像資料を用いたり、定められた実習以外に、短期間の見学実習やボランティア等を行い、理解を深めることも重要です。

Q5．保育所実習の事前指導では、設定保育を想定した模擬保育を行っています。

A. 様々な保育形態について学べる機会を作りましょう。

＊子どもの主体性を重視した保育を学ぶためには、画一的な方法での模擬保育だけでは不十分ではないでしょうか。
＊例えば、ドキュメンテーションなどの記録に基づいて子どもたちが自由に遊べるコーナーの環境を考えてみたり、一つの遊びから、遊びの発展の可能性を考え、それに対する必要な環境を話し合ってみたりといった、発展的な内容を取り入れてみるのもいいでしょう。

他にも・・・・

＊領域に関する教科目等と連携し、様々な保育を学べるようにする。
＊実習指導の中でも子どもとの関わりを通して学べるように現場と連携する。

Q6．実習を行う順序、実習施設の選定、実習の実施方法に関する工夫を教えてください。

A．育てたい保育士の姿に学生が近づけるように、実習の積み重ねや連続性を意識しつつ、どの実習で何を学ぶのかを明確にし、それに合った方法を工夫しましょう。

＊子どもとしっかり向きあい、子ども一人一人の気持ちや背景を十分に理解した支援についての学びを重視する場合、施設実習を最初の実習とするのも一つです。
＊保育所実習と施設実習の学びを連続性、発展性のあるものにするために、担当者が連携し、学びの内容を整理しましょう。
＊特に保育所の実習指導担当者が保育所のみを想定して伝えるのではなく、福祉職としての保育士の在り方を伝える意識を持つことも大切です。

＊保育所で2回実習を行う（保育実習Ⅱを選択する）場合、実習施設の選定方法によって配慮する内容も変わってきます。
＊同一実習施設では、統一された指導や評価を受けることができます。また、個人内の子どもの発達や理解が深まります。しかし、学生が多様な保育を学ぶ機会が少なくなります。
＊異なる実習施設では、1回目とは異なる保育方針、保育方法等の理解ができますが、子どもとの関わりや実習園の理解が新たに必要となり、学びの積み重ね、発展という面ではやや弱くなります。

＊保育所の実習施設として、幼保連携型認定こども園、小規模保育事業や事業所内保育事業も認められていますが、学びの蓄積を考慮して実習施設を選定していきましょう。

他にも・・・・

＊実習を各学期の中間に設定し、教科目ごとに実習と関連させながら学べるようにする。
＊実習を分割して行い（例えば週に1日ずつ）、その都度振り返りを丁寧に行う。
＊同じ実習施設で長期にわたる実習を計画することで、個々の子どもの発達や心理について理解が深まり、長期の指導計画に基づく保育内容や保育士の関わりなどを理解することができる。

キーワード（４）キャリア教育

Q1. 学生主体の職業選択を促すためにはどうしたらよいでしょうか。

A. 具体的な年次計画と目標を個別に作成し、継続的なキャリア形成を行いましょう。

＊保育士への憧れや魅力をもち入学してきた学生が多い中で、卒業時の具体的な保育士像をイメージできる学生は少ないのではないでしょか。

＊具体的な保育士像をイメージするためにも、入学後にどんな保育士になりたいかやそのためには何を学ぶべきかなどの計画を立て実行することが必要となります。
＊明確な目標や計画が不明確な状態が継続すると、保育職への関心や意欲が低下し、それは学習場面にも影響します。
＊在学中に、将来を見据え、具体的な保育士像をイメージするために年次計画と目標を立て、PDCAサイクルを踏まえた継続的なキャリア形成を行いましょう。

＊具体的な目標設定のためにも、現場や自治体等との連携も重要になります。現場で子どもたちと関わったり、保育士の職務を目の当たりにする中で、より具体的な保育士像をイメージできたり、保育職の魅力への新たな気づきにつながります。

＊以上のような取組を通じて、学生が保育職の魅力を感じ取れるようなキャリア教育を行っていきましょう。

他にも・・・・

＊キャリア形成にかかわる講座などの年次計画を再考する。

＊学生の職業選択をあらかじめ絞りすぎることで、主体的に思考する幅を狭めてしまっている可能性もある。したがって、在学中に学生自ら社会に出るための方向性を決定できる教育を行う。

Q2. キャリア教育を特定の教職員で行うことに限界があります。

A. 全学的なキャリア教育の位置づけや、プログラムを再考してみましょう。

＊キャリア教育は、担当教職員のみで担い実施されていることが多いと思います。
＊しかしながら、そこに関わる教職員だけでは、最終的な出口を意識するあまり就職試験の対策講座などが中心になってしまっているかもしれません。

＊本来、キャリア教育とは、キャリア形成、職業意識、社会人・職業人の基盤となる能力の獲得を目的とするものです。
＊したがって、全学的に学生へキャリア教育を行っているという意識とプログラムの再考が必要になります。
＊例えば、保育士の魅力を伝えるために、教科目や正課外の活動を通してどのような工夫をしているかなど、全てが点ではなく、線でつながることを意識して、キャリア教育を行っていくことが大切です。

＊以上のことから、再度、全学的にキャリア教育を見直し、一人ひとりの学生がどのような人生を歩みたいかや、やりがいをもってできる仕事とは何かを考えられる力の形成をサポートできるようにしましょう。

他にも・・・・

＊全学的なキャリア教育の位置づけや理解、個々ができることなど改めて見直すためにも、教職員研修を通じて共通理解を図る。

＊個々のキャリア形成に応じたサポートを行うための年次計画と目標を立てる。

＊個別にきめ細やかなサポートをするためにも教職員と学生の間に信頼関係が基盤となるため、互いに信頼関係を構築できる人間関係づくりを行う。

キーワード（５）正課外活動

Q1. 教科目や保育実習の他に学生が保育の現場に入る機会をどのようにつくったらよいでしょうか。

A. 保育施設に学生が行く機会が得られるようにサポートしましょう。

＊保育現場で実際に子どもや保育者の姿を見る機会は保育実習に向けた準備となるだけでなく、保育士という職業への理解にもつながります。
＊授業の空き時間などに学生が系列の保育施設や近隣の子育て支援センターに定期的に赴くことなどが考えられます。

＊保育の現場に入ることは学生にとってハードルが高いものです。教職員がきっかけをつくることが大切です。養成校の教職員が保育施設と学生との橋渡しをし、時間や人数などの調整をすることで円滑に活動を進めることができます。ある養成校ではこうしたサポートによって、任意であっても、ほぼすべての学生が参加している例もあります。

＊保育現場で、子どもや保護者と関わることによって子どもの成長・発達を実感することができます。また、保育士の働きかけもみることができます。これを通じて保育の仕事のやりがいや保育士の魅力を感じることにもつながります。
＊絵本の読み聞かせや手遊びの経験がきっかけとなり、保育実習に向けた学びの意欲を高めることにつながります。
＊定期的に子どもや保護者と関わることで実習に向けて自信をもつことができます。

Q2. 保育士の魅力向上につながる学生の主体的活動をどのようにサポートしたらよいでしょうか。

A. 保育士の魅力向上につながるクラブ・サークル、プロジェクト活動をサポートしていきましょう。

＊人形劇やパネルシアターなど児童文化財等に関わるクラブ・サークルがあり、保育施設などで公演活動を行っている養成校もあります。

＊保育士になる上での貴重な体験です。保育施設との橋渡しを行ったり、顧問をつとめるなど、活動が活発に進むようなサポートすることが教職員には期待されます。

＊学園祭などで、子どもを対象とした遊びのワークショップなどイベントを開催することも学生が成長する機会となります。学生が主体的に取組むことを前提としつつも、必要に応じて教職員が専門的な見地からサポートするとよいでしょう。

＊多様な保育のあり方を知るため、学生がさまざまな保育現場に赴くなどのプロジェクト活動を行っている養成校もあります。保育にかかわる勉強会など学生の主体的な活動を教職員が専門的な見地から適宜サポートしています。

Q3. 保育現場でのボランティア活動にどのようなサポートをすればよいでしょうか。

A. 教職員がボランティアのきっかけづくりを支援しましょう。

＊学生にとって保育現場におけるボランティアは子どもと関わる貴重な経験となり、学生の成長を促します。また、保育士としての自己の適性を見極めたり、その後の学びの方向性を見定めたりする機会でもあります。
＊保育実習がきっかけとなることが多いようですが、初年次の学生にはチャンスがありません。養成校の教職員が紹介を行うことなどが必要です。
＊ボランティアを行うのはどこでも良いというわけではありません。ボランティア先によって保育士の魅力を感じるか否が左右されます。養成校と実習や就職でつながりがある信頼できる保育施設をボランティア先として養成校の教職員が集約して、学生に紹介できるとよいでしょう。
＊養成校の教職員がボランティアの事前・事後指導を行ったり、適宜相談に乗るなどフォローすることで学生の成長につながります。

他にも・・・・

＊保育現場における長期のインターンシップを導入によって保育の魅力向上につなげている実践例もある。
＊保育所等におけるアルバイトを推奨することが考えられる。単に求人情報を伝えるだけでなく、適宜教職員がアドバイスを行うことが大切。

キーワード（６）保育現場等との連携

Q1. 実習指導等の授業や、キャリア教育・就職支援の一環で、ゲストティーチャーを招いて現場の話をしていただいたり、懇談会の場を設けたりしていますが、それ以外に連携できることはあるでしょうか。

A. 「実習指導以外の授業」「実習指導」「キャリア教育」のように、大きく3つのカテゴリーに分け、保育現場・自治体・保育団体等とどのような連携がなされているか、組織的に情報共有しましょう。

＊カテゴリー別に整理して情報共有することで、組織的な連携と各教員による個別の連携が行われている現状を把握することができます。その際、関連部署の職員も含めて、それぞれの取組に対する目的や思いを語り合うことで、教職員で協働的に保育士養成を行っていくことができるでしょう。

＊それぞれの取組の内容を見直した時、重複していれば役割分担することで教育効果が高まったり、一方での連携を継続し、一方では新たな取組を行うことで更なる充実を図ることもできます。

＊教員が個別に行っている連携は、授業担当者の変更や異動等が生じた場合につながりが切れてしまい、継続されない可能性があります。組織的に継続していく必要のある取組なのか、各教員の個別の連携としてその教員に任せたままにしておくのか、カリキュラムポリシーやディプロマポリシーの観点から検討し、必要と思われる取組については、組織的に行っていきましょう。

他にも・・・・

＊同じ法人内や近隣の園・施設等の存在は、大きな強み！
　共に保育士養成を行っていく。
＊園・自治体・保育団体等が企画・主催している行事やイベント、研修を調べ、授業等で連携できないか検討する。
＊潜在保育士の掘り起こしや復職支援は、リカレント教育の一環として自治体等と連携して行うこともできる。

キーワード（７）就職支援

Q1. 就職希望者と就職先のミスマッチングが生じないか不安です。

A. 学生の個々の特長や就職先などに関する情報を教職員で共有しましょう。

＊依然として保育士不足が続いています。したがって、就職希望者は、多種多様な施設から希望する就職先を選択することができます。

＊しかしながら、選択の幅が広がることで、就職先が求める人材と就職内定者の特長に齟齬が生じ、早期離職につながることがあります。そのことにより保育士の魅力を喪失することにつながることも考えられます。

＊就職支援はその担当部署が中心となることが多いでしょう。しかし、より学生の特長を理解するためにも、ゼミ担当教員やキャリア支援・進路支援部署などと連携しつつ、入学時より細やかに面談等を行い、その内容を共有することが大切になります。
＊例えば、面談記録を共有フォルダの中にデータとして蓄積することで、個々の進路に対する個々の意向の変化を把握するなども良いでしょう。

＊就職先の状況も卒業生や現場と連携し、常に情報のアップデートをし、教職員間で情報共有することで、俯瞰的に就職希望者と就職先の適合性を図ることが可能となるでしょう。

他にも・・・・

＊学生自身の自己理解を深めるためにもキャリア教育とのつながりを見直す。

＊より保育職の魅力に気づくため、普段から学生が様々な現場へボランティアなどに行くことを促す。

＊在学生が卒業生と懇談会を行う中で、各施設への理解や保育士の魅力などをより具体的に理解できるようになる。

Q2. 入学後、保育士になることに自信がなくなり、他職種への就職を希望する学生がいます。

A. 多様な視点から保育士の魅力ややりがいについて語り合う時間を設けてみましょう。

＊入学後、高度な専門性を求められる魅力的な職業であることを理解しつつも、専門的な知識の習得や保育職の責任の重さへの理解、実習等の経験から、保育士になることを躊躇したり断念してしまう学生もいるかと思います。

＊このような場合、ゼミや友人などと語り合うことで乗り越えられる場合もありますが、現職の保育士から具体的な保育職の魅力ややりがいを聞いたり、保育職に対する不安などを語る場を設けることで、改めて保育士の魅力に気づいたり、気持ちに変化が生じる場合もあります。
＊例えば、就職内定者や卒業生、現職の保育士や園長、主任など多様な視点から保育職に関する話を聞いたり、何に不安を抱えているかなど自己の現状を率直に語れる場があると良いでしょう。

＊多くの養成校では、卒業生や現職の保育士と在校生の交流などをしているかと思いますが、どちらかというと聴講や質疑応答などにとどまっているケースが多いかと思います。
＊しかし、保育士に就くことに自信がなくなっている学生の場合、その思いを卒業生や現職の保育士と小グループで語り合うことで、不安が軽減されます。したがって、改めて保育職の魅力に気づくためにも、そのような場を定期的に設定することも大切でしょう。

他にも・・・・

＊学生自ら様々な施設へボランティアなどに出向くことで、自分の適性（施設保育士など）に合っていることに気づくことができる。

＊多様な特長の学生がいることを踏まえて、保育職の様々な働き方（正規職員や臨時職員等の選択肢があること等）に関するキャリア形成について共に考える。

キーワード（８）リカレント教育等卒後支援

Q1. 卒業生が就職先に適応できているか心配です。

A. 卒業生が気軽に相談できるように、卒業生や現場とのつながりをつくりましょう。

＊保育士に魅力を感じて就職していく学生が多いですが、養成校での学びと現場とのギャップに戸惑うことが多々あります。早期離職の理由として、職場での人間関係の悩みも多く挙げられます。
＊こうした悩みを気軽に相談できる職場環境であれば良いですが、学生時代の苦楽を共にした教員や友人、ゼミやクラス、サークル等とのつながりは、卒業後に悩んだ時の支えになります。

＊卒後1年目の卒業生の就職先に出向いて話を聞くことは、早期離職防止にも効果的です。
＊実習訪問指導の実習園に卒業生がいるか事前に把握し、卒業生の様子もうかがうということが、卒業生にとって保育士の魅力の再確認につながり、励みになることもあります。
＊常日頃から養成校が現場と連携して保育士養成を行っていると、就職後も連携して卒業生の職場への適応を支えることができるでしょう。

＊卒後、継続的に卒業生に働きかけ、動向を知ることは、学生時代に何を養成していく必要があるのか、保育士の高度な専門性による質の高い保育を通して輝く子どもたちの姿を十分に伝えてきたのか等、養成課程の見直しにもつながります。

他にも・・・・

＊卒業生と在学生の対談は、卒業生が自分の成長を実感したり、保育士の魅力を再確認する機会にもなる。

＊早期離職や再就職等に関して、卒業生からの相談・連絡を受け付けられるように、SNSを活用するのも効果的。

Q2. 日々の授業だけでなく、リカレント教育も行うのは、養成校の業務が増えて大変だと思ってしまいます。

A. 普段から行っていることにリカレント教育を含められないか、考えるところから始めましょう。

＊保育士資格を取得した後も、保育所保育指針等の改定や関連法令の改正が行われ、子ども・子育てをめぐる社会の状況も変わっていきます。
＊保育士は高度な専門性が求められる魅力的な職業であるとも言えますが、保育職を続けながら学び直したい時、結婚や育児等で一旦、保育職から離れてそれらの変化に対応できるか不安になります。保育職に戻りたいと思っても躊躇してしまう時もあります。
＊そのような時に、出身の養成校や身近な養成校がリカレント教育を行っていると、一歩踏み出す大きな助けとなるでしょう。

＊しかし、その分、養成校の負担が過重になってしまっては、保育職の魅力を伝える養成校教員も疲弊してしまいます。
＊普段の授業を公開することで、学び続けたい・学び直しをしたい卒業生にも開かれた学びの機会にすることができます。
＊卒業生を授業に招いて、保育職の魅力について語ってもらうことを実習指導等の授業で多くの養成校が行っています。その際に、日頃行っている授業の資料をまとめて、保育の最新の動向に関するレジュメを作成しておき、卒業生に今の学生がどのようなことを学んでいるのか、事前の打ち合わせで伝えるということから始めることもできるでしょう。

＊そのような取組の中での卒業生とのやり取りを通して、卒業生のニーズを把握し、体系的なリカレント教育に発展させたり、出産・育児・介護等で保育職から一時的に離れた保育士を対象にした研修を行政と連携して開講する等、始められることを見つけて、少しずつできるところから積み重ねていきましょう。

他にも・・・・

＊ICTを活用する技術は、これからの保育士に求められるスキルの一つになってきている。現場のニーズに応じて、保育におけるICTのスキルを習得できるよう、リカレント教育に取り入れていく。

保育士の魅力向上に関する取組：チェックリスト

1. 中高生への働きかけ

- □中学生や高校生に対して保育士の仕事を伝える取組を行っている。
- □学生募集の場面で保育士の魅力ついての理解を促している。
- □保育士の魅力につながるような入学前教育を行っている。

2. 教科目の工夫

- □保育士の魅力や、学生に身につけて欲しい力について共通理解ができている。
- □各教科目の担当者間で連携している。
- □保育士資格を取得しない学生にも保育の魅力が伝わるようにカリキュラムを考慮している。

3. 実習指導

- □各実習担当者や教職員全員が連携して取組んでいる。
- □学生が実習で何を学べばいいのかが分かるような指導内容になっている。
- □実習の振り返りを少人数、あるいは個別に丁寧に行っている。

4. キャリア教育

- □修業期間における具体的な目標設定と計画を立てている。
- □キャリアや職業意識を形成するためのプログラムがある。
- □全学的なキャリア教育の位置づけが明確である。

5. 正課外活動

- □授業や実習以外に学生が保育の現場に入る機会をつくっている。
- □保育士の魅力向上につながるような学生の主体的な活動をサポートしている。
- □保育現場でのボランティアへのサポートを行っている。

6. 保育現場等との連携

- □各キーワードの取組において、保育現場・自治体・保育団体等と連携している。
- □保育現場・自治体・保育団体等との連携の実態について、保育士養成に関わる教職員間で把握している。
- □学部・学科として継続的に行っている。取組を定期的に振り返り・改善している。

7. 就職支援

- □学生の特長や就職先の情報を教職員で共有している。
- □卒業生や保育現場と往還的な連携を行っている。

8. リカレント教育等卒後支援

- □卒業生の就職先での様子を把握している。
- □卒業生の動向を踏まえて、卒後支援の体制を整えている。
- □リカレント教育を組織的に行っている。

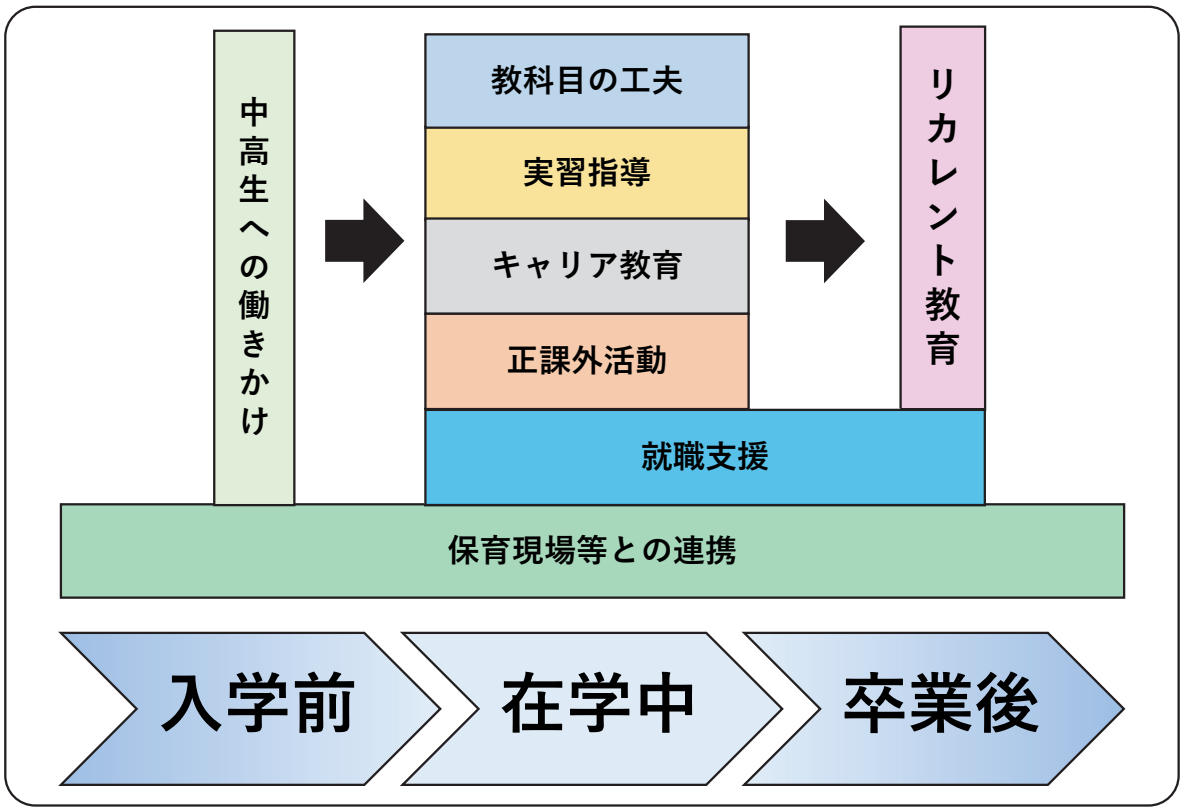
保育士の魅力向上の取組イメージ図
ー保育士の魅力向上を組織的に行うためにー

＊所属する養成校では、保育士の魅力向上にどのように取組んでいますか？

＊現在行っている取組について、ハンドブックの8つのキーワードの観点から、入学前－在学中－卒業後の流れの中に位置付けてみましょう。

＊最も力を入れている取組を大きな四角で表したり、それぞれの項目とのつながりが分かるように整理してみてください。

＊継続していきたいこと、改善すべきこと、新たに始める必要のあることを話し合い、保育士の魅力を伝える取組を組織的に行っていきましょう。



おわりに

保育士養成において、保育実習指導及び保育実習の充実が重要であること、保育実習は実習施設と養成校が協働して行っていく必要性は、これまでも常に強調されてきました。保育実習を核とした実践力の養成が、保育士の魅力を伝える重要な役割を担ってきたといえるでしょう。

しかし、改めて「保育士の魅力を伝える保育士養成とは？」と問うてみると、保育士養成に関わる全ての教育や支援の在り方が問われていることに気付かされます。保育士養成施設における保育士の魅力向上の取組を考えれば考えるほど、「保育士養成課程を構成する教科目全体を通して、専門性の養成が行われているのか？」「保育士養成に関わる教職員が、協働的に保育士養成を行っているのか？」という問題に行き着いてしまうのです。そのため、ハンドブックを活用することで、保育士養成の質の向上という問いを教職員同士で話し合える内容になることを心掛けました。

教職員が協働し、組織的に保育士養成を行っているかを振り返る一つの方法として、ハンドブックには、保育士の魅力向上に関する取組のチェックリストとイメージ図を設けています。チェックリストとイメージ図を参考に、既に実施している工夫や取組の現状を把握した上で、更なる保育士の魅力向上のための工夫や取組の充実に活かしていただければと思います。

ハンドブックを作成するにあたり、ヒアリング調査の協力校による様々な取組はもちろんのこと、保育士養成研究所の過去の調査研究事業の研究報告書と保育士養成倫理綱領も参考にしました。研究報告書と保育士養成倫理綱領は全国保育士養成協議会のウェブサイトに掲載されています。併せてご覧ください。

＜参考資料＞
・平成27年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）
「保育士養成のあり方に関する研究」研究報告書
・平成28年度「指定保育士養成施設における教育の質の確保と向上に関する調査研究（厚生労働省委託調査研究事業）」研究報告書
・平成29年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）
「保育実習の効果的な実施方法に関する調査研究」研究報告書
・令和元年度　子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）
「指定保育士養成施設卒業者の内定先等に関する調査研究」研究報告書
・令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）
「保育士養成施設における保育士の魅力向上に関する調査研究」研究報告書
・一般社団法人全国保育士養成協議会「保育士養成倫理綱領」（令和2年6月20日採択）

Q＆Aから学ぶ好事例

保育士の魅力向上のための養成校の取組

令和2年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）
保育士養成施設における保育士の魅力向上に関する調査研究

2021（令和3）年3月
一般社団法人　全国保育士養成協議会

調査研究構成員一覧（50 音順）

（所属・職名は令和３（2021）年 3 月 31 日現在）

令和２年度子ども・子育て支援推進調査研究事業
「保育士養成施設における保育士の魅力向上に関する調査研究」

《ワーキング部会構成員》

◎部会長　●ハンドブック作成作業部会長　○ハンドブック作成作業部会

第１部　保育士養成施設における保育士の魅力向上に関する質問紙調査

◎　小原　敏郎　（保育士養成研究所副所長・共立女子大学教授）
　　片川　智子　（鶴見大学短期大学部准教授）
　　髙橋　貴志　（保育士養成研究所副所長・白百合女子大学教授）
　　恒川　丹　（田園調布学園大学助教）
　　三浦　主博　（仙台白百合女子大学教授）
　　目良　秋子　（白百合女子大学教授）

第２部　保育士養成施設における保育士の魅力向上に関するヒアリング調査

○　伊藤　理絵　（岡崎女子短期大学講師）
　　加賀谷　崇文（秋草学園短期大学教授）
○　熊谷　享子　（豊橋創造大学短期大学部准教授）
○　江津　和也　（淑徳大学大学准教授）
◎　髙橋　貴志　（保育士養成研究所副所長・白百合女子大学教授）
　　仁藤　喜久子（仙台白百合女子大学講師）
　　平沼　晶子　（和泉短期大学准教授）
○　水落　洋志　（東海学園大学准教授）
●　矢藤　誠慈郎（全国保育士養成協議会常務理事・和洋女子大学教授）
　　渡辺　行野　（文京学院大学助教）

《ヒアリング協力校》

大阪成蹊短期大学
大阪保育福祉専門学校
四條畷学園短期大学
西南学院大学
東京教育専門学校
美作大学短期大学部
大阪千代田短期大学
神戸常盤大学
尚絅学院大学
仙台白百合女子大学
長野県福祉大学校

令和２年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）

保育士養成施設における保育士の魅力向上に関する調査研究

研究報告書

令和３（2021）年３月

一般社団法人　全国保育士養成協議会